

これもいいけど、こっ
ちじゃない！私は聖剣
が欲しかった！あの光
がドバァーって出るや
つ！あの闇を切り裂い
たり、騎士王が持って
たりする^{排他的}やつが欲し
かったん
だアアア！！！！

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

聖剣が大好きで、もはや中毒だろうと思われるくらいの聖剣好きの青年が、間違えて違う仮面ライダーの方の聖剣を送られて落胆しながら異世界無双する話。

アンチが嫌いな方は読むのを推奨しません。

目次

設定

主人公とその仲間の設定集（現在聖我、

リリアーナ、ハジメ） | 1

本編

聖剣好きな青年 | 8

聖剣違いイイ!? | 14

朝から問題発生! | 18

転生の次は何事だ?! | 23

聖剣起動と戦争参加! | 26

サボりと変身! Who is the

shinning hero? | 30

ステータス……チートすぎませんか?

王女と聖剣使い | 34

聖我、大迷宮に向かう | 43

聖我の初実戦 | 47

聖我と奈落落下 | 56

檜山 | 61

裏切りの疑いは晴れない | 67

初めての人殺し | 71

勘違いの決闘 | 76

皇帝と水の剣士 | 84

聖我は嫌われている | 92

雫の刀 | 98

7本の聖剣モドキ | 104

リリーの用事と原作崩壊	110
亀と勧誘と忍者	116
魔族の将	123
将の魔法とドジ	130
老人とプレゼント	137
贈られた加速龍と雷の剣士	143
勇者	149
分身攻撃	157
四属性の剣士と頼もしいパートナー達	165
巨大な怪鳥	176
戦争の終了と女性とアクセル	182
王国と帝国の条約	186

溜まった怒り	193
勇者と聖我の決闘？	201
ライセン大迷宮	213
闇の騎士王	219
世界の真実	228
聖剣修復	234
クラウ・ソラスの起こす騒動	241
兎人族のイレギュラー	247
話せば意外とわかる	253
オークシヨン	262
紅き騎士王	270
聖我の明かされる秘密	282
帝国に行く前に	290

聖我の回答	296	前座を超えた第一階層	378
帝国の破天荒な皇帝と砲撃の獣王	301	第二階層の黄金と騎士王	384
両国会議《上》	309	進化の時	392
両国会議《下》	315	元素の加速龍（エレメンタル・アクセラ	392
鎌のお姫様	321	レート・ドラゴン）とプリミティブドラゴ	400
錬成師と転生者	329	英雄王との決着	408
ハジメのリベリオンと聖我のソル	337	魔人族の将、再来	416
ジャー	337	騎士団長と魔人族の騎士	424
苦難の婚約披露宴	349	現れるもう1つの竜殺し	429
約束	354	狂う友と剣道少女	435
発見！大迷宮！	362	最終階層と魂魄魔法	441
攻略開始	369	ユエとハルナ	449

527	手を組む者たち、激突する者たち	
521	ロード・オブ・ワイズ・タイラント	513
	賢神と失踪者	505
	氷の王者	496
	襲撃後	488
	時を潜る者	481
	駆けつける友、攫われる友	473
	円卓の王国騎士と反抗の錬成師の剣舞	463
	身体の真実、煙の剣	455
	闇龍失墜	

588	ハウリア対帝国の後始末とその後	577
	究極の力	558
	聖剣の仮面ライダー、全員集合！	551
	不死鳥と感情のトリプルドラゴン	543
	錬成師と皇帝	534
	聖我の成果	
	暗黒使徒	
	聖剣使いVS賢神	599

設定

主人公とその仲間の設定集（現在聖我、リリアーナ、ハジメ）

? 神刃 聖我

・読み……カミヤイバ セイガ

・誕生日……7月16日（特に思い付かなかったために作者と同じ誕生日）

・容姿……Fate/Prototypeのプロトセイバー、35話「闇の騎士王」からはプロトセイバーの髪と目が変質化しており、黒髪白目となっている。

・武装……聖剣（仮面ライダーセイバー系統）・聖光剣クラウ・ソラス（折れてから6話「最終階層と魂魄魔法」で復活）
アクセラドラゴン・シューレックス
 ・加速龍の靴

・好きな物・人……聖剣、リリアーナ、トレイシー、ハルナ、雫、園部、菅原、宮崎（リリアーナ、トレイシー以外は恋愛面ではない）

・好きなアニメキャラクター……聖剣を使うキャラ全般

・嫌いな物・人……大切な存在を害する者、敵対してくる者

・好敵手……フリード、ハジメ

・略歴……元は聖剣が好きで聖剣を見つげるために色々な国に飛び回っていた聖剣狂。聖剣のことなら18時間ほど熱説できるほど聖剣に狂う程の愛を注いでいる。（物語内ではその聖剣狂はなりを潜めている）

ちなみに死因は大切にしていた聖剣のキーホルダーを落として拾おうとしたら車に轢かれるというテンプレといえればテンプレだが聖剣のキーホルダーを拾おうとしたら部分があるためアブノーマルである。

死んだあと出会った女性に転生させてくれると聞いてそれを聖剣が使えるかもしれないという理由で快諾し、聖剣を転生特典に所望して「ありふれた職業で世界最強」という世界に転生した。

転生したあと転生特典に関するミス（エクスカリバーかと思ったが仮面ライダーの聖剣だった）で呆然としてしまいが気を取り直してありふれた職業で世界最強の世界を楽しむことにした。（なお原作については何も知らない）

その翌日から転生したり、仲間にあらぬ疑いをかけられたり、王女の護衛になったりと色々なトラブルに苛まれるが王女の護衛として戦ったりと結構充実した1日を送っている。

魔族族最初の襲撃の際に強大な力を振るつたために恐れられ、裏切らないように楔を

打つという名目で王国の王女のリアーナ、帝国の皇女のトレイシーと婚約している。楔は多い方がいいと考えられているので、王国・帝国の貴族、商人、ギルドの上層から婚約・見合いの手紙が送られてくる。

リアーナと婚約してはいるが、職務は依然変わらずリアーナの護衛である。

・戦闘能力……仮面ライダーセイバーに出てくる仮面ライダーを使つて戦うがよく使
うのは仮面ライダーセイバーと仮面ライダーカリバー。

万能な力をよく使う傾向があるため、仮面ライダーバスターや仮面ライダー剣斬、仮面ライダースラッシュなどの特化型はあまり使わない。1番不遇であつた最光は新フォームを得たことよつて不遇でなくなり、今1番不遇なのはバスターとスラッシュだつたりする。

仮面ライダーセイバーの力以外は光武器精製で作りに出す光剣、釘などをよく用いて敵に攻撃する。色々な効果をつけられるため仮面ライダーの次によく使われる。武器と書いてはいるが鎖など聖我が武器に使えると思つた物を作ることができる。

聖剣と違つて後天的に得た加速龍アクセラドラゴン・シューズの靴、通称アクセルは光武器精製の展開スピードの上昇や移動速度の上昇によく使われる。

そんなアクセルは58話でエレメンタルドラゴンと融合進化しており、エレメンタル・アクセラレート・ドラゴン元素の加速龍となつた。

進化したアクセルは2つある禁手の中の一つであるワンダーライドブックとなり、プリミティブドラゴンと一緒にソードライバーに装填することで仮面ライダーセイバー・エレメンタルアクセルドラゴンとなる。

プリミティブドラゴンに乗っ取られた際に光武器精製と対をなす闇武器精製を新たに発現した。

更には身体に眠るサーヴァントのスキルを使うことができるようになり、直感、巨獣狩りなどのスキルを戦闘に組み込み始めた。

・人物……トータスに転移した後すぐに仲間に疑いをかけられ村八分のような事をされた時リリアーナに拾われた為にリリアーナに絶対的な忠誠を誓っており、必ず仕える人間にメリット、もしくは利益をもたらしそうという人間。

好意を向けられれば好意を返し、悪意を向けられれば悪意を返す。鏡のような人間である。

・名前の由来……神刃 聖我という名前は最初、上刃 聖我という名前だったのだが、神という文字が仮面ライダーセイバー内の変身するキャラクターに着いているために神刃 聖我という名前に変えた。

□リリアーナ

・読み……リリアーナ

・誕生日……何時？

・容姿……まだまだ先の二期に出てくるから見ましようね！

・武装……無し（王女が武装してたらおかしい！……おかしくはないかな？）

・好きな物・人……聖我、従者、トレイシー、雲達聖我に味方する神の使徒

・略歴……ハイリヒ王国の政治・内政等の分野ではハイスペックなお姫様。転移してきた聖我達を快く歓迎するが、歓迎パーティーの際に見た聖我の聖剣に興味を示す。

聖我がヘイトを買うようになってから聖我を神の使徒ではなく自分の護衛として雇い始め、聖我を王族の権力で守り始める。

一回目の襲撃の後、44話で聖我にプロポーズし、45話で婚約することになる。

婚約前も婚約後も、聖我の心を支えてサポートしている。

・人物……優しい人。だが国にとって不利益をもたらさずか大事な人に危害を及ぼす人に対しては非情な人間。

だが大切な人や国にとって利益をもたらすものは優遇する。

他にもルールの隙を突いたりしてとんでもないことをやらせたりと王道からは少し離れていたりする。

□南雲ハジメ

・読み……ナグモ ハジメ
・誕生日……何時？

・容姿……原作と変わらず

・武装……ドンナー&シユラーク・シユラーゲン・メツエライ・オルカン・パイルバンカー・転移させるフープ・クロスビット・魔剣リベリオン・2冊のアームドブック

・好きな物・人……ユエ、シア、ミュウ、レミア

・嫌いな物・人……敵対する人、差別する人

・好敵手……聖我

・略歴（トータス転移時から）……トータスに転移してから周りに流されてそのまま戦争に参加、聖我とも全く関わらずにそのまま初めての大迷宮攻略に向かう。

だが65階層にてベヒモスと檜山達の妨害で奈落に落とされ、聖我が光のチェーンで助けようとするが助けられず、それが聖我がヘイトを買う切っ掛けとなった。

そこからフューレンまでは原作と同じで、フューレンではシアと聖我が出会い、そのまま勘違いで戦いに入る。聖我はシアの力を封じることと勝利するが、またも勘違いでハジメとユエは聖我を攻撃してしまう。

最終的に聖我とハジメは手を取り合い、エリセンでは魔剣リベリオンの試運転、王都

では大迷宮攻略を一緒に行なった。

テイオとは出会っていないため、ハーレムはまだ3人である。……ミユウはハーレムメンバーに入るのか否か……

・戦闘能力……魔剣リベリオン完成前は様々な現代兵器、ロマン武装を使っていたが、リベリオン完成後はハーレムメンバーの力を使うことができるようになり、現代兵器などはあまり使われなくなってきた。

・人物……仲間、特に愛しているものに対して優しく、他の人間には敵対されなければ普通の態度で接している。

だが敵対すれば一切の情け容赦なく攻撃する。

本編

聖劍好きな青年

剣こそが男の浪漫！それも聖劍つてかつこいいよね！エクスカリバー！エクスカリバー・モルガン！エクスカリバー・ガラディーン！アロンドイト！カラドボルグ！Fate系もいいけど、ハイスクールDxDの7つに別れた聖劍に、アスカロン！デュランダル！エクス・デュランダル！聖王劍コールブランド！劍を作る系だけど聖劍創造ブレイド・ブラックスミスソード・オブ・ビトレイヤ！双覇の聖魔劍！他のアニメの聖劍もかつこいいよな〜！

諸君！私は劍が好きだ！

諸君！私は聖劍が好きだ！

諸君！私は聖劍が大好きだ！

光の極光を放つ聖劍が好きだ！

闇の極光を放つ聖劍も好きだ！

擬似太陽が封じられた聖劍が好きだ！

時に透明になる聖劍が好きだ！

破壊力が強い聖劍が好きだ！

形を自由に変えられる聖剣が好きだ！

スピードを速くする聖剣が好きだ！

幻覚を生み出す聖剣が好きだ！

聖なる力を増幅させる聖剣が好きだ！

色々支配できる聖剣が好きだ！

次元を斬れる聖剣が好きだ！

その他諸々の聖剣も好きだ！

魔剣？ダークなイメージな剣の方がいいと申すか貴様!?

よろしい！ならば戦争だ！ダークなイメージなど光の力、聖なるオーラによってうち

払われる運命なのだから！

「……………こんな子だったの？君……………お姉さんちよつと引いちゃうんだけど……………というか聖剣って……………」

「アハハハッ！聖剣っていいですよね？聖剣ってほんとにかっこよくてですね！光のオーラで敵をバツサバツサと斬り殺して……………」

3時間後……

「どんな敵すらもその聖なるオーラに怯えてですね！……」

さらに3時間後

「悪魔すらも触れるのを怖がってですね！……」

さらにさらに12時間後……

「そして！最後に！形がどれもかっこいい事ですかね！」

「そ、そう……お姉さんちよつと疲れてきた……」

「大丈夫ですか？あ、もしかして聖なるオーラが苦手なんですか？聖劍の話をするとうき出る聖なるオーラに！」

「聖劍の話をするとうき出る聖なるオーラってなによ……」

聖劍、聖劍、聖劍と聖劍の話しかしないこの青年に嫌気がさしてしまい、ちよつと頭を抑える女性。

「さ……さて、ちよつと貴方の話をさせて貰うわね？……聖劍の話は置いておいてね？ね？」

「わかりました」

聖剣を抜けば善良な青年なのだ。この青年は。

「さて、あなたは死にました。なんで死んだか覚えてるかな？」

「えっと確か聖剣を使いたくてわざわざ聖剣探しに旅に行ったら、道端に聖剣のキーホルダーを落としてそれを拾いに行ったらそのまま道路に行っちゃってそのまま車にドゴンって……」

「そうそう……ほんとあなた聖剣好きねえ……」

「私のソウルですから！」

胸を張って聖剣が好きだと答える青年にあきれ果てる女性。そして女性はあることを青年に伝える。

「君にはあるチャンスがあるの！」

「チャンス？」

「そう！あなたは天国にGOするか、神様転生するか！どっちにするか選べる権利があるのよー！」

「……神様転生？ナニソレ？」

「え？」

「え？」

聖剣ばっかりに執着しすぎて神様転生のことすら知らなかった青年であった。

「神様転生っていうのは異世界にGOすることのことよ」

「……あーなんかあったな。なるほど……聖剣が使えるような可能性がある神様転生にしますー！」

この青年、転生するかどうかは聖剣が判断基準らしい。

「はあーい！じゃあ特典を1個選んでね！」

「と、特典？」

「そー何かひとつ欲しいものがあつたらそれが次の人生で使えるようになる！それが特典ー！」

神様転生には特典がお決まりだよね！

「……前世の知識とかはそのまま引き継がれるの？」

「うん！お金とかも問題ないよ！親はいないけど、君には17歳の高校生として転生してもらおうからね！」

「なら……」

「なら？」

「聖剣を下さい！必要な聖剣に関するものもその他諸々も！」

「いいわよー！じゃあ、はいっとー！」

青年の体に光が入っていく。

「じゃあ特典をつけて、聖剣は貴方の次の人生の家に送っておいたわ！じゃあ、次の人生！頑張つてねえ？」

その瞬間、青年は地面から落下してそのまま次の人生に旅立って行った。

「さて……さてつきの子には聖剣を送っておいたし。何本もあつたから送っちゃった……それにまだまだあるし、まあ放送されたらまた送ればいいか……この変な小さい本も送っておいたし！」

この物語は、いかにもファンタジーな聖剣を神様転生の特典に頼んだ主人公が、聖剣は聖剣でも、仮面ライダーの方の聖剣を使って仕方なく異世界無双する話。

はてさて、どうなる事やら……

聖剣違いイイ!?

ここは日本のとある町。そこに聖剣好き……聖剣狂の青年が転生した。転生特有の空から落下とかはなく、ただ転生特典を決めた瞬間地面に穴が開きそのまま次の人生で使う家に転移したのだ。

「……」が私の新しい家か……」

青年は辺りを見回す。ある程度の家具が揃っており、机の上には人一人入りそうなダンボールが何個かある。そして外に出てみると外見は普通の一軒家だった。

そして他にやることなかったのもそのままダンボールを開け始める。すると1つのダンボールから1つの手紙が出てきた。とりあえず開けてみようと思っ手紙を開けてみると、

『聖剣好きの青年へ』

さっきの綺麗なお姉さんだよ！君はありふれた職業で世界最強というラノベの世界に転生したんだ！伝えるの忘れてたよ！ごめんね！

君には毎月1000万送られるようにしてあるからね！生活には困らないよ！あと君の名前は、《神刃^{カミヤイルバ} 聖我^{セイガ}》だからよろしくね？聖我くん！

君の転生特典である聖剣はダンボールの中に入れてあるよ！残りの必要なアイテムとかもそこにあるのよ！放送されたらまた聖剣とその必須アイテムとか送るから！

ついでに君の容姿は君が好きなキャラクターのアーサー・ペンドラゴン（プロトタイプ）にしておいたからね！

あと今日は日曜日で、明日から〇〇高校つてところに通ってもらうからね！もう入学手続きはしているから！明日学校に行くだけだよ！

じゃあ良き第2の転生ライフを楽しんでね！』

「……………ついいいか？放送されたら送るってなんだ？……………まさか」

ダンボールを急いでカッターで開ける。最悪の結末なら聖剣だけと思いついていたあの騎士王が使う聖剣じゃなくなってしまう。そんなことないよねーとひたすら願いながらダンボールを開けると、そこには……………

武器でありドライバーでもあり、ベルトの至る所に金の文字でローマ字で日本語が表記されている、聖剣ソードライバー……………日本の文化と言っても過言ではない特撮ヒーロー仮面ライダーの最新作、仮面ライダーセイバーの聖剣ソードライバーがそこにはあった。

そして聖剣ソードライバーの周りには変身に必要な火炎剣烈火、水勢剣流水、雷鳴剣黄雷があり、さらにそのまわりにはワンダーライドブックと呼ばれる仮面ライダーセイ

バー達が変身するための必須アイテムが散らばっていた。

「放送という単語でもう私は察したよ……ってことは……」

残りのダンボールの中には土豪剣激土、風双剣翠風、音銃剣錫音、闇黒剣月闇、光剛剣最光、無銘剣虚無があり、それらの変身アイテムもダンボールの中に散らばっていた。

「仮面ライダーセイバー……：H A H A H A……：これじゃねーよ……：聖剣……：エクスカリバー……：水泡……：容姿がプロトアークサーなんだからエクスカリバー使わせてよ……」

「……このネックレスはなんだ？」

エクスカリバーでは無いことがわかって落ち込んでいるとダンボールの中に金色のメダルの中に水晶が入ったネックレスがあった。

「なんか付箋が貼ってあるな……：無限収納BOX……：またの名を宝物庫……：王の財宝の縮小版かな……」

ワンダーライドブックを無限収納BOXに近づけるとワンダーライドブックが吸い込まれて行く。

「……なるほど……じゃあ出てこい」

すると先程しまったワンダーライドブックが無限収納BOXから出てきた。

「……役立つな。これ……」

そして全ての転生特典として渡された仮面ライダーセイバー世界の転生特典を収納

して明日から高校2年と言われているのを思い出して教科書類をバックの中に入れて準備をする。

それが終わったあと、自分が転生した世界について考察し始める。

「ありふれた職業で世界最強……んなラノベ読んだことないし……ありふれた職業ということはサラリーマンが最強……異世界無双できるとも言われてたし、異世界に何らかの形で行くのかな？なら今日考えても仕方ないや。今日はもう寝よう。そうしよ」

そのまま転生1日目の幕を閉じ、そのままベッドの中に入ってぐっすり寝たのだった。

すぐにその平和な日常が壊れるのを知らずに……

朝から問題発生！

聖我の朝は早い。毎朝の日課である竹刀の素振りを行い、筋トレを行う。いつ聖剣を握ってもいいようにと、厨二病みたいなことを思いながら前世で毎日続けていたことがある。

プロトアーサーの容姿、そして身体のスペックは超人的で竹刀の素振りも筋トレもすぐ終わってしまう。聖剣エクスカリバー貰えなかったと少し神様を恨みはしたが、ちゃんと名前を言わなかった自分も悪かったと思い、プロトアーサーの容姿だけでなく身体スペックまでくれたことに感謝しながら朝ごはんを食べていた。

朝ごはんのメニューは白米と納豆、鮭の塩焼き、おひたしとお味噌汁。健全な日本食の朝ごはん。パンにしようか迷ったらしいが。

そして無限収納BOXから聖剣とライドブックをひとつずつ取り出す。光剛剣最光と金の武器 銀の武器ワンダーライドブックだ。光の属性を司る聖剣と仮面ライダー最光に変身するための必須アイテムだ。

ただし今は何故か使えない。どの聖剣もどのライドブックもだ。まあこの世界で使ったら不味いだろうが。

「早めに出ようか？なにかあったら困るし、スマホを持って……」

昨日のうちに準備した荷物を持ち、無限収納BOXのついたネットクレスをつけて玄関から外に出て、そのまま玄関の鍵を閉めて、これから通う〇〇高校に足を進めた。

「おはよう……ござ……います？あの……あなたどなたですか？この学校は教師と生徒、それに関係者以外立ち入り禁止ですよ？」

学校の校門に着いた時、その校門の前に聖我より身長が小さい……というかロリっ子が校門の前に立っており、聖我に立ち入り禁止と伝えて来た。

「……私は、この学校に転校する予定の神刃 聖我です。聞いておりませんか？」
転校生の特徴すらも知らないのかと思いつつながら聖我は自分の名前を丁寧に伝える。

「は、はい？神刃くん？……ええええええ！？」

ロリっ子は大声で叫び、その様子を見た学校の周りで出社しようとしている会社員や、家の周りを掃除している主婦がヒソヒソと喋り始めた。

「あ、すいません……ちよつと教員室に……」

「ええ」

流石に恥ずかしくなったのかそのまま教員室まで歩き始めたロリっ子にそのまま聖我はついて行った。

「えっと……あなたの担任は私です。じゃあ、教室に私が入ってホームルームが始まって私が合図したら入ってきてください」

「あ、はい」

ロリっ子が成人しており教師をしていることに驚きながらそのまま聖我は廊下で待ち始めた。

5分後ー

「まだかな………まだか………」

まだ聖我は呼ばれない。

10分後ー

「さっき叫ばれてヒソヒソされて……今度は放置……泣きたい……早くしてくれ〜」

15分後ー

「(………まだかな………というかもしかしてこれはいじめか!?! いじめなのか!?!)」

20分後ー

キーンコーンカーンコーン! キーンコーンカーンコーン!

「ホームルームを終わります! 起立! 礼! ありがとうございます!」

「「「ありがとうございます!」」」

「(……(??)……泣きたい……)」

もはや聖我は廊下で体育座りし始めた。

「あれ? 君どうしたの? 見ない顔だけど……私は八重樫 雫。よろしくね」

ロングヘアのポニーテール女子が体育座りで佇んでいる聖我に向かつて尋ねる。

「八重樫さんですか……私は転校生の神刃 聖我です。20分間合図を待つてずっと放置された転校生です」

聖我が答えていると

「どうしたの雫ちゃん……って君は誰? 見たことないけど……」

これまたロングヘアの女子が雫を見てから聖我のことに気づき聖我が何者か尋ねる。

「放置された転校生だつて」

「あちゃー……愛ちゃん先生! 転校生くん! 忘れてますよ!」

ロングヘアの女子がロリっ子に聖我のことを伝える。すると、

「……あ……忘れてた……」

その言葉に聖我はドヨンとしたオーラを出し始めた。

「転校生くん?! あ、ああああ! 愛ちゃん先生も悪気があつた訳じゃないの!……どうすればいいのオオオ!?!」

ロングヘア女子が叫び、何が起きた?!と教室にいる生徒が騒ぎ出して収拾がつかなくなつたのだつた。

「えつと転校生の神刃くんです。自己紹介お願いします……」

ロリっ子は畑山 愛子というらしく、ちよつとオドオドしながら聖我に自己紹介するよう促す。

「御紹介に預かりました、朝っぱらから誰ですかと言われ、答えれば叫ばれてヒソヒソ言われて……尚且つさつきまで放置されてた神刃 聖我です。1996年生まれで、誕生日は7月16日です。これからよろしくお願いします……」

「……(可哀想だな……こいつ)……」

聖我の自己紹介に悪意を感じながらもこいつ可哀想だなと思つたクラス一同だつた。そして授業がすぐ始まって、次の休み時間に質問攻めされたのだつた。

転生の次は何事だ?!

転校生生活1日目……前途多難である。1時間目は皆授業中であるはずなのに好奇心の視線を聖我に向けていた。聖我に意識を向けていたためか、授業はあまり進まなかった。クラスメイトが聖我に対する思いは男の9割がチツ！イケメンが！女の9割が何あの男かっこいい！そして男2人と女2人があいつ大変そうだな……。そして残り2人の男だ、問題は。1人はプロトアースーだ！かっこいい！そして最後の1人が同士を見るような目を向けていた。

その後の10分休憩はクラスメイト八割強に質問攻めされていた。転校つてことは引越してきたの？とか彼女いますか？とか趣味はなんですかとか……。まあ普通の質問だね。

そして授業が始まってまた終わり、また10分休憩が始まり今度は4人……。そのうち女2人は聖我が放置されてた時に接して来た子達が聖我の机に来た。

「俺の名は天ノ河光輝だ。！これからよろしくな！」

「俺は坂上龍太郎だ！よろしくな！」

「さっきぶりね？改めて私は八重樫雫。よろしくね？」

「白崎香織だよ！よろしくね！」

イケメン美少女集団が話しかけて来た。聖我も受け答えはキチンとする。

「改めて、私は神刃聖我だ。よろしく！」

そして3時間目の授業は社会だった。社会はあのロリっ子先生が授業をしていた。和んでいた。……………本当に。

そして昼休みが始まった。聖我は1人こつちを見つめている男子の方に向かった。

「やあ、君。さつきから見つめてたけど何か用かな？」

「え！神刃くん？」

「えつと……………君は？」

「僕は南雲ハジメ！よろしく！」

「じゃあ、南雲くん？なんでこつちを見つめてたんだい？」

聖我はさつきから気になっていた目線についてハジメに聞く。もう1人の視線には気が付かなかったようだが。

「いや君の容姿がキラクターにそっくりでさ……………」

君は興味無いよね？とばかりに伝えてくる。イケメンはアニメに興味が無いとでも思っているのだろうか？

「ああ。プロトアーサーか。生まれつきなんだ」

「知ってるの!？」

「ああ。プロトアーサーというより神話の人物を調べてたらFateにたどり着いてさ……」

「へ〜」

という風にFateの話をハジメと聖我が話していると、突然教室の床に魔法陣が現れた。その魔法陣の源は聖我と光輝から現れていた。

「魔法陣? どういうことだ!？」

「皆さん! 早く教室から出てください!」

畑山先生が叫ぶと同時に魔法陣が爆発して光が教室内を包み込む。

光によって真っ白に塗りつぶされた教室が再び色を取り戻す頃、そこには既に誰もいなかった。蹴倒された椅子に、食べかけのまま開かれた弁当、散乱する箸やペットボトル、教室の備品はそのままにそこにいた人間だけが姿を消していた。

この事件は、白昼の高校で起きた集団神隠しとして、大いに世間を騒がせるのだが、それはまた別の話。

聖剣起動と戦争参加!

「…………あれ?ここは転生前の…………」

光が爆発したと思つたら転生前の部屋にいた。そして聖我を転生させた女性が目の前にいた。

「やあ、君を転生させた女の人だよ!さて、簡潔に要件を伝えるね!君は漸くというかすぐに原作に入ることになるよ!君は異世界トータスに、そして戦争に参加することになるよ!」

「…………そうですか…………そういうえば特典がまだ使えないんだけど…………」

要件を聞いてから特典のことを相談する。

「…………光の剣と闇の剣が1番最初に使えるようになるよ!そこからは登場した順に使えるようになるから!だから最初は仮面ライダー最光と仮面ライダーカリバーにしかないからね!」

「…………わかった、ありがとう。それとプロトアークサーありがとう!」

「それは私からの手向けさ。まあどういたしまして!それと、行つてらっしゃい!」

そうしてまた聖我はクラスメイトが待つ異世界に向かうのだった。

「さてと……原作を壊すも壊さないも君次第だよ？ 神刃 聖我！ 頑張りたまえ！ そして良い受難を！」

女性はそのまま部屋から笑いながら出て行った。

聖我はまたも光に吞まれ、気づいた時には大理石のような素材で作られた美しい光沢を放つ滑らかな白い石造りの建築物のようで、これまた美しい彫刻が彫られた巨大な柱に支えられている大聖堂のような場所に転移していた。

聖我は目の前に巨大な壁画があるのに気づく。縦横十メートルはありそうなその壁画には、後光を背負い長い金髪を靡かせうっすらと微笑む中性的な顔立ちの人物が描かれていた。

「……………聖剣でバサツと斬り殺してえ……………」

思わず聖我は毒づいてしまう。

ただ聖我はあることに気づく。周りに誰もいないのだ。

「またか……………」

とりあえず聖我は魔法陣が書かれた台座から飛び降りて足跡がかすかに残っていた道を通りながらクラスメイトがいるであろう部屋に向かう。

「皆、ここにイシユタルさんに文句を言っても意味がない。彼にだってどうしようもないんだ。……俺は、俺は戦おうと思う。この世界の人達が滅亡の危機にあるのは事実なんだ。それを知って、放っておくなんて俺にはできない。それに、人間を救うために召喚されたのなら、救済さえ終われば帰してくれるかもしれない。……イシユタルさん？ どうですか？」

「そうですね。エヒト様も救世主の願いを無下にはしませんよ」

「俺達には大きな力があるんですね？ ここに来てから妙に力が漲っている感じがします」

「ええ、そうですね。ざっと、この世界の者と比べると数倍から数十倍の力を持っていると考えるといいでしょうな」

「うん、なら大丈夫。俺は戦う。人々を救い、皆が家に帰れるように。俺が世界も皆も救ってみせる!!」

と高らかにイシユタルと呼ばれる御老人と話している光輝を見つけた。大声で話していたため簡単に見つけられた。

「……今日は放置されてる時が多い気がする……」

「か、神刃！ あ、あれ？」

聖我がが部屋の扉の前に居たため光輝が驚いて辺りを見回していたが、そのまま聖我は

イシユタルにこう伝える。

「あ、今日このクラスに転校してきた神刃聖我です。よろしく御老人」

「あ、使徒様。イシユタルと申します。よろしくお願ひします」

挨拶を交わして、そのまま聖我は椅子に座る。すると気を取り直して光輝がみんなに問いかける。

「……気を取り直して！どうだ？みんな！」

「へっ、お前ならそう言うと思つたぜ。お前一人じゃ心配だからな。……俺もやるぜ？」

「龍太郎……」

「今のところ、それしかないわよね。……気に食わないけど……私もやるわ」

「雫……」

「え、えつと、雫ちゃんがやるなら私も頑張るよ！」

「香織……」

こんなふうには聖我がない間に戦争に参加するようになってしまい、新参者の聖我と口りつ子先生であり威厳がない畑山先生では止めることはできなかつた。

そして聖我とその他のクラスメイトは戦争に参加することになったのだつた。

サボりと変身!Who is the shining hero?

聖我達は聖教教会という聖我達が召喚されたところの正面門にやって来た。下山しハイリヒ王国に行くためだ。

聖教教会は「神山」の頂上にあるらしく、荘厳な門を潜るとそこには雲海が広がっていた。

そのまま魔法陣からイシユタルが魔法を唱え、ハイリヒ王国に向かうのだった。

王宮に着くと、聖我達は真っ直ぐに玉座の間に案内された。

教会に負けないくらい煌びやかな内装の廊下を歩く。道中、騎士っぽい装備を身につけた者や文官らしき者、メイド等の使用人とすれ違うのだが、皆一様に期待に満ちた、あるいは畏敬の念に満ちた眼差しを向けて来る。聖我達が何者か、ある程度知っているようだ。

生徒達は居心地が悪そうに、聖我は最後尾を付いていった。

美しい意匠の凝らされた巨大な両開きの扉の前に着ると、その扉の両サイドで直

立不動の姿勢をとっていた兵士二人がイシュタルと勇者一行が来たことを大声で告げ、中の返事も待たず扉を開け放った。

イシュタルは、それが当然というように悠々ゆうゆうと扉を通る。聖我や光輝等一部の者を除いて生徒達は恐る恐るといった感じで扉を潜った。

扉を潜った先には、真つ直ぐ延びたレッドカーペットと、その奥の中央に豪華な椅子——玉座があった。玉座の前で覇気と威厳を纏った初老の男が立ち上がって……待っていた。

その隣には王妃と思われる女性、その更に隣には十歳前後の金髪碧眼の美少年、十四、五歳の同じく金髪碧眼の美少女が控えていた。更に、レッドカーペットの両サイドには左側に甲冑や軍服らしき衣装を纏った者達が、右側には文官らしき者達がざつと三十人以上並んで佇んでいる。

玉座の手前に着くと、イシュタルは聖我達をそこに止め置き、自分は国王の隣へと進んだ。

そこで、おもむろに手を差し出すと国王は恭しくその手を取り、軽く触れない程度のキスをした。どうやら、教皇の方が立場は上のようなのだ。

そこからはただの自己紹介だ。国王の名をエリヒド・S・B・ハイリヒといい、王妃をルルアリアというらしい。金髪美少年はランデル王子、王女はリリアーナという。

そしてそのまま晩餐会が開かれた。咲人は晩餐会が始まってすぐにプロトアーサーの超人的スペックで王宮の庭に向かう。

「さて。試してみるか……」

無限収納BOXからワンダラーライドブックと1つの聖剣を取り出す。

朝取り出した光剛剣最光と金の武器 銀の武器ワンダラーライドブックだ。光の属性を司る聖剣と仮面ライダー最光に変身するための必須アイテムだ。

《聖剣サイコウドライダー!》

そして聖我は聖剣サイコウドライダーを腰に巻き付ける。そしてワンダラーライドブックを開く。

《金の武器 銀の武器!》《GOLD or SILVER?》

ワンダラーライドブックを剣先を開きながら装填する。

そして聖我は光剛剣最光をドライバーから取り出す。

《最光発光!》

「変身!」

《Who is the shining sword?》

《最光一章!金銀の力を得た輝く剣……最光!!》

聖我の身体が光剛剣最光の中に入り、剣を振り回して移動する。

「お、動きやすいな……エクスカリバーより使い勝手良かったりして……まあここは異世界だ。どこかにエクスカリバーがあるだろ！」

晩餐会が終わる頃に変身を解除して聖我は自分に渡された部屋に向かって眠り始めた。

「あく今日は本当に厄日だったな……しかもこの部屋一人部屋だし。おやすみなさい私」

そのままものの数秒で眠ってしまったのだった。

聖我は気づかなかったが、晩餐会の会場で聖我が最光に変身していた所を見ていた少女がいた。

「なんででしょうかあれは？……神刃聖我……気になりますね。ヘリーナに調べさせましょうか……」

転生者はトラブルに必ず見舞われる（作者の勝手な妄想）……聖我はトラブルから逃げられない運命なのだ。

ステータス……チートすぎませんか？

聖我がサボった晩餐会の翌日から早速訓練と座学が始まった。

まず、集まった生徒達に十二センチ×七センチ位の銀色のプレートが配られた。不思議そうに配られたプレートを見る生徒達に、騎士団長メルド・ロギンスが直々に説明を始めた。

「よし、全員に配り終わったな？ このプレートは、ステータスプレートと呼ばれている。文字通り、自分の客観的なステータスを数値化して示してくれるものだ。最も信頼のある身分証明書でもある。これがあれば迷子になっても平気だからな、失くすなよ？」

非常に気楽な喋り方をするメルド。彼は豪放磊落な性格で、「これから戦友になろうってのにいつまでも他人行儀に話せるか！」と、他の騎士団員達にも普通に接するように忠告するくらいだ。

聖我達もその方が気楽で良かった。はるか年上の人達から慇懃な態度を取られると居心地が悪くてしょうがないのだ。

「プレートの一面に魔法陣が刻まれているだろう。そこに、一緒に渡した針で指に傷を

作って魔法陣に血を一滴垂らしてくれ。それで所持者が登録される。ステータスオープン」と言えば表に自分のステータスが表示されるはずだ。ああ、原理とか聞くなよ？ そんなもん知らないからな。神代のアーティファクトの類だ」

「アーティファクト？」

アーティファクトという聞き慣れない単語に光輝が質問をする。

「アーティファクトって言うのはな、現代じゃ再現できない強力な力を持った魔法の道具のことだ。まだ神やその眷属達が地上にいた神代に創られたと言われている。そのステータスプレートもその一つでな、複製するアーティファクトと一緒に、昔からこの世界に普及しているものとしては唯一のアーティファクトだ。普通は、アーティファクトと言えば国宝になるもんなんだが、これは一般市民にも流通している。身分証に便利だからな」

なるほど、と頷き生徒達は、顔を顰しかめながら指先に針をチョンと刺し、プクと浮き上がった血を魔法陣に擦りつけた。すると、魔法陣が一瞬淡く輝いた。聖我也同じように血を擦りつけ表を見る。

神刃 聖我 男性 17歳 レベル1

天職 剣使

筋力	300000
体力	300000
耐性	300000
敏捷	300000
魔力	300000
魔耐	300000

技能 剣術・オーラ付与「光属性」「闇属性」・聖剣「最光」「カリバー」・加速・加撃・光属性適正・全属性完全耐性・詠唱完全省略・隠蔽・光武器作製・探査・気配感知・魔力感知・瞬時魔力回復・物理耐性・行動推測・言語理解

「……………スキルはないにしろやりすぎじゃあ…」

転校初日に転移したのでぼっちでステータスオープンしたが、能力値が高すぎる。

そんな中メルド団長からステータスの説明がなされた。

「全員見れたか？ 説明するぞ？ まず、最初に「レベル」があるだろう？ それは各ステータスの上昇と共に上がる。上限は100でそれがその人間の限界を示す。つまりレベルは、その人間が到達できる領域の現在値を示していると思ってくれ。レベル100ということは、人間としての潜在能力を全て発揮した極地ということだから。そ

んな奴はそうそういない」

「(待て待て待て…レベル1でこれ?…いやみんなもこれくらいなんじゃ…)」

メルド団長が色々なことを言っているが全く頭に入らない。だが次聞こえた言葉で聖我の意識は戻ることになる。

「ほお、流石勇者様だな。レベル1で既に三桁か…技能も普通は二つ三つなんだがな…規格外な奴め! 頼もしい限りだ!」

「いや、あはは…」

「(あいつが勇者で規格外…でも三桁、私五桁なんだけど…やばいやばいやばいこのままだと適当なところで出ていつて聖剣搜索プランがアア…隠蔽ってなんだ? 使ってみるか)」

聖我がシヨックを受けていると隠蔽という技能を見つけた。隠蔽を発動してみる聖我。

すると、

神刃 聖我 男性 17歳 レベル1

天職 剣士

筋力 150

体力	150
耐性	100
敏捷	100
魔力	150
魔耐	100

技能 剣術・光属性適正・隠蔽・探査・言語理解

「よし！勇者よりスペック上だけどまだマシ！」団長さん」

内心ガツポーズをしてメルド団長に見せに行く。途中勇者よりスペック上ということに驚かれたが、技能の少なさを見てそのまま返してくれた。そして戦闘訓練と座学を受けてから部屋に戻ろうとすると、

「神刃聖我様ですね？王女様がお呼びです。来て貰えますか？」

クラスメイトがいる中呼び出しを受けたので少しざわついたが、聖我がそのまま無言で着いて行ったので晚餐会で知り合ったのかな？とスルーされた。一部の男子から妬みの目線があつたが。

「(なんの用だろ…ねむっ…)」

眠そうにしながら聖我はメイドに着いて行ったのだった。

王女と聖劍使い

「……なんで私なんですか？メイドさん」

「何がでしょうか？」

メイドの後ろを歩きながら聖我はふと疑問に思ったことを口にし、メイドはその疑問に疑問形で返す。

「いえ、なんで勇者じゃなくて私なのかな〜と…」

「……王女様の今回の考えは分かりかねます。私も何故晩餐会にいなかった貴方を呼んだのか分かりません」

メイドは聖我が晩餐会にいなかったことを知っていたようだ。

「…バレてましたか……」

「私と王女様だけです。王女様が貴方が晩餐会をサボって庭にいた事を私に伝えてきたので」

その言葉に聖我はやつちまったという風な顔をする。もしかすると最光のことで呼んだのかもしれない。

「……です。ではどうぞぞ」

「お金が掛かっていそうな扉をメイドが開け、その中に聖我は足を踏み入れる。すると「こんばんは、私の名はリリアーナ・S・B・ハイリヒ。どうぞ腰をおかけください、神刃 聖我様」

「では失礼して…」

リリアーナが聖我に挨拶をして座るように伝える。ここで普通の感性を持つ人間なら挨拶を返してから座るだろうが、聖我は普通の感性を持つ人間ではなく、挨拶を返さないでそのまま座る。

「それでなんの用で？」

「…あら、最初は世間話をするのが普通じゃないんですか？紅茶とお茶菓子を添えて」「生憎と私は普通の感性を持つ人間ではなくてね。さっさと本題に入ってさっさと眠りたい」

紅茶の入ったポットとお茶菓子の入った皿を指さしているリリアーナに対してさっさと眠りたいと言う聖我。メイドが少し睨み出した。

「わかりました、では昨日の晩餐会の時貴方は庭で何をしていらしたのですか？」

「夜景を少し見ていました」

「ふふっご冗談を。貴方が珍妙な剣に変わったところは見ていますから誤魔化しようがありませんよっ？」

完全にバレていた。聖我は観念して話し始める。

「……誤魔化しようがないですね。あの剣は私の姿の1つです。光剛剣最光と呼ばれる聖剣になれるものです」

「光剛剣……最光……じゃあ貴方は聖剣なのですか!？」

「人間です。あれは聖剣の効果でしかない。今はもう1本使えますが……」

「もう1本！聖剣を見せて貰えますか？」

見せなかつたら見せなかつたで王女権限で待遇悪くされそうだしなあと思って無限収納BOXから光剛剣最光と闇黒剣月闇を取り出す。

「………珍妙な形ですね……さてこれは押収させて「待て待て、これは自分の所有物だ。誰が渡すか」ですよね」

聖我2振りを押収しようとするリリアーナを手で追い払って聖我を手につつ聖我。すると残念そうにしながらリリアーナは諦める。

「でも、これは王に報告しなければいけませんね。聖剣2振りを持つ神の使徒なんて恐ろしいです」

「そうですね。私の部下のメイドもこの神の使徒様だけ戦争に賛成しなかつたそうではないですか」

わざとらしく聖剣と聖我を王国に報告しようとするリリアーナとメイド。さすがに

王に伝えられれば聖劍は奪われてしまうだろう。どうすればいいか悩んでいると、聖我は禁句を言ってしまう。

「なんでもしますから、それだけはちよつと許してください…」

「今なんて言ったか聞こえましたヘリーナ？」

「いえ全く聞こえませんでした。…もう1度言つて貰えますか？大きな声で」

「(……わざとだ…だが言わないとまずい…)」

言つたら聖我の自由はなくなりそうだが、やつと手に入れた聖劍なのだ。F a t e やハイスクールD x Dのような聖劍でなくとも、失いたくはない。

「なんでもしますから、それだけは…勘弁してください！」

「わかりました。じゃあ、これから私が願つたらそれを貴方ができる範囲で叶えてくださいね？神刃聖我様？」

「もう聖我でいいです…」

「わかりました。聖我！」

聖我は魂が抜けたような表情をしていたが対してリリアーナはものすごい笑顔だった。

聖我、大迷宮に向かう

聖我の異世界ライフは変わっている。まず朝は誰もいない時間から剣を振り、クラスメイトが起きて朝食を取り始め、取り終わってクラスメイトが殆どいなくなってから朝食を取り始める。

その後騎士団の騎士と剣を打ち合い、メルドとも戦っていつも通り勝つ。たまに光輝や雫が模擬戦を申し込んで来るが、相手が技能を使って挑んでくるところを聖我はスペックを無理やり押えた状態で勝つ。

聖我が王国から貰ったアーティファクトは手袋だけだ。少し手を守ってくれる程度の能力の籠った手袋。リリアーナに聞いてみると、勇者より高いスペックのせいで上部から疎まれていられるらしい。リリアーナは聖我にも能力の付いた剣を与えるべきと言ったらしいのだが。

そして昼飯を貰って訓練場で食べてから今度は座学を受け、その後また訓練場に向かって剣を振る。聖我の振る剣はただの西洋剣だ。

そこにオーラ付与を行うことで下手なアーティファクトよりはダメージが出るようになってる。

夜は晩飯を食べてから風呂に入ってから自室に戻り、技能を試してみてもどのような結果があるか調べたりしている。

例えば加速と加撃。加速は10秒毎にスピードを2倍にして加撃も10秒毎にパワーを2倍にする。何処かの赤龍帝の籠手のような能力だ。

詠唱完全省略はその名の通り全ての魔法の詠唱を完全に省略する。

隠蔽はスペックを誤魔化すだけでなく、姿を認識できなくしたりすることができることがわかった。

光武器作製は光の剣や槍や鎌や弓矢、斧などを作ることができる技能で、どんなものでも光の力で切り裂くことが可能。……焼き切れるといった方がいいかも。

探査。それは半径10メートルの対象の情報を見ることができると絞り返むことでその範囲はさらに大きくなる。

ざっとこんなものだ。そして寝る前に王女リリアーナの部屋に向かつて談笑したりする。リリアーナのお願いという名の命令を聞くことになるのだが、最近のお願いは生徒の様子見などの神の使徒関連。聖剣をばらさないようにしてくれる、融通を効かせてくれるので別に悪くないとも最近は考えてるようだ。

そしてそのまま就寝に入ってそのまま寝る。これが毎日続く。

ある日訓練が終了した後、いつもなら夕食の時間まで自由時間となるのだが、今回は

メルド団長から伝えることがあると引き止められた。何かと注目する生徒達に、メルド団長は野太い声で告げる。

「明日から、実戦訓練の一環として【オルクス大迷宮】へ遠征に行く。必要なものはこちらで用意してあるが、今までの王都外での魔物との実戦訓練とは一線を画すと思ってくれ！ まあ、要するに気合入れろってことだ！ 今日にはゆつくり休めよ！ では、解散！」

その日リリアーナに夕食の時間前に呼び出された。

「………なんの御用で？お姫様？」

「いえ、頑張ってくださいと伝えただけです！危険だったら聖剣を使ってください。………庇ってあげます」

「リヨーかいつす。じゃあ戻ります」

「ええ。お気を付けて」

心配だったから聖剣を危険な時は使えと言いたかっただけらしい。

「なんともまあ、可愛らしいお姫様だ」

部屋に戻る最中にふと聖我がこぼした一言に部屋に戻る聖我に付いていたヘリーナは少し笑っていた。

聖我はりりアーナに激励を送られた日の翌日ホルアドという町に来ていた。ホルアドにはオルクス大迷宮があり、今回はそこで戦闘訓練をするというのだ。

その訓練は翌日からであり、今日はホルアドの宿にて休むように言われていた。クラスメイトが2人ずつ泊まっているのに対して聖我は1人で泊まっていた。

「大迷宮……波乱ありそうだな」

闇黒剣月闇を眺めながら翌日から始まる大迷宮での訓練に思いを馳せる聖我だった。

聖我の初実戦

「よし、光輝達が前に出る。他は下がれ！ 交代で前に出てもらうからな、準備しておけ！ あれはラットマンという魔物だ。すばしっこいが、たいした敵じゃない。冷静に行け！」

ラットマンと呼ばれた魔物が光輝たちの前に出る。聖我はぼーっとしていたがステータスプレートをチェックしたりして大迷宮に入って少し歩いてから戦闘訓練が始まったのだ。

その言葉通り、ラットマンと呼ばれた魔物が結構な速度で飛びかかってきた。

灰色の体毛に赤黒い目が不気味に光る。ラットマンという名称に相応しく外見はねずみっぽいが……二足歩行で上半身がムキムキだった。八つに割れた腹筋と膨れあがった胸筋の部分だけ毛がない。まるで見せびらかすように。

「うわっ……キモ……」

クラスメイトのほとんどはグループでチームを組んでいたが、南雲ハジメと聖我はチームを組んでいなかった。というかハジメと組もうか悩んだが、単独の方がいいと判断したのだ。

聖我がキモと言ったからなのか、ラットマン2匹が光輝たちの間をすり抜けて聖我の方に向かってくる。こちらに向かってくると思わなかったのかクラスメイトたちが怯え始めたが、聖我は鉄の剣に光のオーラを込めてラットマン2匹を同時に切り裂いた。

「……弱いしキモいし、最悪だな」

クラスメイトは聖我の毒舌とその容赦の無さに若干引いていた。だが騎士団のほとんどはいつも通りだなどと言うふうには褒めていた。

聖我は模擬戦では正々堂々やるが、容赦は全くかけない。というか相手が弱点を晒せばそこを念入りに突き、相手が剣を落とせば即接近して剣を向ける。

光輝たちはそれがトラウマになりそうになって聖我のことを恐れたり：

そこからは特に問題もなく交代しながら戦闘を繰り返し、順調に階層を下げて行っ

た。

そして、一流の冒険者か否かを分けると言われている二十階層にたどり着いた。

現在の迷宮最高到達階層は六十五階層らしいのだが、それは百年以上前の冒険者がなした偉業であり、今では超一流で四十階層越え、二十階層を越えれば十分に一流扱いだという。

一行は二十階層を探索する。

迷宮の各階層は数キロ四方に及び、未知の階層では全てを探索しマッピングするのに

数十人規模で半月から一ヶ月はかかるというのが普通だ。

現在、四十七階層までは確実なマップピングがなされているので迷うことはない。トランプに引つかかる心配もないはずだった。

二十階層の一番奥の部屋はまるで鍾乳洞のようにツララ状の壁が飛び出していたり、溶けたりしたような複雑な地形をしていた。この先を進むと二十一階層への階段があるらしい。

そこまで行けば今日の実戦訓練は終わりだ。神代の転移魔法の様な便利なものは現代にはないので、また地道に帰らなければならぬ。一行は、若干、弛緩した空気の中でせり出す壁のせいで横列を組めないで縦列で進む。

「擬態しているぞ！ 周りをよく注意しておけ！」

メルド団長の忠告が飛ぶ。

その直後、前方でせり出していた壁が突如変色しながら起き上がった。壁と同化していた体は、今は褐色となり、二本足で立ち上がる。そして胸を叩きドラミングを始めた。どうやらカメレオンのような擬態能力を持ったゴリラの魔物のようだ。

「ロックマウントだ！ 二本の腕に注意しろ！ 豪腕だぞ！」

メルド団長の声が響く。光輝達が相手をするようだ。飛びかかってきたロックマウントの豪腕を龍太郎が拳で弾き返す。光輝と雫が取り囲もうとするが、鍾乳洞的な地形

しかし、発動しようとした瞬間、香織達は衝撃的光景に思わず硬直してしまう。

なんと、投げられた岩もロックマウントだったのだ。空中で見事な一回転を決めると両腕をいっぱい広げて香織達へと迫る。しかも、妙に目が血走り鼻息が荒い。香織も恵里も鈴も「ヒィ！」と思わず悲鳴を上げて魔法の発動を中断してしまった。

「光武器作製ー光の弓矢」

そのロックマウントを光武器作製で作り出した弓矢でロックマウントを射抜く聖我。

「……この程度で驚くな、魔法を中断するな。非効率だ」

「えっ？う、うん」

相当気持ち悪かったらしく、まだ、顔が青褪めていた。

そんな様子を見てキレる若者が一人。正義感と思い込みの塊、我らが勇者天之河光輝である。

「貴様……よくも香織達を……許さない！」

どうやら気持ち悪さで青褪めているのを死の恐怖を感じたせいだと勘違いしたらしい。彼女達を怯えさせるなんて！ と、なんとも微妙な点で怒りをあらわにする光輝。それに呼応してか彼の聖剣が輝き出す。

「万翔羽ばたき、天へと至れ——『天翔閃』！」

「あつ、こら、馬鹿者！」

メルド団長の声を無視して、光輝は大上段に振りかぶった聖剣を一気に振り下ろした。

その瞬間、詠唱により強烈な光を纏っていた聖剣から、その光自体が斬撃となつて放たれた。逃げ場などない。曲線を描く極太の輝く斬撃が僅かな抵抗も許さずロツクマウントを縦に両断し、更に奥の壁を破壊し尽くしてようやく止まった。

パラパラと部屋の壁から破片が落ちる。「ふう〜」と息を吐きイケメンスマイルで香織達へ振り返つた光輝。香織達を怯えさせた魔物は自分が倒した。もう大丈夫だ！と声を掛けようとして、笑顔で迫っていたメルド団長の拳骨を食らつた。

「へふう!？」

「この馬鹿者が。気持ちにはわかるがな、こんな狭いところで使う技じゃないだろうが！崩落でもしたらどうすんだ！」

メルド団長のお叱りに「うっ」と声を詰まらせ、バツが悪そうに謝罪する光輝。香織達が寄つてきて苦笑いしながら慰める。

その時、ふと香織が崩れた壁の方に視線を向けた。

「……あれ、何かな？ キラキラしてる……」

その言葉に、聖我を除く全員が香織の指差す方へ目を向けた。

そこには青白く発光する鉱物が花咲くように壁から生えていた。香織を含め女子達

は夢見るように、その美しい姿にうっとりした表情になった。

「ほお、あれはグランツ鉱石だな。大きさも中々だ。珍しい」

「素敵……」

香織がそんなことを言っていると、

「だつたら俺らで回収しようぜ！」

そう言つて唐突に動き出したのは檜山だった。グランツ鉱石に向けてヒョイヒョイと崩れた壁を登つていく。それに慌てたのはメルド団長だ。

「こら！ 勝手なことをするな！ 安全確認もまだなんだぞ！」

しかし、檜山は聞こえないふりをして、とうとう鉱石の場所に辿り着いてしまった。

メルド団長は、止めようと檜山を追いかける。同時に騎士団員の一人がフェアスコップで鉱石の辺りを確認する。そして、一気に青褪めた。

「団長！ トラップです！」

「ッ!？」

しかし、メルド団長も、騎士団員の警告も一歩遅かった。

檜山がグランツ鉱石に触れた瞬間、鉱石を中心に魔法陣が広がる。グランツ鉱石の輝きに魅せられて不用意に触れた者へのトラップだ。美味しい話には裏がある。世の常である。

魔法陣は瞬く間に部屋全体に広がり、輝きを増していった。まるで、召喚されたあの日の再現だ。

「くっ、撤退だ！ 早くこの部屋から出る！」

メルド団長の言葉に生徒達が急いで部屋の外に向かうが……間に合わなかった。

部屋の中に光が満ち、聖我達の視界を白一色に染めると同時に一瞬の浮遊感に包まれる。

聖我達は空気が変わったのを感じた。次いで、ドスンという音と共に地面に叩きつけられた。

尻の痛みを耐えながら立ち上がり聖我は周囲を見渡す。メルド団長や騎士団員達、光輝達など一部の前衛職の生徒は既に立ち上がって周囲の警戒をしている。

どうやら、先の魔法陣は転移させるものだったらしい。現代の魔法使いには不可能な事を平然とやってのけるのだから神代の魔法は規格外だ。

聖我達が転移した場所は、巨大な石造りの橋の上だった。ざつと百メートルはありそうだ。天井も高く二十メートルはあるだろう。橋の下は川などなく、全く何も見えない深淵の如き闇が広がっていた。まさに落ちれば奈落の底といった様子だ。

橋の横幅は十メートルくらいありそうだが、手すりどころか縁石すらなく、足を滑らせれば掴むものもなく真つ逆さまだ。聖我達はその巨大な橋の中間にいた。橋の両サ

イドにはそれぞれ、奥へと続く通路と上階への階段が見える。

それを確認したメルド団長が、険しい表情をしながら指示を飛ばした。

「お前達、直ぐに立ち上がって、あの階段の場所まで行け。急げ！」

雷の如く轟いた号令に、わたわたと動き出す生徒達。

しかし、迷宮のトラップがこの程度で済むわけもなく、撤退は叶わなかった。階段側の橋の入口に現れた魔法陣から大量の魔物が出現したからだ。更に、通路側にも魔法陣は出現し、そちらからは一体の巨大な魔物が出現する。

その時、現れた巨大な魔物を呆然と見つめるメルド団長の呻く様な呟きがやけに明瞭に響いた。

——まさか……ベヒモス……なのか……

聖我と奈落落下

橋の両サイドに現れた赤黒い光を放つ魔法陣。通路側の魔法陣は十メートル近くあり、階段側の魔法陣は一メートル位の大きさだが、その数がおびただしい。

小さな魔法陣からはトラウムソルジャーが大量に現れた。

「……メルド、私がああ骨兵をやるからお前らはベヒモスを抑えろ……ステータスの低いやつから撤退させろ」

「……わかった。騎士団員も付けよう。俺と残りの騎士団員でベヒモスを抑える」

聖我は鉄の剣に光のオーラを纏わせ、光武器作製で大量のナイフを作り出す。

「光輝！お前たちはトラウムソルジャーを……どこ行つた？あいつら……つてあアア！おい戻れ光輝！お前ら！」

もう既に光輝たちはベヒモスの方に向かって遠距離攻撃をかましながら突撃していた。

「……自分勝手な奴らだ……まあさっさと突破したいし……」

無限収納BOXから闇黒剣月闇を取り出しついでに天空のペガサス ワンダーライドブックを取り出す。

「ステータスが低い今の状態なら！全員下がれ！道を切り拓く！」

「え？……みんな下がって!!」

聖我が下がるように声を大きくして伝えるとその隣にいた園部と呼ばれる女子がみんなに下がるように復唱する。

園部の掛け声でようやく下がったクラスメイトを見てから闇黒剣月闇のジャガンリーダーに天空のペガサスを3回リードさせる。

《必殺リード！必殺リード！必殺リード！ジャアクペガサス！》

そして闇黒剣月闇のトリガーを引いて闇黒剣月闇を横に切り裂くように構える。

《月闇必殺撃！習得三閃!!》

青いエネルギーを闇黒剣月闇に充填させ、そのまま青いエネルギーを斬撃とともに発射する。その場にいたトラウムソルジャー全てを切り裂く。

「進め！さっさと速く行け！」

「あ、ありがとう、神刃！」

園部にお礼を言われたがそれをスルーして残りの生徒達に速く行くように伝え、前に残っている光輝たちの援護に向かわねばと思っていたら、ハジメが光輝の元に向かつていた。

「……あいつなんで弱いのに行くんだ？……分からねえな………トラウムソルジャー」

をまずは片そうか」

無限収納BOXに天空のペガサスをしまつて今度はストームイーグルを取り出す。

《必殺リード！必殺リード！ジャアクイーグル！》

ジャガンリーダーにストームイーグルをリードしてトリガーを引く聖我。

《月闇必殺撃！習得二閃！！》

今度は突きを放つて炎のエネルギーで出来た鷲を飛ばす。炎の羽根にトラウムソルジャーが包まれ、燃やされて息絶えて行く。

「……あとはベヒモスと戦っている奴らだけだ。……そろそろ失礼しようかな？」

もう聖我は他の生徒とともに階段まで下がっていた。そして闇黒剣月闇を構えながら光武器作製で出てくるトラウムソルジャーを倒していく。

だがここで驚くべきことが起こる。ベヒモスの前にハジメを置いて勇者とメルドにその他が退却してきたのだ。

「……………どう言うことだ。……理解に苦しむ。?!錬成で止めてやがんのか！なら納得だが、後退する時どうするんだ？」

そして勇者たちがこつちまで来てから香織が叫ぶ。

「皆、待って！ 南雲くんを助けなきゃ！ 南雲くんがたった一人であの怪物を抑えるの！」

香織のその言葉に何を言っているんだという顔をするクラスメイト達。そう思うのも仕方ない。なにせ、ハジメは「無能」で通っているのだから。

だが、困惑するクラスメイト達が見てみるとそこには確かにハジメの姿があった。

「なんだよあれ、何してんだ？」

「あの魔物、上半身が埋まってる？」

次々と疑問の声を漏らす生徒達にメルド団長が指示を飛ばす。

「そうだ！ 坊主がたった一人であの化け物を抑えているから撤退できたんだ！ 前衛組！ 後衛組！ どちらも遠距離魔法準備！ もうすぐ坊主の魔力が尽きる。アイツが離脱したら一斉攻撃で、あの化け物を足止めしろ！」

ビリビリと腹の底まで響くような声に気を引き締め直す生徒達。中には階段の方向を未練に満ちた表情で見ている者もいる。

無理もない。ついさつき死にかけたのだ。一秒でも早く安全を確保したいと思うのは当然だろう。しかし、団長の「早くしろ！」という怒声に未練を断ち切るように戦場へと戻った。

聖我もFateの談笑をした仲だと思つて無限収納BOXからジャアクドラゴンを取り出してジャガンリーダーにリードさせる。

《必殺リード！ 必殺リード！ 必殺リード！ 必殺リード！》

劇中では有り得なかった4回のリードを同時に行う。そしてトリガーを押す。

《月闇必殺撃！習得四閃!!》

突きの構えを行い、黒いドラゴンの力を纏わせる。そしてベヒモスに狙いを定めて突きを放つ。

黒いブレスがベヒモスに発射される。その一撃でベヒモスをヒットバックさせる。

そしてハジメが後退し始め、あとは任せようと思っていたその時、ハジメに火球が当たり、そのまま転げる。そしてベヒモスとともに落下してしまった。

「（セイバーが使えていれば飛行能力があったが、光剛剣最光と闇黒剣月闇じゃあ飛べない……………試してみるか）光武器作製！チェーン！」

「おい南雲捕まれ！」

光のチェーンを作り出して南雲に握らせようとしたが、長さが足りず捕まえられなかった。

「クソが……………」

そのまま落ちていく南雲を見て心から助けることが出来なかった自分を攻めるのだった。

檜山

「……ほぼ接点がなくとも悲しいものだな、クラスメイトがいなくなるといのは」

闇黒剣月闇の変身機能を使えば仮面ライダーカーリバーになっていけば助けることができたか……何度考えたことか。あの時出し惜しみをしないでカーリバーになっていれば被害を出さないでベヒモスを苦難なく倒せたのではないか。

「……白崎さんは寝込んでおられるらしいし。……リリアーナからの情報ではさっさとクラスメイト達を戦争に参加させようとしているらしいな。……ありふれた職業で世界最強つてもしかして南雲のことなのか？」

「……この物語は本当に戦争系か？ いや違う。戦争系ならこの国は戦火に見舞われるはずだ。だからその可能性はない、なら……まさか冒険系？……なら南雲が主人公か？」

南雲が主人公で奈落到ちて覚醒する。有り得そうな物語だ。

「まあそれに賭けよう」

そのまま聖我は寝ようとベッドの中に潜り込もうとする。すると、

「居る？…神刃？」

園部優花がコンコンと扉を叩く。

「何の用ですか？」

「天ノ河が集まれつてさ」

光輝がクラスメイトを集めているらしく、聖我はその呼び出しを受けて広場に向かう。すると、檜山の声が聞こえてきた。

「俺の所為で皆をあんな目にあわせちまって、ホントにすまねえっ!!」

土下座する檜山大介に対する生徒達の視線は厳しいものだ。それは当然だろう。メルド団長の言葉に従わず、不用心にトラップを発動させた結果、自分達を死の危険に追いやったのだから。

この事態を予想していた檜山は土下座した。反論することが下策以外の何ものでもないと知っていた彼は、適切なタイミングを見計らい謝罪するに徹したのだ。檜山の狙いは光輝の目の前での土下座である。基本的に性善説で人の行動を解釈する光輝ならば、謝罪する自分を確実に許すだろうと予想していたのだ。

「……」

聖我は終始黙っていようとした。檜山の特徴と光輝の性格を知らないからだ。断罪はされるだろう、そう思っていた。

「——檜山」

光輝は足元で額を地に擦り付け、許しを請う檜山に話しかける。ピクリ、と肩を震わ

せる檜山。それを批難に怯えていると解釈した光輝は――

「よく勇気を出して謝罪してくれた」

その声は罪を責めるものではなく、むしろ慈悲に満ち溢れたものだった。

「(はあ。)」

「お前の行動の結果、南雲は死んでしまった。それは理解しているな？」

「あ、ああ……」

「なら、二度と同じことをしないでくれ。次からはきちんとメルドさんの指示に従って行動するんだ。もう二度と、クラスメイトを死なせてしまわないように」

そう言うと、光輝は檜山を取り囲むクラスメイト達の方に向き直る。

「皆も思うところはあるかもしれない。でも、クラスメイトの死に何時までも囚われちゃいけない！ 前へ進むんだ！ きつと、南雲もそれを望「むわけがないと思うぞ」神刃!？」

「……天ノ河、なんで君がそれを決めるんだい？」

「だって南雲がそれを望んでー」

「望んで？ ホントかな？ まあそれは置いておこう。檜山くん

「な、なんだ？」

聖我の出す殺気に怯えながら聞く檜山。

「……君さ、あの魔法攻撃を放ったかい？南雲を攻撃した魔法攻撃を自分で」

「……いや……違う……それは俺じゃない……俺は炎球なんて放ってない」

「なんで炎球？……私はそんなこと言ってないんだけど？」

光輝の発言で緩んでいた生徒達の睨みが厳しさを再び帯び始める。それを不味く思ったのか、光輝が檜山と聖我の間に入る。

「神刃、辞めるんだ。檜山はやってないと「疑わしきは罰せよ。私がいつも心がけている事だ。明らかに檜山は怪しい」それでも檜山はやっていない！」

「……そうか、あくまで容疑者候補を庇うのか？」

「いやそんなことは「……そろそろお辞めくださいませんか？」イシユタルさん！」

イシユタル・ランゴバルドが光輝と聖我の口論に割り込んできた。

「私が思うに貴方が怪しいのですが、どうでしょうか？」

「何故でしょうか？」

「……あなたは私たちが知らない武器をお持ちのよう」「それは今関係ありますか？」ありますとも、効果が分からない武器ほど怪しいものはありません」

クラスメイトがこちらを睨んでくる。確かに怪しいと。

「これですか？」

無限収納BOXから闇黒剣月闇を取り出す。

「そうそれです！なんですかそれは？」

「銘は闇黒剣月闇、私の家の家宝である聖剣の1つですよ」

「聖剣……ですか？それが？」

「その通り。あなた方が保有するなんちゃって聖剣とは全く違う聖剣ですよ」

イシユタルは聖我を睨み始める。それはそうだろう。自分の国の聖剣がなんちゃって聖剣と呼称されたのだから。

「……それは回収させて貰いましょうか？」

イシユタルは闇黒剣月闇が欲しいようだ。ベヒモスを簡単に弾ける武装なのだ。さぞかし強いと思ったのだろう。

「……なぜ？……ああ。ナルホド。これは怪しいから回収しないとイケない？」

「その通りです。さあこちらにその剣を」

「渡すわけないだろ。馬鹿」

「なら実力行使です」

メルド直轄の騎士ではない騎士が現れ、聖我に向けて剣を向ける。

「どんな話が逸れてるな……まあいい、少しこいつら黙らせようか」

無限収納BOXから闇黒剣月闇をしまつて今度は光武器作製を発動する。そして光の刀を作り出して構える。

「いざ、まい「何をしているんですか？聖我さん」リリイか、いや聖剣を奪おうとしてきたから対応しているだけだが」

「はあ……下がってください。イシユタル様、あなたもです。これは立派な反逆と捉えますよ？」

「わかりました」

リリアーナがヘリーナを連れて現れて事態を収拾してしまった。そして檜山がハジメを撃ったかどうかは有耶無耶になり、クラスメイトの間では終わった事件として認識されたのだった。

ごく一部を除いて……

裏切りの疑いは晴れない

「本当に怪しいと思われると人は全く接してこなくなるのか……私は何もしたくは無いのだけどな……」

聖我はあの時イシュタルに投げかけられた自分の聖剣に対する疑いによつてほとんどのクラスメイトから冷たい目で見られていた。

別に隠していた訳では無い。使う機会がなかったのだ。別に訓練の時は光武器作製の能力で生み出した剣で戦ったり模擬剣を使えばいい。それにラットマン程度の雑魚、それに数の少ない魔物相手なら普通の剣で十分だ。

ただトラウムソルジャーとの戦いは思っていたよりも数が多かったため必殺リードを使っただけだ。

それなのにイシュタルの質問それだけの性で自分の剣の力でハジメを落としたのではないかと思われてしまったのだ。そしてそれを謝らない聖我はクズではないか？という噂が流れてしまっていた。

「私が今接しているのはリリイと八重樫、園部のパーティーくらいか……本当にボツチだな……」

聖我が言った通り聖我に話したりするのはリリアーナ、雫、そして園部優香、菅原妙子、宮崎奈々だ。

リリアーナはいつも通り会話しているだけで噂は関係ないと思っっている。そして雫は同様に噂は関係ないと思っって訓練している。

園部達はこの間のベヒモス・トラウムソルジャー戦の時に園部を助けてくれたのにハジメを助けられないわけないだろうと思っって普通に接してくれている。

「……リリイのところに向かうか……はあ……」

聖我は王宮から与えられている部屋から出てリリアーナの部屋に向かうことにした。

「こんばんは、リリイ」

「こんばんは、聖我」

聖我はリリアーナの部屋に来てヘリーナの淹れたお茶を二人で飲んでいた。

「なにか新しいことあった？」

「えつと……いい知らせと悪い知らせがあるんだけどどっちが聞きたいですか？」

「どうやら2つあるようだ。」

「なら悪い知らせから」

「悪い知らせは聖我を追い出そうとする勇者様方の動きと貴族達の応援のせいで聖我が

「ここから追い出されてしまうこと」

「やっぱりですか……薄々わかってたけど」

リリアーナの言う通り光輝と香織が一緒になって聖我を追い出そうとしていてそれを応援する貴族は存在している。

香織がなぜ光輝と一緒に……聖我を追い出そうとしているかと言うとハジメを失ってショック状態だった香織が起き上がり、ハジメを失ったのは檜山か聖我の性というのを聞いて、檜山は謝ったのになんで聖我は謝らないんだ！という光輝の謎超理論に何故か同調して追い出そうとしているのだ。

「……それとい方の知らせは貴方の立場を確立させつつ、勇者様の文句も言わせないような立場を貴方に与えることができることになったことです♪」

「？」

聖我はリリアーナが何を言っているのか分からなかった。立場を確立させつつ文句も言わせないような立場とは？……と思つてぽかんとしている

「貴方を私の護衛騎士に任命させてください♪……駄目ですか？」

上目遣いでこちらを見ながら聖我にリリアーナの護衛騎士にならないか聞いてきた。たしかにリリアーナの護衛騎士になればリリアーナの加護を受けることが出来るだろう。

「君のお父さんはどうなんだい？」

「父は神の使徒が自分の意思で護衛をしてくれるなら別に構わないし、娘を信頼しているなら裏切らないだろう。それに娘が初めて気兼ねなく話せる人物なのだから私が反対意見を握り潰そう……そう言っていましたわ。それにこれはお母様も同じ意見です」

「……私でいいのか？」

「クゼリーさんが文句をいいそうですけど、私は別に構いません。私の初めての友達ですもの……いなくなったら心細いですし」

「……」

聖我はどうしようか悩んでいた。リリアーナの護衛騎士になってリリアーナの加護で干渉されなくなってもリリアーナに負担がかかるのではないかと。

「……私は貴方を守りたいんです。だから貴方は私を貴方の聖剣の力で護ってくださいませんか？」

「わかりました。リリアーナ姫。その案ありがたく受けさせていただきます」

聖我は決心したような表情でリリアーナの前で跪いた。

「これからよろしくお願いします」

この後王の間で聖我を追い出そうとしていた勇者と治癒術士と貴族達が聖我がリリアーナの騎士に任命されたことに驚いていた事はまた別の話。

初めての人殺し

「聖我は護衛騎士に任命されてすぐにリリアーナと複数の護衛騎士と共に問題が起きているというところある貴族の領地に来ていた。税金を規定より多く徴収していると言われている、魔人族との繋がりをも疑われている貴族。」

他の護衛騎士は聖我のことをあまり信用していない。そのことを別に聖我は気にしていない。リリアーナが自分のことを信用してくれていればそれでいい。そう思っているからだ。

その問題の貴族との会談ではリリアーナと聖我以外の護衛騎士が出席することになっていたので、聖我は扉の外で待機していた。

聖我は扉の外で闇黒剣月闇を腰に携えながら待機していて、探知の技能を使用していた。キーワードは魔人族。未だヒットはしないが微弱な魔人族の波長を感じていた。

そしてそろそろ会談が終了しそうな時、問題が起こった。突然護衛騎士が攻撃を受けたのだ。2方向から。

「裏切ったのですか！ヴァージ卿！」

「……フツ、魔人族の圧倒的な力の前には我々は無に等しいからな。私は貴様の身柄を

持つて魔人族の方に寝返る！」

ヴァージ卿と呼ばれた貴族は魔人族に魔人族の戦士を2人貸し与えられていたのだ。

「聖我！お願いします！」

「了解、リリイ！」

聖我は扉を蹴破り、闇黒剣月闇を構えて魔人族に斬り込む。

「……なるほど、神の使徒か。だが勇者でもない限り魔人族に勝つことは……」

「リリイ！下がっていてください！」

「ええ！」

《かつて、世界を包み込んだ暗闇を生んだのはたった1体の神獣だった……》

無限収納BOXからジャアクドラゴンを取り出して1ページ目を開く。

「魔人族など私の相手にならないことを知れ！」

《ジャアクリード！》

ジャガンリーダーにジャアクドラゴンを読み込ませて邪剣カリバードライバーに装

填する。

「変身！」

闇黒剣月闇でライドインテグレーターを押し変身する。

《闇黒剣月闇！》

《Get go under conquer than get keen!》

《ジャアクドラゴン!》

《月闇翻訳!光を奪いし漆黒の剣が、冷酷無情に暗黒竜を支配する!》

聖我は仮面ライダーカリバーに変身した。

「姫は私が護る。絶対に傷つけさせはしない!」

「……」

2人の魔人族は黙ってそのままカリバーとなった聖我に襲いかかる。

「(なんで黙ってやがんだ?……まあい、さつさと片付ける!ストームイーグル! 天空のペガサス!)」

攻撃を避けながら無限収納BOXからストームイーグルと天空のペガサスを取り出してジャガンリーダーにリードさせる。

《必殺リード!ジャアクイーグル!》

《必殺リード!ジャアクペガサス!》

そして闇黒剣月闇のトリガーを引きながら2歩後ろに下がる。

《月闇必殺撃!習得三閃!!》

剣を横薙ぎに振ることでペガサスとイーグルの翼をエネルギーで表現された一撃を魔人族の1人に叩き込む。

「……………」

「仲間が死んでも何も思わないのか……洗脳されてるのか？」

魔弾を何発も聖我に放つ魔族。だがその攻撃を闇黒剣月闇で切り落としながら洗脳されているのか？と思ってしまうが、最優先事項を思い出して闇黒剣月闇を必冊ホルダーに納刀する。

《月闇居合……》

魔族が聖我が何もしないで立ち竦んでいるのを見て好機と思ったのかそのまま腕に魔力を込めながら突撃する。

すると、

《読後一閃！》

カリバーの胸部装甲……ボルキュイラスに攻撃が当たりそうになるストレスで闇黒剣月闇を魔族の首に振り下ろして斬り殺す。

「……安らかに眠れ」

そう呟いてから変身を解除してリリアーナの前に跪く。

「終了致しました」

「御苦労さまです。私の騎士」

リリアーナが聖我のことを労うと、聖我は立ち上がって闇黒剣月闇を裏切った貴族に

向ける。

「どうしますか？」

「運んで貰えますか？……王宮まで」

「わかりました。ブックゲート」

無限収納BOXからブックゲート ワンダーライドブックを取り出して王宮へと繋げる。ブックゲート ワンダーライドブックは異世界に転移して少し経ってから他の特殊なライドブックと同じ時期に追加されたものだ。

「では参りましょうか？」

「ええ」

他の護衛騎士を叩き起して裏切った貴族を運ばせて、聖我はリアーナの手を引いてブックゲートの中を通って王宮に戻ったのだった。

リアーナの役に立てたと、聖我は少しご機嫌だった。

聖我はその後部屋で人を殺したことを今更思い出してそのまま吐いていたが……

『そろそろあの2本の聖剣を解放してあげましょうか』

聖我を転生させた女性は椅子に座りながら宝玉を見てそう呟いた。

勘違いの決闘

火炎剣烈火と水勢剣流水が魔人族討伐が終わってから解放された。どうやらこれからは物語に出てきた順に解放されるらしい。

「火炎剣と水勢剣が使えるようになったか。なるほど、使えるようになるには時間が必要ということか……これはリリイに報告すべきか否か……まだいいか。さてそろそろ護衛交代の時間だ……少し街に出ても……探査に何か引っかけたな！」闇黒剣月闇
！」

リリアーナが魔人族に襲われてから探査の技能は常に張り巡らせている。キーワードは敵意を持ったモノ。そして今回は急速で何か接近してきていたため無限収納BOXから闇黒剣月闇を取り出して構える。

「……………なんだ天ノ河か……………」

目の前に黄金の鎧と国から支給された聖剣を持ってそのまま突っ走ってくる青年を確認し、そんな特徴のある青年は光輝しからないため闇黒剣月闇を無限収納BOXにしまう。

「なんの御用ですか？勇者さま？」

「はアはア……………おい神刃！人を殺したっていうのは本当か!？」

「え？ええ、確かに殺しましたが…………」

「……………ならさつさと自首しろ！なんで人を殺したのにまだここに居るんだ!？」

聖我には何を言っているのか全く分からなかった。さつきから光輝は何をとち狂ったことを言っているのか全く分からなかった。人は確かに殺したが、投獄されるわけが無い。

「……………何故?」

「何故って……………お前狂ってるのか!？人を殺したんだぞ！ならなんでお前は牢屋に居ないんだ!？」

「静かにしてくれないか？私の主が今休んでいるんだ。もうすぐ護衛交代の時間だし」

「……………ふ、巫山戯るなあ!!お前は人の命を奪ったんだぞ!」

「リリイが寝てる。昨日の疲れが取れていないんだ。何も出来ない勇者が……………リリイの睡眠の妨げをするな!」

「……………何も出来ていないって……………お前も出来てい「それはちがいますよ勇者様」え？貴女は?」

鎧をつけて剣を腰に携えた剣士が1人リリアーナの扉の前に足を進めて光輝の言葉を言葉で止める。

「もう交代だ。ゆっくり休め。魔人族2人と戦ってから護衛を私たちの当番の日までやってくれたんだ。私たちもこの仕事に着いて10年くらいだが、最初神刃のことは警戒していたが杞憂だったようだ。それに神刃のリリアーナ様への忠誠心は私たちを超えそうなくらい有るな」

「拾ってくれた恩義は元の世界に帰るまでに返すつもりだ。返せなければこの世界に残るつもりだ。別に私は戦争に参加するつもりは無い。まあリリイが参加するように命令すれば参加するがね？クゼリーさん」

「フツそうか、だがな神刃、ここではいいが公の場ではリリアーナ様のことをリリイと呼んではダメだからな？」

「わかっているさ。じゃあ私は部屋に戻りますよ」

「ああ。ありがとう」

そのまま聖我はあくびをしながら光輝とリリアーナの護衛騎士のクゼリーの前から立ち去り、そのまま自分の部屋に向かった。光輝のことはスルーしてそのまま自分の部屋に向かった。……仮にも勇者な光輝をスルーしてだ。

クゼリーと聖我の会話に口をあぐりと開けてぼかんとしていた光輝。そしてクゼリーがちよつと笑いながら光輝の肩を叩くと

「おい待て！神刃ア！」

叫び出した光輝をうざがりながら聖我は受け答えをする。

「なんですか？」

「お前：俺と決闘しろ！俺が勝ったらお前の聖剣を渡してもらってお前は牢屋に入れ！」

「じゃあ私が勝ったら？」

「そんなものは必要ない！どうせ俺が勝つからな！」

「……聖剣は使っていいのか？」

「ああいいだろう！どうせ俺が勝つ！」

その言葉を聞いた聖我はニヤリと光輝に見えないように笑いながらこう答える。

「わかりました勇者殿。その決闘受けてたちましよう」

決闘は秘密裏に行われることになった。イシュタルは恐れなかったが、エリヒド王が勇者が聖我に倒されたら士気に関わると、リリアーナ、エリヒド、イシュタル、メルド、雫、そして回復役の香織が立会の元、真夜中の訓練場で行われることになった。

エリヒド王は魔族を単独で2人倒した聖我の実力を買っているのだ。

「では、これより勇者・天ノ河光輝とリリアーナ姫の護衛・神刃聖我の決闘を始める！双方準備を！」

メルドの掛け声で聖我は聖劍ソードライバー（火炎剣烈火）を取り出した。

知らない聖劍が出てきてリリアーナ以外の立会者が驚くも、リリアーナは違う聖劍の事を伝えなかった聖我に頬を膨らませていた。

そして聖劍ソードライバーを腰に纏わせる。

《聖劍ソードライバー！》

《ブレイブドラゴン！》

伝承を省略してブレイブドラゴンを起動して聖劍ソードライバーにセットする。そして火炎剣烈火を聖劍ソードライバーから引き抜く。

《烈火抜刀！》

「変身！」

《ブレイブドラゴン！！》

《烈火一冊！》

《勇気の竜と火炎剣烈火が交わる時、真紅の剣が悪を貫く！》

聖我が変身したことにリリアーナ以外が再度驚き、リリアーナは自分のことのように誇らしげにしている。

「出来ましたよ。さあ始めましょうっ。」

「では開始！」

そのメルドの開始の声を聞いた光輝が聖剣を振りかぶって聖我に突撃して斬り掛かる。

「フーン！」

火炎剣烈火を聖剣と打ち合わせて弾き飛ばす。なまくら聖剣と違って火炎剣烈火は闇と光の聖剣のレプリカ。だが劇中でも色々な剣と斬り結んでも壊れることは無かった。

「どうした勇者殿！こんなもんか！」

「まだまだア！」

光輝は小声で天翔閃の詠唱を始めながら火炎剣烈火を持つ聖我と剣を打ち合わせる。そして、光輝が勝敗を決めるために詠唱を終わらせて1歩下がって聖剣を振り上げる。

「喰らえ！天翔閃！」

眩い光の奔流が聖我を包む。これを見た光輝はキメ顔で香織と雫に俺やったよ！と言おうとする。

ーだが現実には甘くない。

《必殺読破！》

《烈火抜刀！》

《ドラゴン！一冊斬り！ファイヤー！！》

光の奔流を受けながらそのまま火炎剣烈火の前に突き出して突き進み、光輝の前に躍り出て火炎剣烈火に炎を纏わせながら光輝を十字に斬る。

「火炎！十字斬!!」

「ガはアアア!!……な、なんで……」

光輝は天翔閃を受けてほぼノーダメージなのがなんでもなにか分らないらしい。

「ん？ああ。貴方の天翔閃を受けてなんで立っているのかそれが気になるんですか？……色々要因はありますけど一番の要因は貴方のステータス不足です。たかがトラウムソルジャーを吹き飛ばす程度では私にダメージを与えることは不可能です。…それに天翔閃っていうのは！」

詠唱せずに火炎剣烈火に光を光輝より綺麗に纏わせる。

「天翔閃・翼撃!!」

立ち上がろうとした光輝に光を纏った火炎剣烈火を高速で近づいて斬りつける。

「ぎゃああああ!!」

「こっやるんですよっ!!」

聖我の圧勝にエリヒドとリリアーナ、メルドと雫が納得している中香織は唾然としてイシユタルは真っ白に燃え尽きていた。

「そもそも魔人族を殺したただけでなんであんなこと言われなきゃいけないんですか……」

貴方がクラスメイトにやろうと言ったことでしょう……」

そう言つてから聖我は変身を解除してリリアーナの前に跪く。

「御苦労さまでした。部屋まで護衛して貰えますか？」

「Yes. My Lord.」

そのままリリアーナの前に出てリリアーナの部屋まで送つてリリアーナと一緒に
茶を飲んでから部屋に戻つて寝たのだった。

光輝や他の立会者を放置して。

皇帝と水の剣士

勇者・光輝との戦いから結構経ち、リリアーナの護衛にも慣れた頃、勇者達がベヒモスを倒して帰ったことを知らない聖我は……

「神刃、ヘルシャーの皇帝からの使者がこちらに来るらしい。まあ休暇な神刃には関係ないか」

「はあ……案外遅くありません？普通なら召喚の三日後には来そうですね？」

「……ヘルシャーは実力主義な国だ。なぜなら帝国は三百年前にとある名を馳せた傭兵が建国した国であり、冒険者や傭兵の聖地とも言うべき完全実力主義の国だからな。……武人としては皇帝とは気が合うだろうがな。メルド団長も皇帝からいつもスカウトされている……まあ神刃は休暇だからいないだろう？今度はどこに行くんだ？」

ヘルシャーの皇帝の件は聖我もメルドやクゼリー、もちろんリリアーナから聞いていた。強いヤツと戦いたい……そんな向上心のある帝国最強の戦士だと。

だが聖我は休暇でいい。いつも休暇ではブックゲートで何処かの街に向かって観光しているからだ。もちろん仕事はしているためエリヒドから給料も貰っているからそのお金は王国から小遣いで渡されたものでは無いため気兼ねなく使える。

聖我は聖剣探しと色々な街の骨董品屋に行ったり、美味しい飯のある宿屋や飯屋を人伝に聞いて食べに行っていたりする。こないだはウルの水妖精の宿のカレーもどきを食べに行っていた。

「そうですね、エリセンにでも行きましようかね？エリセンは水産物が美味しいと聞きますから魚を食べに行きますよ。次いでにドライブにでも行ってきます」

「そうか、じゃあまた交代の時にな」

「では」

ブックゲートを開いてそのままエリセンに向かった聖我だった。

「え？いねえのか？」

「はい…聖我は休暇で今は確かエリセンで海鮮料理を食べているはずですね…」

「来るのが遅かったか…神刃聖我をここに呼べないのか？俺は勇者よりそいつと戦ってえんだ！魔族2人を1人で倒した武傑をこの目で見定めたい」

光輝とヘルシャーの使者が戦い、その使者が皇帝・ガハルド・D・ヘルシャーだったことがバレ、ガハルドは勇者では戦い足りない、魔族を倒した聖我を連れてこいと言いつつ出した。

だがリリアーナの聖我はいないという発言にポカーンとしてしまい、そのあと悔しが

りながら聖我を呼べないのかリリアーナに問い始めた。

「…あまりやりたくはないのですが、ヘルシャーの皇帝の頼みですからやりましょう。あくまで頼まれたからです」

「なんかすごい渋るなリリアーナ姫」

「えつと…」

ガトライクフォンをポチポチ操作し始めたリリアーナ。何故スマホのようなものを持っているのか地球組は分からなかったが、リリアーナはLINEを開いて聖我のガトライクフォンに

『私の命令です。さっさと王宮に来てください』

と聖我のLINEに送ったのだった。

するとリリアーナの目の前に本のようなゲートが生成されて聖我が出てきた。

………右手にイカ焼き、左手にタコの丸焼き、そして口に魚の丸焼きを啜えて。

「…もぐもぐ…もぐもぐ…もぐもぐ…ごくん………リリアーナ姫、なんの御用でしょうか？ 私は今まで海で海鮮を食べながら海にいたのですが」

「ああ、それでそんな格好なんですか？」

リリアーナの言うそんな格好とはアロハシャツに黄色のズボンを履いていて、顔にはサングラスに麦わら帽子と、いかにも海を満喫していましたふうな格好で跪いていた。

「えつと…ヘルシャーの皇帝が貴方と戦いたいと」

「ヘルシャーの皇帝陛下?」

リリアーナの前から立ち上がってグルリと当たりを見回してヘルシャーの皇帝を見つけるとガハルドに聖我はこう聞く。

「勇者では駄目ですか?」

「満足出来ん!」

「わかりました!やりましょう!」

「貴様の持つている聖剣を使えよ!」

「わかっています!」

聖我はまたも戦闘をするようだ。

「行くぞ!」

「ええ!」

光武器精製で光の剣を作ってガハルドの剣と斬り合いながら聖剣ソードライバー（水勢剣流水）を腰に巻き付けてライオン戦記を起動する。

《ライオン戦記!》

そして光のナイフをガハルドにぶつけて時間を稼いでライオン戦記をソードライ

バーにセットして抜刀する。

「変身！」

《ライオン戦記!!》

《流水一冊!》

《百獣の王と水勢剣流水が交わる時、紺碧の剣が牙を剥く!》

青い騎士の登場にガハルドは困惑しながらもすぐに笑いながら剣を聖我に向ける。聖我也剣を向けようとするが少し考え直して剣を聖剣ソードライバーに戻す。

「……ヘルシャーの皇帝・ガハルド殿には今使える最強の力で答えるのが礼儀と私は思う。だからこそ！」

《ピーターファンタジスタ!》《天空のペガサス!》

聖我は2冊のワンダーライドブックを追加で取りだして起動する。

「面白え! やっぱ勇者とは違うなお前!」

「この世界に来て初めての全力です! 受けきってもらいますよ!」

2冊のワンダーライドブックをソードライバーにセットして抜刀する。

《流水抜刀!》

《蒼き野獣の鬣が空になびく!》

《ファンタステック! ライオン!!》

水の一撃と風の剛撃がぶつかり合い、急いで鈴が結界を張ったが、すぐに破られてしまった。

「ウオオオオオオ!!」

互いに叫び合い、互いの技をぶつけ合う。その行為に勇者との戦いの時や魔族との戦いの時には感じなかった高揚感を感じる聖我。

勝負は付いた。僅かに聖我のハイドロ・ボルテックスがガハルドの風破斬を打ち破り、ハイドロ・ボルテックスがガハルドにぶつかったのだ。

聖我の勝ちだった。そして聖我はガハルドに回復魔法を掛けてそのままリリアーナとエリヒド、そしてガハルドに頭を下げてそのままブックゲートでエリセンに戻ったのだ。

「その後の出来事」

「リリアーナ姫、神刃聖我を譲ってくんねえか？」

「嫌です! あの方は私の護衛です!」

「いいじゃねえか! あいつを取り立てて将軍にすれば魔族なんて一網打尽だしな! それにアイツも褒美を貰えるぜ?」

「(将軍?! それに魔族との戦いで聖我が功績をあげれば褒美で私と結婚することも!」

………」

「(……リリアーナ姫ってこんなに考え分かりやすかったか?)」

結局リリアーナはガハルドの要求を吞まず(顔を赤く染めながら)、そのまま部屋に戻って本当にああ答えてよかったのかな?と少し後悔しながらそのまま布団の中に潜った。

↳更にその後の出来事↳

「くしゅん……誰かが私のことでも話してるんですかね……」

「いやあんたそれはこんなに寒くなるもの食べたからでしょうが」

日本にあるかき氷に似た食べ物を山ほど食べて寒くなってくしゅみやみをしたにも関わらず、誰かが聖我のことを話しているのか?と推測した聖我にその店のおばちゃんがツッコミを入れていた。

何気に当たっているが。

聖我は嫌われている

「なんでまだ王宮にいるの？」

その言葉は聖我の心に何故か深く刺さった。だけどそれは自分を守ってくれた、自分の立場を使って助けてくれたリリアーナの言葉ではなく、光輝と一緒にあって聖我のことを疎ましく思っていた白崎香織だった。

「何故ですか白「苗字で呼ばないでー」さいですか」

どうやら聖我に対して強い嫌悪感を持っているようだ。

「で、勇者パーティの治癒術師殿、たかが護衛の私に対してなんの御用でしょうか？ 私はリリアーナ姫の護衛で忙しいのですが」

「……どうせなんちゃってでしょ！ さつさとリリーのエセ護衛なんてやめてさつさと王宮から出て！ 私はあなたのことを視界に入れたくないの！」

「……じゃあここに来なければいいでは無いですか」

「え？」

「それか私がない時にここに来ればいい。私はここから出れませんよ。休暇の時以外」

「……なんでよ！なんで出れないのよ！」

聖我のここから出れない発言に香織は強く怒鳴る。当たり前のことなのに、香織はそのことを忘れていいのか知らないのか。

「私の主はリリアーナ姫です。私をここから出したいならリリアーナ姫に言ってください」

「ッー！」

聖我の主はリリアーナであり、リリアーナが解雇すると言わない限り聖我を解雇することはできないのだ。それに魔人族を倒せる神の使徒は今は1人、聖我しかない。2つの理由が聖我を王宮から出すことが不可能なのだ。

「……南雲く「ハジメくんの名前を言わないで！」……錬成師くんのこと私に対して恨み辛みをぶつけるならお門違いだ」

「え？」

香織は聖我の言葉に呆然とし始める。

「……錬成師くんがベヒモスに向かっている間私はずっとトラウムソルジャーを斬り殺していた。私には錬成師くんを奈落に落とすことは不可能だ」

「それはみんなが魔弾を放ち始める時じゃない！」

「ならもう1つ言おうか。私の攻撃は紫の龍のエネルギー攻撃だった。君なら見えてい

たと思うが、錬成師くんに当たったのは違う色のはずさ」

「……………」

「それに君たちは私が錬成師くんを奈落に落としたと言ったけど、もし私が落とそうとするなら私は助けに行かないでそのまま無視すると思うよ」

聖我は光武器器精製で鎖を作ってハジメを助けていた。

「うるさいーうるさいうるさいうるさい!!あんたが悪いの!あんたが助けないから!あんたが代わりに落ちればよかったのに!」

「……………そうか」

その後も香織は聖我に罵詈雑言を浴びせて来た。リリアーナの部屋には防音魔法を掛けてその罵詈雑言を聖我は目を瞑って探查を行いながら聞いていた。

香織が聖我に罵詈雑言を浴びせているのは王宮のメイドや騎士、文官に見られていたのだが、そんなことはお構い無しに香織は聖我に罵詈雑言をずっと浴びせ続けた。

「はアはア……………」

2時間くらい経ってから疲れたのか香織は聖我を罵るのをやめてそのまま聖我を睨みつけてからそのまま立ち去って行った。

噂を聞きつけたのか、雫が聖我のところに来た。

「神刃くん、ごめんなさい。香織が……」

「構わない。リリアーナ姫には罵詈雑言を聞かせないように防音魔法を掛けていた」

「ごめんなさい」

もう一度聖我に謝ってから走って行ったのだった。

「だからですね！もうちよつと神刃君は皆さんと協調してください！だからさつきも白崎さんに怒られるんですよ！」

護衛交代の時間になり、疲れていた聖我はそのまま自分の部屋で眠ろうとすると愛子が聖我の目の前に出てきてそのまま説教をし始めた。

「自分がやったことすら謝らないから皆さんと話したりすることが出来ないんです！もう高校生なんですよ？ちゃんと謝らないとダメでしょう！」

「(……このクソ教師が……事情も詳しく知らないのに知ったような口を聞かないでくれ……)」

「聞いてるんですか！ちゃんと皆さんと合わせてください！リリアーナさんのところでなんちやってな仕事なんてしてないで！」

疲れた聖我に説教。もう精神がすり減り始めていた。

「(……なんちやってじゃねーよ。ちゃんと仕事してるし、技能使って農地検査とかして

るあんたとは違って結構重労働なんだよ。リレイからの恩が無かったらそのまま仕事放棄してるわ。そもそも……」

「……それに人殺しまでしたそうじゃないですか！なんでそんなことするんですか！先生に言ってみなさい！」

「……仕事だ、いい加減寝かしてくれ」

「何が仕事ですか！天ノ河くん達の方が重労働ですよ！知らない世界にいきなり連れ込まれて戦争を手伝うことになって！いつも訓練している！あなたはなんですか！扉の前で立っているだけじゃないですか！」

「……あーそうですね。貴女から見れば立っているだけなんですよね」

「なんですかその態度！」

「はあ……物事を固定の人間からしか見ない。決めつけ……それにふざけているとしか思えない物言い……もうどうでもいいよ。勝手に私の評価をつけてくれて構わない。私自身あんたらともう関わりたくない」

「え？」

「私は眠いので帰ります。さっさと失せてください……」

呆然とする愛子を見無視してそのまま部屋に戻ってそのまま眠りについたのだった。

聖我を転生させた女性は寝ている聖我を覗きながらため息をついていた。

「……………ここまで原作キャラが聖我を嫌うなんて……まあ火炎と水勢を使いましたし……次はあの3つを解放しましょうか！」

女性は黄色と緑色とグレーの光る玉を持ちながらうふふと笑っていた。

雫の刀

「シヤムシールが使いにくい？」

突然訓練中に聖我が雫にシヤムシールが使いづらいと愚痴を吐かれた。確かに雫は剣道を習っていたと記憶している。それは異世界トータスに来てからの記憶だが。

「ええ。なんだか刀っぽいけど刀じゃないのよ。なんていえばいいかしら。やつぱり剃りすぎなのよね」

「なるほど。だがそれなら錬成師のところに行って刀を頼めば良くないか？」

錬成師のところに行つて作ってもらえーそう言うとき雫は首を横に振る。

「いえ、錬成師の工房に頼みに行つたら折れやすくて作れないことはないけどすぐに折れるから実用性には欠けるって言われたわ」

「……そもそもなんで私にそんなことを言うんだ？」

武器に悩みがあるなら訓練相手の聖我ではなくメルドや錬成師に言えばいいものを何故か聖我に言っているのだ。

「いやあなた武器作れるんじゃないかしら？ 聖剣を貸してくれなんて言わないけど武器を作れるなら刀も作れるんじゃないかな？ と思つて貴方に愚痴を吐いたのだけ……」

「……光武器精製か。了解したけど実用出来ると思わない方がいいぞ？」
「どう言うことかしら？」

聖我の実用出来ると思わないことという言葉に首を傾げる雫。

「光武器精製」

聖我から魔力が放たれ刀を魔力が形作る。

「ほい」

刀を雫に投げ渡して雫がキャッチする。そしてそれを振ろうとすると刀は霧散した。

「どう言うことかしら？」

刀が消えたことに驚きながら聖我に聞いた。だす。

「私の光武器精製は光の魔力を使用して武器を作り出すんだ。いつもは手に握っているからずっと維持するための魔力を供給することが出来るんだ」

「あら？じゃあ皇帝陛下に投擲したナイフは？」

「あれは事前に魔力を貯めておくんだ。数十秒維持するための魔力を貯めてそれを皇帝陛下に投げて攻撃するのさ。まあナイフだから消費魔力が少ないだけで刀となると西洋剣よりは楽だろうけど……」

言い淀む聖我に雫は言わなくてもいいわというように自分でその言葉を続ける。

「維持魔力はとんでもなく多くなるわけね」

「ああ。1日維持するのに100は必要だな」

「……それはちよつと頼みづらいわね。いいわ、自分で何とかしてみるから」
少し悲しげに零は立ち去っていく。

「（……派生技能次第で解決できるか？）」

ステータス3万超でも毎日魔力供給は大変になるため解決策を考え出す。

「（……光武器精製・オーラ付与）」

光武器精製で作りに出した刀に光のオーラを付与すると光のオーラを吸うように刀が
実体を維持するが1時間しか持たなかった。

「……派生技能に賭けるか。ひたすら色々な武器を作れば……」

光武器精製で槍や薙刀、盾に弓など色々な武器を作り出してそれに光のオーラを付与
していった。

「……戦い以外でこんなに頑張ったことトータスに来てからありましたっけ？……ない
な」

徐々にオーラのおかげで1時間から2時間に伸び始めてきた。

「……って、2時間じゃなあ……1日、欲言うなら3日持つ剣作れないかな？」

「……どうかしたの？」

また訓練場の端っこで刀を作ってオーラ付与をしていると優花がひよこつと顔を出

して何をしているか聞いてきた。

「魔力刀の維持の練習だ」

「あれ？でもこないだの訓練はずっと剣を振ってたわよ？」

「……八重樫に相談されてな。刀を作れないかって。ただ私の手から離れると維持できなくなるんですよ」

「……刀となると私も頼りにならないわね。お昼ご飯置いておくわよ」

「ああありがとう」

優花はそのまま去っていった。

「……というか光武器精製結構使っているんだからそろそろ派生してないかな……」

神刃 聖我 男性 17歳 レベル1

天職 剣使

筋力 42000

体力 41500

耐性 43200

敏捷 41255

魔力 45000

魔耐 40500

技能 剣術「縮地」「無心」・オーラ付与「光属性」「闇属性」「火属性」「水属性」「岩属性」「雷属性」「風属性」・聖剣「最光」「カリバー」「セイバー」「ブレイズ」「バスター」
「エスパーダ」「剣斬」・加速・加撃・光属性適正・全属性完全耐性・詠唱完全省略・隠蔽・光武器作製「効果付与（※2文字）」・探査「広範囲探査」・気配感知「リンク」・魔力感知「リンク」・瞬時魔力回復・物理耐性・行動推測・言語理解

色々と増えていた。オーラは光と闇以外に増えた聖剣の属性が付与され聖剣の派生技能も剣斬まで増えていた。そして光武器精製は効果付与が付いていた。

「……ちよい待ち……2文字？2文字……2文字……少なっ！」

2文字の効果が付与できないらしい。だが2文字なら聖我の夢が叶うのだ。

「シャア！勝った！2文字なんて最高だ！光武器精製！」

光武器精製によって剣が作られ、剣に維持という効果を付与する。

そしてそれから1日後、

「維持完了！WRYYYYYY！」

結局聖我の光剣が維持されており、魔力は充填しなくても維持することが出来ていた。

その後すぐに刀を作って維持の効果を付与して雲に渡したのは言うまでもない。

……この派生技能がトータスに来てから眠っていた聖劍狂を呼び覚ますことになる
とはこの時、聖我の知り合いは知らない。

・エクスカリバー・ルーラー
支配の聖剣

これらの聖剣・エクスカリバーがハイスクールD x Dでは使われていたのだ。そして破壊、擬態、天閃、夢幻、透明、祝福、支配と全て2文字なのだ。

他にも色々な聖剣を作ることができそうだが聖我はひとまずハイスクールD x D産のエクスカリバーを作ることにしたのだった。

「さてさて……まずは擬態の聖剣を作るか……光剣を作つてく擬態の効果を与……」

光剣をシンプルな形の剣にして擬態の効果を付与する。そして擬態の効果を使用して薙刀を変えようとする。

「……あれ？変わらない」

うんともすんとも言わないのだ。盾にしようとしても意味がなく、そのままなんにも変わらない。

「擬態つて……」

聖我が擬態という言葉を言うと剣が肌色に変わった。……聖我は無限収納BOXか
らなげ入っているか分からないが辞書を取り出して擬態の意味を調べる。

・他のもののようにすや姿に似せること。

・動物が、攻撃や自衛などのため、体の色・形などを周囲の物や動植物に似せること。

「2個目の意味かよおおお！保護色つてなんの意味があるんですか！」

光剣をポイツと外に投げ捨ててまた違う剣を作り出す。

く擬態の聖剣モドキの行方く

聖我が投げ捨てた擬態の聖剣はそのままそこを通りかかった光輝の頭の上に落ち、そのままゴツンと頭にぶつかった。

「イタツ！なんだ？……何も無いな」

維持の効果を付与していないためすぐに消え、光輝はそのまま首を傾げながら歩き始める。

「……透明の聖剣以外ほとんど使えない……」

透明の聖剣は剣の透明化という能力は発現できたけど所有者の透明化が出来ず、破壊の聖剣は剣そのものが爆発して粉々になり、夢幻の聖剣は剣がその場から消えてしまうという剣として使えない能力になり、天閃の聖剣は光の速さで飛んでいく剣になってしまった。

支配の聖剣は効果をどうやって試験するか分からないためそのまま外にポツシュート。そして一番ひどいのが祝福の聖剣だ。効果は祝福を付与したのだが、剣から

「祝えー！」

という声が聞こえてきたのだ。どこぞの魔王の側近だ！と作って使用した時思ってしまった聖我。

支配の聖剣をボツシュートした時、その支配の聖剣が落ちた所を通りかかった檜山が支配の聖剣のせいで足を躓かせたのだがそのことを聖我は知る由もない。

「全部不良品じゃねえか！期待して損した……」

おそらく2文字で効果がよくわかる言葉を付与しなければならぬことに気づき、2文字じゃどう考えても聖剣系統の能力は無理と判断して聖剣エクスカリバーを複製するのは諦めて違う武器を作ることにした。

だが聖我はあることに気づく。

「……あれ？破壊の聖剣は壊れた幻想に上手く使えば進化するし、天閃は一直線しか飛ばないけど英雄王の王の財宝に近いよな……それに夢幻の聖剣はブラフに使える……聖剣ではないけど攻撃手段にはなるのか」

全部不良品とはいえ攻撃手段にはなることに気づいてなんとも言えない気持ちになつた。

「……この時やらなければならぬことに気づけばあんなことにはならなかったのだがそのことを聖我は知る由もない。」

「……で？なにか弁明はありますか？」

「ありません。誠に申し訳ありません。深く反省しております」

……新しい武器を作っていたら夜が明けており、毎日の日課と言っていいリリアーナとのお茶会をすっぽかしたのだ。リリアーナは夜中の3時まで紅茶のポットに冷めては温かいお茶を入れ直し、冷めては温かいお茶を入れ直していたらしい。……控えめに言つて14歳の女の子が健気にお茶を淹れて待つていてすっぽかすつてクズじゃん。

現在聖我はリリアーナが椅子に座っている前で日本最高の謝り方DOGGEZAを行っていた。ヘリーナと護衛担当だったクゼリーも見ている。

ちなみにリリアーナは聖剣狂な聖我の一面を知らない。親しみを持って接してくる者には親しみを、悪感情を持って接してくる者には皮肉や悪感情を、という聖我の一面しか知らないのだ。

まあそんなことは置いておくと、

「許して欲しいですか？」

「ええ（そろそろこの体勢辛い……）」

「じゃあ明日ちよつと付き合ってください。私明日休みなので」

「はい………え？」

明日リリアーナの用事に付き合うことになった聖我だった。

　とあるなんかクソゴミが居そうな所

「……なにあの金髪……勇者以前にヤバいんですけど……ノイント……魔人族を王都に送り込め、勇者の前にあの聖剣使いを殺す」

「はー！」

原作崩壊の予感……

リリイの用事と原作崩壊

「待ってましたよ聖我！」

「ああリリイ……ここは？」

聖我はリリアーナが来るように言った場所に来ていた。聖我がリリアーナに許してもらったための条件として。

聖我がリリアーナに呼ばれた場所は、お墓だった。

「ここは魔族との戦争でこの国のために戦ってくれた兵士や冒険者のお墓です。この国のために、戦えない私たちを守るために」

「……そうか」

リリアーナに呼ばれた場所は戦死者のお墓だった。この国、ハイリヒ王国のために戦ってそして死んでしまった兵士たちの墓。

「メルド団長や、お父様にお母様も毎週来るんです。そしてお花をここに添えて祈っていく。それが私たちの習慣なんですよ」

「……」

聖我は黙ってしゃがみこんで黙祷を捧げた。この国ハイリヒ王国のために戦った偉

大な兵士たちの為に。

「私は一刻も早くこの戦争を終わらせて私たちの国の民をこれ以上戦場に向かわせないようにしたいの」

「……リリイ、私はいつまでも君の命令を聞こう。君の為ならなんでも聞くよ」

「ありがとう聖我」

聖我は立ち上がってリリアーナの手を握った。

「……さて、行きましよう？ 聖我、王宮に戻りますよ？」

「……はい。リリアーナ姫、戻り「大変です！リリアーナ姫！神刃殿！」何事ですか！」

リリアーナから手を離して部屋に戻ろうとすると王国の兵士がリリアーナと聖我の元に走って向かってきた。

「御報告致します！魔族が王都に攻め込んできました！結界は破られた模様！その数、15万！至急神刃殿を戦場に向かわせろとのことです！」

「魔族ですつて!?!なぜいきなり！」

リリアーナは驚いていた。いきなり王都に攻め込んできたからだ。

「空間が歪んだところから現れたとのことでありませう！ただいま帝国にメッセージを送り応援を呼びました！勇者殿はホルアドから戻っています、時間がかかります！神刃殿に早く戦線に出てもらわねばならぬとの王様の御命令です！」

「……わかった。直ぐに出る。私はどこに向かえばいい？」

聖我は覚悟を決めた顔をして王国の兵士に問う。

「すぐさま前線へ！」

「……リリイ、君は安全な所へ」

「はい！」

「変身！」

《烈火拔刀！》

《語り継がれし神獣のその名は！》

《クリムゾンドラゴン！》

《烈火三冊！》

《真紅の剣が悪を貫き、全てを燃やす！》

ライドブックを起動せずにドライバーに差し込んで火炎剣烈火を抜刀して変身した。

そしてクリムゾンウイングを展開して大空を飛び、

「物語の結末は魔族ではなく私が決める！」

戦場に向かって行った。

「メルド団長！」

「聖我か！悪いがここを任せていいか！魔物が多すぎる！」

「任せてくれ！」

ブレイブドラゴンのページを押してライドブックの特殊能力を発揮させる。

「喰らいたまえ！塵すら残さぬこの熱風を！」

《ブレイブドラゴン！》

バーンブレイサーから熱風を巻き起こして魔族と魔物を攻撃する。魔法攻撃が飛んでくるがその攻撃を火炎剣烈火で弾いて熱風を当て続ける。

「貴様！上から卑怯だぞ！」

魔族のリーダー格と思わせる豪勢な鎧を纏った魔族が聖我に文句を言う。

「……卑怯？汚い？何を言っている。こんな言葉を知らないか？」

聖我は言葉を発しながらストームイーグルのページを押し込む。

「卑怯汚いは敗者の戯言であると！」

《ストームイーグル！》

火炎の竜巻を発生させて文句を垂れ流した魔族のリーダー格を巻き込んで燃やし尽くす。

「……部隊長だったのかな？バスターとかを試したかったが戦場で使うには範囲攻撃がないとなあ……」

部隊長と思われる魔人族を殺して魔人族と魔物を範囲攻撃で殺し続け、後退を始めた兵士の援護に向かってクリムゾンウイングを広げて飛んだ。

「……魔人族がなぜ攻めてきたのか……勇者召喚がバレてイレギュラーが2人いるのがバレたか？」

「いや前兆はあった。あのヴァージ卿の時だ。あの時からこの国には魔人族が潜入していたんだ……」

「勇者殿はいないぞ！どうするのだ！」

「……メルド、兵士たちの状態は？」

文官や軍師が話し合っている中エリヒド王はメルドに兵士がどのような状況か聞いてきた。

「……ほとんどの兵士が死んでいるか重傷です。動くのには最低十二時間は掛かります……結界前の魔人族はそれを待つことは無いでしょうが」

「そうだな……動けるのは誰がいる？」

「私と副団長、そして神刃 聖我です。神殿騎士は分かりません」

「本当に愛子殿が農地検査でいなくてよかった……」

愛子がいれば万が一で死んでしまうかもしれないからだ。農作物などが戦いで生

命線のため、死んでしまえばハイリヒ王国が窮地に陥ってしまう。ちなみに園部パーティと一部の男子は愛子の護衛のため王宮にはいない。

「ほかの神の使徒は？」

「……」

メルドは首を横に振りエリヒド王は考え込む。戦力的に奇襲を食らったことで兵士のほとんどが怪我で動けないのだ。いきなりの魔法攻撃で。しかも勇者はホルアドから戻る最中、神殿騎士はまだ王都に到着していない。

神の使徒はシヨック状態で戦おうとしない、動けるのはメルドと副団長、リリアーナの護衛騎士であるクゼリー、リリアーナとともに墓に行っていた聖我、そして少ない動ける兵士たち。

「聖我に耐えて貰っていますが……」

「……メルド、残りの兵士を連れて神刃 聖我の援護に向かえ。副団長は統率のために残ってもらおう。……治療が終わるまで耐えてくれ」

「……」

メルドはそのまま部屋を出ていった。エリヒド王は頭に手を起きながら兵士の回復にもっと力を入れるように命じたのだった。

亀と勧誘と忍者

「……」

《ブレイブドラゴン!》《ストームイーグル!》

無言でブレイブドラゴンとストームイーグルのライドブックのページを押し込んで特殊能力を発揮する。何回目か、それは聖我にも分からない。ただひたすらに範囲攻撃で燃やし尽くしているのだ。

だがその範囲攻撃を辞めることになってしまった。大型の亀のような魔物が現れたのだ。それも2、3体ではなく数十単位。

ライドブックのページを押し込んで火炎の竜巻を巻き起こして燃やし尽くそうとしてもその攻撃を甲羅に閉じこもって凌いでしまう。

「……相手も馬鹿じゃないか……」

聖我は知らないが魔人族は聖我の圧倒的な範囲攻撃を見て魔人族と防御力の低い魔物ではなく防御力の高い魔物……まあタンクのような魔物を前面に出すようにしたのだ。

「……聖剣を変えるか」

上から下にクリムゾンウイングを使って降りて無限収納BOXにソードライバーを

しまうことで変身を解除して土豪剣激土と玄武神話を取り出す。

そして玄武神話を起動してゲキドシエルフに玄武神話を装填する。

《玄武神話！》

そしてトリガーを開いて玄武神話のページを開く。

《玄武神話！》

すると聖我の目の前に岩が現れてそれをぶった斬ると、斬った岩が聖我の身体を周りを飛び回りアーマーと化す。

《一刀両断！》

《ぶった斬れ！》

《ドゴ！ドゴ！土豪剣激土！》

《激土重版！》

《絶対装甲の大剣が、北方より大いなる一撃を叩き込む！》

「これが仮面ライダーバスターか！……悪いけどお前らの防御をぶっ壊す！」

セイバーを優に超える腕力で土豪剣激土を振り回して亀の魔物の殻にぶっつける。

すると亀の魔物の殻がピキッとひびが入りそのまま真っ二つに割れる。

「……同じ亀でも、神獣である玄武とお前らただの魔物が同じ硬さだと思ふなよ！」

聖我はそう叫んでから光武器精製を発動する。

「爆破の光剣！精製後、照射！」

あのリリアーナに怒られた時開発していた聖剣モドキの改良版、破壊の聖剣のアップグレードである爆破の光剣を精製して甲羅に当て続ける。

「この光剣は着弾後に爆発するのさ……甲羅なんて直ぐに吹き飛ばよ！光武器精製！倍加の光剣！」

赤龍帝の籠手の能力1回分、倍加1回分を発動することが出来る光剣であり、倍加の持続時間は10秒、そして倍加した後には光剣は破壊されるのだ。

「セイー！」

土豪剣激土を振り回して殻が破れた亀の魔物を切り刻む。それはもう細切れに。

「オーラ解放！火属性！」

火属性のオーラを土豪剣激土に付与して地面に突き刺して亀の魔物の肉を焼き尽くす。

「……………」

「ふむ、君がかの有名な聖剣使いかな？」

亀の魔物の肉を焼き尽くしていると1人の魔人族が聖我の目の前に現れた。見た目は肌が浅黒く、髪は赤い。そして服は身体に吸い付くようなボディースーツをつけた女性だ。

「……魔人族、何の用だ？」

「……冷たいわねえ……自己紹介をしておくよ、アタシの名前はエリシア。よろしく」

「そうか」

変身を解除して土豪剣激土を無限収納BOXにしまう。

「何故鎧を解いたのかしら？」

「……君に戦意は感じられないし、範囲内に敵は感じないから」

戦意のない人間には手を出さない。これが聖我の自分の中のルールだ。

「あら、そう……じゃあ要件を伝えるわ。貴方アタシたちのところに来ないかしら？」

「……メリットは？」

聖我は魔人族の側に着いた時の利点を聞く。それを脈アリと捉えたエリシアはさらに話し始める。

「そうねえ……貴方には戦ってもらおうことになるけど。それ以外は自由に暮らして構わないわ。それにアタシみたいなお姉さんと一緒にイチヤイチャ出来るわよ？」

「なるほどね……」

考え込む仕草をする聖我に行ける！と思ったエリシアはさらに聖我に甘い言葉を投げかける。

「貴方は今こんなところで1人で戦っているわよね？こんなところで1人で戦わせるなんてこの王国の指揮官も酷いことをするわ……」

「……」

聖我は黙り込むがそれを見ないでエリシアは甘い言葉をさらに投げかける。

「私たちのところに来れば貴方を1人にはしないわ。絶対に裏切らないし、いつも一緒にいてあげる。お姉さんのところに来てくれない？」

「………魔人族、悪いがその望みは受けないよ」

「え？」

聖我は立ち上がりながら無限収納BOXから風双剣翠風と猿飛忍者伝を取り出して起動する。

《猿飛忍者伝！》

「……確かに私は裏切られているよ」

ハヤテシエルフに猿飛忍者伝を装填する。

「色々な人に嫌われてるよ」

風双剣翠風を二刀流モードに切り替える。

《双刀分断！》

「そう言う裏切らない人間は私も欲しいよ」

《壱の手、手裏剣！》《弐の手、二刀流！》

《風双剣翠風！》

《翠風の巻！》

《甲賀風遁の双剣が、神速の忍術で敵を討つ！》

仮面ライダー剣斬に変身して二刀流モードになったエリシアに刃先を向ける。

「……でも私には助けてくれた人がいるんだ。だからさ？」

「（……身に纏う雰囲気が変わった!?）」

聖我はエリシアに宣言する。

「私はこの王国を、主を裏切ることとは絶対にしないよ！」

「……原作が崩壊してしまいましたか…解放のためのシステムは変えることすらできませんからね…どうしましょう…いくら仮面ライダーになれるとしても一人では消

耗が激しくなるばかりよ……まさかあれがパワーアップするとは……」

女性は聖我の様子を宝玉で見ながら悩み始める。

「ならワシがその小僧にプレゼントをやるというのはどうだ？」

「……悪いけどそうして貰えるかしら？ 忙しいのにゴメンなさいね」

突然女性の前に現れた老人が女性に提案し、女性は老人の提案を受け入れた。

「なに、ワシは担当の転生者はおらぬからな。気にするつもりもないわ。……しかし普通のストーリーから本当にはみ出てるの」

「このままだと違う終わり方になるわ。エヒトを南雲ハジメが殺す終わり方ではなくなり、ここからは私も貴方も予測することは不可能よ」

「そうじゃな……ではワシはお主の転生者に渡すプレゼントを考えてくるわい！
………何にしようかのう………」

「よろしくね」

女性は再び宝玉に目を移し、老人はそのまま女性の部屋を出ていった。

魔人族の将

「貴方はアタシ達の提案を断る……そういうことかしら？」

断つた後はないわよ？と言いたいような目をエリシアは聖我に向けるが聖我は二刀流モードとなった風双剣翠風をエリシアに突きつけたまま答える。

「アンタらは遅かったんだよ。私があの人に提案される前に勧誘すればよかったかもね？まあもうそちらに着くことは一切ないよ。だから大人しく死んでくれ？」

「……悪いけどまだ死ねないのよ……全隊！攻撃開始！」

エリシアが叫んだ瞬間、何もないところから魔物が100体規模で現れた。そして各々が剣斬と化した聖我に攻撃を仕掛ける。バスターの時を見たらしく、全ての魔物がスピード特化になっていた。

だが剣斬と化した聖我にスピードに特化した攻撃を当てることは難しい。全ての攻撃を避けまくり、攻撃をしてきた魔物を斬り飛ばしていく。

「……100体じゃあ私に傷を当てることは不「ソイツはどうかな？」なにー！」

聖我に向かって光の光弾が降ってきた。そして不意を付かれ、聖我に当たってしまった。

「……なるほどコイツが聖剣使いという訳か……若いのによくやるもんだな……」

「エリシア。勧誘は成功する……じゃなかったかしら？」

「ゴメンなさいね。断られちゃったわ、カトレア、フリード様」

「構わぬよ。どうせ神代魔法を3つ持つ私の前では敵ではない。……少年、貴様にはここで果ててもらうぞ」

聖我に攻撃を仕掛けたのは原作でオルクス大迷宮にて勇者を襲撃した魔人族であるカトレアとグリユーエン大火山にて南雲ハジメとそのハーレムメンバーを襲った灰竜を役するフリード・バグアーだ。

「神代魔法だと？」

「？ああ人間族は一部の者しか知らぬのか。神代魔法とはトータスに七つ存在する神代の魔法。現在使用されている属性で分類された魔法と違い、より根源的な事象への干渉を行う。大迷宮の攻略者として認められた者の脳内に知識が直接転写され、行使するこ
とが出来るのだよ」

「……なるほどな……剣斬では君らの相手はキツそうだ。変えようか」

「？」

聖我は変身を解除してソードライバー（火炎剣烈火）とブレイブドラゴン、ストームイーグル、キングオブアーサーを取り出して起動する。

《ブレイブドラゴン!》

《ストームイーグル!》

《キングオブアーサー!》

「偉大な騎士王の前に跪け!」

ソードライバーに装填して火炎剣烈火を抜刀する。

《烈火抜刀!》

「変身!」

《竜巻ドラゴンイーグル!!》

《増冊!アーサー王!》

《烈火二冊!》

《荒ぶる空の翼龍が獄炎を纏い、あらゆるものを焼き尽くす!》

「さあ、行こうか!」

「行くぞ、エリシア、カトレア」

「はー!」

聖我は火炎剣烈火とキングエクスカリバーの二刀流で3人に挑み、エリシアとカトレアは魔弾、フリードは灰竜の極光を浴びせる。

「さあ!騎士王の一撃を喰らえ!」

巨大なキングエクスカリバーが顕現し、それに気づかないカトレアをキングエクスカリバーで真つ二つにするように振ると、

《ジャキーン！》

「カトレアアアア！」

カトレアの身体が真つ二つになってしまった。

「き、貴様！」

狼狽えるフリードを無視してキングエクスカリバーのケイトリガーを5回連続で引く。

「ヤバそう！行け！レイキ！」

レイキと呼ばれたバスターに斬り殺された亀の魔物の超大型バージョンが現れ、エリシアの盾となる。

「倍加の光剣！サイズ倍加！」

《必殺読破！》

巨大なキングエクスカリバーの大きさが2倍になる。そしてそのままキングエクスカリバーがエンキに迫る。

《キングスラッシュユ！》

エンキを青く輝くエネルギーを纏った斬撃を喰らい無惨な状態になり、それに唾然と

するエリシアに急接近して火炎剣烈火で首を切り落とす。

「……貴様は化け物か……」

「私は化け物じゃない。ただの護衛だ」

「……灰竜よ！ゆけ！」

五体の灰竜が魔法陣から現れそのまま聖我に極光を当てまくる。

聖我が光に包まれ、フリードは勝ち誇る。

「これでエリシアとカトレアの仇が取れたか……」

「そんなわけないだろ」

《キングオブアーサー！ からの、剣が変形！ 巨大な剣士が目覚ます！ キングオブ

アーサー！》

聖我は無傷であり、聖我を護るように青い巨人が聖我の前に立っていた。

聖我は極光が当たる直前にキングエクスカリバーのベデイヴリーダーのスピリダにキングオブアーサー・ワンダークライドブックを接触させキングエクスカリバーをキングオブアーサーに変形させたのだ。

「行ってこい！」

キングオブアーサーが灰竜全てを相手して聖我はフリードに攻撃を始める。

「セイ！」

「グッ！……セイ！」

「がはあつ！」

聖我はフリードにキングエクスカリバーで攻撃をしたが腕を硬化させてダメージを最小限に抑えてそのまま聖我を殴り飛ばす。

「……なんて威力だ。まるで金属のような……」

「当たり前だ。変成魔法で自分の腕をアザンチウム製に変えたのだから！」

「なるほど。それが変成魔法か。……セイバーにダメージを負わすなんて……」

「世界最高硬度を舐めてもらっては困るのだよ！ さあ、カトレアとエリシアの仇を取らせてもらうぞ！ この聖剣使いが！」

フリードは腕に魔力を込めて聖我を殴る。アザンチウムの硬度とフリードの魔力を込めた一撃はセイバーになっている聖我すらも吹き飛ばしてしまう。

「空間魔法を受けよ！」

空間魔法をフリードは発動し、聖我の後ろに空間の穴を開ける。そして聖我は空間の穴に入ってしまった、天空に出てそのまま落下してしまう。

「ストームイーグルを舐めるな！」

バーミリオンウイングを展開して飛ばうとするも、今度は謎の重圧が聖我を襲う。

「何だと！」

「重力魔法だ！」

そのまま聖我はバーミリオンウイングを展開して飛んだにも関わらず落下してしま
う。

「グアア！」

「……神代魔法こそ最強の魔法だ！」

キングオブアーサーと灰竜の戦いは聖我とフリードの戦いとは対照的だった。

《ジャキーン！》

灰竜はキングカリブルと言われるキングオブアーサーの持つ剣により抵抗する間も
なく斬り伏せられていき、灰竜を全て殲滅すると他の周囲の魔物を斬り始めたのだっ
た。

将の魔法とドジ

「貴様に勝つ！そしてエリシアとカトレアの仇を！貴様に殺された魔人族の仇を取る
！」

「ならば私はこの戦いで死んだ共に訓練した兵士の皆さんの仇を取る！貴様ら魔人族、
そして魔物に殺された人間は計り知れないからな！」

フリードの魔力の籠ったアザンチウムでコーティングされた腕と聖我のキングエク
スカリバーと火炎剣烈火がぶつかり合う。だが腕にコーティングされたアザンチウム
の重さと魔力がキングエクスカリバーと火炎剣烈火を押ししていた。

「……神代魔法というのは大迷宮を攻略したら手に入るものと聞く！だが大迷宮とい
うのは短時間で攻略できるものではないだろう！」

「そうだがそれがどうした！」

重力魔法で吹き飛ばされそうになるのを気合いとバミリオンウイングの起こす風
で耐えながら聖我はフリードに聞く。

「貴様のその魔法は3つ！だが大迷宮を3つも攻略するのは物凄い時間がかかるのでは
無いのか！」

「……ああ、そういう事か。それなら話は簡単だ！この戦のためにアルヴ様の使いである銀髪の天使がこの魔族の将であるフリードに重力魔法と空間魔法を授けてくださったのだ！」

「……7つでは無いのか？」

「戦で必要なのはこれら3つの魔法と言われたのだ！残りはこの戦が終わってから自力で集めるさ！」

アルヴ様と銀髪の天使と気になる言葉が聞こえたためそれを記憶の片隅に置いておきキングエクスカリバーのケイトリガーを5回連続で引く。

《必殺読破！》

キングエクスカリバーと火炎剣烈火に蒼く神々しいエネルギーを滾らせる。

「！先程の一撃か！ならば！アザンチウムと重力魔法の合わせ技を受けよ！」

フリードはアザンチウムでコーティングされた腕をさらにコーティングし、腕を巨大なアザンチウム製の金属腕に変える。そして重力魔法を使ってそれを振り下ろそうとする。

「《キングスラッシュ！！》」

「グラビティハンマー！」

キングエクスカリバーの火炎剣烈火を振り蒼い衝撃波を発射する聖我に対してアザ

ンチウム製の巨腕を振り下ろすフリード。

「ぶち抜けエー！」

「このまま打ち砕く！」

蒼い衝撃波がどんどん押されていくのを見て聖我は火炎剣烈火をソードライバーに納刀してレッカトリガーを引いて抜刀、キングエクスカリバーのケイトリガーを5回連続で引く。

《必殺読破！》《必殺読破！》

《烈火抜刀！》

《ドラゴン！イーグル！アーサー王！三冊斬り！ファ・ファ・ファ・ファイアー！》

《キングスラッシュユ！》

バーミリオンウイングが巨大化し、火炎剣烈火とキングエクスカリバーに炎と蒼い聖なるエネルギーが充填される。そして聖我はバーミリオンウイングを羽ばたかせそのまま大空へ飛び上がり頭から急降下する。

「フレイムアーサー！ダブルフラッシュ烈火纏う騎士王の二閃！！」

フリードのアザンチウム製の巨腕にキングエクスカリバーと火炎剣烈火を振り下ろして破壊しようとする。

「！させぬわア！硬化せよ！」

必殺技を2つ兼ね合わせてキングエクスカリバーと火炎剣烈火が斬りつけてもアザンチウム製の巨腕に硬化魔法がかかってしまい、さらに硬くなって破壊できなくなってしまう。

「クソっ!」

必殺技の効力がなくなりバーミリオンウイングが縮小してしまい、その様子を見たフリードは1番最初に放った蒼い衝撃波を破壊して重力魔法を聖我に掛ける。

「な!」

「吹き飛ばエ!」

重力魔法で再度空間魔法で空間に穴を開けたフリードはそこに聖我を入れて自分の目の前に出す。

「さあ硬化魔法を得たアザンチウムの一撃を受けそのまま死ぬえ!……………む……………」

硬化魔法と変成魔法が使えないだと…まさか魔力切れか!」

「……………神代魔法はどうやら魔力を大量に使うようだな……………」

「クッ……………」

「フリード様!」

魔族が1人魔法陣から現れた。まだ気は抜けないなど聖我は火炎剣烈火とキングエクスカリバーを構えるが、

「まだ戦は始まったばかりだ。一旦戻るぞ。ここでこの聖剣使いと戦っても魔力を失うだけだ」

「はー！」

魔法陣を再度部下と思われる魔人族に展開させるのを見て脱力する聖我を見てフリードは

「聖剣使い！貴様の名を聞いておく！」

聖我の名前を尋ねた。

「……神刃 聖我だ。次はないぞフリード」

「神刃 聖我か。その名前、記憶に刻んでおこう。ではまた戦いの場で会おうではないか！」

そう言ったフリードは部下に魔人族とともに転移していった。

「魔人族の将・フリードか……」

聖我は傍から見えたら引き分けに見えるがほぼ負けていたこの戦いを記憶し、次会うときは負けないように心に誓うのだった。

「……まさか魔族側のフリードが強化されてるなんて……」

「……ドラゴニックナイトをなぜ使わなかったのだ？」

女性は宝玉を老人と覗いていた。そして老人は何故聖我がドラゴニックナイトを使わなかったのか女性に聞く。

「……聖剣と同じシステムなのよ」

「?どう言うことじゃ?」

聖剣と同じという言葉に老人は疑問に思う。

「……ドラゴニックナイトもキングライオン大戦記もエックスソードマンもジャオウドラゴンもプリミティブドラゴンもスラッシュ解放後に解放するようにしてるから解放出来ないのよ」

「待て。お主の言葉にサーベラなどのあの転生者の転生後に出てきたライダーが出てこなかったが……まさか……」

「ええ。実は追加ライダーやエレメンタルドラゴンは渡していないわ……」

女性の言葉に老人は驚く。

「どうする気じゃ!ドラゴニックナイトすら解放出来ないとは……」

「……どうしよう」

どうやら女性はドジったようだった。

「待て。転生者が転生する前のライダーの転生前のアイテムは時間が経てば解放されるんじゃない？……エレメンタルドラゴンが渡せないのはキツイのお……」

「……追加された聖剣とライドブックを追加対象にできないかしら……」

「……いい方法がある」

「なにー！」

女性は老人のいい方法がなにか知りたくなかった。

「ワシが思いついたプレゼントと追加ライダーと追加アイテムと一緒に封印した状態で渡すんじゃない。それなら行けるじゃろ？」

「……確かに。でもまた追加ライダーが出たらどうするの？」

「転生者に事情を伝えればいいじゃろ？そうすれば追加されても無限収納BOXに入れるだけで良い」

「なるほどね。ありがとう」

「構わぬよ。さてまだ思いつかぬからまた考えてこなければ……」

「じゃあねー」

先程の落ち込み具合から一転、物凄い笑顔になって老人を送り出した女性だった。

老人とプレゼント

「……貴方がそこまで苦戦する相手だったのですか？」

「……フリードが退却しなければ私はあの一戦でそのまま叩き潰されていたでしょう。……魔法も強かったですが、それ以上に戦い方がさすが魔族の将と言える方でした」

「……貴方が勝てないとなると勇者様やメルド団長でも勝てないでしょうね……どうしましようか」

フリードの一戦から少し経ち、兵士の回復が済み、戦線から離脱した聖我は軽傷のためそのままリリアーナの部屋に向かって雇い主にフリードとの戦いの詳細を伝えた。

「……聖我、貴方の現状一番強い状態はガハルド皇帝陛下で使ったものとそのアーサー？と呼ばれるものですか？」

「まだエスパードがありますけど……勝てるかは分かりませんね。まだセイバーには奥の手がありますが解放されていませんし」

「……聖我、勇者様はあと少しで到着します。勇者様とメルド団長と貴方でそのフリードとやらを倒せますか？」

リリアーナは勇者である光輝とメルド、そして聖我の力を合わせればフリードを倒せ

るか質問する。

「率直な意見ですが、無理です。逆に足でまといかと」

「……そうですか。わかりました。部屋に戻ってよく休んでください。……聖我」

「リリイ？うお」

聖我が振り返るとリリアーナは聖我に抱きついた。

「……聖我、死なないでください。私と貴方は主従関係の前に友達なのですから」

「……わかつているよ。リリイ……」

そのまま数分間聖我とリリアーナはお互いを抱擁し、そのままリリアーナが先に離れて聖我は部屋に戻った。

「ふむ。よくいちやついておるようじゃの。原作崩壊で戦争中なのに」

「……貴方は？」

聖我はリリアーナとお互い抱擁した後すぐに部屋に戻って深い眠りに着いたはずなのだ。

「……ワシは君を転生させた女の知り合いじゃよ。まあ君みたいな転生者をサポートする存在じゃよ」

「……そうですか。それでさつき原作崩壊という言葉を目にしましたがどういこと

すか?」

あの女性の知り合い。その言葉を聞いて聖我は警戒を緩めて原作崩壊という気になる言葉について老人に聞く。

「ありふれた職業で世界最強と呼ばれる世界なのは知ってるじやろ?この世界が」

「ええ」

「本来ならば魔人族が攻めてくるのは主人公がリリアーナ姫に救援を要請されて王都に来た時だけなのじゃよ。だから魔人族がこの時間に攻めてくるのが原作崩壊というこ
とじゃな」

「……なるほど」

「……まあ原作崩壊は君のせいでもあるのだが」

「どういうことですか!」

老人の原作崩壊は聖我の性という言葉に憤慨する聖我。なんにも心当たりがないからだ。

「……君は光武器精製の派生技能の効果を感じているかの?」

「ええ。2文字の効果追加ですよ?」

「それが進化すれば何文字になるか分からないからじゃ。それに魔人族を二人転移してから殺していることも原作崩壊に繋がっておるのじゃ」

「そうですか」

「行動に気をつけることじゃな。この戦を引き起こした黒幕は世界を一部を除いて全て見通すことが可能な者じゃからな」

老人の言葉に聖我は驚愕する。そんなチートな存在が黒幕なのかと。

「……さて、君にワシからのプレゼントと追加ライダーの聖剣とワンダーライドブックと強化アイテムを全て封印状態で渡しておこう」

「……ああ。登場順に解放するんですね？」

「ああ。そして追加ライダーが追加される度にそのライダーの聖剣とワンダーライドブックを無限収納BOXに入れておこう」

「わかりました」

老人は心の中で胸を撫で下ろした。聖剣違いで発狂したと聞いたから忘れていたことに怒るのではないかと思ってしまうのだ。

「さて次はワシからの君の補助のためのアイテムを渡そうではないか。……最初は赤龍帝の籠手や他のライダーの変身アイテムなどの強い武器にしようかと思っただんじやが」

「？」

聖我は赤龍帝の籠手と聞いて主人公武器渡されても聖剣あるしなあと思ってしまう。仮面ライダーの変身アイテムも同様だ。

「……作ってみてもいいんじゃないかと思っただんじや。ほらこれ」

聖我は靴を手渡された。青い丸い宝石が付いた白い靴だった。

「赤龍帝の籠手を見本に作ってみたのじや。靴として足が大きくならうとも自動でサイズを合わせてくれる。そして能力は10秒毎に……」

《Accelerate!》

「スピードが倍加する。そしてそれは身体全体にかけたり剣速にかけたりすることができるのじやよ。……それは神セイクリッド・ギア器 モドキじやな。原作では聖書の神が作っておったから、あくまでモードキじや」

「なるほど。この神器の名前は？」

「それはな、ア『加速アクセルドラゴン・シユース龍の靴だ!』アクセル……」

いきなり響いた大声に聖我は驚いてしまう。

『お前が俺の相棒か!俺の名は加速龍・アクセラレーション!アクセルつて呼べ!』

「よろしくアクセル。私は聖我。神刃聖我だ」

『よろしく聖我!』

「ふむ。打ち解けたようで何よりじや。さてそろそろ行きなさい。君はまだ戦争が終わっていないだろう」

「……ありがとうございます」

「頑張りたまえよ？」

老人はそう言つて空間を閉じて聖我とアクセルはそのまま聖私の部屋に戻った。

『……あい、聖我。ちゃんと俺を使いこなして禁手化させてみるよ？』

「……任せろ。聖剣同様使いこなしてみせるよ」

『それは頼もしいな！』

聖我はそのまま眠りに着いたのだった。

「……アクセルを送ったの？」

「そうじゃ。彼奴も暴れたそうにしていたからの」

女性はいつとも違う部屋、和室で緑茶を飲んで老人と話していた。

「……まあありがとう、こちらの問題を解決してもらつて」

「構わぬよ。お前は私の娘なのだから」

「そういえばそうね。3000年もこの仕事やってると忘れちゃうわ」

女性と老人は賑やかに緑茶とお茶菓子をお茶菓子を仲良く食べながら雑談をしていたのだった。

贈られた加速龍と雷の剣士

「勇者が王宮に辿り着いたようですわ。リリアーナ姫様からの連絡ですわ」

「ありがとうございますハルナさん」

「別にこれくらい構いませんのよ。でも勇者様に合流するのではなくて聖我さんにはさっさと戦場に出るようにとの命令が出ておりますわ」

その言葉に聖我はムツとする。別に雫以外に会いたい訳では無いがさっさと行つてこいとは酷い扱いだなと。

「勇者はどうするんです?」

「旅の疲れを癒してから戦場に参加させるとのことですわ。聖我さんの方が重労働ですのよ……」

「心配しないでください。魔族の将であるフリードには遅れを取りましたがこの聖我、その他の雑兵に殺されるなんて言う愚を犯すことはありません」

「そう言うことではありませんの!……失礼しました。では行つてらっしゃいませ。こういう時戦えれば聖我さんのお役に立てるのに……」

「?では行つてきます」

聖我は首を傾げながらソードライバー（雷鳴剣黄雷）とランプドアランジーナを取り出してソードライバーを腰に巻き付けてランプドアランジーナを装填して抜刀する。

「変身！」

《黄雷抜刀！》

《ランプドアランジーナ！》

《黄雷一冊！》

《ランプの精と雷鳴剣黄雷が交わる時、稲妻の剣が光り輝く！》

仮面ライダーエスパーダに変身したのだった。

「行くぞアクセル！」

『おうよ！Acceleration System Start Up！』

アクセルの宿る靴の青い宝石が光り輝き、アクセルの能力が作動し始める。

『Are You Ready？』

「出来てるよ」

『OK！さあ倍加の始まりだ！』

《Acceler！》

聖我は足に倍加の力を込めてそのまま走り出す。仮面ライダーのスペックを考える
と倍加すれば戦場までそんなに掛からないのだ。

「……やはり聖我さんはかっこいいですわ……」

ハルナ。貴族の三女であり、敬愛するリリアーナに仕える侍女である彼女は聖我に恋焦がれていた……

《Accelerate!》

『これで5回目のスピードの倍加だ……どうする。どこに使う?』

「必殺技のスピードを倍加させる。行くぞ!」

雷鳴剣黄雷をソードライバーに納刀してイカズチトリガーを引いて再度抜刀する。眼前には多数の魔族とその魔物が居る。

《必殺読破!》

「……トルエノ・デストローダ」

《黄雷抜刀!》

雷のエネルギーを雷鳴剣黄雷に充填して雷を纏って敵に向かって突貫する。そのスピードは正に神速。魔族と魔物の急所を的確に狙って斬り殺す。体感時間では1時間ほど敵を斬っていたはずだが実際は1秒にも満たなかった。通常のトルエノ・デストローダなら10秒ほどだろうが3.2倍になったスピードはそれよりも早かった。

「……アクセル、次の倍加は目に送ってくれ」

『認識速度の倍加か！任せろ！』

「……フリードほどではないが強いやつが来るな」

聖我が常時探査を行っているがその探査の網にフリード以下だがこれまでの魔族とは一線を画す魔族が来たのだ。

「貴様が聖剣使いか！……フリードが手放しに敵ながら強い奴と聞いていたがまだ子供ではないか！」

「アクセル、次の倍加は剣速」

『了解』

「極光を呑め。天翔閃・砲撃！」

雷鳴剣黄雷に光の魔力とオーラを込めて圧倒的なスピードで剣を魔族に向けて突く。

「当たってないぞ！所詮はこど」

突いて少し経つと光のエネルギーに魔族は吞まれてしまいそのまま塵すら残らなかった。

「……フリード以下どころか雑魚じゃないか」

『……同感だ。こんなに心躍らない戦いは久しぶりだ』

偉そうな口を聞くからどんなに強いかと聖我は思っていたが、聖我からしたら雑魚に

過ぎなかった。

……あの魔族は本当に普通の魔族相手なら数十人来ても勝てないレベルの強さを誇るのだ。アクセルの倍加のスピードと聖我の剣技が合わさって雑魚にしか見えなかったのだ。……つまり聖我が強くなったのが悪い。

「……しかし結構押し返してきたな。メルドさ……メルド団長の指揮能力の高さが伺える。これなら勝てるな」

『……俺はお前から聞いている勇者が気になるんだが』

「……彼奴には戦場に出ないで貰いたいな」

『そうか、何故だ？』

「魔族を殺したから牢屋に入れと意味不明なことを言われたから」

『把握した』

そしてまた探査に引っかかる存在が現れた。どうやら鎌を持った敵のようだ。リーチが長い武器は基本的に苦手な聖我だったがアクセルが来たことでその苦手を克服している。

「アクセル！」

『おうさア！』

《Accel!》

身体全体に倍加を掛けて鎌の魔人族の背後に回って首を斬りつける。

「ガア！……フリード様が言っていたのは貴様か！変成魔法で金属を首にコーティングしてなかったらあぶ！ぎやあああ！」

《Accelerate!》

「セリフが長い！」

あまりに酷い。相手がセリフを吐いている時は待つてやるのが普通のはずだが聖我にそんな余裕はない。そんなセリフを吐く時間があるなら向かってこいって話だ。

『酷いな。セリフくらい待つてやれよ』

「待つた結果死んだらやだし」

『同感だ』

なんだかんだ言つて聖我とアクセルは同じような性格をしているのだった。

「アクセルと仲良さそうねくさてエスパードを使ったみたいだし、スラッシュを解放しあげましょう」

女性は宝玉を覗きながら女性はピンクの玉を手の上に乗せて弄りながらそう呟いた。

勇者

「光輝！早く殺して次に向かうぞ！」

「殺すなんて無理です！意識は刈り取ってあるんですから良いでしょう！殺しなんてそんなの……」

「起きられて回復でもされて王国の兵士に奇襲を掛けられたら目も当たられない！早くトドメを刺してくれ！」

「無理です！」

今現在、メルドと光輝、雫、香織、その他勇者パーティーは一休みしてから戦線に出ていた。だが問題がひとつある。雫以外誰もトドメを刺そうとしないのだ。

「雫ちゃん！なんで殺しちゃうの！」

「やらなきゃ殺されるわよ！少なくとも聖我はこうするわ！」

「駄目だよ！」

こんなふうな戦場に出ているというのに人を殺すことを躊躇するばかりか人を殺すことをしようとする人間を止めようとするのだ。

「ああ！……殺さないで駄目でしょう！殺さないで私たちが殺されるのよ！」

「やめるんだ零！龍太郎！零を止めてくれ！」

「おう！」

「離しなさい！龍太郎！」

そう。殺そうとする者を羽交い締めするなんて言う、戦争中にも関わらず巫山戯ているとしか思えない行為を平気でするのだ。

「……まだ聖我の言っていたフリードが戦線に出てこないから良いもの……聖我は我らが巫山戯ている間にどんなに武功を上げているものか……」

「あのーメルド団長、俺聖我の方に行ってきたも……」

「駄目だ！持ち場を離れるな！」

「ですよー」

このように聖我の指揮に入りたいと言う兵士と騎士が勇者が戦線に出た瞬間から増えているのだ。聖我の持ち場は自由。縦横無尽に戦場を駆け回り、魔族を殺しまくっているのが普通は行きたくないはずなのだが、勇者の様子を見て聖我の所の方がマシだ！とばかりに聖我の方に行きたいとずっと言っているのだ。

「……（内心俺も聖我の所行って暴れ回りたい……）」

メルドも大概ストレスが溜まっているようだった。

「メルド様！」

「ハルナか！つて……なんで戦場に……」

「私の技能、幻影でございますわ。帝国軍もう少しで戦線に到着なさるようございませう！率いてらっしゃるのはガハルド陛下！」

「……ガハルド様がいらっしゃるのか……聖我と合わせれば無敵か」

前の話でも出たハルナの天職は幻影使い。自分の幻影を対象の元に送ることが出来るのだ。ちなみに聖我のところに情報を送ったのは紛れもなく本人だ。そしてハルナの幻影は役目を終えて消えていく。

あちらこちらで雷が見える。聖我が必殺技を乱発しているのだろう。メルド達ここで足踏みしている中聖我はアクセルとともに殺しまくっているのだ。

「……光輝！早く次に……」

「貴殿が王国最強騎士と呼ばれるメルド・ロギンスか？」

「！」

冷たい殺気が上空から飛来する。その正体は、

「私の名はフリード。フリード・バグアー。メルド・ロギンスと戦いたくてな……神刃聖我とは昨日戦ったが彼奴のは違う戦い方を期待する！」

「く……それが鋼鉄の……」

「その通り！」

「メルドさアん！」

「？邪魔臭いわ！」

「がはあ！」

「光輝！」

突如フリードが現れてメルドに向かって宣戦布告、そのままメルドをアザンチウムの巨腕で吹き飛ばし、吹き飛ばされたメルドを助けるために叫びながら聖剣をフリードに向かって振った光輝を風魔法で吹き飛ばしたのだ。

「全員退却だ！こいつはヤバイ！」

「な、なんでですかメルドさん！」

「コイツは聖我ですら負けそうになった戦士だからだ！」

聖我ですら負けそうになった。その言葉に兵士と雫が震え上がる。訓練で何度負けたか分からない。それなのに負けそうになった。光輝達は震え上がらないが聖我に対しての信頼はそこらの人間の比ではない雫と兵士は退却し始める。

メルドは聖我に知らせるために聖我に言われていた光弾を上に向かって放つ。救援信号、またはフリードが現れた時に使うように言われた魔法を。

その頃聖我はクリムゾンドラゴンとアクセルのコンボで敵を殲滅していた。

「ん？あれは……信号弾か」

今すぐに向かいたいがまだ敵が残っている。聖我はひとつやってみることにした。

「光武器精製……」

武器とは多種多様である。ミサイルなどの兵器も武器となる。刀や銃も武器となる。ならば武装したロボットも武器なのではないか。

「効果付与・維持！」

『聖我！勝手だが構築スピードを倍加するぞ！』

その言葉を聞いてもなお黙ったままなのでアクセルは言った通り構築スピードを倍加する。

「来たれ！光の武装兵！」

光のガトリング砲やロケットランチャーを肩に構えた重装歩兵が聖我の周りに精製される。そして聖我はそれらに号令を掛ける。

「魔族及び魔物を殲滅せよ！」

聖我のチートは加速する。……魔力の限り武装を作れるって本当にヤバイな。そして聖我はクリムゾンウイングを展開してアクセルのスピード倍加を利用してメルドの元に向かった。

「光輝！」

南雲ハジメが落ちた時と同じ状況だ。メルドがフリードを抑えているうちに逃げるよう伝えても光輝が見捨てられないとのたまい、香織と龍太郎が光輝がメルドを助けようとしているのを見てその場で踏みとどまって戦い始めたのだ。

雫は仲間の名前を言うことしかできなかった。いつも訓練していた友達である聖我が負けそうになった敵と聞いて動けなかった。

「……私はメルド・ロギンスと戦っているのだ！もういい。貴様らを極光で焼き尽くす！」

灰竜を召喚して灰竜達に口を開かせて極光を放たせようとする。

メルドは光輝達を急いで下がらせようとするが時すでに遅かった。

極光は放たれてしまったのだから。

聖我はメルドが信号弾を放った場所に到着した。だがそこにはこの間戦ったフリードの姿と灰竜、そして鎧がボロボロになり左腕が一本なくなってもかろうじて意識を保っているメルドと鎧と聖剣、そして右目が焼ききれて全身がやけどしている光輝、右腕が焼ききれ他にも色々と焼失している香織、そして両膝が無くなり足がなくなつてオマケに両手もなくなつた龍太郎がいた。どうやら龍太郎とメルドが前にいたためか2

人が重症になってしまったらしい。

そして後ろにいた兵士と雫は無事だったようで急いで治療しようとしている。

《ストームイーグル!》

ストームイーグルのページを押し込んで炎の竜巻を巻き起こして灰竜を始末してフリードの前に立つ聖我。

「! 神刃聖我では無いか! 今度は貴様が相手か!」

「……: 光武器精製、軽装歩兵×15。展開スピード倍加」

『任せろ!』

軽装歩兵15体を急いで作り出してフリードの相手をさせて急いでブックゲートを開いてメルドと光輝を背負って香織と龍太郎を雫と兵士達に背負わせて王宮に急いで戻らせる。

「……: さて、フリード。私は今君に対して感謝しているかもしれないし、怒っているのかもしれない」

「ほう?」

「だが今はその気持ちを考えるべきではないな。君と戦って君を殺す」

「……: 来い!」

《ヘンゼルナッツとグレーテル!》

ヘンゼルナッツとグレーテルと音銃剣錫音を取り出してヘンゼルナッツとグレーテルを起動してスズネシエルフに装填する。

「変身」

スズネトリガーを引いて装填されたヘンゼルナッツとグレーテルを展開して変身する。

《銃剣撃弾！》

《銃でGO！ GO！ 否！剣で行くぞ！》

《音銃剣錫音！》

《錫音楽章！》

《甘い魅惑の銃剣が、おかしなりズムでビートを切り刻む！》

仮面ライダースラッシュとなりフリードに向かって剣を突きつけこう宣言する。

「これが仮面ライダースラッシュ……この力で君を倒す！」

分身攻撃

「さあ！私の力を、進化した力を見せてやる！アクセル、倍加を全て身体に！」
『おうさー！行くぜー！』

聖我は倍加を済ませてから地面を蹴る。するとフリードが変成魔法を使って身体を鋼鉄に変えようとする。だが聖我のスピードはこれまでとは違う。

「ぐはあー！」

「フリード！君の変成魔法が発動する前に君を殴ればいいわけだろ！簡単なことだったんだ！」

「……行けワイバーン！」

灰竜とは違い、小型の竜が聖我に向かって召喚され、炎を吐いてくる。

だがその攻撃に億さず、避けもせず左首元に備え付けられた赤・青・黄の3色で構成されるドロップノブを操作してその炎を受ける。

「……ワイバーンか。その程度の攻撃じゃ私は殺せないよ。反撃だ！くらえー！」

炎が与えた衝撃をクッキーデイバイダを使って音に変えてそれをフリードとワイバーンに放出する。

「うるさア！……耳が壊れる……」

「ふん！さて面白いライドブックを使ってやるよ！」

無限収納BOXからこぶた三兄弟を取り出して装填する。

そしてそのままスズネトリガーを引いて展開して変身する。

《銃剣撃弾！》

《銃でGO！ GO！ 否！剣で行くぞ！》

《音銃剣錫音！》

《甘い魅惑の銃剣が、おかしなリズムでビートを切り刻む！》

左腕がこぶた3兄弟の力を宿したブタサンアームに変化し、3種の異なる性質に変化

する盾ステツピッグワイズが新たに装備されたのだが、

「その何が面白いのだ？」

フリードに文句を言われてしまう。

「……見せてやるよ、フリード」

こぶた三兄弟をシンガンリーダーにリードさせて必殺技を発動する。

《こぶた三兄弟！》《イエーイ！》

《錫音音読撃！》《イエーイ！》

すると聖我、スラツシユが3人に増えた。

「な!？」

「まだまだ行くぜ!」

左と右のスラッシュがこぶた三兄弟をシンガンリーダーにリードさせる。

こぶた三兄弟! イエーイ!

錫音音読撃! イエーイ!

その数7人。そしてそれぞれが聖剣とそれに対応するワンダーライドブックを取り出して装填して変身する。

《ブレイブドラゴン!》《ライオン戦記!》《ランプドアラランジーナ!》《玄武神話!》《猿飛忍者伝!》《ヘンゼルナッツとグレートル!》《ジャアクドラゴン!》

「「「「変身!」」」」

各々が変身するための動作を行う。聖剣を抜刀したり、トリガーを引いたり、ジャアクリーダーにリードさせてからベルトに装填してエンングレイブヒルトでライドインテグレーターを押し込むことで変身する。

《烈火抜刀!》《流水抜刀!》《黄雷抜刀!》《一刀両断!》《双刀分断!》《銃剣撃弾!》《暗

黒剣月闇!》

《ブレイブドラゴン!》

《烈火一冊!》

《勇氣の竜と火炎剣烈火が交わる時、真紅の剣が悪を貫く！》

《ライオン戦記!!》

《流水一冊!》

《百獣の王と水勢剣流水が交わる時、紺碧の剣が牙を剥く!》

《ランプドアランジーナ!》

《黄雷一冊!》

《ランプの精と雷鳴剣黄雷が交わる時、稲妻の剣が光り輝く!》

《ぶった斬れ!》

《ドゴ!ドゴ!土豪剣激土!》

《激土重版!》

《絶対装甲の大剣が、北方より大いなる一撃を叩き込む!》

《壱の手、手裏剣!》《弐の手、二刀流!》

《風双剣翠風!》

《翠風の巻!》

《甲賀風遁の双剣が、神速の忍術で敵を討つ!》

《銃剣撃弾!》

《銃でGO! GO! 否! 剣で行くぞ!》

《音銃剣錫音!》

《錫音楽章!》

《甘い魅惑の銃剣が、おかしなリズムでビートを切り刻む!》

《Get go under conquer than get keen!》

《ジャアクドラゴン!》

《月闇翻訳! 光を奪いし漆黒の剣が、冷酷無情に暗黒竜を支配する!》

仮面ライダー総勢7人が変身したのだった。仮面ライダーセイバー、仮面ライダーブレイド、仮面ライダーエスパーダ、仮面ライダーバスター、仮面ライダー剣斬、仮面ライダーラッシュ、仮面ライダーカリバーになって、セイバーが指揮を取るようだった。

最光がいなのはまだエックスソードマンが使えないのと8人だところぶた三兄弟を使うと余ってしまうからだ。

「私、ブレイズ、エスパードはワンダーコンボを発動し、フリードと戦い、バスター、剣斬、スラツシユ、カリバーは魔人族と魔物を殺しにいけ！」

「了解しました！」

「わかった！」

「承知した！」

「オツケー！」

「了解したぜ！」

「……わかった」

性格が変わっていた。スラツシユの性格変貌のように聖我が分身すると性格がまるっと変わるのだ。上からブレイズ、エスパード、バスター、剣斬、スラツシユ、カリバーだ。

そしてバスター、剣斬、スラツシユ、カリバーは無限収納BOXからディアゴスピーデーを取り出して展開する。

《《発車爆走！》》

《《ディアゴスピーデー！》》

全て赤という訳ではなく灰色、緑色、ピンク色、紫色のディアゴスピーデーに変わっていた。

そしてそれに乗って各自色々なところに走る。

それを見据えたままフリードは待っていた。

「なぜ待っていた？」

「……貴様とは正々堂々戦いたいからだ。そして魔族の友の仇を執る。……だからパウアアップするなら早くしろ」

「分からないな。君のことは」

「分からないならそれで結構だ」

《ストームイーグル!》《西遊ジャーニー!》

《ピーターファンタジスタ!》《天空のペガサス!》

《ニードルヘッジホッグ!》《トライケルベロス!》

各々がワンダーコンボに必要なライドブックを取り出して起動し、装填する。

《烈火拔刀!》《流水拔刀!》《黄雷拔刀!》

そして聖剣を抜刀して変身する。

《語り継がれし神獣の名は!》

《クリムゾンドラゴン!》

《烈火三冊!》

《真紅の剣が悪を貫き、全てを燃やす!》

《蒼き野獣の鬣が空になびく！》

《ファンタステイックライオン！！》

《流水三冊！》

《紺碧の剣が牙を剥き、銀河を制す！》

《ランプの魔人が真の力を発揮する！》

《ゴールドエンアランジーナ！》

《黄雷三冊！》

《稲妻の剣が光り輝き、雷鳴が轟く！》

3人の仮面ライダーが現状でできる最強のフォームに変身してそれぞれの構えを取る。

「さて始めようか」

「もちろんだ。準備は出来ている」

セイバー、ブレイズ、エスパーダがフリードに斬り掛かるのだった。

四属性の剣士と頼もしいパートナー達

《暗闇居合！》

《読後一閃！》

暗黒剣月闇から闇のオーラを纏った斬撃の衝撃波が放たれる。その衝撃波はカリバーの目の前の魔族と魔物をまとめて斬り殺す。魔族達も負けじと魔法を放ってくるが認識速度に倍加を掛けているため生半可な魔法攻撃は当たらない。当てたいならどこぞの錬成師の銃をもってこいという話だ。

カリバーは無限収納BOXからストームイーグルを取り出してジャガンリーダーに読み込ませて必殺技を発動する。

《必殺リード！ジャアクイーグル！》

《月闇必殺撃！習得一閃！》

闇のバーミリオウンイングを背中に生やして空に飛び上がり、闇の炎の竜巻を巻き起こして魔族と魔物を上空に吹き飛ばす。

「あら、貴方は陛下に勝った聖剣使いではありませんか？」

「……貴女は？」

カリバーが竜巻を巻き起こしているところにその竜巻に巻き込まれていなかった魔物と魔族を斬っていた金髪縦ロールの女性が近付いてカリバーに尋ねる。

「わたくしはトレイシー・D・ヘルシャー！皇帝陛下とバイアスお兄様とともにハイリヒ王国の救援に来た皇女ですわ！」

「……ガハルド陛下の親族でしたかトレイシー様、短い間ですがよろしくお願い致します」

「ふふつよろしくお願いします。さて片付けますわよ！」

「もちろんです。天空のペガサス」

天空のペガサスを無限収納BOXから取り出してジャガンリーダーにリードさせる。

《必殺リード！ジャアクペガサス！》

《月闇必殺撃！習得一閃！》

闇の力を纏ったペガサスが現れてその背にカリバーが乗ろうとすると、

「少し借りますわよ！」

「え？」

トレイシーがペガサスの上に飛び乗ってそのまま空を走らせる。

「……持ってかれた、ストームイーグル……」

《必殺リード！ジャアクイーグル！》

ストームイーグルをもう一度取り出してジャガンリーダーにリードさせる。

《月闇必殺撃！習得一閃！》

バーミリオンウイングをもう一度生やしてトレイシーと並走して飛ぶ。

「あら、飛べるんですね？」

「……トレイシー様、共に魔族を斬りませんか？」

「その案、乗りましたわ。行きましようか！エグゼエス！」

異質なオーラを纏うエグゼスと呼ばれた大鎌を構えてペガサスを走らせる。そんなトレイシーを追うように必冊ホルダーに暗黒剣月闇を納刀して引き抜く。

《月闇居合！》「暗闇より顕現し敵を屠る闇の一撃！」

カリバーは必冊ホルダーから暗黒剣月闇を引き抜いて魔族の集団の真ん中に向けて剣を振り下ろそうとして、トレイシーはペガサスとトレイシーの影からエグゼスに闇のオーラを纏わせて縦に振り下ろそうとする。

《読後一閃！》「天翔閃・禍転！」

2人の闇の斬撃が魔族に直撃してそのまま吹き飛ばされるか闇のオーラに侵食されて死んでいく。

「やりますね」

「実力主義の帝国の皇女ですから！……戦争が終わりましたら一勝負！お願いしますわ

！」

トレイシーとカリバーは拳を打ち合わせてまた魔族を殺しに回るのであった。

「……あのさーなんでハルナさんがいるんですか？」

「……キャラが違うような気がするんですけど、聖我さん？」

幻影使いな貴族少女であり侍女でもあるハルナがなぜ戦線にいるのか。剣斬はそれが聞きたいのだが、ハルナ的にはどうしておちやらけたような喋り方になっているのか聖我に聞きたいようだった。

「……分身の副作用的ななかだよ。だから気にしないでねハルナさん！でもでもなんでハルナさんがここにいるんですか？」

「……実は聖我さんに皇帝陛下が戦線に到着したことを伝えたかったですけど……幻影がいなくて、でも早く伝えたかったので……自分で技能の隠形を使ってここに来てしまいました……」

「……カリバーがトレイシー様と接触したみたいです。……ハルナさんを安全に王宮まで送りたいんですけどちよつと時間かかりますよ！」

《ジャツ君と土豆の木！》

風双剣翠風を手裏剣モードに切り替えてシンガンリーダーにジャツ君と土豆の木をリードさせようとすると魔人族が魔法を飛ばして来た。

「幻影衝！」

ハルナがすかさず幻影を実体化させて衝撃として放って剣斬を守る。

「早くやつちやつてください！」

「はい！」

《ジャツ君と土豆の木！ニンニン！》

《翠風速読撃！ニンニン！》

手裏剣モードとなった風双剣翠風に蔦が四方から生えてそれを魔人族に投げつけ、魔人族の身体に鋼鉄を優に超える威力を誇る豆を撃ち込んでいく。

「疾風剣舞・回転」

「……剣舞じゃないですよね。豆を撃ち込んでるだけですよね？……というか豆撃ち込むだけであんな威力出るんですね」

「……細かいことは気にしないで、戻りましょうかハルナさん？」

「はい！」

《ディアゴスピーデー！》

緑色のディアゴスピーデーを展開して王宮に向かってハルナと剣斬を乗せて走ら

せる。もちろん攻撃してくる魔族はディアゴスピーデーで轢き殺して行く。そしてハルナを王宮に送ったらブックゲートでまた戦場に戻ったのであった。

「イエーイ！オラオラてめえらもつと攻撃してこいよ！じゃねーとこの音銃剣錫音の餌食になつちまうぜエ？」

「……神刃、性格が……口調が……何時もと全然違うのだが、どうしたと言うのだ!？」

「クゼリー、俺と一緒に……」

「一緒に?」

「魔族を殲滅しようぜ!」

「ですよねー!ロマンティックな言葉を期待した私が馬鹿だった!」

スラツシュがこんなになってしまった要因は少し前のあのライドブックのせいなのだ。

く少し前く

「クゼリーと共闘なんて初めてかな?」

「そうかもしれないな」

リリアーナの護衛を交代してクゼリーも戦線に出てきたところでディアゴスピー
ディーに乗ったスラツシユと鉢合わせて共闘することになっていた。

そして魔族を2人で斬り伏せているとスラツシユが

「こっぴつと剣を振つてると疲れてしまうな……」

「戦争なんてそんなもんだ。お前が特殊なのではないか？ 神刃は上から竜巻やら炎で攻
撃してたしな」

クゼリーの言う通り、スラツシユ、というか聖我はワンダーライドブックのページを
押して発動する技で魔族を殲滅していたのだ。剣を振るのはあまりしていなかった。

「……これ使うか」

ブレイメンとロックバンドという名のワンダーライドブックを無限収納BOXから
取り出して起動する。

その行動がスラツシユの口調と性格を破壊することになってしまったのだ。

《ブレイメンとロックバンド！》

音銃剣錫音を銃奏モードに変える。

《銃奏！》

そしてスズネシエルフにブレイメンとロックバンドをセットしてスズネトリガーを
引く。

《ブレイメンとロックバンド!》

《銃剣撃弾!》

《剣でいくぜ! NO! NO! 銃でGO! GO! BANG! BANG!》

《音銃剣錫音!》

《甘い魅惑の銃剣が、おかしなリズムでビートを切り刻む!》

「フアー……」

仮面ライダースラッシュ・ヘンゼルブレイメンに変身したのだが、様子がおかしく、クゼリーが顔を覗き込もうとすると、

「イエー……イェー! ようこそ俺のライブにイェ! お前ら魔族に地獄の音楽を楽しませてやるぜエー!」

見事に豹変したのだった。そして話は冒頭のクゼリーとの掛け合いに戻る。

若干クゼリーもキャラが崩壊しており、スラッシュは銃奏モードとなった音銃剣錫音で魔族と魔物を撃ち抜き、クゼリーはスラッシュから闇のオーラを込めた光剣と光のオーラを込めた光剣を使って殺しまくる。ちなみに維持を付与している為壊れない。

「……デカツ」

そんな楽しい殺戮劇をやっている2人の前に突如蛇の魔物が現れた。フリードの手

に入れた変成魔法でやったのだろうが、あまりにデカすぎる。それこそキングオブア
サーに斬ってもらわないといけないくらい。

とりあえず攻撃をかましていると毒を吐いてきた。

「……神刃、どうする？ 魔族もないから多分私たちを殺すために仕向けた殺戮兵器
みたいなものだぞ……」

「……クゼリー、……やるつきやない、やらなきや死ぬぞ……」

「……リリアーナ様……今度私を慰めてください……」

スラツシユのハイなキャラが少し壊れ、クゼリーのキャラが完全に崩壊した。そして
スラツシユはシンガンリーダーにキングオブアサーをリードさせる。それも3回。

《キングオブアサー！ イエイイエイイ！》

《錫音音読撃！ イエイイエイイ！》

音銃剣錫音の銃口に青いエネルギーが充填されてスラツシユの上にキングエクスカ
リバーが顕現し回転し始める。

「光と闇の光剣よ、私に力を与えよ」

光と闇のオーラを纏った2つの光剣が青い光を放出し始める。

「キングシュート!!」

「全ての敵を切り刻む為に――――^{エックススカリバー}蒼光抜天斬り!!」

キングエクスカリバーが巨大な蛇の魔物に発射され、クゼリーは青い光の放出で上へ上へ蛇の魔物の頭からバツテンに斬る。……どっからどう見ても謎のヒロインXの無銘勝利剣である。

結果は蛇の魔物の敗北であり、蛇の魔物は肉を切り一帯に飛ばしながらそのまま絶命したのだった。

「……この戦争終わったら休暇を申請しよう……」

「美味しい店教えてやろうか？」

「……よろしく」

そしてクゼリーとスラッシュは魔族をまた斬り始めるのだった。

「……まさかお前に会ったアなあ……久しぶりだな神刃聖我！」

「……そうですねガハルド陛下」

ガハルドとバスターは魔族と頑丈な魔物を2人で斬り殺していた。

「バイアス様が来てらっしゃるとカリバーからトレイシー様に聞いたのです
が……」

「ああ、アイツなら功績欲しさに部下と共に戦線に突っ込んで行っちゃったよ……」

「失礼承知で言いますが」

「なんだ？」

「お子さんちゃんと教育した方がいいと思いますよ？」

「全くその通りだ。……バイアス死んでねえといんだけどな……」

ガハルドとバスターの前には余り強敵は現れず、というかガハルドという歴戦の猛者にフリードに高評価されたバスターを同時に相手する勇気は魔族達にはなく、トレイシー・カリバー組、ハルナ・剣斬組、クゼリー・スラツシユ組のような強敵は飛んでこなかった。

「……強敵現れねえな……暇だ」

「……暇ですわねー」

魔族が魔物をガハルドとバスターを抑えるために送っているだけで魔族は全く来ないため2人は暇を持て余していたのであった。

巨大な怪鳥

フリードはセイバー、ブレイズ、エスパーダと同時に戦っていた。

「……3人で攻めてはいるんだが……」

「中々倒せません……」

「流石は魔人族の最高戦力。一筋縄ではいかないか」

「………やはり3人に増えても一日では変わらぬか……」

セイバー、ブレイズ、エスパーダは魔人族の最高戦力であるフリードに追い詰められていた。アクセルの能力はスピードの倍加。まだかの赤龍帝のような赤龍帝の贈り物などのような特殊能力に目覚めていないためスピードに対応されてしまつては前回と同じ結果になってしまうのは必然だった。

「……そろそろか」

「何を言っている？」

フリードが3人から距離を取って空を見上げる。

「……彼奴が送る、現時点最強最悪の魔人族の魔物兵器……」

「禍絶鳥である」

フリードがそう宣言した瞬間、空に亀裂が入って穴が空き、空から青い巨大な鳥の化け物が現れる。

「「な!」」

「まさか我々が魔物と魔人族だけで攻め込むと思っていたのか? 残念だったな。我々の狙いは王宮である。あの禍絶鳥でこの王都ごと王宮を滅ぼすのさ!」

「……神代魔法の使い手はお前だけじゃないのか!」

「……悪いな、私以外にももう一人いるのさ。さて王宮を滅ぼさせてもらおうぞ?」

フリードが重力魔法で3人を押さえつけようとするのを見てエスパードが雷の斬撃を放って魔法の使用を中断させる。

「行け! 飛べるのはお前だけだ!」

「リリイを助けてきてください!」

「分かった! クリムゾンウイング!」

エスパードとブレイズの声を聞いてクリムゾンウイングを展開して禍絶鳥の元に飛ぶ聖我をフリードが空間魔法で止めようとするがその魔法の詠唱中に水と風のオーラを纏わせた斬撃をブレイズが飛ばして中断させる。

「させません! あの鳥をセイバーが落とすまで貴方を移動させませんよ!」

「俺たちであわよくばお前を倒す……覚悟しろ!」

「……分身はやはり想定外だ……仕方ない、相手をしよう」

フリードが万が一逃げないようにエスパードとはある魔法の詠唱を始めて、ブレイズはフリードと斬り合い始めたのだった。

急な禍絶鳥の登場により人間族は絶望していた。巨大な怪鳥が王宮目指して飛んでいるのだ。対照的に魔人族の士気は今までにないくらい上がっていた。

だが突然禍絶鳥に赤い騎士が突貫したことで魔人族の士気が若干下がる。赤い騎士の正体が自分たちの同胞を焼き殺した龍の力を持つ騎士だからだ。

『聖我、あの鳥にどうやって挑むつもりだ？』

「……分からない、だがリリイが王宮にいるなら助けなければならぬ。それが私の職務だからな」

『……倍加を貯めておく。お前の限界はステータスを考えると10回が限度だ。……勝てよ相棒。あのジジイからお前に渡されて現在の宿主であるお前が死んでしまうのは悲しいからな』

「……分かってるさ」

聖我は禍絶鳥に向かって剣を構える。放つは新しい技、ストームイーグルと西遊

ジャーニーのページを同時に押し込む。

《ストームイーグル!》《西遊ジャーニー!》

如意棒を思わせる魔力で練り上げられた棒を生み出して火炎のオーラを込め、炎の竜巻を先端に纏わせて禍絶鳥に向けて放つ。

「喰らえ!如意の竜巻撃!」

禍絶鳥にその火炎の攻撃が当たる。だがその攻撃をもつともしないように王宮に再度進軍し始める。

「……アクセル、魔力を大量に使ってあの化け物鳥を上には押し上げる。……構築スピードに倍加を全て掛ける」

『あいわかった!任せろ!』

光武器精製を使って巨大な剣を作り出す。禍絶鳥すら超えるほどの大きさだ。

そしてそれを構築しながらキングオブアーサーを取り出して西遊ジャーニーと取り替えて火炎剣烈火を抜刀する。

《烈火抜刀!》

《竜巻ドラゴンイーグル!!》

《増冊!アーサー王!》

《烈火二冊!》

《荒ぶる空の翼龍が獄炎を纏い、あらゆるものを焼き尽くす!》

ワンダーコンボを解除してキングオブアーサーのアーマーを纏ってキングエクスカリバーのベディヴィルダーにキングオブアーサーを読み込ませて変形させる。

《キングオブアーサー! からの、剣が変形! 巨大な剣士が目覚めます! キングオブアーサー!》

キングオブアーサーを呼び出して構築が終わった巨大な光剣を持たせる。キングオブアーサーでも持ち上げるのに苦労するその光剣を禍絶鳥に向かって放り投げるのだ。

そして禍絶鳥の上に叩き上げ、キングオブアーサーをキングエクスカリバーに切り替える。

『相棒! キングエクスカリバーを加速しろ!』

「あいよ!」

キングエクスカリバーに倍加を掛けてケイトリガーを5回連続で引いてブレイブドラゴンのページジとストームイーグルのページジを押し込む。

《キングスラッシュ!》

《ブレイブドラゴン!》《ストームイーグル!》

ドラゴンの形をした炎が禍絶鳥に突進し、炎を帯びた無数の羽がドラゴンを援護する。そしてキングエクスカリバーと巨大なキングエクスカリバーを同時に禍絶鳥に振

り下ろす。

「これで終わりだ！」

倍加を掛けられたキングエクスカリバーは無数の斬撃を禍絶鳥に与える。それも禍絶鳥サイズの斬撃を。

その斬撃によって禍絶鳥は消え去った。そしてセイバーはフリードの元にまた向かうのだった。

戦争の終了と女性とアクセル

「禍絶鳥が私に倒されて魔人族が後退というか撤退したただと？」

ただ今聖我は無性にイラついていた。理由は禍絶鳥を魔力の限りを尽くして屠ったすぐあとにブレイズたちの元に向かったセイバーなのだが、そこに戻った頃にはフリードはいなくてブレイズとエスパードが疲れきって地面に寝そべっていた。

「……そうなんですよね……いきなり生きている魔人族が空間が歪んだ瞬間消えたと報告されています。……完全に逃げられました」

「クソッ……禍絶鳥さえいなければ倒せたかもしれないのに……」

聖我は今リリアーナとともに紅茶を飲んでいた。怪我をした兵士を兵舎に戻したあとと聖我は疲れきった身体に鞭を打ってリリアーナに報告し始めた。リリアーナは早く寝るように言ったがその忠告を無視して報告していた。

「可能性の話は辞めましょう。……明日はまた色々と忙しくなります。部屋に戻ってゆっくり休んでください」

「ああわかって」

聖我は席を立ってリリアーナに一礼をしてから部屋に戻ろうとドアに向かおうとす

るとそのまま倒れてしまった。

「聖我!？」

リリアーナは急いで聖我の元に駆け寄ってヘリーナに見せる。

「……魔力切れと体力切れですね。運ぶ人もいませんから……私も運べませんし……」

どうしようとしても言うようにリリアーナを見るヘリーナ。するとリリアーナは少し微笑みながら仕方ないと言うふうにかう答える。

「……し、仕方ありませんね……わ、私のベッドで寝かしてあげましょう……」

「リリアーナ様、この部屋ベッドが一つしかないんですがー(棒読み)」

「じ、じゃあ一緒に寝るしかないですね。仕方なくですよ? 仕方なく……」

3日間の戦争が終結したすぐあと、ハイリヒ王国の王女であり聖我の3歳下のリリアーナはそのまま仕方なく聖我と一緒に寝ることにしたのだった。……仕方なくです。

アクセルはその様子を見て、

『(モテてるなく聖我の奴。3歳下……まあ色々歳差がある恋愛した奴いっぱいいるから大丈夫か……さてアイツのところに行くか)』

ちよつと歳の差を心配しながら相棒へ恋するリリアーナにエールを送るアクセルだった。

「ここは聖我が転生することを伝えられ、転生特典を選んで転生した時の部屋。そこには聖我を転生させた女性と加速龍であり今は聖我の相棒を務めているアクセルがいた。」

『何の用だ、俺も聖我と同じく疲れている。早く帰らせてくれ』

「ごめんなさいね、アクセル。でもこれはこれからの聖我にとつてとても大事な話なの……少しの間時間を貰うわ」

『いいだろう……さつさと話せ』

女性はアクセルに呼び出した要件を話し始める。

「……原作が今までなくらい破壊されているわ。主人公が成り代わるなんて世界は普通にあつたし、主人公の弟がいるくなんてこともあるけど、この世界の壊れ方はあんまりないわ。私はてっきり主人公と奈落に落ちるもんかと思つたのよ……」

『……なるほど、やはりこの世界は俺が知つていふかお前らの把握している世界とは全く違う世界か……』

「……そうね……貴方には奥の手があるわよね？私の父が貴方を神器モドキにした時に禁手を用意してあるはずよ？」

『……解放条件は厳しいけどな』

「それは言わないお約束よ……」

女性は深いため息を放つ。それを見てからアクセルはその場から消えようとしていた。

『俺は帰る。あとは任せただぞ』

「お姉さんに任せなさい！」

そのまま女性を置いていったままアクセルは神器モドキに戻って行った。

「……フリード、その男は確かにセイバーと言ったんだね？」

「ああ、そうだシーク。神刃聖我は仮面ライダーセイバーと名乗っていた。それにスラッシュとも……」

「そうか……」

シークと呼ばれた女性は抵抗するフリードを部屋から追い出して一人こうつぶやく。

「仮面ライダー……私が作りたい存在……私の魔剣システムに勝てるかしら？ 仮面ライダーセイバー……いや？ 神刃聖我さん？」

シークは十字架の形をした西洋剣を眺めながら月を見るのだった。

王国と帝国の条約

「……フリードの力は凄まじかった。それにフリードの言っていた神代魔法……あの力はフリードだけの力じゃなさそうだ。それに禍絶鳥を最初から投入すれば勝っていただろうにしなかった。何故だ？」

聖我は色々な武器に慣れるために訓練場で槍や鎌を作って振りながら終わった戦争について考えていた。まあ戦争と言ってもフリードの魔法と禍絶鳥についてなのだが。

「……神代魔法の詳細な情報は探査で少しだけ手に入ったけど……」

神代魔法の情報をエスパードとブレイズがフリードと対峙している時に探査でフリードを調べて神代魔法の入手方法とその使い方を知った。

・重力魔法……ライセン大峽谷と呼ばれる峽谷のどこかにあるライセン大迷宮の番人を倒して手に入れることができる魔法。重力魔法と銘打ってはいるが、その本質は星のエネルギーに干渉する魔法。

・空間魔法……グリユーエン大火山の中にある迷宮を攻略することによって手に入れることができる魔法。聖我が持っている無限収納BOXを作るために必要な魔法でもあり、ブックゲートのような使い方も可能。

・変成魔法……魔人族の領土内にあるシユネー雪原内にある氷雪洞窟を攻略することで手に入る魔法。有機的な物質に対する干渉魔法で禍絶鳥や魔物の強化はこれのおかげと思われる。

『攻略は時間的に無理だぞ？どうする？』

「アクセル、取り敢えずは情報を手に入れられたんだ、今度の長期休暇で重力魔法を取りに行く。それにスラツシユが解放されたんだからジャオウドラゴンがそろそろ解放されるさ」

長期休暇で重力魔法を手に入れられるかは分からないがジャオウドラゴンが解放されるなら戦力が增える。ジャオウドラゴンのことを話すとアクセルが不機嫌になり、

『……俺のバランスブレイカーも使えるようになってもらわんと困るからな？』

「わかってるよ、ジャオウドラゴンとか以外にもアクセルのバランスブレイカーも手に入れてみせるさ」

『その意気だ』

そのままアクセルを併用して聖我は弓を使い始めたのだった。

「リリイ、それマジか？」

「ええ。今回の戦争の後の会議ではそのようなことを話しました。こんな感じですよ」
訓練後の夜、聖我はリリアーナの部屋で紅茶を飲みながら戦争後の会議のことについて聞いていた。王国と帝国で話され約束されたのは3つの約束。

1つ目はこの戦争で勝てた理由の一つである聖我の扱い。聖我の行動に対して聖教会、帝国、王国は文句をつけない、聖我に命令を下さないという約束。まあ簡単に言うとう聖我の行動に誰も口を出すことはなくなったということ。

2つ目は帝国と王国合同で魔人族の行動を逐一報告し合うこと。

そして最後の3つ目は婚約の話だ。

「婚約って誰が婚約するんだ？リリイ？」

「……本当はそうなるはずだったんですけど、此度の戦争で婚約するはずだったバイアス皇太子が死亡してしまっただけですよね」

バイアス・D・ヘルシャー。帝国の長子であり、皇太子であった彼は武功をあげて名声をあげようと敵の大軍に自ら突っ込み、灰竜やワイバーン、亀の魔物の反撃を受けて死亡してしまっただけ。

「……それで？」

「アリエル・D・ヘルシャーと呼ばれる小さい女の子が帝国にいらつしやるんですが、その子と私の弟であるランデルが婚約することになりました」

「そうか、……ちよつと待て、リリーの婚約が破棄されたら違う次男とかに回されるんじゃないのか？」

「……いえ、皇太子との婚約が皇太子が死んだから違う人ね。とはいかないですよ。それに私は聖我と……」

「なんか言つたか？」

「いえ何も」

聖我はリリアーナの婚約がなくなったことを聞いて何故かほつとしたことを疑問に思いながら気になることを聞き出した。

「そういうやメルドさんや勇者はどうなったんだ？」

「実は……メルド団長の腕は極光で塵になってしまつたんです。治すことは不可能です。

……光武器精製なら義手を作ることができそうですがどうですか？」

「……ちよつと待つて」

「?はい」

聖我はステータスプレートを取り出してステータスを確認し始めた。

神刃 聖我 男性 17歳 レベル42

天職 劍使

筋力	52000
体力	52000
耐性	52000
敏捷	52000
魔力	55000
魔耐	52000

技能 剣術「縮地」「無心」・オーラ付与「光属性」「闇属性」「火属性」「水属性」「岩属性」「雷属性」「風属性」「音属性」・聖剣「最光」「カリバー」「セイバー」「ブレイズ」「バスター」「エスパード」「剣斬」「スラッシュ」・加速・加撃・光属性適正・全属性完全耐性・詠唱完全省略・隠蔽・光武器作製「効果付与（※5文字）（維持付属）」・探査「広範囲探査」・気配感知「リンク」・魔力感知「リンク」・瞬時魔力回復・物理耐性・行動推測・言語理解

「いけそうだ。神経接続、音属性オーラ付与、光武器精製発動。精製対象は義手」

聖我はステータスを確認して付与できるのが五文字になったのを見てメルドのためにオーラと神経に接続して使えるように神経接続の効果を付与して音属性のオーラを付与した。

「これを渡せばいい」

「ありがとうございます。それと勇者とその仲間たちですが、ヘリーナ、書類持ってきてください」

「はい」

ヘリーナが書類をリリアーナに手渡してリリアーナが義手をヘリーナに渡す。そしてヘリーナはメルドに義手を届けるためそのままお辞儀をして部屋から退散した。

「こんな感じですよ」

リリアーナから手渡された書類を見てみると、

・天ノ河光輝の場合……右目は修復不可能であり、怪我は額にまで行っている模様。聖剣と鎧は効果を失い真つ二つに折れたり粉々になっている。

・白崎香織の場合……右腕だけでなく肩に右腰の端つこで内蔵には届いていないが骨が少し焼けている。右足の一部までなくなっている模様。アーティファクトである杖も聖剣と同じく効果を失い折れてしまった。

・坂上龍太郎の場合……この度の報告の中で一番怪我が酷く、両足は完全に無くなり、生殖器は辛うじて無事だが、両手が消し飛んでおり、アーティファクトも効果を失って塵になっている。

「……酷いな……」

「光輝さんは意識がありますが、香織さんと龍太郎さんは意識がありません。怪我のシヨックです」

「そうか、……部屋に戻らせてもらおう」

「わかりました。それと一つだけいいですか？」

「なに？」

光輝たちの状態を聞いて暗くなつた聖我はリリアーナに部屋に戻ると言つてドアに手を伸ばすとリリアーナに呼び止められる。

「今回の光輝さんたちの怪我は貴方は悪くありません。むしろ戦争に参加すると一言も言つてない貴方がよく戦つてくれました。……だから何言われても気にしないでください。聖我？」

「わかつた……おやすみ、リリイ」

「おやすみなさい、聖我」

そして聖我はリリアーナの部屋から出てそのまま自分の部屋に向かつたのだつた。

溜まつた怒り

「……先生が帰ってきた？随分早くないか？まだウルに行つたばかりと聞いているよ？」

「ええ。愛子さんが帰ってきました。ついでに護衛の皆さんも。仕事ですが会いに行つてもいいですよ、清水という貴方のクラスメイトが死んだから、だそうです」

リリアーナから聖我は護衛中に愛子が帰ってきたことを聞いて驚いているともう一つ驚く情報が流れてきた。闇術師の清水が死んだというのだ。

「……本当に死んだのか？」

「はい。ブルータルに引き裂かれたらしく、真つ二つになつた遺体を見つけたそうです。愛子さんが」

「……そうか」

「行かなくていいんですか？クラスメイトでは？」

「……私は転校初日で転移しているし、他の奴らに嫌われているし、清水と関わりはない。それに私の今の仕事はリリイの護衛……例えリリイが離れてもいいと言つても私は離れないよ」

その言葉に無言でリリアーナは俯き部屋に戻って書類をまた片付け始め、聖我は探査と結界を広げ直す。

「……仕事が終わったら見に行くか……」

清水が死んで悲しいという気持ちは聖我の中にはない。せいぜいああそうですかみたいな感じだ。冷たいかもしれないが聖我はクラスメイトに対してそんな気持ちしか向けていない。園部とその2人の友達や雫なら別だが、他のクラスメイトには基本的に冷たい。

……
聖我が冷たいのも何もかも、最初に聖我を嫌ったクラスメイトと教師が悪いのだが

「清水くん……」

畑山愛子、教師になって初めて自分の教え子が死んでしまった。その事実が愛子に重く覆いかぶさった。そして帰ってみれば光輝、龍太郎、香織が重傷で、魔族の襲撃があつた後であると。そして魔族の襲撃の被害が最小限に抑えられたのは聖我のおかげ、聖教教会と一部の貴族以外が笑っていた。

そう笑っていた。自分の大切な生徒が殺され、光輝たちが重傷を負っているのによ

かった。その言葉が愛子の心に突き刺さった。聞けば聖我が救援に到着したのは光輝達が重傷を負ったすぐあとらしい。

もつと早く来れなかつたのか。そんな考えが愛子の中で回っていた。

「……清水が安置されているのはここか」

あまり聞きなれない声。顔を上げてみれば聖我が清水の前に立っていた。

「……」

清水の死体の前で聖我は座り込んで合掌していた。

「……」

そのまま立ち上がって聖我は清水が安置されている部屋から出ようとする。その様子を見た愛子は走って聖我の腕を掴んだ。

「何か御用ですか？」

「……」

「何か御用ですか？ 畑山先生」

「……」

「何か御用ですか？ 畑山さん」

「……」

聖我の腕を掴んだまま黙りこくっている愛子の様子を見てため息を付きながら聖我

は腕を振り払おうとする。

その動作に反応したのか愛子は両手で聖我の腕を握る。

「……………何の御用ですか？ 畑山さん」

「なんで」

「？」

「なんで天ノ河くん達を助けなかったんですか」

「……………間に合わなかったからです」

聖我の場合殲滅している時に新しい姿になるのは時間の無駄でしかないのでスラッシュになれなかった。なので光輝を助けることは殲滅している間不可能だった。

「……………それでもクラスメイトを助けることはクラスメイトとして当然でしょう！ 本当に間に合わなかったんですか!? 本当は見捨てたんじゃありませんか!?」

「……………その根拠は？」

「クラスメイトに嫌われているから、相手にされないからという腹いせに天ノ河くん達を助けなかった、見捨てたんじゃ「黙れ」え……………」

聖我の突然の黙れに愛子は困惑する。

「……………クラスメイトを見捨てたか……………貴女にとってはそういう認識なんですわね」

「どういうことですか！」

「……私にとってあなたがたはクラスメイトでも仲間でも同郷の人間でもなんでもな
い」

「え……」

聖我はきつぱりと愛子にそう伝える。

「あなたがたは私にとって邪魔な存在でしかない」

「な、なんで……」

愛子は聖我の言葉に動揺する。全く予想だにしない言葉を聞いたからだ。

「前から私は貴女が嫌いだ、一方的にそちらの言い分を投げかけこちらの意見を真つ先に否定する、断片的にしか情報を聞かないでそれを知ったかぶりのように高圧的に言ってくる……」

「それは君のことを思って……」

「……仕舞いにはクラスメイト、……人が1人死んだだけで帰ってくる。職務怠慢だ

……国から渡された仕事も満足にできないのかあんたは」

「クラスメイトが死んだことをそんな扱い……」

「あんたは戦争中にも同じことが言えるのか？ 戦友が死ぬ度に悔し涙を流して戦争中に葬式を開けるか？ そんなことをしたら戦争に負けてしまうだろうさ」

聖我は愛子のことを貴女からあんと言い始めていい返し始めた。どうやら前から

溜めていたストレスが今解放されたらしい。

「……私は戦争なんかさせるつもりはありません！ 神刃くんはいいように使われているだけです！」

「……止められない時点であんたの力はその程度だ」

「う……」

「それに、私はいいいように使われてない」

「え？」

「私はリリイのために剣を振るう。あんな人を殺すのを何も考えず戦争参加を決めて教会に本当にいいように使われているあの勇者バカと一緒にするな」

「それでも人殺しは……」

「……私はリリイの騎士だ。貴様に口を出される覚えは全くない。もう二度と関わるな。いい加減目障りだ」

聖我はそうきつぱり愛子に伝えて清水が安置されている箱の前に花を添えてそのまま部屋から出た。

「見てたわ。随分きつぱり言うわね」

「雫か」

「あら名前で呼んでくれるようになってくれたのね」

聖我が部屋から出て少し経ってから雫が聖我の目の前に現れた。

「……幻滅したか？」

「ううん、貴方は正しいと思うわ、だから安心しなさい」

「……そうか、おやすみ」

「おやすみなさい」

聖我は雫の横を通り過ぎ、雫は聖我を見送ってから部屋に戻ったのだった。

「……そうですか、そんなことが」

「どうされますかリリアーナ様」

「……」

リリアーナはハルナから聖我が愛子に向かって言い返した現場のことをハルナから聞いていた。

「リリアーナ様？」

「今度聖我と話しませんか？ハルナさんも一緒に」

「え?」

いきなりのリリアーナの言葉に驚くハルナ。

「一緒に聖我のストレスを無くしましょう? 貴女が聖我のことを想っているのは知っていますよ?」

「……そうですね。その時は一緒にさせていただきます」

聖我のストレスを無くすことを企むリリアーナとハルナだった。

勇者と聖我の決闘？

聖我は光輝たちの怪我が少し治って少し経ってからリリアーナに呼び出されていた。

「リリイ、それは本当かい？それが本当なら……」

「ええ。どうも愛子さんを泣かしてしまった、清水さんをバカにしたという根も葉もない噂で光輝さんと龍太郎さん、香織さんを中心とした貴方の元お仲間さんがうるさくしています」

聖我はこの前愛子に言われたことに対して溜まった鬱憤を倍どころか二乗にして返した所を見た中村恵理と呼ばれる女の子が事情を愛子から聞いてそれをようやく目覚めた光輝たちに伝えたらしい。

その中村恵理が話したことにより光輝たちは怪我也治りかけなのに輸血されたまま立ち上がってエリヒドとリリアーナに抗議しに行ったらしい。

「光輝さんたちの言い分は聖我を愛子の目の前で土下座させろ、聖我は責任を持って王宮から出ると言ってます……」

その言葉に聖我は無言になってリリアーナをじーっと見つめ始める。

「……」

「ジー」

「効果音を自分で出さないでください!……何ですか?」

「いやなんか勇者のことをリリイが光輝さんって言ってるのとムカつくというか……なんというか」

「(嫉妬……聖我が嫉妬してくれてます……) わかりました。勇者と呼ぶことにします。りゅうた……拳士のこともこう呼びますね」

「すまない」

聖我は自分の気持ちに気づかず、リリイにさん付けされる光輝に嫉妬していた。その後すぐにリリイは話を再開させた。

「では、勇者の話に戻ります。勇者の狂言に付き合うつもりは最初はなかったんですが、その場にいたイシユタルからまた決闘を行えばいいと言われてしまいました」

戦争の残り火とでも言うように魔物がまだ完全に駆逐されていなく、決闘をしている暇さえあるなら魔物を片付けると言わなければ、住民が被害を受けている。それを無視して決闘とは教会の人間とは思えないと憤慨するリリイナ。

「……成程。それで?」

「イシユタルは聖我さんにハンデをつけるのたまひまして……」

「ハンデ?」

「ハンデの内容は、貴方の聖剣の使用を禁止す「そんなんでいいのか？」え？……わかりました。決闘は了承するという形でいいんですね？」

「ああ。まあどうせだ……」

聖我は怪しげに笑いながらリリアーナにこう伝える。

やるなら心折つても構わないよね！

「さあ始まりました！戦争後にな・ぜ・か了承された決闘！これより選手の入場です！あ、ちなみにこの決闘はどちらかが負けを認めたら終わります！」

一般客も迎え入れて国の士気をあげるためにこの決闘を使つたらどうでしょう？とのリリアーナと聖我の声に王であるエリヒドはイシユタルと一部貴族の制止を振り払ってコロシラムのようになった練習場で盛大に実況されながら決闘が始まろうとしていた。あ、実況してるのは聖我の活躍が見れると張り切っているハルナ。

「赤コーナー（？）！魔族との戦争に参加すると豪語したくせに戦争中に魔族を殺さないとのたまった挙句これから戦う相手にハンデをもらった勇者！天ノ河ア！光輝イ！」

一部の貴族からは歓声とハルナに対するブーイング、観客からブーイングを受けなが

ら赤い垂れ幕が貼られたところから光輝が眼帯をつけながら王国に支給されたアーティファクトが壊れたため青い鎧を身にまとい宝剣と呼ばれる聖剣の亜種を帯剣して歩いて現れた。

「青コーナー！神の使徒からリリアーナの姫の護衛になってから活躍続き！いつも使っている聖剣は勇者へのハンデのせいで使えないが違う戦法を使うと聞いています！護衛騎士！神刃聖我！」

ギルガメツシユのライダースーツのような服を来て観客とリリアーナの歓声を受けながら青い垂れ幕から歩いて現れた。何故か赤いカラコンをしながらプロトセイバーの髪を整えて。

「前回と同じように行くと思うなよ！」

聖我に対して光輝がメンチを切ると、

「……戯言を……」

「え？」

「ハルナさん、始めてください」

聖我は光輝をバカにしながら槍を作り出して構える。

「ハイ！ではこれより決闘を始めます………始め！」

その言葉を聞いた瞬間聖我は投槍の構えをして光輝に槍を投擲した。効果は必中。

その攻撃が全て狙った物に当たるといふ効果だ。

「な！」

光輝は剣を抜くがそのまま肩に槍を受けてしまいそのまま肩を貫通され剣をその痛みで落としてしまう。

「光武器精製」

光属性と闇属性のオーラを纏わせた光剣を2本作りだしてオーラを放出して光輝に向ける。

「……降参するか？」

「まだだ……負けるわけには……」

「そうか、ならまた寝込んでろ」

「それはどういガバア！」

光剣を上空に投げて光武器精製で音属性のオーラを纏わせたガントレットを作り出して光輝の鳩尾にアッパーを叩き込む。音属性のオーラの力と衝撃発動の効果によって上空に叩きあげられる光輝。

「アクセル！」

《Accelerate!》

ガントレットを地面に叩きつけて衝撃で上空に飛び滞空していた光剣をキャッチし

て詠唱を開始する。

「模倣剣技！火炎十字斬！二連！」

火炎を纏っていないくともそれはセイバーの火炎十字斬。その攻撃を見た光輝はこの前決闘を行った時のセイバーの攻撃を思い出し目を瞑ってしまう。

「目を瞑っている場合か？」

火炎十字斬のダメージは全く無く、無敵になったのかと一瞬思ってしまったが聖我がニヤニヤしているためそれはないだろうと思った光輝。

聖我は光輝に向かって巨大な光手裏剣を投げようと構え、光輝は目の前で投げられようとすする巨大な手裏剣を見て自分の末路を悟ったかのように魔法で障壁を作り出す。

「疾風剣舞・回転！」

風のオーラを纏わせた見た感じものすごい派手な光手裏剣を光輝に向かって投擲する。

……ダメージがない。というか障壁にヒビすら入っていない。

「光武器精製！」

光剣を上空に100本単位で作り出して光輝に全て投擲するがそれすらも弾き飛ばす。

「……………クツ！ダメージを与えられないだど!？」

「……………これが俺の力だア！喰らえ！天翔閃！」

光の光線が宝剣から飛び出て聖我を穿つ。聖我はそれを真正面から受けてそのまま聖我は肩と胸に火傷を負いながら倒れ込む。

「さあ、降参しろ！」

光輝は完全に勝った気でいる。

聖我はそのまま倒れて動こうとしない。クラスメイトはいい気味だとばかりに聖我をバカにし始める。

そして聖我は立ち上がり口を開く。

「さて、そろそろ真面目にやろうか？」

「え？」

聖我は自分の胸に光剣を突き刺して聖我はそのまま光になって消え去った。

「……………え？」

そして聖我は光輝の目の前に空から現れた。

「……………どういふこと?」

「……………今までお前が戦ったのは光武器精製で作られた0.000001%の実力な私だよ。0.000001%のスペックの私をボコしてイキって……………wwww……………」

聖我の言葉にポカーンとする光輝。聖我は事前に分身を作り出すことができる剣を使って分身して弱体化の効果を持つ剣を使って弱体化しまくった分身を作り出して自分分は上空に闇黒剣月闇に必殺リードして得たストームイーグルのバーミリオンウイングでスタンバっていたのだった。

真面目に真っ白になってポカーンとしている光輝を同じくポカーンとしているクラスメイトの客席のところに金玉を蹴りあげてそのまま野球バットで吹き飛ばした。

「ホームラン!」

ハルナがトータスには無いはずの野球の知識を知っているのは放っておいて聖我はそのままクラスメイトの客席通り越してコロシアム化している練習場の壁にめり込んだ光輝を捕捉する。

「ハルナさん」

「何ですか?」

「これってまだ終わってないですよね?」

「ええ。どちらかが負けを認めたらですか」

その言葉を聞いて聖我は光武器精製を発動して釘を精製する。それも超巨大な。それを何百も。

「あくクラスメイトの皆さん。巻き添えで当たるかもしれないけど……」
死なないようにね？

王の財宝のようにクラスメイトの客席目掛けて釘を投射する。まさに今までの鬱憤を晴らすかのように。

「……あ、ちなみにこの釘、当たったら三日三晩寝れなくなったり頭が三日間おかしくなったり頭がキチガイになったり身体が三日間熱くなったり動かなくなったりするけど、まあそれは不運だったということで、私は悪くないよ？ 私の射線にいた君たちが悪い」

聖我は釘の能力に呪い（低）という能力を込めている。喰らえば少しばかり身体に異常をきたす事になるという嫌な能力を。しかも当たるだけで呪いは起こる。

しかも弓矢でもいいのに釘。藁人形を打ち込むかのように念入りに投射する。たまにすごいミニサイズな釘を打ち込んだりするため目に入りそうになるバカもいる。

さっさと魔法を展開して逃げればいいのにと思いかもしれないが聖我はそこも念入りに対策している。魔法を阻害する結界をわざわざ図書館から引っ張り出し、クラスメ

イトが座る席をわざわざリリアーナが教えてそこに結界を打ち込んで認識阻害の能力を組み込んだナノサイズの釘を打ち込んでバレないようにしている。

あ、ちなみに雫と園部とその取り巻きはリリアーナと一緒に観戦しているので被害はありません。

そのリンチショーに10分位は客も楽しそうになっていたが30分も同じ光景が続くと飽きたと言い始めてそのまま立ち去り始める。だが客は確かに聖我の強さと光輝の頼りなさを心に刻んでいた。

客が居なくなってもまだ釘を打ち続けるためそろそろ辞めるようにイシユタルと一部の貴族が止めに入る。エリヒド達は止める気すらない。

「そろそろおやめ下さ」「私に降参しろと?」「いえそうでは……」

「そろそろおやめろ!勇者を殺す気か!」

「そうだ!神の使徒を殺すなど許されることではない!」

「……知るか」

「「はっ」」

聖我は光輝達が死ぬと言われても別に気にしないと云った。その言葉にイシユタル達はポカーンとなる。

「リリイから聞いているんだが、教会、帝国、王国は私の行動に口を出せないらしいな。」

何故口を出しているんだ？」

「え？」

イシユタルは知らなかったようだ。その事についてリリアーナは聖我に説明を始める。

「会談に参加したのはイシユタル殿と同程度の権限を持つ人ですからイシユタル殿が知らなくても不思議ではないです」

「……まあそういうことだ。そもそも何故勇者は降参しないんだ？可笑しいよな？仲間が苦しんでいるのにさ？」

完全に悪役ムーブだが聖我に悪気というものは存在しない。日々の悪口とこの前の愛子の言動で完全にキレてしまっているのだ。

「……私はやめる気すらない。魔力が切れようと魔力を回復する光剣を作ればいい話だ」

「……」

イシユタル達は啞然としているが他の貴族や王は聖我的行動に納得している。自分たちの行動が聖我をここまで追い込んでいたのだ。リリアーナが拾わなかったら聖我的釘の矛先が自分たちの首に向いていたのかと思うとほっとしている。

そんなことが5時間ほど続いて釘が刺さりまくって血が出まくっているが輸血する

ことの出来る光剣を作り出して死なせないようにしていると愛子がやってきた。

「何してるんですか！やめてくださいい神刃くん！イジメなんて許しま……うう」

愛子は聖我に説教をしようとする。と聖我の殺気が込められた目を見てそのまま気絶してしまった。

それから数時間後、光輝がようやく小さい白旗を上げたので聖我の勝ちとなり釘を撃つことをやめてリリアーナと一緒にリリアーナの部屋に戻ったのだった。

ちなみに釘の効果は重複してしまい、奇跡の効果を起こしていた。光輝は筋力や魔力などのステータスが全て最底辺に落ちて行動を起こすだけで魔力が必要になり考えるだけで魔力を使用することになり魔力回復薬を飲みすぎてぶくぶく太っていた。

龍太郎はベッドから動いていないので今回の実害はないと言いたいのだが、誰かがつけられた呪いのせいで見舞いに来た誰かの身体からゴキブリが出現して龍太郎の胸元や口の中にゴキブリが入ったりしていた。

ちなみにイシユタルと一部の貴族、愛子にも極小数の小さい釘がとばっちりて刺さってしまつて色々な呪いの効果に苛まれていた。

……まさに地獄としか言えない状況だった。

ライセン大迷宮

「……なんか簡単に見つかったな」

『……もの探しは探査の効果で簡単にできるからなあ……大迷宮の意味無くないか?』

聖我はディアゴスピーディーを走らせながら探査を使ってライセン大迷宮を探していた。

クラスメイトの殆どが動けなくなつてから数日経つてから長期休暇が渡されたのだ。聖我はこれ幸いとライセン大峡谷にブックゲートで転移してライセン大迷宮を探していたのだが、すごく簡単に見つかった。

「で……」

『……』

「『なにこれ?』」

聖我とアクセルは壁に直接書いたくそうぎい文を見ていた。内容は

《おいでませー! ミレディ・ライセンのドキワク大迷宮へ♪》

だ。音符と! がクソうざく、元々沸点が高いはずの聖我とアクセルは少しイラついていた。

『まあ入ろうぜ?』

「ああ」

聖我とアクセルは入ろうとするのだが入口が見当たらないため壁を叩きまくつていくと、

ガコンツッ!

「『え?』」

壁の窪みのところを叩きまくっていると回転扉だつたようでそのまま扉が回転して聖我はそのまま壁の向こうへ姿を消した。

聖我はここがどんな大迷宮なのか理解した。ここはからくり屋敷なんだと。そしてここでは探査が必須の技能ということに。

そうして探査を使っていると沢山出てくる罠の数々。矢が飛んできたり、巨大な鉄球が出てきたり。しかも罠が出る度

《ビビった? ねえ、ビビっちゃった? チビってたりして、ニヤニヤ》

《それとも怪我した? もしかして誰か死んじゃった? ……ぶふっ》

本当にウザイ文が大量に出てくる。そしてたまに入口に戻ったりと文も相まってストレスはマツハで溜まっていた。

『なあ相棒。落ち着け？本当に落ち着けて』

「ん？どうしたんだ？俺は落ち着いてるよ？」

『……落ち着いているやつはキングオブアーサーのワンダーライドブックを構えたりしないから！倒壊するかもしれないから真面目にやめ《キングオブアーサー！》遅かった……』

聖我はアクセルの制止を振り切ってキングオブアーサーのワンダーライドブックを起動してブレイブドラゴンとストームイーグルもついでに起動する。

ソードライバーに装填して火炎剣烈火をすごい勢いで抜刀する。

《烈火抜刀！》

「変身！」

《竜巻ドラゴンイーグル！！》

《増冊！アーサー王！》

《烈火二冊！》

《荒ぶる空の翼龍が獄炎を纏い、あらゆるものを焼き尽くす！》

『あくやりやがった……』

「オラア！」

ケイトリガーを5回連続で引いてキングエクスカリバーと巨大なキングエクスカリ

バーに青いエネルギーを纏わせる。

「やけくそ！」

《キングスラッシュュ！》

壁を斬りまくって探査の言う通りに出口まで一気に走る。

『おい聖我！俺酔う！酔っちゃもうからちよつと抑え……オロロロロ』

アクセルが神器の中で吐いているようだが気にしないで走りまくる。するとある部屋にたどり着いた。

その部屋は長方形型の奥行きがある大きな部屋だった。壁の両サイドには無数の窪みがあり騎士甲冑を纏い大剣と盾を装備した身長二メートルほどの像が並び立っている。部屋の一番奥には大きな階段があり、その先には祭壇のような場所と奥の壁に荘厳な扉があった。祭壇の上には菱形の黄色い水晶のようなものが設置されている。

「動きそうだな……」

『壊すか？』

「……いや壊さない。動くなら乱戦の練習が出来そうだ。フリードとの戦いのために」

『来るぞ！』

騎士甲冑が動き出して聖我に攻撃し始める。大剣をキングエクスカリバーで防ぎ止めるがキングエクスカリバーと同等サイズの大剣を何本も受け止めるのは不可能だ。

「アクセル！展開スピードの倍加を頼む！」

『おっしやあ！』

《Accelerate!》

この前クラスメイトに対して放った巨大な釘に今度は呪いではなく連鎖爆破の効果を込める。そして巨大な釘を何百も精製して騎士甲冑に向けて投射する。

連鎖爆破の効果は釘が騎士甲冑に当たってから同時に爆発してダメージを与えていく。

《ディアゴスピーディー！》

赤いディアゴスピーディーを取り出してそのまま部屋の一番奥の祭壇と巨大な扉の前に向かう。襲ってくる騎士甲冑は釘と炎の竜巻で吹き飛ばしていく。

「喰らえ！」

またケイトリガーを5回連続で引いてキングエクスカリバーをディアゴスピーディーの前に出すように構える。そして巨大なキングエクスカリバーも回転して青いエネルギーでできたドリルを巨大な扉にぶつける。

《キングスラッシュ！》

ドリルが当たった扉は巨大な穴を開けられ、ディアゴスピーディーに乗りながら聖剣ソードライバーを腰から取って邪剣カリバードライバーを取り出して腰に巻き付ける。

《ジャアクドラゴン!》

闇黒剣月闇を取り出してジャアクドラゴンをジャアクリーダーにリードさせてからベルトに装填してエンングレイブヒルトでライドインテグレーターを押し込むことで変身する。

《闇黒剣月闇!》

《Get go under conquer than get keen!》

《ジャアクドラゴン!》

《月闇翻訳! 光を奪いし漆黒の剣が、冷酷無情に暗黒竜を支配する!》

「さて親玉の登場か?」

「やほくはじめまして〜みんな大好きミレディ・ライセンだよ〜」

『「……は?」』

ディアゴスピーディーを回収して目の前の巨大なゴーレムに喋るわけがないと思いつながら喋りかけると巨大なゴーレムは女の声帯で喋っていたのだった。

闇の騎士王

「やほ〜はじめまして〜みんな大好きミレディ・ライセンだよ〜」

『「……は？」』

聖我とアクセルは混乱していた。巨大なゴーレムに喋りかけるといきなり自己紹介を始めたのだ。

『おい。探査かけろ』

「ああ」

聖我は巨大なゴーレムもといミレディに探査を掛けようとするやと左腕からモーニングスターを射出してきた。

「チツチツチ」レデイーの秘密を技能で調べないでよ!」

「なら倒して教えてもらおう迄だ!」

「勝てるならね!」

《必殺リード! ジャアクペガス!》

《月闇必殺撃! 習得一閃!》

青いエネルギーを闇黒剣月闇に充填させて再度飛んでくるモーニングスターを弾き

飛ばす。

モーニングスターのダメージを考慮するならばスターの方がいいのだろうか、

「やっぱり無限に再生する私のゴーレムと私相手はキツイみたいだね!」

ここに来る前に倒したはずのゴーレム達がここに来てしかも全回復しているのだ。パワーが高いバスターでも集団戦はきついためカリバーで戦っている。変身を変える暇すらないというのもある。

「……アクセル!」

《Acceler!》

走るスピードを倍加させてミレディの目の前に走り込んで必冊ホルダーに闇黒剣月闇を納刀する。

《月闇居合!》

《読後一閃!》

闇のエネルギ어의斬撃をミレディに当てて装甲の一部でも破壊されている……そう思っていたのだが、

「私の装甲は世界最高硬度のアザンチウム!そんな攻撃じゃ……ヒビすら入らないよ!」

接近した聖我にモーニングスターと重力魔法をかけて壁に吹き飛ばす。

そして浮遊してミレデイの周りにあるブロックを壁にめり込んでいる聖我に投射する。

「そのままぺちゃんこになっちゃえ！」

「がアア！」

そのまま聖我は壁からずり落ちて迫り来るブロックにぺちゃんこにされてしまい、変身解除を余儀なくされる。

「……………ないだの子達が規格外なだけでこの子はそんなに強くない……………いや一人で来たり、神代魔法も持っていないみたいだから仕方ないのかな？」

ミレデイは倒れ伏す聖我から目を離してゴーレムの修復と聖我が壊した大迷宮を直し始めていた。倒れ伏した聖我を死んだと思つて。

「……………あら、ライセン大迷宮を攻略していたのかしら。……………更新するの忘れてたわ……………」
聖我を転生させた女性は聖我の様子を見て自分の仕事をすっかり忘れていたことを思い出した。

「何やってんですか姉さん……………」

「あらの可愛い可愛い弟じゃないの！ちょっと待っててね。今から私の担当の子のアイテムを解放してから行くから！」

女性の弟と遊ぶために女性は3つの光る玉を聖我に向かって投げて女性は自分の弟のところに向かって行った。女性はブラコンらしい……

「……イタタ……」

『相棒！解放されてるぞ！これを使えば勝てる！』

アクセルは気絶していた聖我を無理やり起こして解放されたジャオウドラゴンを聖我に許可を取らず取り出す。

「ジャ……オウ」

『それにドラゴニックナイトとキングライオン大戦記もだ！』

「ん？まだ戦えるの？」

色々と修復していたミレディは聖我が起きたことに気づいて容赦なくモーニングスターを発射する。モーニングスターは倒れ伏す聖我にその勢いが殺されることも無く直撃した。

……したはずだった。聖我の目の前にキングエクスカリバーが現れてモーニングスターを真つ二つにして聖我は守ったのだ。

「え？」

ミレディは突然現れたキングエクスカリバーに驚く。そしてキングエクスカリバーは無限収納BOXに青い細い光線を流し込んでドラゴニックナイトを取り出させる。

そしてドラゴニックナイトとジャオウドラゴンを空中に浮かしてキングエクスカリバーはキングオブアーサーワンダーライドブックに代わってエネルギーをドラゴニックナイトとジャオウドラゴンに流し込む。

『……どう言うことだ？このような現象は見たことがない！』

アクセルは聖我の目の前で起こっている現象に驚く。そしてキングオブアーサーワンダーライドブックがドラゴニックナイトとジャオウドラゴンにエネルギーを流し切るとキングオブアーサーワンダーライドブックは無限収納BOXに戻って行った。すつかり変わってしまったドラゴニックナイトとジャオウドラゴンを置いて。

「……使ってみるか」

『やるのか!?危険かもしれないぞ!』

「俺はエクスカリバーを信じる!」

ドラゴニックナイトを仕舞って黒い仮面と鎧を纏った騎士と黒い龍が描かれている

ジャオウドラゴンを起動する。

ラウンス・ジャオウドラゴン・アーサー

《円卓の黒龍王！》

そして聖我は円卓の黒龍王のページを開く。

《闇の龍を従えた騎士王が、闇の力を込めた聖剣を引き抜き数多の敵を蹂躪する…》

ジャガンリーダーに円卓の黒龍王を読み込ませる。

《ジャオウリード！》

邪剣カリバードライバーに円卓の黒龍王を装填してエングレイブヒルトでライドインテグレーターを押し込んで変身する。

《闇黒剣月闇！》

《When the Knight of Darkness
fights, Excellence
reveals darkness that cannot
be joked.》

《No matter how strong it is,
the power of the dark dragon
will knock down everyone
anything.》

ラウンス・ジャオウドラゴン・アーサー

《円卓の黒龍王！》

《誰も生き残れない……》

仮面ライダーカリーバー・ジャオウドラゴンの金色の部分黒くして目を赤から血のよ
うな赤に変えた姿になって闇黒剣月闇を構えてミレディに向かってこう叫ぶ。

「闇の龍と騎士王の力、とくと見よ！」

「上等だよ！重力魔法の真髄を受けてみなよ！」

ミレディが破壊されたモーニングスターの代わりにハンマーを使って聖我に殴り掛
かると聖我を守るように7つの見たことがないワンダーライドブックがハンマーの攻
撃を吹き飛ばす。

聖我は無意識下で見たことがないワンダーライドブックのひとつを掴んで起動する。

《ジャアクセイバー！》

そしてジャガンリーダーにジャアクセイバーをリードさせる。

《サモンリード！ジャアクセイバー！》

ジャアクセイバーワンダーライドブックと闇黒剣月闇から全体的に黒くなったセイ
バーが召喚されて騎士甲冑達に攻撃し始める。

《ジャアクブレイズ！》《ジャアクエスパード！》《ジャアクバスター！》《ジャアクケン
ザン！》《ジャアクスラッシュ！》《ジャアクサイコウ！》

残りの6つのワンダーライドブックを起動してジャガンリーダーにリードさせる。

《サモンリード！ジャアクブレイズ！ジャアクエスパード！ジャアクバスター！ジャア

クケンザン！ジャアクスラツシユ！ジャアクサイコウ！》

今聖我が変身できる仮面ライダーの黒バージョンが現れて騎士甲冑に攻撃を仕掛け始める。

「さあ邪魔は居なくなつたな？」

「まさかこんな方法で攻略するなんて……でもアザンチウムと重力魔法を攻略するのは不可能だよ！」

「……そんなもん破壊するだけだ！」

「え？」

聖我は光武器精製を発動して重力不変という効果を与えた剣を作り出して地面に突き刺す。

「これで重力魔法は攻略完了だ。さあジャアクライダー達が抑えている間に決める！」

円卓の黒龍王を閉じてエンブレイブヒルトでライドインテグレーターを押し込んで再度円卓の黒龍王を開く。

《ジャオウ必殺読破！》

「卑王鉄槌……」

闇黒剣月闇を頭の上に両手で掲げて闇のエネルギーを収束し始める。オリジナルは自分の魔力しか使えなかったがカリバー式のこの技は違う。ミレディや騎士甲冑達の

魔力すら集めて収束し始める。

「私の魔力まで!？」

「極光は反転する……光を呑め!」

闇黒剣月闇に集まった魔力が全て収束し終わり、闇のエネルギー刃が闇黒剣月闇を覆う。

《ジャオウ必殺撃!》

「約束された勝利の剣!!!」

聖我はそう叫ぶと思うままにミレデイに向かつて放つ。その黒いエネルギーはミレデイゴーレムを飲み込んで無騎士甲冑や壁をも焼き尽くす。

《You are die.》

その言葉が響いた時にはジャアクライダーと聖我しかライセン大迷宮には残っていないなかつた。

世界の真実

「……見事に塵すら残ってないな……」

『やりすぎだぞ聖我。まあなんだ、強いな……その姿』

「……キングオブアーサーとジャオウドラゴンの合体ワンダーライドブックか……しかしエクスカリバー（F a t e）が使えるとは……」

聖我は今感動している。オルタの宝具とはいえ、自分はセイバーの宝具であるエクスカリバー（モルガン）を撃つたのだ。キングオブアーサーの力とジャオウドラゴンが合わさったおかげでだ。

『オリジナルよりも威力下だけどなく今の威力じゃ本家と撃ち合いしたら確実に撃ち負ける……』

「うっさいわ……わかってるよ……」

まあアクセルの言った通り、この世界では通用するだろうが、F a t e世界のサーヴァント達にはそんなにダメージは入らないだろう。オリジナルよりも威力が格段に下なのだから。

『そんなことより壁が光ってやがるぞ？』

「ああ行くさ」

アクセルが壁の一角が光っていることに気づいた。上方の壁にあるので浮遊ブロックを足場に跳んでいこうと、ブロックの一つに跳び乗った。その途端、足場の浮遊ブロックがスィーと動き出し光る壁まで聖我を運んでいく。

「勝手に動いてくれるのか……」

『……』

10秒もかからず光る壁の前まで進むと、その手前5メートル程の場所でピタリと動きを止めた。すると光る壁はまるで見計らったようなタイミングで発光を薄れさせていき、スつと音も立てずに発光部分の壁だけが手前に抜き取られた。奥には光沢のある白い壁で出来た通路が続いている。

そしてそのまま通路を浮遊ブロックが進むとそこに居たのは……

「やつほー、さつきぶり！ ミレディちゃんだよ！」

ちっこいミレディ・ゴレムがいた。

『なんか想定内だな……ん？相棒？』

「……いや全然もう一回エクスカリバー放ってやろうなんて考えてないよ？」

『やめろ！それは全然シヤレにならない！』

「へ？いやあの黒いビームは勘弁して！謝るから！」

アクセルはエクスカリバーを再度放とうと円卓の黒龍王を構える聖我を必死で止めてミレディはさすがにエクスカリバーの威力に恐れを為したのか必死で小さい身体で土下座して止めようとする。

この騒動は聖我が落ち着くまで続いた……

「さて、重力魔法はどこにある?」

「……もう撃たないよね……」

「撃たないよ。さあ重力魔法を私に渡してくれ」

ミレディは聖我がエクスカリバーを放つかもしないとガタガタ震えている。

「その前に君はなぜ神代魔法を求めたのか聞いてもいいかい?」

「私の主を守るため、私の宿敵を倒すためだ」

「……そう……その宿敵って誰?」

聖我の目的を聞くとミレディは聖我の言う聖我の宿敵のことが気になって聞く。

「魔族の将、フリード。銀髪の天使が神代魔法を与えたと云つ「銀髪の天使!?!……じゃあ神の使徒がもう出てきてるの……」どう言うことだ?」

「ああ、君は知らないのか……じゃあまずはこの世界の真実に着いて話してあげるよ」

そうしてミレデイは聖我に対してこの世界について話し始めた。
長い話のため要約すると、

神代の少しあと、世界は戦争ばかりしていた。人間、魔人、巫人はそれぞれが祭り上げていて神のため、その他にも土地のため、金のため、差別意識に反逆するためと様々な理由で戦争をしていた。

その争いに終止符を打とうとしたのがミレデイ達解放者であった。ミレデイ達は神代から続く神々の直系の子孫であった。そして解放者のリーダーであるミレデイは神の真の意図……人間を駒として争わせるといふ神のゲームのようなものに気づいた。

そして神々のいる神域に特に強力だった7人を中心に戦いを挑んだがその戦いの前に神々の扇動によつて解放者を敵と認識した人間達にやられてしまい、残った7人は迷宮を各地に作り出して神代魔法を伝えるためにその迷宮で神を倒すものを待っていた……。

「とまあこんな感じ……」

「そうか……でも私は神と戦うつもりはないぞ?」

「知ってるよ。まあそのうち戦うことになるさ。さて重力魔法を与えてあげる。そこに座って〜」

聖我に神代魔法とその使い方が流れ込んでいく。すると、

「ガバァー！」

吐血しだした。

「ど、どうしたの?!」

ミレディは驚くが聖我の吐血は止まらず、血溜まりが出来始める。

『……やはりジャオウドラゴンのデメリットか』

「あ、アク、アクセル……」

「どういうこと?!」

『ジャオウドラゴンの中に流れ込んだアーサーの力は邪の力を増幅するものだったのだから。オルタのイメージがよく合っている』

「アク、セル……何故今になって……」

『重力魔法の情報がトリガーになってジャオウドラゴンの使用に伴って掛けられた邪の力のダメージだろう。これからはジャオウドラゴンは禁止だ』

「聖剣使いくん……髪が……」

アクセルが聖我がなぜ吐血したか説いているとミレディが震えた声で聖我に異変を伝える。

「み、ミレディ?」

「髪が金から黒髪になって……それに目も白くなってよ……」

『代償か……肉体に損失がないのが救いだな』

聖我はその事実に驚くが驚く前に失血で死なないように光武器精製で輸血が出来る光剣を作り出して自分の腹に刺す。

「……光武器精製？……いいことを教えてあげる。ジャオウドラゴンだっけ？それと同等の力を誇れるようになるかもしれないよ？」

「な、なんだ？」

「私の知り合いに其れを使ってた人がいたから。光剣を重ねて其れを一本の剣にするとかって」

「そうか……ありがとう……そういえば私をぶっ飛ばした時に言ってたあの子達って誰？」

「あーそれはね……」

聖我はミレディからミレディの言っていたあの子達の情報である白髪赤目の眼帯の男、金髪赤目の吸血鬼の女、兎の女のことを聞いて輸血が終わってから再度ミレディに札を言つてそのままブックゲートで自分の部屋に戻って行った。

その後自分のベッドの上で横たわって寝てしまい、リリアーナが様子を見に行ったら聖我の異変に驚いてその異変に着いて説明して無茶をしたことを怒られて泣かれてしまったのはまた別の話……

聖劍修復

「……それ本当か？」

「ええ本当です。……聖劍が自己修復を行っているのは真面目な話です……」

聖我とリリアーナは夜でもないのに会議室で二人で話していた。話の内容は光輝の使っていた、フリードの極光で破壊された聖劍の話。

どうやら聖劍は独りでに勝手に動き魔力を使って自ら修復を行っているようだ。それも工房で直していたウォルペンが寝ている間に自己修復を行い始めていたようで、ウォルペンが気づいた頃には20パーセントの修復が終わっていたらしい。

不審に思ったウォルペンは聖劍を放置して遠距離から聖劍の修復の瞬間を見て大層驚き、ウォルペンは王へ相談し、王からリリアーナ、リリアーナから同じ聖劍を使う聖我に話が回ってきたということだ。

「聖劍はヘリーナに持ってこさせています。ヘリーナ」

「はい。こちらです。」

ヘリーナが聖劍の欠片と修復が40パーセントほど終わっている聖劍を箱に梱包したものを机に置いた。

「……まじか……」

「何とかありませんか？」

「……この聖剣に意思があると考えるべきだろうな……私も似たような事例を知っている」

聖我が思い浮かべるのはキングエクスカリバーが聖我を守ったこととキングオブアーサーがドラゴニックナイトとジャオウドラゴンに力を分け与えたことだ。キングオブアーサーにも意思が宿っていたと考えられる。

それはこの聖剣も同じなのだろう。

「……とりあえずやってみるか……光武器精製」

聖我は光の杖を作り出す。効果は選択対話、選択した相手と意識を持つていれば対話可能という能力を持った杖だ。

だが音沙汰がない。

「……効果が薄いか……ならミレディに言われた方法でやって見るか……」

「光武器精製、効果能力増幅、光武器精製、効果武装合成」

先程の杖と同じ形の杖を2本作り出して先程の杖と合わせる。すると三本の杖は1本となつて再度選択する。すると、

『私を呼んだのは貴方ですか？』

「……あんたが聖劍の意思か？」

『はい。私の名前はウーア・アルト。光輝様に仕える、または使われる聖劍に宿る意識です』

「自己修復もあんたの意思か？」

『はい』

聖我はウーア・アルト……ウーアの自己修復は光輝のためという言葉に驚いた。聖劍が意識を埋め込まれているなんて話は聞いたことがないからだ。それに光輝のために直すとはどれだけしたわれているのだろうと思つてもいた。

「何故自己修復をしていた？」

『理由は2つ。1つは光輝様のために。もう1つは貴方の助力を得るためです』

「私の助力？」

『貴方の持つ技能である光武器精製……其れを使えば私はさらなる力を得て光輝様を助けることができますのです』

その言葉を聞いて聖我はイライラしていた。光輝に散々イライラされてついこないだまで怒りを抑えていたのだ。それに変な言いがかりをつけてくる光輝の戦力を回復させたくない。

「……そのメリットは？ 私はタダ働きなど絶対にしないぞ。せめて対価くらい用意して

いるんだろうな？」

『……………対価ですか……………』

「私が勇者を嫌っているのは知っているだろうか？そもそもメリットが無ければ直す必要すらない」

『……………聖剣の欠片の余りを渡しませよう。余ればですが……………』

「……………余らなかつたらお前の意識を消して別の剣に変えて私の剣として使わせてもらうからな」

『……………わ、わかりました……………』

ウーアはその脅しに驚き、なんとしてでも欠片を余らせなければと思ってしまった。流石に意識を消されたら堪らないからだ。

「で？どうすればいいんだ？」

場所は変わって聖我の部屋。そこにはリリアーナと聖我、そして聖剣の残骸とその中にあるウーアがいる。会議室は他の人間が使うため聖我の部屋で直すことになったのだ。

『貴方の光武器精製は私の時代にも扱う人がいました。貴方がさつき私と対話しようと

した時のように融合、強化、増幅、能力強化、自己修復、それと追加で光刃発射、砲撃、重量操作を追加してください」

「……いいだろう。維持は自分で『貴方がやってください。私に魔力はありませんし、光輝様にそんな大量の魔力はありません』……わかった」

「光武器精製、光剣精製、数は十二本。能力はそれぞれ武装合成、強化、増幅、能力強化、自己修復、光刃発射、砲撃、重量操作、意識支配、ビット生成、ビット操作、重力操作」
聖我はそう宣言すると光剣が十二本が出現して光剣を全て合成してウーアの入った欠片を入れようとする。

『な、何をしようとしているんですか!? やめてください! 私の意識を支配しようとしな
いでください「黙れ」え?』

「こちらは仕方なく光剣を作り出してお前を直している。だがお前はやるべき維持でさ
えこちらに投げかけてきている。……勇者のためと言っているが勇者のために聖剣を
直すほど私はお人好しではない」

『そんな!? リリアーナさん! 何とか言ってやって下さい! 貴方の部下でしょう!』

ウーアは聖我の言葉を聞いて急いでリリアーナに聖我を説得するように頼む。

「あ、今聖我オフなんで聖我に口を出すのは王国側として無理なんですよ……まあ説
得するつもりなんてサラサラありませんよ」

『何故ですか！光輝様の力が上がれば戦力が増強されるんですよ！その聖剣使いなんていらなくなるくらい光輝様がかつや「黙りなさい」……え？』

「聖我のお陰で今回の戦争に勝てました。勇者は邪魔をしただけです。お父様には今ヘリーナに連絡してもらって聖剣の所持権利を勇者から聖我に移動させる旨を伝えました」

『な!?!』

「貴方が勇者を思う気持ちは分かりますが、この国に勇者は必要ありません。『そんなことないです！』……勇者は甘すぎる。戦争で魔族を殺すのを躊躇した、此度の戦争の勝利の最大の功労者である聖我に対して決闘など……昔の私なら笑っていたかもしれませんが今の私は違います。ストレートに言うなら、勇者はこの国ではお荷物です」

『そんな……』

リリアーナはそう答えると聖我にウーアを光剣の中に流し込むように伝えて聖我はその旨を了承して聖剣ウーア・アルトを光剣の中に流し込み始めた。

『やめてください！やめてやめてやめてやめて……ぎゃあああ！』

およそ一時間後、光剣の中にウーア・アルトを流し込み終わり、聖剣ウーア・アルトは聖我の命名した聖光剣クラウ・ソラスとなった。

クラウ・ソラスはアイルランド語で光の剣、または輝く剣と呼ばれ、伝承とは違うが

名前の通り光り輝く聖劍として変身しない時に聖我が使う武器となった。

クラウ・ソラスの起こす騒動

ここは王宮内の訓練場。そこで聖我と雫は練習試合と称して2人で殺し合いと言つてもいいくらい真剣に斬りあつていた。

「ビット生成！ソードビット！」

「聖我がそう叫ぶと聖我の背中に8つの細い光り輝く剣が現れる。そしてそれを聖我はクラウ・ソラスを振ることで操作する。」

「なんの！」

対して雫は聖我にこの前作つてもらった光剣から新しい技術で作られた光刀を鞘から抜刀することで聖我の操作するソードビットを弾き落としていく。

「八重樫流刀術 音刃流！」

剣が打ち合うと同時に手首の返しで剣撃を逸らし、同時に逆手に持ち替えて切り上げる。

「やるじゃないか！重力操作！」

聖我にかかる重力のみを軽くしてアクセルを併用してスピードを底上げする。そして聖我はクラウ・ソラスを剣帯にしまつてすぐに引き抜く。

「抜剣!」

「グウ!」

クラウ・ソラスの重量を操作して雫の光刀に当たる瞬間だけ通常の5倍の重さに変えて攻撃する。その攻撃の衝撃に手をしびらせてしまい光刀を手から離してしまつてその隙を逃すまいと聖我はクラウ・ソラスを雫の首元に突きつける。

「チエツク・メイトだ」

「……降参ね。やっぱり光輝の聖剣とは大違い。しかもビット兵器なんてずるいわよ! 一瞬私ガンダムと戦っているのかと思つたわ!」

「……ダンボール戦機WのアキレスD9をイメージしているんだけどなあ……」

「どっちも一緒よ!……もう一戦行くわよ!」

「了解。なら行くか!」

また聖我と雫は距離を取つて聖光剣クラウ・ソラスと雫のトータスに来てから使っている光刀・二代目を構えてお互い急接近して切りあう。

その様子をリリアーナは席に座りながら眺めていた。ちなみにその隣にはハルナとヘリーナ、園部とその取り巻きが座っていた。

「クラウ・ソラス……アイルランドの剣……ケルトの武器名だったかしら……聖我らしいっちらしいわ!」

「聖剣いっぱい持つてるのにまた増やすんだもんね〜」

「いや多すぎでしょ……それを1人で使いこなすのも……最早……」

「人を辞めている……でしようか？」

「そうそれそれ。ハルナにもそう思われていたなんて聖我もヤバいわね〜」

聖我のことについて園部達は色々と話していた。主に聖剣について。確かに聖我の聖剣は多すぎる。

「……天ノ河の聖剣をあんな高性能な聖剣に作り替えちゃうのもすごいわ。今度ナイフ作ってもらおうかしら？ 軽く電気を流すナイフとか爆発するナイフとか」

「あ、じゃあ私色んな鞭作ってもらおう！ 騎馬鞭とか〜フレイルとか〜キャットオブナイフとか〜」

「リリイ〜私の友達の発想が怖い件について〜何とかしてよ〜」

「……やっぱり聖我の剣を振る姿はカッコいいですね……」

「あ、ダメだ。完全に自分の世界に入っちゃっしやる……」

完全に諦めた宮崎だった。仕方なく聖我と雫の実戦形式の模擬戦を見ていた。

「本当に大変でしたね……ハルナ」

「本当ですよヘリーナさん。まさかリリアーナ様の部屋に勇者様が押しかけてくるとは思いませんでした。しかも夜中の聖我さんがいない時に扉を叩いてまで……」

ヘリーナとハルナが疲れているのには理由がある。原因は聖我が今振るっているクラウ・ソラスが原因だ。聖私の振るうクラウ・ソラスの所有権は無事、エリヒドとメルド、そしてイシユタルと同等の権力を持つシモンによって聖我に渡された。

勇者は宝剣を、この戦争の功労者である聖我には褒美として聖光剣クラウ・ソラスの所有権を。これが王国としての認識だ。

だがそれでは納得が行かないものがある。勇者とそのシンパ……貴族はほとんど味方しないためシンパとはクラスメイトのことを指す。聖我にトラウマを埋め込まれてはいるが、聖我が憎いたため負け戦とわかっていても光輝の味方になっている。

勇者には聖剣を持たせるべきだ。光輝は負けていない、卑劣なひっかけに騙されただけだと言ってきた。直されたのならそれは返してもらおうと。

対して王国の言い分は戦場で人殺しを躊躇するものなど勇者でもなんでもないと述べてその勇者達の意見を跳ね除けた。

それで収まって欲しかったが、勇者たちは驚くべき行動に出た。聖我とリリアーナがいつも寝る前にお茶を一緒に飲んで雑談をしているのは最初は誰も知らなかった（ヘリーナは別）が、今では王や王妃、貴族はもちろん、メイドや文官でさえも知っている。公然の秘密となっている。

そして聖我がお茶を飲み終わってそのまま部屋から出たあと少し経ってリリアーナ

が寝ようとした時に勇者とクラスメイトが直談判しにやってきたのだ。

なんでこんな夜中に来たのか、それは聖我が日中いつも護衛しているため話しかけることすら出来ず、仕方なく聖我がお茶を飲み終わって少し経ってから来たらしい。

そしてリリアーナが何故か持っているスマホで聖我を呼び出してついでにヘリーナにも連絡して来てもらい、クラスメイトと勇者を追い出したのだが、中村恵里や香織がリリアーナにいつまでも付きまとって光輝に聖剣を返すように言ってきた。

まあそれもそんなことをしていたらハイリヒ王国の財務大臣、メイド長、執事長、そしてメルドがもうお前らの世話しないで追い出すぞと脅すとそれなりを潜めた。追いつけられなかったら生活できないのだ。

実際クラスメイトの中でまともな仕事をしているのは愛子を護衛している愛ちゃん護衛隊、そしてリリアーナの命令には絶対服従、リリアーナも大好きな主従の鏡のような関係を作っている聖我だけだ。

これらを見てみるとクラスメイトはまるで親（王国）の脛を齧りまくってゲームばかりしているニート（クラスメイト）だ。働かないのだから。

そうしてリリアーナを追いかけ回してリリアーナお付の人間の胃に大穴を開けたクラウ・ソラス騒動は終わったのだ。

「もうこんなことないといいですけどね」

「本当です」

お疲れ様です。ヘリーナ、ハルナ。

兎人族のイレギュラー

「……探査で見る限りイレギュラーな実力を誇るヤツらが3人いやがるな……ミレデイの言っていたあの子達ってこいつらのことか？」

『かもしれないな。まあ今の聖我に勝てるやつはほぼ居ないだろうけどな。……まさか休暇ではなく、任務で探すことになるとは……』

ここはフューレン。ハイリヒ王国においてあらゆる業種が日夜シノギを削っている大陸一と名高い中央商業都市である。

ここで聖我とアクセルはリリアーナの命令でミレデイの言っていた実力者を探しに来ていた。事の始まりは聖我がクラウ・ソラスを作り終わり、クラウ・ソラスの騒動が終わった頃。

聖我は重力魔法を手に入れたこととその大迷宮を攻略した3人組の情報をリリアーナに渡したのだ。するとリリアーナは聖我にその実力者を見つけ出してそれらを可能ならリリアーナの部屋に連れてくるように言った。わざわざリリアーナの名前を書いた書状を渡してまで。

そう言うことで聖我はまずミレデイから聞いた情報を探査に打ち込んでどこにいる

かの大まかな情報を調べた。するとその3人組はブルックからフューレンに移動していることがわかったのだ。

重力魔法を手に入れたら次の迷宮を探すものでは無いかと思ったのだが、魔人族の戦争が行われていたことを思い出してブルックに箆っていたのだらうと断定して聖我はブックゲートでフューレンに一足先に向かって対象が来るまで観光しながら待っていたのだった。

そんな日を送っていたある日、聖我の探査に対象がフューレンに入って観光をしているという反応があった。聖我はその反応を見た瞬間歓喜した。しかも対象は二手に別れており、まずは1人になっている方を接触しようとアクセルに倍加をかけさせて1人の方に先回りするのだった。

青髪青眼な兎人族の少女は今フューレンで観光をしていた。兎人族の少女には白髪赤目眼帯の男と金髪赤目の吸血鬼という異色な仲間がいるのだが、今は別行動をしてあまり人通りがない路地に入って行っていた。

「楽しいですね〜でもハジメさんと一緒に周りたかったですう……」

「なるほど、大迷宮を攻略した3人組のうち1人はハジメっていうのか……トータスじゃ珍しい名前だな……兎人族」

「ええそうですよ、私の将来の旦那様で……あなた誰ですか？」

青髪青眼の兎人族は話しかけてくる男に普通に自然に回答しようとする途中で話しかけて来た聖我が誰なのか疑問に思つて質問する。

「これは失礼。私は神刃聖我。ハイリヒ王国のリリアーナ姫の護衛であり、君らを見つげに来た者ですよ」

「ハイリヒ王国!?まさか私を捕まえに来たんですか!？」

「いやちが「ハジメさんに助けを求めるときでしょうが、今はいませんから、ここで叩き潰して証拠隠滅ですう!」勘違いなされているのでは？」

青髪青眼の兎人族は背中から大槌のようなものを取り出す。そしてそれに魔力を流すとカシュン! カシュン! という機械音を響かせながら取っ手が伸長し、槌として振るうのに丁度いい長さになった。

「問答無用!行きますですう!」

「クラウ・ソラス!シールドビット!」

青髪青眼の兎人族はその大槌を振り上げて聖我に向かって叩きつけようとする。それを見た聖我は無限収納BOXからクラウ・ソラスを取り出して目の前に小型のシールド

ドのようなビットを作り出して攻撃を防ごうとするが、シールドビットはそのまま破壊されそのまま聖我は吹き飛ばされる。

「イタタ……なんてパワーだよ……本当に兎人族か……」

「真正正銘の兎人族ですう！さあ行きますよ〜！」

「これ以上やらせるか！重力操作・対象は私の重力！」

青髪青眼の兎人族が再度大槌に魔力を流して大槌を振り上げて聖我に向かってくるのを見て聖我は自分に負荷されている重力を無くしてアクセルに倍加を掛けさせて超スピードで青髪青眼の兎人族に接近してクラウ・ソラスの斬れない部分を青髪青眼の兎人族の腹に叩きつける。

「……痛ア……私のステータス今6000代のはずなんですけど……」

「……そういうことか！（今ということとは身体強化の類だろう。ならば〜）光武器精製！効果付与・強化阻害・結界生成・武器合成！」

三本の剣を作り出して複合を行ってそれを地面に突き刺す。すると光の膜が剣から出てきてあつという間に青髪青眼の兎人族と聖我を包み込む。

「何をしたかはわかりませんがかく……」

「あんたのステータスの類は身体強化系統の魔法を使って上がっているとみた。だから強化を阻害する結界を貼らせてもらった」

「な……私のアイデンティティーが……」

「落ち込んで地面に座り込む青髪青眼の兎人族に聖我は近づいて行くが青髪青眼の兎人族はゆつくりと後ろに下がっていく。」

「……なんで逃げるんだ？」

「だって……私にあんなことやこんなことをする気でしょう！この変態！」

「……いやしないけど……情報を教えて貰って王宮に来てくれたらそれで終わりなんだからだな……」

「まさか王宮で私に集団で!?変態ですう！助けてください！ユエさぁーん！ハジメさぁーん！」

「しないのに……ん？」

『相棒、上から来るぞ！気をつけろ！』

騒ぐ兎人族を説得しようとまた近付こうとすると上から雷魔法が飛んできた。これはまずいと聖我は後ろに下がる。

「……なるほど、ミレディの言っていた実力者ってのはお前らか」

「ウチのシアに手を出すなんて許さない……」

「俺の仲間に手を出したんだ。覚悟はできてるよな……」

あの雷魔法を避けた聖我の前に現れたのは金髪赤目の美少女と白髪赤目で眼帯をし

ている義腕の青年だった。

話せば意外とわかる

「ウチのシアに手を出すなんて許さない……」

「俺の仲間に手を出したんだ。覚悟はできてるよな……」

2人の実力者が聖我の目の前で臨戦態勢に入っている。1人は聖我に向かって二丁の拳銃を向けており、1人は雷の龍を作り出して今にも目の前の聖我に向かって放とうとしている。

「いやホントにごか「問答無用……」こいつら全員話聞かねえ！やるしかねえか！音銃劍錫音！」

聖我は音銃劍錫音を取り出してヘンゼルナッツとグレーテルを起動する。

《ヘンゼルナッツとグレーテル！》

ヘンゼルナッツとグレーテルをスズネシエルフに装填する。

「変身」

スズネトリガーを引いて装填されたヘンゼルナッツとグレーテルを展開して変身する。

《銃劍撃弾！》

《銃でGO！ GO！ 否！ 剣で行くぞ！》

《音銃剣錫音！》

《錫音楽章！》

《甘い魅惑の銃剣が、おかしなリズムでビートを切り刻む！》

「……強いオーラを感じる……ハジメ、本気で行こう……」

「ああ！分かつてる！」

ハジメは黒と赤の拳銃から雷を滾らせて銃弾を放つ。それを聖我は左首元に備えられたドロップノブと呼ばれる赤・青・黄のノブを操作して銃弾を受ける。

「やったか！」

ハジメはスラッシュユとなった聖我を見て勝ったと思った。怒りに任せて雷を滾らせすぎたとは思ったがこれを喰らって無事なわけがないと思って勝ちを確信する。

だが聖我には殆どダメージは通っていないなかった。それを見てハジメとユエは驚く。

「（危なかったな……ファウンテンボレロをドロップノブを操作して固くしておいて良かったよ……）……君たち話を聞いてくれないか？ 誤解なんだ」

「は？ 聞くわけ「待って……」ユエ？」

ハジメはまたも拳銃に雷を滾らせて銃弾を放とうとするがそれを金髪赤目のユエが制止する。

「シア、何があった？」

ユエはシアに話しかけて聖我に何をされたか聞いていて、ハジメは拳銃を聖我に向けて牽制している。

「私は話しかけられて、ハイリヒ王国のリリアーナ姫っていう人の護衛らしく、君らを見つげに来た者って言うて来ました」

「……この人悪くない」

「? いやいやシアが怪我しているだろ? アッチがどう見ても悪モンだろ?」

「この剣を見ればわかるし、貼ってあった結界は強化を阻害する結界……この人はシアを殺そうと思えば殺せだし、犯そうと思えば犯せてた……多分シアが誤解して攻撃したんだと思う」

「……シア、そのソイツに何された? それか何した?」

ハジメはシアに聖我に何をされたか何をしたか問い質す。すると、

「えつと……ドリユツケンを振り上げてその人に攻撃して、その人が光の盾みたいなものを出して攻撃を防いで……それと「悪かった。本当に悪かった。誤解して申し訳ない」ですう!!」

ハジメはシアの話を途中まで聞いて聖我に向かって謝る。どうやらこちらが悪いと判断したようだ。スラツシユとなっていた聖我は変身を解除する。

「……いやわかってくれればそれでいいよ……それで話を聞きたいんだけどいいかな？ミレディから聞いた限り大迷宮を攻略できるって聞いたからそれを確認しようかと思つてわざわざリリアーナ姫に言つて任務扱いで君らに会いに来たんだよ」

「あのミニゴーレム野郎……俺らの情報バラシやがったな……話を聞くよ。大迷宮攻略者なら俺も話がしたい」

「あはは……じゃあ自己紹介からしようか。私の名前は神刃聖我。リリアーナ姫の護衛だ」

「へえ、神刃聖我……神刃聖我……カミヤイバ……神刃聖我……なんか引つかかるな……」

ハジメが顎に手を当てながら聖我の名前を連呼するのをユエが不思議そうに見ているとシアが聖我の目の前に出てくる。

「私はシアですう！さつきはごめんなさい」

「構いませんよ。無意味に決闘をふっかけられることもありすから、あなたがしたことなんて些細なものです」

「あ、私はユエ。そのシアの師匠でハジメの正妻」

「ユエさん！私が正さ痛っ！」

「面白い人達だね……君は？」

ユエがシアが正妻と言いかけるとシアの頭に重力魔法を軽くかけておしおきしていた。

「俺は南雲ハジメだ。よろしくな」

「南雲？なあお前日本生まれか？」

「なんでお前がそんなことを！」

聖我が日本出身か問うとハジメが声を荒げる。

「神刃聖我、私は学校に転校したすぐあこのトータスに召喚された」

「！」

「そして私はトータスでオルクス大迷宮に向かい、オルクス大迷宮で南雲ハジメという少年が落ちるところを助けようとしたがあと1歩のところまで助けられなかった……南雲ハジメは死んだと思われるが何故か生きている。……南雲ハジメ、君は何者だ？私の探査はさつきから私が覚えている南雲ハジメと同じだと伝えてきている……私と同じ存在かな？それともハイリヒ王国の敵かな？」

「……違う」

「そうかい、ならいいさ。さあ、話そうか？南雲ハジメ、それにそこのお嬢さん方もね？」

聖我はハジメにこやかに話しかけて手を伸ばし、その手をハジメは掴んだ。

「……でか？」

「……いや？個室の料理店に向かおうか」

聖我はハジメ達を連れて歩き始めフューレンの個室がある料理店を探索で検索したのだった。

少し歩いてから聖我とハジメ達は聖我が検索した機密情報を渡したりすることもあるといふ高級料理店に入って行つた。(勿論個室)

「好きなものを頼んでくれて構わない。ここは王国や帝国の貴族や大臣がよく使う飯屋でな、個室も大量にある。……まあ一応やつとくか」

「？」

聖我の言葉にハジメが首を傾げる。だがハジメのその様子を無視して聖我は光武器精製を使って防音・結界展開・偽装を付与された釘を作り出してそれを壁に打ち付ける。

「やつぱりそれは光武器精製……」

「そうだよ？吸血鬼のお嬢さん」

「それを使いこなせばどんな敵でも倒すことができる技能持ち……敵対しないで良かった……」

ユエは安堵した表情で深いため息をつく。シアをジト目で見ながら。
「ゆ、ユエさん……」

シアはその様子にたじろいでしまい、ハジメが笑う。

「なあ神刃、なんでシアがこんな高級料理店に入れたんだ？ シアは兎人族だし、なんか文句言われると思うんだが……」

「私の技能、隠蔽を使ってウサミミを見えないようにさせてもらった。まあ服装がやばかったが、そこは大丈夫だ」

「そうか……」

ハジメはその言葉を聞いてユエと同じく安堵する。聖我はそれを見てコイツも苦労人なんだと理解した。

ハジメ達が食べ終わった頃、聖我はコーヒーを少し飲んでからハジメ達に喋りかけ始めた。
「さて、本題に入らせてくれるかな？」

「ああ構わない。それで何の用だ？」

「君らに聞きたいことは王国に敵対するか否か、それと王宮に戻ってこないかということとリリアーナ……リリイに会ってくれるか……それだけだな。まあ王宮に戻ってくる必要はないし、リリイにも最悪会わなくてもいいさ」

その聖我の質問に対してハジメは口を開く。

「王国がこちらに攻撃をしかけてくるなら王国に敵対するし、王国がこちらに何もしないならこつちは何もしない」

「そうか、じゃあまあとりあえず聞いておくけど王宮に来るかい？それとリリイの元に來てくれるかな？」

「王宮に戻るつもりはない。それにリリアーナという少女の元に行くつもりもない」

「そうかい。まあこうなることもわかってたさ。……とりあえずこれだけ持っておいてくれ」

「んっ」

聖我はその答えを聞いて無限収納BOXからスマホを3機取り出してハジメ達に渡す。

「これはガトライクフォン。聖剣を持つ私でしか真の力は発揮できないけど真の力は使えなくてもスマホとして使える、私の連絡先を入れて置いた」

「……そうか、ありがたく受け取っとくよ」

そう言つてハジメとユエ、シアは個室から出てそのまま観光しに戻つて行つた。
「……さて、もどるか」

聖我はお金を払つてブックゲートでそのままリリアーナの部屋に向かつてブックゲートを開いて帰つて行つた。

「……そうですか、実力者の正体は南雲ハジメ……まあいいでしょう。聖我、ご苦労様でした」

「……リリイ、連れてこなくてよかつたのか？」

「構わないですよ、あなたがいれば取り敢えず安全ですからね」

「そうか……」

聖我はリリアーナに報告してからそのまま紅茶を飲んでそのまま帰つて行つた。

オークション

「フューレンの犯罪組織が潰されてない？それに犯罪組織の活動が戦争が終わってからまた活発になってるって……」

「はい。この前エリセンの街から情報が回ってきまして、海人族の母親がその娘を誘拐されて脚を攻撃されそのまま負傷して誘拐されたことが私の耳に届いて来ました」

「まさかそんなことが起きてるとは……戦争で緊迫中なのに」
「全くです」

犯罪組織・フリートホーフ。その組織はフューレンの何処かをアジトとして活動しており、主に誘拐してきた亜人や美少女、美女をオークションにかけて貴族や権力者に売っている組織だ。

他にも2つほどフリートホーフと肩を並べて裏世界を荒らしている犯罪組織がいるが、それら3つを潰すのは至難の業らしい。

「で？私はどうすればいいの？」

「えっと、王直属の暗部がフリートホーフで幹部をやっていた犯罪者を捕らえたので拷問して見たらフリートホーフの拠点や関連する組織の情報を全て吐いてくれました。

罨は仕掛けられているかもしれませんが、聖我にフリートホーフを潰してきて欲しいんです」

「……了解。任せてくれ」

「私から頼みましたけど本当に宜しいんですか？罨が仕掛けられているところに特攻して来いって言っているようなものですよ？」

「……リリーの頼みなら私は絶対にこなしてみせる。それに破壊してしまっても構わないのだろう？」

「……はいー！」

聖我はリリアーナのフリートホーフを壊滅して欲しいというお願いを快く了承し、翌日からすぐに活動することを決めたのだった。

聖我は翌日の早朝からフューレンのギルドに来ていた。そこにはドット秘書長と名乗るメガネをかけた細身の男性が待っていた。

「お待ちしておりました。リリアーナ姫の護衛殿、そして此度の戦争集結の最大の功労者殿」

「お世辞はいいです。フリートホーフをさっさと潰しましょう。拠点の地図はあります

か?」

「はい。それとギルド支部長からの依頼でフリートホーフのメンバーは殺さないようにして欲しいとの事です」

その以来に聖我はドット秘書長を睨みつける。その圧にドット秘書長は竦み上がる。「どういうことでしょうか?」

「ふ、フリートホーフのメンバーは犯罪者ではありませんが、人としての権限はあります。なので殺さないでいただけると……」

「いいでしょう。峰打ちで何とかしましょう」

「ありがとうございます」

聖我が理由を聞いて了承したのを見てドット秘書長は胸を撫で下ろす。ドットと比べて若いとはいえ目の前にいるのは己よりずっと力が強い存在なのだ。

「では参りましょうか」

聖我はドットが歩き出すのを見て一緒に歩いて行った。

「や、やめてくれ!?!なんだってこんなところに英雄様が来ているん……」

「おいおいどんな冗談だ!本部に早く連絡しろ!英雄様がこっちにきやがったてな!早

くー」

「なんて強さだ……魔人族を1人で7割削ったってのはマジだったのかよ！ぎゃあああ
あー！」

聖我は変身せずに光武器精製で作り出した釘に気絶の能力を絡ませたものを大量に作り出したものを大量に投射していた。それらは全てフリートホーフのメンバーに当たって行きオークションの商品として売られている人達には当たらない。

そして聖我は丁寧に不能の能力を込めた剣を大量に投射される釘の中に織り交ぜて腕や目、足などに刺してゆく。犯罪を抑制させるために動かなくするようにしているのだ。共にフリートホーフを潰そうと聖我に同行していた冒険者達（金から黒のランク）はその大量の武器が雨のように降る光景を呆然と見ていた。

「……これが本当の実力者か……金だとか言っていた自分が恥ずかしいな……」

聖我に対して感嘆の声を漏らしているのは閃刃と呼ばれて活躍している金ランクの冒険者であるアベルと呼ばれる男だ。最初は聖我に対して苦言を漏らしていたが自分が斬ろうとする前に聖我の大量投射にフリートホーフのメンバーが倒されてしまった活躍することが出来ずに傍観に徹していたのだが、何個もアジトを潰しているうちに聖我に尊敬の念を向けていた。それに加えて自分の實力不足にも気づいていた。

ちなみにこのアベルと呼ばれている男は別の世界線では漢女に改造されてしまっ

いたのだが、聖我によつてそれは回避されたと思われる。

「黒白の帝王……」

冒険者達のうちの誰かが聖我のことを黒白の帝王と称する。その異名はその後冒険者達の中で語り継がれることになるのだが聖我はそのことを知らない。

「さて次だ！ 行きますよ！」

冒険者と自分が精製した軽装歩兵にフリートホーフのメンバーと誘拐されオークションにかけられそうになっていた少女達を運ばせて違うアジトを潰しに行こうとする聖我を見て疲れている冒険者も気合いを入れて聖我に着いていくのだった。

「まさかここを除く全ての拠点が潰されるたアな！ だがここで負けるわけにはいかん！ 絶対に勝つぞ！」

「「オオー！」」

「勢いよく円陣組んでるところ悪いけどもう半壊してるぜ？」

「大人しくお縄に着いてもらおうか！」

最期のフリートホーフの拠点は本部のようで頑丈な造りになっていた。なっていたのだが、聖我が崩壊・爆発・連鎖爆発の能力を込めた剣を大量に作り出してフリートホー

フの本部の天井や壁を破壊して侵入したためそんな造りも無駄になってしまった。

「な、何故こんなところに英雄が来ている！」

「聖我、こいつがフリートホーフのリーダーだ」

「ありがとうアベル。残りを捕らえてきてくれ」

「わかった！」

アベルとその他の自分の周りにいたこの掃討戦で信頼を築き上げた冒険者を全てフリートホーフのメンバーを捕らえるのを出すと、聖我は光剣を5本作り出してフリートホーフのリーダーに向けて投射しようとする。

「ま、待て！」

「何だ？命乞いか？」

「俺を殺せば貴族が黙ってないぞ！お前の雇い主も無事じゃ済まな……私の雇い主はこの国の王女リリアーナ姫だ。それに貴族は私に手が出せないようになってる」マジかよ……」

聖我はそのまま光剣をフリートホーフのリーダーの足と手と片目に向けて投射してそのままそれらを使いものにならなくしたのだった。

「まさかほぼ1人で全てフリートホーフのアジトを壊滅させるとは……リリアーナ姫の決断はやはり間違えていなかったようだね」

「さて、これでフリートホーフの件は終わりかな?」

「ああ。本当に感謝するよ、まあそれとは別に色々大変なことになりそうなんだけどね……」

聖我はギルドに戻るとドットから感謝の言葉を聞いたあとギルド長の部屋に呼ばれてイルワ・チャングという名の男にまた感謝されていた。

だがこれからのことを考えたイルワが青ざめた顔をするので聖我ははて?という顔をしていた。

「残り2つの犯罪組織が動き出そうとしているんだ……」

フリートホーフが潰れたことが瞬く間に伝えられたので残り2つの犯罪組織が動き出そうとしていることに青ざめているイルワ。それを不憫に思った聖我はある提案をする。

「犯罪の抑制なら君の名前を本当に使っているのかい?」

「構いませんよ。それにそのことはリリアーナ姫の為にもなる」

「ありがとう!感謝するよ!」

聖我はイルワという強い後ろ盾をリリアーナの他にも手に入れたのであった。

「あらあら、良くも悪くも原作を壊していつてるわね！見る側としても楽しいことこの上ないわ！」

「姉さん、本当にこの転生者は今までの転生者を軽く超えているな……僕もこんな人を転生させたいもんだよ」

「頑張りなさい！応援してるわよ！」

とある姉弟は聖我の活躍を宝玉で見て楽しんでいた。

紅き騎士王

「アクセル……なんか護衛以外の任務が多くないか？リリイとお茶会したいんですけど……」

『仕方ないだろ、魔人族が侵入している可能性があるなら行かないと不味い……それに王国は魔人族を余裕で倒せるはずの人材が動けないもしくは動かないんだからな』

王女リリアーナに聖我は魔人族が複数潜伏している可能性のある街・ノーツに来ていた。ノーツは何の変哲もない、何も無い街。そこに魔人族が居るとは思えないのだが、襲撃のせいで王国は敏感になっている為に仕方なく来ていた。

アクセルの言っていた魔人族を余裕で殺せる存在とは聖我、メルドを始めとした騎士団の精鋭メンバー、そして聖教教会の騎士であるデビット、それと働かないニート勇者こと天ノ河光輝とその仲間たちだ。

「……まあ確かに私の初任務も魔人族が乱入してきたしな……それに最近聞いたことだけど魔人族が新たな力を得たくなんて情報をイルワから聞いたしな」

『……イルワが渡した情報なら信用できるな』

「そろそろ街の長とノーツ支部のギルド長に会いに行く時間だ。行くか」

聖我はアクセルと話しながらノーツの街の長とノーツ支部のギルド長の元に飛行しながら向かうのだった。

「イルワに聞いた通りの男だな君は。さて、この街に魔族がいるのだが、確実にいる」
「その根拠は？」

今聖我はノーツのギルド長と話していた。ノーツの街の長は会議があるらしく、聖我と少し話してから出て行ってしまったのだ。

「魔族がヘンテコな鎧を付けて冒険者を襲っているという話が色々なところに流れているのだ。これには街の人間も怖がっている。……何とか出来ないかね？我々では口惜しいが倒すことが出来んのだ。この街は辺境の街だから金ランクも稀にしか来ないしな」

「任せてくれて構わないよ。本当にいるなら対処しなくては……」

聖我はクラウ・ソラスを見ながらノーツのギルド長の願いを快諾した。そして聖我がお茶を一口飲もうとしたその時。

「大変です！街の長が、会議中に魔族に襲われました！」

「……………はっ！」

聖我とノーツのギルド長は啞然とした。いまさつき魔人族の退治を聖我に依頼してそれを快諾したばかりなのだ。魔人族が見ているタイミング良く襲ったように思える。

「聖我くん！頼めるかね？」

「任せてもらおう！変身！」

聖我は勢いよく部屋から飛び出してソードライバーとセイバーのワンダーコンボに必要な3冊のライドブックを取り出してソードライバーに装填、火炎剣烈火を抜刀する。

《烈火抜刀！》

《語り継がれし神獣の名は！》

《クリムゾンドラゴン！》

《烈火三冊！》

《真紅の剣が悪を貫き、全てを燃やす！》

仮面ライダーセイバー・クリムゾンドラゴンとなり、そのままクリムゾンウィングを展開して街の長がいる会議場に飛び立つ。

「……ノーツには弱い奴しかおらんのか!? データが取れないではないか! データが取れ

なかつたらあの小生意気な女、シークに怒られてしまう……おいテメエら！こうなつたらノーツを焼き飛ばせ！」

「ハイ！」

ノーツを襲撃してきた魔族のリーダーが配下の魔族に指示を出し、魔族を街に散開させようとするが、

「させるか！」

《西遊ジャーニー！》

炎のエネルギーで構成された如意棒を作り出して魔族のリーダーに向けて威嚇射撃として投射する。だがその攻撃は避けられてしまい、魔弾の反撃を喰らってしまった。

「……イテテ……」

「貴様が報告にあつた神刃聖我か！データ収集に申し分ない！テメエら！やるぞ！」

「「「「ハイ！」」」」

魔族のリーダーと6人の配下が一斉に十字架の形をした西洋剣……ロングソードとワンダーライドブック？を取り出す。

「ワンダーライドブックだと？」

「？貴様のものではないがな！」

《ナイトオブリーダー！》

《ナイトオブブルーパース！》×6

ワンダーライドブック？を起動してロングソードに着いている音銃剣錫音のスズネシェルフのような装填スロットにワンダーライドブック？を装填してロングソードのトリガーを引く。

「変身！」

「変身！」×6

《魔剣起動！》

《鎧よ、現れよ！》

《魔剣・無銘！》

《騎士のリーダーが戦場に出る時、その配下の力はさらに増大する！》

《魔剣起動！》×6

《鎧よ、現れよ！》×6

《魔剣・無銘！》×6

《騎士の力は魔剣により増大する！》×6

「仮面ライダー……だと？」

「その通り！これこそ仮面ライダーイビル、魔剣システムを使った、対貴様用の鎧だ！」
「……量産型に私が負けるわけがないだろう！行くぞ！」

聖我は火炎剣烈火を構えて魔剣システムを使って変身したイビル達に突進する。だが、イビル達はロングソードから魔法陣を射出して魔弾を発射する。ソレも数発単位ではなく数百発単位でだ。

「……魔弾が多いな！」

「コイツには魔力操作とかいう技能が入っていてだな、より効率よく魔弾を作り出すことが出来るのだよ！」

まさにマシンガンのように魔弾を放出するため仕方なく聖我は一步下がって光武器精製で光剣を作り出して攻撃しようとする。

「おせーな！喰らいやがれ！」

イビルの一人が魔剣を構えて突進して聖我の脚を切り裂く。アーマーがあるため本当に切り裂かれた訳では無いが激痛は走る。

「喰らえよ！」

《魔剣・無銘！》

《ナイトスラッシュ！》

聖私の脚を切り裂いたイビルが魔剣のトリガーを引いて技を放とうとする。聖私はすかさず光武器精製で大盾を作り出して防御しようとするがイビルの技の方が早く、闇の斬撃が聖我を襲った。

「ガバア！……性能高くないか……」

「フリードのおかげで貴様のデータはきっちり取つてあるのだよ！ さあこのまま貴様には死んでもらう！」

残りの魔人族6人が魔剣のトリガーを引いて先程と同じ技を放とうとする。

《魔剣・無銘！》×6

《ナイトスラッシュ！》×6

闇の斬撃6連撃が聖我を襲い、聖私は変身を解除してしまった。その様子をみた魔人族は勝ち誇つて街を壊そうと行動し始めるが聖私は無限収納BOXに手を翳す。

「……………アクセル」

『分かった……デメリットは少なからずあるだろうが仕方がない……使え』

そのアクセルの言葉を聞いた聖私は無限収納BOXから銀色の巨大なワンダーライドブックを取り出してそれを起動してページを開く。

《ドラゴニックアースー！》

《円卓の騎士達と紅き龍が織り成す戦いの物語……》

聖我はその表紙に紅い龍と金色の鎧を身に纏う騎士が描かれたライドブックをソー
ドライブバーに装填して火炎剣烈火を抜刀する。

《烈火抜刀!》

《When a knight enters the battlefield
with Excalibur.》(ゴールデンアーマー!)

《The Knights of the Round Table head
for the king's support with the Brave
Dragon.》(スカーレットブースター!)

《And the knight defeats the enemy with
his friends and the Brave Dragon.》(ス
トリーオブアーマー!)

《Dragonic Arthur!》(ドラゴニックアーマー!)

《我らは勝利する!》

聖我は仮面ライダーセイバー・ドラゴニックアーマーに変身した。姿はドラゴニック
ナイトの白銀の鎧が黄金に、ドラゴニックブースターはスカーレット色になっている。

『さあ聖我! 行くぜ!』

「おう!」

聖我は火炎剣烈火とクラウ・ソラスを両手に持つてソードビットとシールドビットとピストルビットを作り出して魔族に攻撃を始める。

「……死んだのではなかつぐはア！」

「……はあーやるか、スカレットブースター！」

《スカレットブースター！》

聖我はスカレットブースターのスカレットトリガーを引くことでブースターを起動して爆炎の矢を放ちピストルビットとソードビットのオールレンジ攻撃をさらに増やす。

「近づけん！」

魔族達は魔剣を使っているが弾幕が厚すぎて全然近づけない。聖我はドラゴニックアーマーワンダーライドブックのページを押す。

《Summoned is the Knight of the Round Table!…… Bedivere!》

ドラゴニックアーマーのページから炎の竜巻が出現しその中から炎の鎧を纏った銀の義手を持っている騎士が現れる。

「我が魂食らいて奔れ、銀の流星！」

騎士は詠唱を行って走り出す。徐々にスピードが上がりそのまま魔族の一人に手

刀を叩きつけると光の極光が放たれる。

デッドエンド・アガートラム
「閃せよ、銀色の腕!!」

その極光は魔族の1人とその後ろにいた1人を優に飲み込んでそのまま塵すら残さず消し去ってしまった。その光景を見た魔族は竦み上がって後ずさるが時すでに遅い。銀の義手を持った騎士はそのまま消え去る。

もう一度聖我はドラゴニックアーサーのページを押して次の騎士を呼び出す。

《 Summoned is the Knight of the Round
Table!…… Tristan! 》

今度は竖琴を持った炎の鎧を纏った騎士が現れて弓を引こうとする。

「痛みを歌い、嘆きを奏でる」

弓を発射して騎士は技名を叫ぶ。

フェイェルノート
「痛哭の幻奏!!」

矢が魔族3人に向けて放たれ、それを避けようとするがその攻撃は避けられても追尾して魔族を射抜く。そして弓の騎士はそのまま消え去った。

「我らイビルが負けるだど! そんなわけ……」

「さあ終わりだ! 騎士王の一撃、受けたまえ!」

聖我はクラウ・ソラスをしまつて火炎剣烈火をソードライバーに納刀して抜刀して天

空に掲げる。

《烈火抜刀!》

すると火炎剣烈火は炎を纏って新しい剣に変わる。その剣は黄金の剣、正しくエクスカリバーとなる。

「行くぞ! 十三拘束解放、円卓議決開始!」

聖我の周りに13の黄金の騎士の霊のような者が現れる。

《是は、生きるための戦いである —— ケイ》

《是は、一対一の戦いである事 —— パロミデス》

《是は、精霊との戦いではない事 —— ランスロット》

《是は、邪悪との戦いである事 —— モードレット》

《是は、私欲なき戦いである事 —— ギヤラハッド》

《是は、世界を救う戦いである事 —— アーサー》

《是は、主従の為、使える国の為の戦いである事 —— 聖我》

何処からか6人の声と何故か聖我の声が響いて黄金の騎士の霊が聖剣に吸い込まれて力が滾る。そして魔力が聖剣に流れ込む。

「……終わりだ! 約束された勝利の炎剣!!!」

炎と極光が混じり合い、炎のレーザーが剣を振り下ろすと共に魔族のリーダーに放

たれてそのままイビルのアーマーごと燃やし尽くして破壊する。

「……………これにて終幕だ」

そのまま聖我は変身を解除して道の真ん中に倒れてしまったのだった。

聖我の明かされる秘密

「……聖我が倒れたんですか!?!何で?!」

ここは王宮のリリアーナに与えられた一室。いつも聖我とお茶を飲んだり、この前は聖我が知らない寝ている時にリリアーナが添い寝した部屋。そこでリリアーナはハルナからの報告に驚いていた。

「いえ、魔力の使いすぎで倒れた模様です。相手の魔人族が聖我さんの使う聖剣に酷似している剣を使って戦い、魔力消費が激しい姿で応戦せざるを得なかったらしいです」

「……それで聖我はどちらに?」

「聖我さんは連絡が来た数分前に起き上がって王宮に戻り始めた」ただいま帰りました

「……」あ、帰ってきましたね」

「聖我!」

聖我はいつも通りの黒髪と白目で帰ってきていた。リリアーナが懸念していたデメリットはなさそうだった為にリリアーナは一先ず安堵していた。

そうしてリリアーナはハルナに椅子を引かせて聖我を座らせてお茶をへリーナに出させて話を聞くことにした。

「なるほど、そのワンダーライドブックを使つたせいでこんなことになつたんですか……それに魔族もあなたと同じ仮面ライダーの力を使つて来たんですか……」

「そこが不思議なんですよね……私でも聖剣の複製はしませんし……あの人から貰つた聖剣と同じ実力は誇れるなんて……」

聖我は仮面ライダーイビルの使つていた量産型仮面ライダーの変身アイテムと言える魔剣・無銘のことを考えていた。するとリリアーナが聖我にあることを聞く。

「……聖我、貴方の言うあの人って誰なんですか？」

「?……聖剣をくれた人ですよ」

「そういうことではなくですね……質問のしかたを変えましょうか」
「?」

聖我がリリアーナに言われたことが理解出来ずに首を傾げていると、リリアーナは聖我の聖剣を手に入れた経緯、原点を聞いてきた。

「貴方は何者ですか？」

「どういふことだいリリイ？」

聖我はリリアーナのその質問をしらばつくられる。答えれば転生者ということがバレ

てしまうからだ。

「……………こういうことはあまり言いたくないんですが、貴方の聖剣は私たちの世界では作れません。まあ神代の時代ならそんなことは無いかもしれませんが、貴方の世界の言語を発声するので私たちの世界では作っていないものと仮定します」

「……………」

「それなら貴方の世界ならどうかと考えるとそれも無理があります。貴方の世界で作れるなら勇者達が使っていないと可笑しいですし、念の為雫に聞きましたけど貴方の武器を作る技術は貴方の世界にはないと断言されました」

「……………」

「それにまだ不思議なことがあります。そのネットワークです。その原理はわかりませんが、なんでも入ることから今の私たちの世界では作れないでしょう。まあ神代の時代なら作れるかもしれませんが、貴方がこの世界に来たのはエヒト神の転移によるもののみだと思えますから有り得ない。そして貴方の世界でも作れない」

「……………」

「そして最後に、貴方が言うあの人とは誰のことなのか……………それが謎なんです。でもこの世界の人間でも、貴方の世界の人間でもないですよ。摩訶不思議な武器とアイテムを作り出せる存在なんて「……………降参」え？」

「降参だ、まさかここまで追及されるとは考えていなかったよ……」

聖我はリリアーナの話に白旗を上げた。どう言い返しても反論されるのがオチだからだ。流石は幼い頃から政争に参加しているだけあって口論には強い。

「ああそうだよ、私はこの世界の人間でもなければ、雫たちの世界の人間でもない。俗に言う転生者ってやつだ」

「転生者？」

聞きなれない言葉にリリアーナは首を傾げる。聖我は少し笑いながら話を続ける。

「転生者って言うのはだな………」

「どうしました？」

「悪いけどヘリーナとハルナは出てもらえるか？」

「な、何ですか！」

聖我の出でいってくれ発言にハルナが憤慨する。聖我のことを知りたいハルナからすればそれは情報が得られないのだ。

「悪いけどリリイだけにしといてくれ、な？」

「……わかりました」

ハルナはそう言ってヘリーナと共に部屋を出ていき、聖我はリリアーナの部屋に防音結界を貼る。

「そこまでしなければいけないんですか？」

「……あまり知られたくはないからな」

「そうですか」

そして聖我は更に防音結界を3枚貼る。ちなみに結界は光武器精製で生み出した釘に能力を付与して合成して作り出している。

「さて、私には前世というものがある」

「前世？」

「簡単に言えば今私が生きている時とは違う……私が死ぬ前の世界だな。私は一回死んで生き返ったのさ」

「……そういう事ですか」

聖我はまず自分に前世があり、転生したということ話を話す。

「アクセル、説明手伝え」

「？」

聖我が足下を見て誰かに話しているところを見てリリアーナは首を傾げていると、

『……結局話すことになるのか……』

アクセルが声を出したのでリリアーナが驚く。リリアーナが驚いているのをスルーして聖我とアクセルは説明を続けることにするが。

『俺は加速龍・アクセラレーション。聖我にはアクセルと呼ばれている。これでも聖我のサポートをしている』

「アクセル……」

『俺は聖我の転生特典の1つだな。転生特典というのは死んだ人間が転生する際に付与される特典のことを言う』

「なら聖我が持っている剣は？」

「アクセルは後付けだよ、最初は聖剣だけだ」

「そうですか……」

リリアーナは納得したらしい。

「……でも今は聖我の力なんですよね？」

『その通りだ』

「……さて、私の秘密はこれで終わりだ。これを聞いて君はどうする？ここから追い出すか？それともここで気味が悪いと殺すか？」

聖我は自分の秘密を話終えるとリリアーナに自分をどうするか問いかける。その口調はいつもの口調ではなく冷徹な口調となっている。

その問いかけに対してリリアーナはこう答えた。

「どんな事情があろうとも、貴方は私の騎士なのです。だから私は貴方を殺したり、追い

出したりしません。ですから心配しないでください」

「……そうか。では私は失礼するよ……」

聖我は席を立って結界を破壊して扉の元に向かって自分の部屋に戻ろうとするとりアーナが聖我の腕を掴んだ。

「……放してくれないか？」

「心配させたお詫びとして一緒に寝てください」

その言葉に聖我は硬直した。だがすぐに意識を取り戻して反論する。

「……リリイ、君は王女。私は護衛。身分の差があるし、何より付き合ってもいない女子と一緒に寝るのは……ね？」

「安心してください！父と母は推奨してくれました！そのまま次のレベルに行ってもいいとー！」

「エリヒド陛下にルルアリア王妃は何やってんだア！」

聖我は叫んでしまった。どこの世界に同衾を推奨して尚且つ大人の階段登っていいと宣う親がいるのだろうか。

だがまあ聖我の価値を考えるなら王女を差し出してもいいのかもしれない。聖我は Fate で言うところの対軍、対城宝具、もっと成長すれば対界宝具の攻撃をバンバン放てるのだから。

「そ・れ・に！この間聖我が疲れている時に一緒に寝ていますし……」
「……え、マジ？」

『マジだぞ』

聖我は知らないが戦争終了後に一回一緒に寝ているのだ。

「……寝るか……」

「はい！」

聖我は諦めムードになり、聖我はそれから自分の部屋で寝ることはなくなり、そのままリリアーナの部屋で毎日ダブルベッドの上で寝ることになった。（一緒に寝るだけであってr18指定の行為はされていないらしい：byヘリーナ）

帝国に行く前に

聖我がリリアーナに転生者ということをバラしてから数日が経った。その間聖我は雫やメルドと鍛錬をしたり、リリアーナの護衛をしたりとほぼ変わらない毎日を過ごしていた。

だが聖我が知らないところでリリアーナを始めとするハイリヒ王国の政に携わる人間、ヘルシャー帝国の政に携わる人間は着実と魔人族に対しての軍備の拡張、聖我から報告を受けていたイビルに対しての対策、そしてハイリヒとヘルシャー両国の王子と皇女の婚約について話し合っていた。

そのことを今エリヒド王は英雄と呼ばれて差し支えない聖我、その雇い主で王女であるリリアーナ、王子のランデル、騎士団長のメルド、ハイリヒ王国を支える大臣達、ついでに一応勇者・神の使徒という立ち位置になっている光輝、香織、雫（龍太郎は未だベッドから起き上がれていない）、農業に尽力している愛子に会議室にて説明していた「さて、今まで話したことを踏まえて何か質問はあるかね？」

「はい」

「聖我殿」

聖我は真つ先に手を挙げた。

「魔族が変身していたイビルについての質問です。あれは生半可な攻撃では倒せませんがどう対策なさるつもりでしょうか？」

「そのことか……イビルについては正直まだ決まっていないのだ。帝国にこれから向かってからガハルド殿と対策会議を行うつもりだ」

聖我はその言葉を聞いて頷いた。聖我はイビルの危険性を理解しているがために聞いている。戦の天才と言ってもいいガハルドと会議するなら問題はないだろう。

「こちらよろしいでしょうか」

「メルドか」

「いつ頃出立なさるので？それに移動方法や移動する人数も気になります。護衛も必要ですから」

騎士団長として護衛に使う騎士や出る日時は重要のためメルドはエリヒドにそれを尋ねる。

「明日出立する」

「!?準備に時間がかかると思うのですが……」

「それに関しては問題ないですよメルド騎士団長」

「どう言うことですか姫様？」

リリアーナの言葉にメルドは首を傾げる。たまに、というか戦争の時見ているはずなのに忘れてしまうようである。

「私が帝国までゲートを繋げるので大丈夫ですよ、護衛も必要最低限で大丈夫です」

その言葉を聞いてメルドは思い出したのかそのまま席に戻って他の質問は無く、明日出ることをエリヒドが正式に伝えて大臣やメルド、光輝達も会議室を後にした。……終始聖我以外の地球組は黙っていたが。

会議室の中にはエリヒド、ランデル、リリアーナ、そしてリリアーナが出なかつたために護衛として残っていた聖我が残っていた。

「さてここからは王族としての問題だ」

エリヒドがそう言うのと聖我は王族出ないために席を立とうとする。だがそれをリリアーナはアイコンタクトで残るように聖我に伝え、聖我は席に座り直した。

「言い方が悪かったな、王国と帝国、そして聖我殿の身の振り方についてだ。今現在帝国との繋がりはランデルがアリエル皇女と婚約することで持てる。今回の会談の折に正式に婚約を結ぶつもりだ。ランデル、アリエル皇女とやっと思わせるぞ」

「楽しみです」

ランデルは原作のランデルとは違い、香織のことが好きではない。いや好きではなく

なったという方が正しいか。聖我に対する仕打ちを見て恋心がなくなったのだ。

だからこそランデルはアリエルとの婚約を喜んで受けた。ガハルドもランデルの歳を配慮してアリエルとの婚約を申し込んだのだ。

「そして今一番議題に上がって両国で議論しているのは君のことなんだ」

エリヒドは聖我のことを指さす。

「わ、私ですか!？」

「そうだ、こんなことを言うのはあれだが、魔人族の次に警戒レベルが高いのは聖我殿なんだ。魔人族の軍勢のほとんどを撃退したことだね」

「その言葉を聞いて聖我とリリアーナはともに領いた。ランデルは聖我が騒がれているのは知っていたがそんなに警戒していたとは思わず驚いていた。

「リリアーナの護衛という立ち位置にはいるがいつ離反するか分からない……これが今の帝国と王国の私以外の上層部のもの考えた。私は君は裏切らないと考えているからね」

「……そうですか」

聖我はその言葉を聞いて自分の今までの行動を思い出す。疑いをかけられてリリアーナの護衛になって、リリアーナのために働いて、光輝をボコして戦争に参加して、愛子に逆説教をして、光輝達を聖剣なしでフルボッコ+呪いにかけて……裏切られるかも

しれないという疑念はかかって当然だと聖我は思ってしまった。王国帝国からは同じ学び舎から来た友という認識になっっているだろうから。

「そこで今我々が考えているのは君をリリアーナかトレイシー殿と婚約させることだ」

「……へ？」

「最初、というより戦争終了後は貴族の娘と婚約させようと考えていたのだが、あの勇者公開処刑の時のことでもっと強い繋がりでないとダメだろうということになってしまっただけ」

「……（；・▽・）」

聖我はそんなふうに考えられていたことに少し動揺するがエリヒドはそれを無視し続けて続ける。

「だからこそ王族か皇族と婚約させようという考えになったんだ。まあ君はいつもリリアーナと一緒に寝てるらしいじゃないか、まあ帝国に着いて全体会議が行われる前に決めておいてくれ」

リリアーナと寝ているんだからリリアーナと婚約するよな？ しねえわけねえよなと言わんばかりにエリヒドは聖我にそう伝える。聖我はそう伝えられてポカーンとしているが。

そのままエリヒドはランデルを連れて部屋を出て行った。

「リリイ、あれマジ？」

「ええ」

「そう……」

「……聖我はどうします？」

リリアーナは聖我がどう答えるか考えながら聖我に聞くと

「少し、考えさせてくれ」

そう言って聖我はリリアーナを置いてそのまま会議室を出て行った。

聖我の回答

聖我はリリアーナと婚約するかもしれない、どうすればいいのか自分の部屋の中で悩んでいた。

「どうすればいいのかな……前世でこんなこと経験したことないしな……どうしよう……」

『聖我らしくくないな、婚約すればいいじゃないか、リリアーナは少なくとも聖我を嫌ってない。むしろ好きだと思っている』

「……」

聖我はリリアーナが今まで自分にくれたことを思い出すことにした。

「最初の頃は確か……」

聖我が転移してから数日経ったあの日、晩餐会で誰にも見られないように仮面ライダーに変身したことがバレてしまいそのままリリアーナに聖剣を持っていることがバレてしまった。てつきり王に報告すると思っていたが報告はしないで王に秘密にしてくれていた。

オルクス大迷宮で南雲ハジメが落ちた時、檜山が怪しいと思って檜山に対して質問し

まくってぼろを出させたがイシユタルに邪魔をされてしまいそのまま聖剣を回収させられそうになったが聖我をあの場合で助けてくれたのもリリアーナだ。

その後聖我にも裏切りの疑いがかけられてしまつて訓練の時居づらくなつてしまつて憂鬱になり、危うく追い出されるところだったがリリアーナが聖我を神の使徒からリリアーナの護衛に立場を落としてリリアーナの傘下に入れることで聖我を守つてくれた。

「……いつも守つてくれてたんだよな……」

『年下の女の子に守られてた聖我を考えるとめっちゃくちや笑える……』

「うるさいぞ〜」

アクセルと馬鹿やりながら聖我はリリアーナのことを考える。

『なあ、リリアーナが他の男と結婚したらどう思う?』

「え、いやだけど」

即答である。答えを言っているようなものだ。アクセルは聖我をジト目で見つめている。神器だから目とかなないけど。

『やっぱり好きなんだろう?というか好きじゃなかったらお前一緒に寝てないだろう?』

「私こんな思ひしたことないから恋愛感情なんて分からないんだけど」

『そーいやこいつ聖剣狂だったな』

何気に聖我の聖劍狂いという名の病を忘れていたアクセル。聖我は前世でも現世ほどではないがイケメンと言えるくらい顔を持ち、なんだかんだ優しかったと聖我を転生させた女性はアクセルに伝えている。

但し聖劍に対しての愛が強すぎて人間に対しての愛がその聖劍に対しての愛を上回る事がなかったために恋愛感情なぞ持つことがなかったのだ。

誰かに対して好きという感情を持つことがない。戦闘、殲滅、頑張れば政治系統にも手を出せるであろう（スペックはブリテンの騎士王）聖我にも恋愛全くやったことない・恋愛ナニソレオイシイノという弱点があったのだ。

『なんつー欠点……見た目パーフェクト（見た目プーサー）、潜在能力凄まじい（プーサースペック＋アクセル宿してる）、戦闘に関しては成長中でもありながらこの世界ではトップ10位には入る……そんな奴が恋愛出来ないってどんな欠点……』

「お前本当に酷くない？」

『いや本当に歴代の宿主の中で一番残念だぞお前。ドライブやアルビオンよりは神器になってからそんな経ってないけど10人位は俺の事使ってるけど恋愛に奥手なというか恋愛感情を持っているのに気付かない、好意にも気付かないやつなんて居なかったぞ』

「……仕方ないやん？ 聖劍より魅力的な女性前世に居なかったんだもん……聖劍より興

味があるものなんてなかったんだもん……」

『……お前死因からして聖剣狂いだもんな！アイツから聞いたけど夏休みとかも全部聖剣の伝承がある土地に向かって聖剣を探し回る馬鹿だったらしいもん！お前はどこぞの皆殺しの大司教だよ！』

「あそこまで酷くないわ！あんなヘルパー野郎と一緒にすんなよ！聖剣のために人体実験するような狂い方してないわ！」

バルパー・ガリレイに対しての罵倒を含めつつ聖我はやはり自分は恋愛感情を知らなかっただけでリリアーナが好きなんだと確信した。

『決意は固まったか』

「ああ。リリイとの婚約をありがたく受けようと思う」

『そうか……言つてこい！』

聖我はアクセルとともにエリヒドとリリアーナの元に向かったのだった。

「この神刃聖我、ありがたくその婚約を受け入れさせてもらいます」

「聖我と婚約出来るんですね！」

「……大変言いづらいんだけどいいかな、リリアーナ、聖我殿、いや聖我と呼ばせてもら

おう。君も婚約するなら私の義息子になる訳だからね」

「はー」

聖我とリリアーナはエリヒド（ハイリヒ国王）が言いづらいこととはなんだろうと思つてエリヒドの言葉を聞くために耳を傾ける。

「私さ、リリアーナかトレイシー殿つて言つただけど……リリアーナとトレイシー殿なんだよね……」

「……………」

「え？」

「それとさ、帝国と王国の貴族からも婚約話は何百通も来てるんだよね……君たちの身近なところで言うと、ヘリーナとかハルナとか」

「……………」

「もつと言うなら貴族だけじゃないんだよね」

「商人とかギルド長とかの娘さんからも婚約話 coming なんだよね……」

「……………」

「おーい、リリアーナ？聖我？あれ？」

聖我とリリアーナは2人ともポカーンとしていた。あまりの情報の多さに。そのまま聖我とリリアーナはエリヒドが頭を叩くまでずっと再起動しなかったのだった。

帝国の破天荒な皇帝と砲撃の獣王

「……………落ち込んでるところ悪いんだけどそろそろブックゲート開いてもらってもいいかな？いや本当に伝えなかった私が悪いんだけど……………」

「あのー聖我とリリアーナ王女はどうしたのですか？」

「実は……………かくかくしかじか」

「あーなるほど」

未だに昨日のことを引きづっている聖我とリリアーナの内聖我にブックゲートを開くよう頼むエリヒドを見て不審に思ったメルドがエリヒドに訳を聞くとメルドは聖我とリリアーナに同情の目を送った。

そして聖我は言われるがままにブックゲートを開いてそのままリリアーナとともにブックゲートを通っていく。それに続いてエリヒド達も通っていく。

これから帝国に行くメンツは以下の通りだ。

国王であるエリヒド、王妃であるルルアリア、この会議のキーマンのひとりでもあるランデル、キーマンその2で落ち込んでいるリリアーナ、王国最強の1人な聖我、騎士団長メルド、地球組でマトモなオカンである雫、最近聖我のお陰で権力が上がっている

シモン、なんか出番が少ないイシユタル、メイド10名(そのうちハルナとヘリーナ)と
りあえずおまけ的な感覚で愛子、愛ちゃん護衛隊の面々、勇者(笑)な光輝、香織、恵
里、鈴。そして護衛として300人の精鋭の騎士たち。

王族とシモン、勇者(笑)、イシユタルと愛子と一部の護衛隊はともかく、王国最強2
人と聖光剣を持った聖我と互角に戦える化け物筆頭雫ちゃん、何やかんや魔族を倒せ
るハルナ、アフターで強くなるヘリーナ、聖我と訓練してそこのベヒモスを1人で倒
せるくらいには成長した愛ちゃん護衛隊の女子メンツ、精鋭騎士たちを見るとどこかに
戦争しに行くのかと間違えられるかもしれない。

「ようこそヘルシャー帝国へ！ハイリヒ王国御一行様！」

門番の兵士も転移してくると分かっていたのだろう、聖我達が転移してきても狼狽え
たりせずにそのまま聖我達を迎える。

そのまま聖我達は門番の兵士が呼んだであろう隊長格の兵士に案内されて帝城に向
かうことになった。

途中亜人が奴隷として扱われているところを見て、この間潰したフリートホーフのこ
とを思い出して辞めさせようとしたのだが、自分は王国の騎士の1人、リリアーナの護
衛の1人なのだということを思い出して我慢していた。……勇者(笑)である光輝と雫
以外の仲間、愛子と愛子の護衛隊男子メンツは辞めさせようとしたが雫達に殴られて止

められた。

「着きましたね、せい「待っていたぞ！救世の英雄！」……」

帝城に書いて聖我にお疲れ様と言おうとしたリリアーナだったがそのセリフはとある中年男性の声に遮られた。

「……ガハルド皇帝か」

「久しぶりだなエリヒド王」

「聖我はリリアーナと婚約することを約束してくれたよ」

エリヒドはガハルドに聖我とリリアーナが婚約したことを伝えた。その言葉に周りのメルド以外の人間が驚くもガハルドは大して驚いていない様子だった。

「トレイシーとも婚約してもらおうから構わんさ！さて聖我！貴様ともう一度戦いたいからな！今すぐ訓練場に来い！」

「リライ？」

「行つてらっしゃい」

聖我はガハルドの申し出を受けていいかりリアーナに聞いたがリリアーナは行つてくるように聖我に伝えた。それを見てガハルドは満足気に笑い、聖我はガハルドとともに戦闘の舞台へと向かった。

ここは帝城内の訓練場である。そこは広く様々な武器が置かれていて、観客席が何故か大量に置かれていた。その観客席にエリヒド、ルルアリア、ランデル、リリアーナ、零達聖我シンパが座っていた。

光輝達は帝城内でゆっくりしていたが。

「……久しぶりの戦闘ですね」

「その通りだ。貴様が成長するように俺も成長するということを教えてやろう」

「最初から本気で行かせてもらいます！」

聖我は聖剣ソードライバー（流水）を取り出して腰に巻き付ける。そしていつもの3冊ではなくキングライオン大戦記と書かれたライドブックを無限収納BOXから取り出した。そしてキングライオン大戦記を起動する。

《キングライオン！》

《自然を超越した蒼き鬣が装甲を纏い、王座に轟く……！！》

「王と来たか……面白え……」

キングライオンの名前を聞いてガハルドは剣を抜く。これは真剣である。

キングライオン大戦記をソードライバーに装填して水勢剣流水を抜刀して変身する。

《流水抜刀！》

「変身！」

《R h y m i n g ! R i d i n g ! R i d e r ! 》

《獣・王・来・迎！ R i s i n g ! L i f u l l ! 》

《キングライオン大戦記!!》

《それすなわち、砲撃の戦士!》

聖我は仮面ライダーブレイズ・キングライオン大戦記となったのだった。

「行きます！」

「行くぜ！」

聖我はキングライオンカノンを起動して突っ込んでくるガハルドに向けて容赦なくぶっぱなした。激流の砲撃を容赦なく連続で弾く猶予もなくぶっぱなしたのだ。

「やるじゃねえか！よ！」

だが聖我の砲撃を食らったにも関わらずそれをものともしないでそのまま突っ込んでくるガハルド。それを不思議に思った聖我は仮面ライダーブレイズ・キングライオン大戦記専用武装を展開する。

《キングライオンブースター!》

『相棒！倍加は終わってるぜ!』

「砲撃を開始する！」

聖我が声を上げるとキンググライオンカノンという名の二つの大砲とキンググライオンブースターという銃撃武器から水の小型弾丸が放たれた。それも連続で。だがその攻撃はガハルドには当たらなかつた。

「どうして?という顔をしてるな!種を教えてやるよ!俺はこないだの報告を聞いた時神代の時代のアーティファクトを探し回った!やつと見つけたよ!最強のアーティファクト!矢避けの加護のペンダントだ!」

聖我はその名を聞いて心の中で驚愕した。その矢避けの加護はF G Oに登場するアルスターの光の御子・クランの猛犬であるクー・フリーンのスキルの一つだ。

能力は飛び道具に対する対応力。使い手を視界に捉えた状態であればいかなる遠距離離攻撃も避ける事ができる。

「なんつー能力を!」

「やつと見つけたんでね!参るぞ!」

ガハルドは砲撃をもともせずに聖我の胸部装甲に近づいて剣を当てる。その攻撃を食らった瞬間、突風が現れて聖我を吹き飛ばす。

「今度は……なんだ?」

「魔力放出のペンダントだ。俺の場合は風属性らしいな」

アルトリアのストライク・エアと同じ属性の攻撃によって吹き飛ばされたことを知っ

てこの世界にも他にも聖剣があると思ひ、気合いで立ち上がる。

「奥の手だ、行くぞ」

キングライオン大戦記ワンダーライドブックの先端部であるソードブックマーカ―を右に倒す。すると、

《流水咆哮！》

「うおおおおおおおおお—— ツ!!」

《キングライオン大チェンジ！》

《それすなわち、砲撃の戦士！》

《さらには、ライオン変形！》

聖我はキングライオンダイセンキを模した青いゾイド……ゲフンゲフン、青いメカライオンに変わる。

「まじかよ……」

《スペシャル！ふむふむ、ふゝむ…》

驚くガハルドを無視して水勢剣流水を重力操作で操ってキングライオン大戦記をリードさせる。

《完全読破一閃！》

光剣5本がライオンモードとなった聖我の周りに現れてそれぞれ効果を発

揮する。一本は重力、一本は風、一本はスピード、一本は水のオーラ、一本は倍加となっている。そして水勢剣流水が水を纏ってライオンモードとなった聖我の口にくわえられる。

「喰らえ！必殺！キングライオンングレネイチャー!!」

真つ直ぐに突撃してくる聖我をこれ幸いと横に避けようとするが光剣の効果で避けずそのままダメージを喰らう。

「まだまだ!」

《スプラッシュユ!リーディング!キングライオン!》

ガハルドがダメージを我慢して立ち上がろうとするとライオンモードを解除した聖我が急接近してキングライオンブースターのキングライオンシエルフにキングライオン大戦記ワンダーライドブックを読み込ませて発動する。

《ライオニックフルバースト!》

キングライオンブースターから水の激流がガハルドの腹にぶち込まれてそのままガハルドは吹き飛んで行った。ゼロ距離から放たれたので矢避けの加護も意味は無かった。

そのまま聖我は勝利し、ガハルドを助け起こして回復させて会議場へと向かうのだった。

両国会議 《上》

「さて、これより帝国と王国の両国の王、騎士団長、戦士、救世の英雄、神の使徒を交えての両国会議を始めさせてもらおう」

ガハルドの声掛けによって両国会議は始まった。帝国側はガハルド、帝国の重臣、帝国の教会の教皇、ガハルドの娘であり次代の皇帝候補第一位であるトレイシー、ランデルの婚約者なリエルが参加し、王国側はエリヒド、リリアーナ、ランデル、メルド、イシュタル、シモン、聖我、雫、愛子、光輝、香織が参加している。残りのメンバーは帝城の来賓室で待機している。

「では最初の議題だ。最初の議題は魔人族の戦力、そしてその対抗策についてだ。悪いが聖我、お前が一番戦っている。説明してくれるか？」

「承りました。魔人族の戦力で注意すべきなのは大きく分けて3つです。1つ目は魔人族の将フリード。このフリードは我々では使えない魔法を駆使して戦う上、戦うにはパワー・テクニク・スピード全てが最高水準でなければ勝てません」

「聖我、ひとついいか？」

「なんででしょうかメルド団長」

「お前はどこまで戦える？」

「……あの時ならギリギリ負けていたでしょう。フリードが魔力切れにならなかつたら負けは私でした」

「そうか」

メルドはその言葉を聞いて半ば絶望していた。聖我は認めてはいないがメルド的には王国最強は聖我なのだ。魔力切れにフリードがなつていなければ聖我は死んでいたということに驚いている。

「2つ目は皆さんご存知ワイバーン・灰竜・禍絶鳥などの合成獣……キメラですね。……こいつらは正直敵にはなりえません。上級魔法で倒せますから」

「そうですか」

「3つ目が問題です。仮面ライダー・イビルと魔人族は名乗っていましたが、魔剣・無銘と呼ばれる魔剣を使用しているらしく、魔剣2本とライドブックの回収に成功していません」

「待つてください！私そんなこと聞いてないんですけど!？」

聖我の魔剣・無銘回収完了宣言にリリアーナが叫ぶ。婚約したとはいえ2人は主と従者の関係なのだから当然報告の義務があるはずなのだ。

「リリイ、悪いけどこれはエリヒド様のみには伝えてないんだ」

「……わかりました」

聖我のエリヒドにしか伝えてないという言葉に魔剣が奪われるかもしれないからというリスクを無くすためにリリアーナに伝えなかつたという考えを汲み取つたりリアーナは多少ふくれながらも引き下がった。

「魔剣・無銘の1つを宮廷錬成師であるウオルペン氏に、もう1つを知り合いの凄腕錬成師に渡して調べてもらっています」

「それはいいんだが、肝心の実力はどうなっている？」

「私のライドブック3冊を軽く超えることが可能なスペックを誇っています。高品質な量産品ですね。例で言うならトレイシー殿がお持ちになつているエグゼスや私の聖光剣クラウ・ソラスを大量に一兵卒が使えるように量産しているようなものです」

聖光剣という言葉聞いた光輝がこちらを睨んできたがそれを無視して説明した。その言葉にイビルの危険性を理解していないイシユタル、光輝、香織、愛子以外が唖る。「倒せる者はどのくらいいますの？」

そう聞いてきたのはトレイシー。そのトレイシーの言葉に聖我は答える。

「私、雫、ガハルド殿、メルド騎士団長、エグゼスを持つている時のトレイシー殿のみでしよう」

「そうなんですわね……あ、トレイシー殿じゃなくて気軽にトレイシーと呼んでください

いな」

トレイシーが聖我の解答を聞いてからニコニコと呼び捨てで呼ぶように伝えると聖我は苦笑しながら首を縦に振る。……横で先祖の仇を見るような目でトレイシーを見るリリアーナには気づかなかつたが。

「ちよつと待て神刃！なんで俺が入ってないんだ！」

「？当然だろう？」

少し経つてから光輝が聖我に文句を付ける。

「お前に出来るなら俺にだって出来るはずだ！俺はゆ「そうか」納得したか！」

「……なあ、戦場で情けをかけるやつがイビルに勝てるわけなからうが！」

「そんなのやってみなけりや分らないだろ！」

「戦争参加をまっさきに認証しておいて魔人族を殺す宣言をしておいて魔人族を殺さない、殺せない口先だけの勇者様がよくそんな口叩けますね、はつきり言つて邪魔です」

「それは言い過ぎだと思うのですが……」

聖我の光輝に対する反論に対してイシユタルが苦言を零す。イシユタルとしては光輝>聖我なので聖我が光輝を貶すのが許せないのだろう。

「……神刃君、魔人族も人なんですよ？人を殺すなんて倫理観がおかしいと思うんですよ。地球では人を殺すのは犯罪でした。やっちゃいけない行為なんですよ？」

「畑山さん、承認したのはその馬鹿、そしてそれを止められなかったのは貴女なんですけどそこんとこどうでしょう？ そういう地球の法律を持ち出すならあの時止めておけばよかつたのでは？」

「それは……」

「双方やめてもらえるか？ この場は魔人族に対しての対策を練るための会議なのだ。決して神の使徒同士で喧嘩をする場ではない」

「失礼しました」

「聖我はガハルドの真面目な言葉に謝る。対して愛子と光輝は謝らない。自分たちが間違っていると思っていないからだ。」

「気を取り直して説明を再開させます。イビルと戦うにはガハルド殿やメルド騎士団長の武器では力不足です」

「ならどうすればいい？」

「簡単なことですよ……零の持っている光刀を該当者に渡します。改造を施してね？」

「「「「?!」」」」

「なるほど、それなら戦力の増強が可能になるな……」
その言葉を聞いたエリヒドは聖我が光輝公開処刑で使っていた無数の釘を思い出しながらそう呟いた。

「そして魔人族が変身する前に高速で手首、頭、心臓を狙えば勝てます」

「……速攻で方をつけるって訳か……なら上級魔法で剣を落とさせてもいいわけだな……」

ガハルドがそう言うってから様々なイビル対策の案が議論されて行ったのだった。

両国会議 《下》

「……さて、イビルについての会議も終わったことだし、そろそろ俺らの問題について解決させてもらおうか」

イビルをどうやって倒すか、それを3時間ほど意見を出し合って会議をした後、ガハルド達はもう一つの議題を解決することにしたのだった。

「うむ、婚約問題か」

「エリヒド殿、その通りだ。今我が帝国と貴殿のハイリヒ王国の間では我が娘アリエルと貴殿の御子息ランデル王子が婚約関係にある」

その言葉を聞いたアリエルとランデルが互いに会釈を交わす。実は会議前に話していたりする。それを暖かい目で見ると、一同。

「ランデルが婿に行くか、それともアリエル殿が嫁に来てくれるか、それはまだ決めなくていい……問題は聖我だ」

「おや？もう救世の英雄殿を呼び捨てで呼んでいるのか？」

「当たり前だろう。もう聖我は家のリアーナと婚約関係にあるのだから」

「やはりもうそこまで行っていたか……」

勝ち誇るエリヒドを見て悔しがるガハルド。

「ちよ、ちよつと待つてください!」

だがそれに水を指す人間がいた。

「神刃君が婚約なんて聞いてませんよ!」

「愛子殿か、聖我が婚約するのは王国、帝国上層部ではもう決定事項だ。もう変えることは不可能だな」

「なんで神刃君なんですか!?!」

エリヒドが愛子に諭すように伝えると何故聖我が婚約するのかを聞いてきた。

「? 聖我がいる前であまり言いたくないが、聖我が余りにも危険だからだ」

「き、危険?」

エリヒドの聖我危険物発言に愛子が首を傾げる。

「そうだ、聖我が我々に危害を加えないように、枷をつけようというのが我々の考えだ」
「待つてください! 神刃君にはよく言つて聞かせますから! 神刃君も戦争が終わつたら私たちと一緒に帰るんです! 貴方方には危害をくわえ「諸悪の根源が何を仰る!」え?」
「元々は貴女方が悪いのだ。聖我が危険物扱いされたのは勇者と聖我が公の場で決闘した後のことなのだからな!」

エリヒドの言葉に今度は光輝が反論し始める。

「神刃があの時についてどういふことですか！」

「……聖我があの時貴方達に大量の釘を放ったことは覚えていますか」

「ええ」

「上層部はそれを危険視しているんだ」

「え？」

「あの際の釘の攻撃の要因は君たちが聖我を邪険に扱い過ぎ、貴族達が聖我を迫害した際の鬱憤が招いた結果だ」

「そんなこと……」

「聖我が失意のどん底にいた時リリアーナが手を差し伸べていなければ聖我は魔人族側に回ってあの強大な力をこちらに奮っていただろうさ」

その言葉を聞いた光輝と愛子は押し黙った。だがエリヒドはまだ言葉を続ける。

「我々は聖我が魔人族の方に行ったり裏切られないようにするために聖我に婚約者という名の枷をつけることを決めたのだ」

「それでリリイに望まない婚約を結ばせる気ですか!!」

聖我が何故婚約することになったのかそれをエリヒドが光輝に伝えたあと、光輝はヘンテコな反論をエリヒドに投げつけた。

「……………?」

聖我、リリアーナ、雫、トレイシー、シモン、ランデル、メルド、エリヒド、ガハルドがその言葉に首を傾げた。

「おーいリリアーナ姫、救世の英雄と婚約するのは嫌か？」

「いえ別に、聖我と婚約できて嬉しいですけど？」

「だそうだが？」

「……」

そのまま光輝は押し黙った。

「さて救世の英雄殿……いや聖我、家のトレイシーとも婚約して貰うぞ。お前には大量に婚約話が来てるんだからな」

「ふア!？」

雫と全部知っているはずのリリアーナが変な声をあげたが全く気にせず続けるガハルド。

「王国、帝国の貴族共に商会の娘、ギルド支部長の娘とかがお前に婚約の話が来てるんだ、まずはリリアーナ姫とトレイシーと婚約してもらおうからな」

「な、なんでそんなに……」

ガハルドの言葉を聞いた香織が聖我に何故そんなに来ているのか尋ねる。

「……そこの勇者が何回も負けたり無能を晒したりしたからだ」

「……」

ガハルドの鋭い攻撃（口撃）で光輝はノックアウトされた。

「やっぱり婚約しないとダメなんですね……」

「当然だ」

「……チツ……上層部のクズ共が……聖我と一緒に2人で暮らせないじゃないですか……」

リリアーナはガハルドの返答を聞くと誰にも聞かれないように毒づいた。だが隣に居る聖我には聞こえていたらしく聖我は苦笑いしていた。

「まあトレイシーとリリアーナ姫と婚約するのは決定事項だ。これだけは覆らんからそこんところよろしくな、あと明日はランデル王子とアリエルの婚約パーティーだからそこんところもよろしく」

ガツハツハツと笑ってガハルドはそのまま会議室から出て行った。それを会議の終わりとして認識したのか残りのメンバーも会議室から出て行った。そして聖我、リリアーナ、トレイシーだけが残された。

「正妻は私ですからね！」

「正妻戦争云々は少し置いときましょう。……いつかの約束を叶えてもらいますよ、聖我さん」

リリアーナの正妻宣言を流してトレイシーはですわ口調をやめて真面目に聖我に問いかけ、どこからかエグゼスを取り出す。

「婚約前に決闘ですわ！」

エグゼスを聖我の眼前に向けながらトレイシーはそう高らかに宣言したのだった。

鎌のお姫様

「婚約前に決闘ですわ!」

その言葉を聖我に言ったすぐ後、聖我はその決闘を受けるとトレイシーに言った。

聖我とトレイシー、リリアーナは会議前にガハルドと聖我が戦った場所に来て、それぞれの得物を持つて睨み合っている。それをリリアーナはにこやかな目で見ていた。

「帝国の人間は決闘が好きなのか?」

「違いますわ、ただ強い人を見掛けたら決闘するのが帝国の常識……そう私は皇帝陛下や先生から学びましたの」

「そうか、じゃあ始めるか」

「望むところですよ!」

聖我は邪剣カリバードライバーを腰に巻き付けてジャアクドラゴン ワンダーライドブックを起動して装填し、ライドインテグレーターを闇黒剣月闇のエンブレイブヒルトで押し込むことで変身する。

「変身!」

《闇黒剣月闇!》

《Get go under conquer than get keen!》

《ジャアクドラゴン!》

《月闇翻訳!》

《光を奪いし漆黒の剣が、冷酷無情に暗黒竜を支配する!》

仮面ライダーカリバーに変身して聖光剣クラウ・ソラスと闇黒剣月闇を構える。トレイシーもエグゼスを聖我に向ける。

「仮面ライダーカリバー! 闇黒剣月闇、クラウ・ソラス……参る!」

「トレイシー・D・ヘルシャー! 魔喰大鎌エグゼス……参りますわ!」

2人がそう言った数秒後、2つの聖剣と鎌がぶつかり合った。

「重力操作、スピード倍加!」

《Acceler!》

聖我は重力操作で身にかかる重力を軽減してアクセルの能力でスピードを倍加してトレイシーに斬りかかるが、トレイシーも風魔法でスピードを底上げしてその攻撃を弾く。

「行きますわよ! エグゼス……喰らいなさい!」

トレイシーが魔力弾を周囲に発生させ、エグゼスでそれを斬るとエグゼスにオーラが滲み出て来る。

「魔喰大鎌エグゼスは魔力を喰らうことで斬撃の威力を底上げ出来ますわ！行きますわよー！」

《必殺リード！》

《ジャアクペガサス！ジャアクヘツジホッグ！》

《月闇必殺撃！習得二閃！》

エグゼスから斬撃が飛んできたため、急いでワンダラーライドブックをジャガンリダーに読み込ませて闇のペガサスを発生させ雷のパワーを込めて斬撃に向けて放つ。

エグゼスから放たれた斬撃を破壊してそのままトレイシーにダメージを与えられると思つて放つたペガサスは驚くことに破壊されエグゼスの斬撃をもろに食らつてしまった。

「な、何故……」

「これこそエグゼスの能力！遠隔操作で魔力を吸い取つて貴方の攻撃を弱らせたのですわ！」

「……面倒臭いなその能力！だが魔力を使わなければ良いだけだ！」

再度アクセルに倍加させてスピードを速くした聖我はトレイシーに急接近するがトレイシーにもう少して触れられるその時に謎の倦怠感に襲われた。

「……今度は私の魔力か……」

「エグゼスならではの技ですわ!」

ふらついた聖我にこれ幸いとエグゼスを振り下ろすトレイシー。その攻撃を抵抗することなく受ける聖我はそのまま吹き飛んでしまう。

「……ならこれで行くしかないな!」

「?まだ聖剣がありますの?でも全ての聖剣の対策は取れておりますわ!」

聖我は変身を解除して無限収納BOXからワンダーライドブックと1つの聖剣を取り出す。

取り出したのは光剛剣最光と金の武器 銀の武器ワンダーライドブックだ。光の属性を司る聖剣と仮面ライダー最光に変身するための必須アイテムだ。

《聖剣サイコウドライバー!》

そして聖我は聖剣サイコウドライバーを腰に巻き付ける。そしてワンダーライドブックを開く。

《金の武器 銀の武器!》《GOLD or SILVER?》

ワンダーライドブックを剣先を開きながら装填する。

そして聖我は光剛剣最光をドライバーから取り出す。

《最光発光!》

「変身!」

《Who is the shining sword?》

《最光一章！金銀の力を得た輝く剣……最光!!》

聖我の身体が光の粒子となつて光剛剣最光の中に入り、仮面ライダー最光へと変身を完了させた。

「身体が剣になりましたわ!」

「まだまだ!」

聖我は右半身アウルムサイドを起点に眩い光を放つて自らの影から人型の影分身を発生させる。

《Who is this?》

《最光二章!》

《光から生まれし影!》

《Shadow!!》

「……さあ、光の力を教えてあげよう!」

「望むところですわ!」

最光に変身したままShadowに地面の影を伝わせてトレーシーの後ろに回り込んで光剛剣最光を振るう。

何故聖我が後ろにいるのか全く分からないトレーシーは混乱しながら最光Shadow

にエグゼスを振るうがその攻撃は影であるシャドーには当たらず空振りエグゼスを弾かれ、エグゼスを手から離してしまう。

「いい能力だろ？こいつは影、実体は持っていない。本体はこつちだ」

光剛剣最光に装填されている金の武器 銀の武器 ワンダーライドブックの目の部分を光らせてトレイシーと話す聖我。

「な、なんですって……」

「さあ、終わりだ！」

最光シャドーが金の武器 銀の武器 ワンダーライドブックの側面に着いているポタンを押すことで必殺技を放つ。

《最光発光！》

最光シャドーはその音声で鳴った瞬間、光剛剣最光をトレイシーに投げ飛ばし、光剛剣最光は光のエネルギーと光のオーラを纏いながらトレイシーに向かって突き進む。

《good luck！》

その音声とともに光剛剣最光はトレイシーに当たる寸前でエグゼスの方に方向転換してエグゼスをトレイシーが取れない距離まで吹き飛ばした。

「私の勝ちだ」

「負けですわ……」

聖我のその声に同意してへなへたと座り込むトレイシー。そして変身を解除した聖我がトレイシーの手を取って立ち上がらせる。

「気は済んだかな？」

「ええ、やはり貴方は強いですわ」

「そう」

「婚約は元から乗り気でしたけど、決闘して私が勝ったら断るつもりでした。でも、貴方は私に勝ちましたし、帝国人は強い人が好きですわ。だから貴方と私は婚約します」

「……よろしく、トレイシー」

「よろしくですわ、聖我」

会議の所から諦めているのか聖我はトレイシーの申し出を快く受けた。そして2人でそのまま戻ろうとすると、

「ちよつと待つてくださいい！」

慌ててリリアーナが聖我とトレイシーを追いかけるのだった。

『ふふつ、最光まで来たわね、ならあとはこれを解放すれば今日の仕事は終わりよ！……』

なんか久しぶりに発言した気がするわ』

聖我を転生させた女性は左手に《ソードXマン》と表紙に書かれたアメリカン・コミックスを持ちながらそう呟いていた。

錬成師と転生者

あの聖我が勝ったトレイシーとの決闘後、聖我はリリアーナとトレイシーとともに部屋の中でお茶会をしていた。議題はまだまだ増える聖我の婚約者である。

「……下手したら10人超えそうなんだよな……」

「何言ってるんです？ 皇帝陛下と同じくらい増えるに決まってますわ」

「それはそれで私たちの苦勞が増えそうな気がするんですけど……」

来ている婚約の手紙は100を超えているのだ。まさか2人だけしか選ばないというのではないだろう。それに聖我とのコネクションが欲しい貴族や商人、ギルド支部長は沢山いる。2人どころか数十人になるかもしれないのだ。

「はあ……魔人族とは別にこんな面倒事が増えるなんて……」

「まあ活躍した時点でその結末は見えておりましたわ」

「そうですね」

溜息を吐く聖我にトレイシーが予測していた発言をしてリリアーナがトレイシーに同意する。

プルル……プルル……

「……ハジメからか、すまないリリイ、トレイシー、ちよつと出る」

「わかりました（わ）」

聖我はガトライクフォンを取り出してハジメの連絡に応答する。

「何の用だ？」

『悪いな、解析が終わったんだ、少し来てくれないか』

「早いな、神代魔法を集めているだけはあるな」

『世辞はいいからさっさと来てくれ、場所はエリセンだ』

「了解した」

どうやら急ぎの用事らしい。聖我がこの前接触した時はそこまで急がなくて構わな
いと言ったはずなのだが、仕事が早すぎる。聖我は錬成師と侮ってバカにしていた檜山
たちに見せてやりたいと思ってしまう。

「リリイ、トレイシー、ハジメがいるエリセンに向かってくる。悪いけど少し席を外す
よ」

「わかりました」

「魔剣ですわね？わかりましたわ」

リリアーナとトレイシーは了承し、聖我はブックゲートを開いてエリセンへと向かっ
たのだった。

「……………来たか」

ハジメはハジメの目の前に巨大な本が展開されたのを見て聖我が来たのを知った。右手に持つはノーツで使われた魔剣の内の1本、左手に持つは正体がよく分からない剣が1本。

「やあ、出来たのかな？」

「出来たさ、魔剣の解析は終了、これは新しい俺専用の魔剣・リベリオンだ。これは神話をモチーフにしていない」

「そうか、……………今なんて言った？」

「いやだから新しい魔剣作ったって」

「……………は？」

聖我は今猛烈に戸惑っている。魔剣の解析を頼んだつもりがいつの間にか新しい自分専用の魔剣を作っているのだから。

「この魔剣・リベリオンは俺のオリジナル魔剣。これまで俺やユエ、シアを虐げたあらゆる存在に対して反抗するという意志の元作られた俺専用の魔剣だ」

「……………能力は？」

「ああ、ワンダーライドブックではなくアームドブックと呼ばれるワンダーライドブックモドキを魔族は使ってた。アームドブックを俺なりに作って、それを認識できるようにしたよ」

「……やってみてくれる？」

「ああ」

《《Curse blade! Revelation!》》

魔剣・リベリオンの音が鳴り響き、アームドブックと呼ばれたワンダーライドブックモドキを起動して装填スロットであるリベリオンシエルフに装填する。

《《Discipline of Revelation!》》

《《ある日迷宮にて奈落に落ちた一人の錬成師とその後仲間になる恋人達の反抗の物語……》》

《《Discipline of Revelation!》》

そしてリベリオントリガーを引くことでワンダーライドブックを開いて変身を行う。

《《Revelation! HENSHIN!!》》

《《Discipline of Revelation!》》

《《我々を嫌い、傷付けたもの全てに反抗せよ!》》

《《Curse blade! Revelation!》》

《反抗一節！錬成師！》

《反抗の魔剣が反抗対象の全てを切り刻む！》

「これが仮面ライダーベリオン。俺専用の仮面ライダーであり、俺とユエとシアの愛の結晶だ！」

「……お前そんなキャラだっけ？」

「え？色々あつたんだよ」

「……そう」

にこやかにそう言うハジメにもういいやと諦めてそのまま説明を促す聖我。

「さて、説明を行おうと思つたが、実演の方が楽だな。やるぞ聖我？」

「へ？……やるつて闘うつてこと？」

「何当たり前のこと言つてんだ？」

「あ、はい」

ハジメの変わり様を見て驚きながらも無限収納BOXから風双剣翠風と猿飛忍者伝ワンダーライドブックを取り出して起動してハヤテシエルフに装填する。

《猿飛忍者伝！》

《猿飛忍者伝！》

そして風双剣翠風を二刀流モードに変えて変身する。

《双刀分断!》

《壺の手、手裏剣! 式の手、二刀流!》

《風双剣翠風!》

《翠風の巻!》

《甲賀風遁の双剣が、神速の忍術で敵を討つ!》

「仮面ライダー剣斬だ、行かせてもらおうぞ!」

二刀流モードになった風双剣翠風をハジメに向けてそのまま斬りこもうとすると、進んだ先に壁が出来た。

「錬成師なんでね、こういうことも出来るわけさ!」

そして壁を貫通して銃弾が聖我に当たり、そのまま吹き飛んでしまう。

「食らえよオルカン!」

ミサイルが発射され防御力の低い剣斬になっている聖我はダメージを多分に食らってしまふ。

「……剣士だろ! 剣使え!」

「剣士だからって必ず剣を使わなきゃいけないわけじゃない!」

「最もな意見に反論を返せない聖我はハジメが強いことを認め、風双剣翠風を二刀流モードから手裏剣モードに切り替える。」

そしてシンガンリーダーにこぶた3兄弟を3回リードさせる。

《こぶた3兄弟！ニンニンニンニン！》

《翠風速読撃！ニンニンニンニン！》

ハジメがいる方向に手裏剣モードになった風双剣翠風を投げ、ハジメに当たる直前にハジメが錬成を使つて防ごうとした瞬間、風双剣翠風は3つに分身し、三方向から襲われてしまい、吹き飛んで行つた。

「やるじゃねえか……ならユエとシアの力を借りようか！」

「まだ先があるのか！」

「行くぜ！」

ハジメは立ち上がつて魔剣・リベリオンのリベリオントリガーをもう一度押す。するとページの色が変わり、先程まで黒と赤だったのが金と赤に変わる。

《Revelion! HENSHIN!!》

《Discipline of Revelation!》

《我々を嫌い、傷付けたもの全てに反抗せよ!》

《Curse blade! Revelation!》

《反抗二節! 吸血姫!》

《反抗の魔法が反抗対象の全てを破壊し尽くす!》

仮面ライダーリベリオンの姿が変わり、魔剣をしまつて両手に一枚ずつ魔法陣を出現させる。

「第二ラウンドだ」

ハジメのリベリオンと聖我のソルジャー

「第二ラウンドだ」

仮面ライダーリベリオン・ユエフオーム（と命名しておく）となったハジメは両手に展開した赤色の魔法陣から燃えたぎる槍を展開する。

「食らえや、緋槍！」

「最上級か！ならこいつだ！」

緋槍を避けながら聖剣ソードライバーとブレイブドラゴン、ストームイーグル、西遊ジャーニーを取り出して起動、装填していく。そして火炎剣烈火を抜刀する。

《烈火抜刀！》

《語り継がれし神獣の名は！》

《クリムゾンドラゴン！》

《烈火三冊！》

《真紅の剣が悪を貫き、全てを燃やす！》

「……面白え！行くぜ！緋槍！」

燃えたぎる槍をもう一度展開して仮面ライダーセイバー・クリムゾンドラゴンになっ

た聖我に緋槍をぶち当てる。

「グッ！……流石に威力がヤバイ……」

《西遊ジャーニー！》

西遊ジャーニーのページを押し込んで火炎の如意棒を作り出してハジメに当てようとするが黄色の魔法陣を展開して龍を出現させる。

「雷龍！」

雷の龍が火炎の如意棒を破壊して聖我に雷龍をぶつけて吹き飛ばす。

「……出力がヤバいな……使うなど言われているが、使うしかないな」

「ノーツの時に話されていた奴か！来い！」

聖我はドラゴニックアーサー ワンダーライドブックを取り出して起動して聖劍ソードライバーに装填して火炎剣烈火を抜刀する。

《ドラゴニックアーサー！》

《烈火抜刀！》

《When a knight enters the battlefield

with Excalibur.》（ゴールデンアーマー！）

《The Knights of the Round Table head forth
or the kings support with the Brave D

ragon.》(スカーレットブースター!)

《And the knight defeats the enemy with his friends and the Brave Dragon.》(ストリーオブアーサー!)

《Dragonic Arthur!》(ドラゴニックアーサー!)

《我らは勝利する!》

「行くぞ!」

「行くぜ!」

魔力を大量に消費するドラゴニックアーサーは短期決戦を行うしかないため早々に決めようと火炎剣烈火を聖剣ソードライバーに納刀して抜刀、天空に掲げる。

《烈火抜刀!》

「行くぞ!」シール・サーティーン 十三拘束解放、ディンジョン・スタート 円卓議決開始!」

聖我の周りに13の黄金の騎士の霊のような者が現れる。

《是は、生きるための戦いである——ケイ》

《是は、一対一の戦いである事——パロミデス》

《是は、精霊との戦いではない事——ランスロット》

《是は、私欲なき戦いである事 —— ギヤラハツド》

《是は、世界を救う戦いである事 —— アーサー》

《是は、主従の為、使える国の為の戦いである事 —— 聖我》

何処からか5人の声と聖我の声が響いて黄金の騎士の霊が聖剣に吸い込まれて力が滾る。そして魔力が聖剣に流れ込む。

対してハジメは両手から5つの魔法陣を出して火、雷、氷、風、土に重力を魔法を組み合わせ、5体の龍を生み出して攻撃を繰り返そうとする。

「これは星の聖剣と火炎の龍の合わせ技！約束された勝利の炎剣エクスカリバー・ドラゴニック!!!」

「喰らえ！俺とユエの必殺！五天龍!!!」

5体の龍が聖我に向かって突撃し、その5体の龍を優に超える大きさを誇る炎龍がハジメに向かって突撃する。

5体の龍の属性の力が炎龍を破壊していくが、聖我の作り出した炎龍も負けじと5体の龍を消していく。5体から4体、3体と減っていくが炎龍の維持も不可能になって来ていた。

「シア！力を借りるぞー！」

ハジメは五天龍の維持を放棄して炎龍と相殺し、魔剣・リベリオンのリベリオントリガーを引いてページを水色と白のページに変える。

《Revelion! HENSHIN!!》

《Disciple of Revelion!》

《我々を嫌い、傷付けたもの全てに反抗せよ!》

《Curse blade! Revelion!》

《反抗三節! 兎の占い師!》

《反抗の大槌が反抗対象の全てを潰して行く!》

仮面ライダーリベリオン・シアフォームとなり魔法陣がなくなり、右手に黒い大槌が現れる。

《Dark Drucken!》

「……シアのドリユツケン……喰らえ!」

魔剣・リベリオンのリベリオントリガーを長押しする。

《Deadly! Shear's power! Revelion impact!》

黒いエネルギーがダークドリユツケンに集まり、巨大なハンマーへと変わる。

「負けてたまるかアア!」

巨大なハンマーが聖我に向かって振り下ろされ、聖我はやられた。

かに思われた。

《Who is this?》

《最光二章!》

《光から生まれし影!》

《シャドー!!》

ダークドリユッケンがぶつかる直前に最光に変身し、最光シャドーを使って攻撃を受け流したのだ。

「……危なかつたよ……」

「……止めさせなかつたか」

「……これはデモンストレーションだった。だが私には意地でも負けられない理由がある! アクセル!」

『おうよ!』

アクセルの声とともに聖我の手にエックスソードマンと書かれたアメリカン・コミックスのようなワンダーライドブックが現れる。

そしてエックスソードマンを起動しようとする聖我。だがそこでクラウ・ソラスが聖我とエックスソードマン ワンダーライドブックの目の前で量子化し、エックスソード

マンへ吸収されていく。

《エックスソルジャー!》

《エピソード1:光の力で戦え!》

エックスソードマン改め、エックスソルジャーを聖剣サイコドライブバツクルに装填し、ライドシグナムでトラーディオライドを押し込む。

《最光発光!》

《Get Shining power! Go to Battlefield! エックスソルジャー!!》

《エピソード1!》

《戦場に参上!ババババン!》

「私は大切なものを守る剣、剣士……いや、ソルジャーだ!」

仮面ライダー最光・エックスソルジャーに変身し、光速移動でハジメのすぐ横に接近する。

「速っ!」

「仮面ライダー最光・エックスソルジャーは光剛剣最光の力とこの国の聖剣であるウーア・アルトを元にしたクラウ・ソラスの力を使うことが出来る……そしてオマケに光の力を!」

「冗談じゃねえぞ！ユエ、力を借りるぞ！」

《Revelion! HENSHIN!!》

《Disciple of Revelion!》

《我々を嫌い、傷付けたもの全てに反抗せよ!》

《Curse blade! Revelion!》

《反抗二節! 吸血姫!》

《反抗の魔法が反抗対象の全てを破壊し尽くす!》

仮面ライダーリベリオン・ユエフォームとなり、障壁魔法を発動させるが、光を圧縮させたビームを放ってその障壁魔法を破壊してハジメのアーマー事吹き飛ばした。

「まだまだ!」

再度ライドシグナムでトラードイオライドを押し込むことで違う姿となる。

《パワー最光!》

《Get Shining power! Power up! エックスソルジャー!!》

《エピソード2!》

拳に光のエネルギーが集まり、光のグローブができる。そしてアクセルの力を使いながらハジメに接近して拳を叩き込む。

「グウ!……俺も負けられないんだよ! 聖我ア!」

聖我はライドシグナムでトラーディオライドをまた押し込み、ハジメはリベリオントリガーを押ししてフォームを変える。

《スピード最光!》

《Get Shining power! Speed up! エックスソルジャー!!》

《エピソード3!》

《Revelion! HENSHIN!!》

《Disciple of Revelion!》

《我々を嫌い、傷付けたもの全てに反抗せよ!》

《Curse blade! Revelion!》

《反抗一節! 錬成師!》

《反抗の魔剣が反抗対象の全てを切り刻む!》

聖我は仮面ライダー最光・エックスソルジャーの最後のパワーアップを行い、足に光が集まり、背中にブースターが新設され、いかにもスピード形態になり、ハジメは仮面ライダーリベリオンの通常形態に戻って魔剣・リベリオンを構える。

そして聖我はエックスソルジャー ワンダーライドブックを閉じて3回トラーディ

オライドを押し込み、ハジメはリベリオントリガーを長押しする。

《ファイニッシュ・リーディング!》

《Shining Speed Slash!》

《超・最光!》

《Deadly! Hajime's power! Revelation Impact!
!》

聖我は超光速でハジメに剣先を向けて突撃し、ハジメは魔剣・リベリオンにエネルギーを充電して振り下ろし闇の斬撃を放つ。

だが聖我はその闇の斬撃をルートを変えることで避け、ハジメに超光速の刺突を放つたのだった。

「俺の負けだ、……勝てると思ったが、そう甘くはないか」

「いや負けるかと思ったさ……」

聖我は勝った。デモンストレーションのはずなのにガチバトル。 트레이シーと戦つ

た時より疲れている。もつと言うならフリード戦より魔力の消費が激しい。

原作主人公にして魔王様の実力は伊達ではないということが分かったところで聖我はハジメにひとつ気になることがあり問いたです。

「なあ、なんでエリセンなんだ？」

「うん？ ああ、大迷宮を攻略した後でエリセンに滞在していたのと、お前に会わせたい奴がいるんだよ」

「へ？」

「パパア！」

そこにはハジメのことをパパ呼びわりする水色の髪の人海人族がいた。

「……お前……ついにユエさんとシアさん孕ませやがったのか……」

「ち、違うわ!?!……イルワ支部長に頼まれてこの子……ミユウをこの街の親に届けに来てたんだ」

「それ私関係なくね？」

「いや、ミユウはお前がフリートホーフから助けた子供の一人だ。レミアって母親が居るんだが、脚の後遺症でまだ動けないから、代わりにミユウが礼を言いに来た」

「なるほどな」

聖我はミユウを奴隷名簿と呼ばれるフリートホーフが持っていた名簿で見たことが

ある。記憶の片隅に追いやっていた奴隷名簿を思い出してミュウのことを思い出した。「ありがとうございしました！」

ミュウは元気よくそう言うとそのまま家と思われるところへ走り去って行ったのだった。

「……そういや、母親からどう思われてんだお前」

「え？……ユエ達と今正妻戦争してる」

「……ハーレム増やしてんのな」

「いやお前もだろ、ギルド支部長から聞いてるぞ」

「グッ！」

聖我の婚約話は市井に広まっていることを知って聖我は胃にダメージを受けたのだった。

そしてそのままハジメから魔剣のデータを渡してもらってそのままブックゲートでリリアーナとトレイシーの元に戻ったのだった。

苦難の婚約披露宴

将来の義弟と義妹となるランデルとアリエルの婚約披露宴にガハルド、トレイシー、ハジメと連戦した翌日疲れた身体に鞭打ちながら出席していた聖我。（調子に乗ってドラゴニックアーサーを使ってエックスソルジャー使わなきゃ良かったと反省している）

そんな聖我に王女であるリリアーナと皇女であるトレイシーと婚約したために挨拶に来る貴族と将来莫大な権力を持つことになる聖我に今のうちにアプローチをかけようとする貴族の子女が話しかけてくるために少しずつ体力と精神力がすり減っていく。

「（……もう嫌だ……なんかリイとトレイシーも大変そうだけど、元々一般人な私にはこの婚約披露宴はキツイものがある……）」

元々聖我は一般人（聖剣に絞れば逸脱人）で死んだ後すぐに転生してトータスに転移した肉体のスペック・武器最強系主人公だ。立ちながら宴をするなんてことをまずしたことがない。

故にこのような催しは結構肉体的にも精神的にも疲れてくるのだ。

「（コブタ三兄弟で分身作って逃げたいけど、リイとトレイシーが無限収納BOXに目をつけて使わせないようにしてくるから逃げられん……）」

宴の最初の頃はリリアーナやトレイシー、ハルナ、雫、ランデル、アリエル、メルド達が聖我に貴族が近づかないようにしていたのだが、話しかけたい・利益を得たい・あわよくば婚約したい貴族や貴族の子女の策謀か、聖我の周りの面々を様々な役職、立場の人間が話がしたいと言って引き剥がして行ってしまった。

「クソ、イルワさんが助け舟を出してくれただがすぐに助け舟を沈没させられてしまったし……」

聖我を犯罪抑止に喜んで使い始め、犯罪がゼロに近くなったと泣いて喜んだイルワは聖我にお礼を言おうと婚約披露宴に呼ばれた折に聖我に会おうとしたのだが、聖我がものすごい人に囲まれるのを見て助け出さないと！という使命感に燃え、聖我を一度は引っぱり出したのだ。

そしてイルワはもう少し話がしたいと言って聖我を利益を求める貴族が比較的居らず、騎士から成り上がったあまり欲がない貴族の元に連れていこうとしたのだが、クデタと名乗る貴族がイルワに日頃の礼を言いたいとイルワの肩を叩きながら連れて行ってしまったのだ。

これに関しては策謀も何も無いと思うのだが、その後また貴族たちに捕まって話をしなければならなくなってしまった。

「イルワさんが居なくなったら瞬間来たよな……執着がヤバイよ……助けてくれリリイ

……」

そう心の中で呟いた聖我はリリアーナのところを向けると、リリアーナの方にも貴族の子女が集まっていた。聖我には聞こえないが、日頃の聖我について質問を掛けまくっている。リリアーナは貴族たちと比べれば話しやすい部類に入るために貴族の子女も遠慮なしだ。

「リリアーナも私と比べれば少ないけど囲まれている……ならトレイシーだ！」

リリアーナの次に信頼されているのか、トレイシーの方を見る聖我。するとトレイシーはエグゼスを婚約披露宴に持ち出しており、その周りには自慢の得物を持った貴族がそれぞれの武器の自慢をしていた。聖我は何しているんだ、そういう目でトレイシーを見てしまった。

「(ならハルナはどうだ！それにヘリーナさんも！)」

3番目に信頼度が高いハルナとヘリーナを見るとハルナとヘリーナも聖我やリリアーナと比べると少ないが人に囲まれていた。聖我はどんな感じで生活しているのか、リリアーナとはどうなのかとか。

聖我とリリアーナが同衾しているとついこぼしてしまったヘリーナはその言葉によつて黄色の歓声をあげた子女達を見て、やべえ、やつちまった……というような表情をし、ハルナはそんなヘマをしたヘリーナを小突くのだった。

「(やべえ……頼れる人がいない！ならランデルとアリエル！……私以上に囲まれてるよ……しかも律儀に無理そうです、みたいなアイコンタクトを2人して送ってきたし……)」

ランデルとアリエルに一時助けを求めようとしたが人の山が聖我より多いために諦めた聖我に律儀にアイコンタクトを送ってきたランデルたちに聖我は申し訳なさでいっぱいになってしまった。

「(……義父^{ガハルド}さんは除外だ、助けても後で戦うことになるし疲れが溜まる……なら義父^{エリヒド}さんなら……！)」

結果を言うとエリヒドはガハルドと一緒に酒に酔っていた。助けることができないうか酔っている中そんな判断力はないだろうと思つて聖我は目を背けたのだった。
「(……明日ゆっくり休もう……そうしよう……！)」

聖我は覚悟を決めて貴族とプロトアーサーのカリスマ全開で貴族たちと話を始め、利益を求める貴族達には一応パイプを作っておき、聖我と婚約したい子女達には婚約をとるための言質を取られないよう奮闘しながら話したのだった。

尚、聖我は翌日普通に何時もの時間に起きて帝国の訓練場でストレス発散をするかのように模擬戦を挑んでくる兵士でアクセルとクラウ・ソラスを使って100人抜きをこなしていた。

その情け容赦のない兵士の心を折るような1000人抜きを靴の中で見ていたアクセスは、

「こいつ正真正銘のバケモンじゃねえか」

と靴の中で呟いていたらしい。(帝国の兵士達は心を折るどころかもつと強くならな
いと、と思つて回復したらまた勇猛果敢に聖我に挑みに行つたらしい。流石帝国、傭兵
の興した国である)

約束

「……今なんて言ったのかしら？耳が遠くて聞こえなかったわ」

帝国での会議や戦闘、披露宴を終え、聖我は雫にあることを伝えていた。そのあることとは……

「だから言っているだろう、南雲ハジメは生きています、そして私は南雲ハジメに接触、魔剣を解析させて魔剣システムを再現させた、と」

南雲ハジメが生きているということである。最初聖我は魔剣システムの解析を終えたことをエリヒドに伝え、稀代の天才錬成師が誰なのか知っているために（聖我↓リリアーナ↓エリヒドという順）褒美を秘密裏に聖我に渡しに行かせ、公的には何もしなかった。

そして聖我は魔剣システムを使って雫の光刀を変身できるように改良しようと雫に訓練の後光刀を持って聖私の部屋に来て欲しいと伝えた。

その言葉を聞いた雫はまた強くなれるとウキウキしながら聖私の部屋に向かい、会議で話していた魔剣システムをあたかも再現できているふうに話している聖我に驚いてしまう。

驚きのあまり肩を掴んで聖我を揺らす雫を聖我は慌てて止めて魔剣システムの再現を行なった人間の詳細を話し始め、最後に名前を言ったのが先程の前の場面である。

「早く香織に伝えないと！」

ハジメが生きていることを香織に伝えようと雫は急いで立ち上がって部屋を出ていこうとドアノブに手を掛けるとドアノブから電気が流れてドアノブから手を離す。

「何するのよ！」

聖我の部屋であるために聖我が何かしたのだろうと怒りの目を向ける雫。だがそれに対して聖我は心外だ、というような目を向ける。

「私は何もしていないよ。私は」

「何よその言い方……」

「私がやりました！」

訝しげな目を向ける雫と聖我に向かって可愛らしい声と共に聖我のベッドの布団の中から金髪の聖我の婚約者ことリリアーナが飛び出した。

「何してるの、リリィ……」

「聖私の部屋で聖私が訓練する前まで一緒に寝ていただけですが何か？」

リリアーナを怪しい人を見るような目で見る雫にリリアーナは誇らしげに聖我と一緒に寝ていたことを雫に伝えた。

「……まあいいわ、早く出してくれるかしらリリイ、出ないと叫ぶわよ」

「どうぞどうぞ、防音の結界に閉じ込めるためのトラップが使われている結界、侵入するものを光の縄と布でぐるぐる巻きにするトラップがつけられた結界が貼られている合戦結界を敗れる戦力があるならどうぞどうぞ。ちなみに聖我と私の共同作業で作られてますから硬さと安全性はバッチリです！」

「……………」

その言葉に雫は沈黙してしまった。絶対破れねえだろと。破れるのこの世界にいないと思ってしまったために。ちなみにこの結界、仮面ライダーベリオンとなったハジメのシアフォームの必殺なら何とか破ることはできるようになっていた。

もうひとつ余談だが聖我の光武器精製の文字数が7文字に増えていた。今までの戦いで急激に効果が成長したらしい。

「さて閉じ込めたのは白崎香織にハジメのことを伝えないためだ」

「えっ？」

「信じないかもしれないがハジメは今こんな見た目になってしまっている」

こんな見た目と聞いてどんな悲痛な姿をしているのかと思つて聖我のガトライクフォンを見ると、そこには白髪赤目眼帯義手のいかにも厨二病が着そうな服を着ているキメ顔を決めているハジメを見て思わず吹いてしまった。

「プツ……これほんとに南雲くん……? プツ……」

大笑いを我慢しているが所々小さく笑っている。高校に通っていた頃のハジメを見たことがある者としては考えられない。そして聖我は次の写真を見せた。すると雫がポカーンとして口を大きく開いた。

「これはハジメのハーレムメンバーだ」

「……………え?」

聖我が見せた写真の中には静かそうで金髪赤目でどこか高貴な12歳の女の子と元氣ハツラツそうな巨乳青髪兎人族、おっとり系美人な海人族。そして海人族の子供までいる。

「あつはつは……リアルハーレムですな分かります」

雫が壊れた。高校に通っていた頃から変わりすぎているのだ。厨二病がさらに加速し、ラノベのハーレム系主人公のようなことを知り合いがしているのだから当然だろう。

「で、なんで香織に伝えちゃ駄目なのよ?」

「ハジメからの要望と私とリリーの考えからです」

「え?」

「ハジメは白崎香織に苦手意識を持っています。白崎香織のせいでハジメはいじめられ

ていたと言ってもいいでしょう。私に次ぐくらい強くなっても苦手意識は治らないってことでしょう」

「気になる言葉があっただけど、そこはいいわ、それで貴方とリリイが考えたことって？」
雫はハジメが聖我の次に強いという言葉が気になったがそれを一旦心の中にしまい、次は聖我とリリイの考えを聞くことに。

「白崎香織は今情緒不安定だ。そんな状態でハジメに出会ったでしょう。また暴走してハジメの気持ちを考えず突貫しに行くだろう」

「それで？」

「別にハジメが高校に通っていた頃なら別に私も止めやしないが、さすがに戦力が減るのは困る」

「？」

「ハジメと金髪の子、ユエ嬢と青髪の子、シア嬢は私に届くレベルの実力を誇る実力者だ。それこそ勇者や白崎香織が瞬殺されるほどのな」

「まさか……」

聖我の言いたいことを大体理解した雫は顔を青ざめさせる。

「魔族との戦争前にハジメのハーレムメンバーの逆鱗を買えば白崎香織はこの世に生きては行けない……例えばハジメに突貫して迷惑をかけるとかな」

「……」

「それにハジメも一応爆弾だ、白崎香織がもしユエ嬢とシア嬢を侮辱するなりすればハジメがキレル」

「……わかったわ」

聖我の説明を聞いて納得したのか香織に話すことはしないと約束した雫。そして聖我は雫の光刀を改造し始めるのだった。

そしてしばらく経ち、聖我は黒い鞘、刀身は光、柄も黒な刀を作り上げた。そしてハジメが言っていたアームドブックも作ってあった。

「雫、これが聖光刀・クサナギだ。そこにあるクサナギシエルフにこのアームドブックを装填してクサナギトリガーを押せば変身できるし、素の状態でも強い。これからも光刀と思つて使つてくれ」

「感謝するわ聖我、これからもメンテナンスなりよろしくね」

雫はそう言い残して訓練場に戻り、そのまま試し斬りをするためにメルドと模擬戦をし始めたのだった。

「クロスセイバーかっこよかったわねえ……それにクリムゾンセイバーもファイチャーリングセイバーも……あれらを聖我はこれから使うことになるのよね……」

テレビを横になりながら見ている女性は次に送らなければいけない本を取り出した。するとその本は次の持ち主である聖我を求めて女性の手から飛び出し、そのまま聖我の元へと飛んでいってしまった。

「……あの子の影響は計り知れないわ、南雲ハジメのリベリオン然り、八重樫雫のクサナギ然り……プリミティブ……原初の力をどうやって操るのかしら……これからが楽しみだわ!」

そう言つてリモコンを操作して違う番組を見始める女性であった。

「エヒト様は勇者に傷をつけたあの童を殺そうとなさっているのですか?!……わかりました、その神託……喜んで受けさせて頂きましょう」

「ええ、計画の成功を祈ります」

見飽きた老人・イシユタルは銀髪の女性からエヒトの神託を聞いてやる気を燃やしているのを見て嬉しげに笑っていた。

だが銀髪の女性はイシユタルが立ち去るのを見て表情を曇らせる。

「……あんのクソ上司の言うことを聞くのもやなんですよね……やりたくは無いですけど、やってしまいましょうか」

銀髪の女性は大剣を2本腰に携えながら背中から翼を出してそのまま大空を舞い、聖教教会へと向かったのだった。

発見!大迷宮!

雫に聖光刀・クサナギを作ってから少し経ち、聖我とリリアーナ、雫はとあることについて話していた。

そのとあることは……

「本当に光輝達はどこに行ったのかしら……私以外の勇者パーティーと動ける大迷宮攻略組が少し前から消えているのよ……王様に聞いてみても知らないみたいだし……」

「探査にも引つかからないから何処か遠くにいるか……それとも集団でボーコットでもしに行つたか?」

「それやつたら本当に父上に追い出されますよ……そこまで頭が回らないとは思っていませんから……」

一昨日から光輝達勇者パーティー、永山率いる永山パーティー、小悪党組が消えているのだ。それもなんの音沙汰もなく。

「イルワさんにフューレンに来たか、他の街に来たか一応聞いてみたが来ていないらしいし、何処かの貴族に呼ばれてなんかやっているんじゃないか?」

「それも有りそうだけど、それなら着替えなりも持つていくでしょ? 光輝に着いている

メイドさんからニアさんが聞いたただけ……」

「武装以外は全て部屋の中にあつたようなのでどこかの貴族に呼ばれて……ということ
はなさそうです」

聖我やリリアーナ、雫に加えて雫に付いているお付のメイドのニアが光輝の専属メイドから聞いた情報を流しながらどこに行つたのか考察する。

そんなことをしていると突然リリアーナの部屋の扉を叩く音が響く。

「……失礼します……ハアハア……」

「どうしたんですハルナさん、ほら息を吸って、すみませんニアさん水持つてきてもらつていいですか?」

「わかりました」

リリアーナが扉を開けるとそこにはリリアーナのメイドの一人であり聖我が好きな女の子ことハルナが息を切らしてそこにいた。リリアーナはニアに水を持つてくるよう頼み、ニアが持つてきた水をハルナに手渡す。

「はあ……落ち着きました……」

「それで何があつたんだ? ハルナさんらしくない」

「えつとです……勇者様方が見つかりました。聖教教会です」

その言葉を聞いた聖我達は首をかしげる。

「なんで聖教教会なの?」

「新しい大迷宮が見つかったらしく、その攻略に向かったらしいのですが、オルクスより攻略難度が高かったらしく……」

「失敗したわけね」

雫はオルクスより攻略難度が高かったという言葉聞いて光輝達が失敗したことを察した。どこに光輝達がいたのかわかって一同が安心する中、聖我はハルナに1つ質問する。

「その大迷宮、誰からの情報だったんだ?」

「えっと……イシユタル様……です」

ハルナからの報告を聞いたあと聖我とリリアーナ、雫はエリヒドから呼び出されていた。

「今回呼んだ理由はわかっていると思うがバーン大迷宮と呼ばれる新しい大迷宮を見つけたことについてだ」

「ええ」

「イシユタルが見つけたらしいのだが、そのところの事実確認はまだだ。大迷宮を見つけたイシユタルが消えたし、勇者も負けた……真面目にどうしようか悩んでいる」

大迷宮を見つけた肝心のイシユタルは光輝達がバーン大迷宮を攻略した後すぐに消えてしまったらしい。

「光輝だけじゃなく、香織や鈴、恵里まで倒れてるし……永山君たちも失敗したなら攻略出来るのは聖我と後は……」

「ハジメか……」

聖我はハジメを呼び出そうか悩んでいた。だが他の大迷宮を攻略しているかもしれないし、どうすればいいか考えていると、

「聖我、南雲ハジメを呼び出してくれ。邪険に扱っていたこともあるが、南雲ハジメの目的は大迷宮の攻略だ。攻略してくれるだろう」

「私はどうすれば?」

「……南雲ハジメと一緒に攻略してもらいたいが、イシユタルが消えたことを考えるときな臭い……」

「聖我、戦争時の分身は可能ですか?」

聖我が大迷宮に潜るか否か悩んでいるエリヒドに天啓と言ってもいい提案がリリ

アーナからもたらされた。その案を即採用し、聖我にスラツシユに変身させる。

《銃剣撃弾!》

《銃でGO! GO! 否! 剣で行くぞ!》

《音銃剣錫音!》

《甘い魅惑の銃剣が、おかしなリズムでビートを切り刻む!》

そしてこぶた三兄弟をシンガンリーダーにリードさせて必殺技を発動する。

《こぶた三兄弟!》《イエーイー!》

《錫音音銃撃!》《イエーイー!》

すると聖我、スラツシユが3人に増えた。

「「さて、変身を解除してつと……」」

聖我（これからは聖我1、聖我2、聖我3とします）は変身を解除し、1人はエリヒドの近くに、1人は雫の近くに、1人はリリアーナの近くに移動した。

「じゃあ、私がエリヒド、義父さん聖我2が雫とリリアーナの護衛でいいかな? 聖我3はハジメと

バーン大迷宮の攻略宜しく!」

「おい待て、何が悲しくてハーレム野郎と一緒に攻略せにやなんのだ」

「「なんか不満か?」」

「当たり前だ! あいつら絶対攻略中もイチャつくだろ!」

「別にいいだろ、私とお前は一緒なんだからさ」

「じゃあ変われ！」

「……嫌だ」

聖我3人が言い争いをしているのを見ながらため息をつくりりアーナ、雫、エリヒドの3人であった。

「へえーこれで光輝くんが手に入るの？」

「そうよ、性能実験も終わったからね。さあ……欲しいものを手に入れるために暴れてきなさい」

「ありがとね……これで光輝くんを2回も傷つけたあの罪人を殺せるよ……それにその取り巻きもね……」

薄暗い路地の真ん中でベッドで寝ているはずの恵里がシークから先が刃になっている杖を受け取っており、そこから立ち去って行った。

「魔剣・ワイズブレードロッド……私たちの魔剣には負けるけれど、その性能はあの神刃聖我さんの聖剣を超えるわ……」

「私たちの魔剣……か、貴様の世界の著名な魔剣を元に行っているのだろうか？ 銘はなんというのだ？」

シークが恵里に渡した魔剣の名前を呟いていると、戦争時に聖我と戦ったフリードが闇の中から現れ、綺麗な謎の女性に問う。

「……私たちの魔剣の銘。それはね……」

「魔剣・グラムと魔剣・バルムンクよ」

「貴様からもらった説明書によると竜殺しの剣か、あの我がライバル対策という訳か」

「そうね、それに……私の能力も合わさるのだから王国を倒すのも不可能ではないわ」

「……バーン大迷宮を攻略出来ないのは痛い……仕方あるまい、さて、我が神の計画通りに事を進めよう」

「我が神……ね、私は信じてないけど！」

シークがそう吐き捨てた後、フリードと謎の女性はそのまま闇の中へと消えていったのだった。

攻略開始

聖我が分身した後、どちらがハジメと共にバーン大迷宮に行くか議論し、その結果聖我Ⅰがハジメに、聖我Ⅱが王城の警備、聖我Ⅲがリリアーナの警備となり、エリヒドの護衛はメルドと雫が請け負うことになった。

「という訳なんだ」

「いつペン殺していいかテメエ？」

聖我Ⅰはガトライクフォンでハジメたちにバーン大迷宮が発見されたことを報告し、リベリオンの姿で来るよう指示した。何故リベリオンなのか、それは例の治癒術師にバレンというようにするためである。

「さて、バーン大迷宮のコンセプトってなんなんだ？」

「わからん。というかコンセプトは入らないとわからねえよ。魂魄魔法が手に入る……それしかわからねえ、ただ神山、聖教教会にあると考えるならエヒトに関してのことだろう」

「なるほどな、それで……そこのお嬢さんは誰だ？ 魔剣システムを貰いに行った時はいなかったが……ハジメのハーレムの新メンバーか？」

聖我ハハジメとバーン大迷宮の内容について話しているとユエとシアと一緒に雑談しているもう1人の和服の女性に気づいてその女性について問う。

「いや、お前から連絡を受けてからブリーゼで向かおうとした時に強いオーラを俺たちがいた冒険者ギルドで感じてな、接触したら王国に行つて確かめたいことがあるつて言つててな」

「それで妾はハジメ殿に連れられて王国に辿り着いたという訳じゃ。簡単に目的の英雄殿に辿り着いたわけじゃし！」

「魔族では無さそうだが……なあ一応こここの国の中枢なんだけど、得体の知れない人連れてこないでくれないか？」

「いや、どうせ俺とお前なら簡単に叩き潰せるからいいだろ？それにユエとシアもいるし」

「いきなり物騒?!」

聖我が和服の女性をハジメが連れてきたことに苦言を零すとハジメが大丈夫と言う。それに対して和服の女性はツツコミを入れていた。

ちなみに今聖我とハジメ達、和服の女性がいるところは聖教教会の会議室のようなどころにいる。英雄と言われている聖我、ハジメ、ユエは兎も角、シアが入れるわけが無いのだが、シモンが大迷宮攻略のために例外として入れてくれている。

聖教会は王国の信仰の要であるから得体の知れない実力者を入れてはいけないのだが……入れてしまっていた。

「……さて、探査」

聖我は和服の女性が何者であるか探るため最近出番がめつきり減っている探査を和服の女性に掛ける。

「本名はティオ・クラルス、天職守護者、種族龍人族……龍人族？」

聖我が探査をかけた結果を呟いている中、そこまで詳しいことはわかるまいと安心してきっていたティオを種族名を言うことで顔を青ざめさせたが、聖我は聞き覚えのない種族に戸惑っていた。

「龍人族は高潔で清廉。私は皆よりずっと昔を生きた。竜人族の伝説も、より身近なもの。この王国を滅ぼそうとするはずがない」

「ユエさんが言うなら一応信用しよう。だがおかしな行動を取ればリリイのためその場で斬り伏せる」

「「王国のためじゃないんかい!?」」

先程まで国の中枢がどうたらこうたらなんて言っていたのにリリアーナのためとたたまったためにその場のハジメ達から総ツツコミを受けた聖我であった。

「ここか……なんか血糊がいっぱい散ってるなあ」

「勇者パーティーと勇者を比べたらダメ、……この世界の勇者はどちらにせよ神の傀儡になつて」

「ハジメと勇者を比べたらダメ、……この世界の勇者はどちらにせよ神の傀儡になつて
いる訳だし」

ハジメ達が勇者をデイスっている中、ハジメパーティーと聖我、ティオはバーン大迷宮に来ていた。行き方は聖教教会の地下深くに向かつて専用の鍵を地下深くにある扉に挿してその扉を開けるだけ。そこには勇者パーティーが撒き散らしたと思われる血糊がべつとり着いていた。

「……来るぞハジメ、準備しろ」

聖我は仮面ライダーブレイズのワンダーコンボのためのワンダーライドブック3冊と水勢剣流水の納刀された聖剣ソードライバーを取り出して腰に巻き付けて装填する。

「（あれが英雄殿が使っているアーティファクト……）」

「変身！」

《流水抜刀！》

《蒼き野獣の鬣が空になびく!》

《ファンタステイック!ライオン!!》

《流水三冊!》

《紺碧の剣が牙を剥き、銀河を制す!》

聖我が水勢剣流水を構え、ティオは鉄扇を懐から取り出して炎を纏わせる。ハジメ達も各々の武装を取り出して構える。

出てきたのは鎧を纏い、剣を持った骸骨騎士。それが数十体現れた。

「あの鎧はアザンチウム程じゃないが硬い!シア、俺と一緒に鎧を砕け!砕いた後に聖我、ユエ、ティオは骸骨共を片付けろ!」

ユエ、シアは骸骨騎士を倒すために指示を無言で頷き攻撃を始める。ティオは鉄扇に炎を充填し、聖我はピーターファンタジスタをソードライバーから外して水勢剣流水に読み込ませる。

《ピーターファンタジスタ!》

《ピーターファン!ふむふむ……》

水のエネルギーを水勢剣流水に充填させる。

「オラアですう!」「パイルバンカー!」

骸骨騎士達の鎧を衝撃で全て破壊すると聖我とティオは左右の骸骨騎士を、ユエは中

中央の骸骨騎士を破壊しようと攻撃する。

「はあ！」

《習得一閃！》

「緋槍！」

炎の長いビームが右の骸骨騎士達を焼き尽くし、水の斬撃が左の骸骨騎士達を真っ二つに切り裂き、炎の槍が中央の骸骨騎士を焼き貫いた。

「なあハジメ、本当にこれ最初の大迷宮の仕掛けか？弱すぎる」

「そうだな、そこまで強くない、どういう……ッ！」

『この部屋は骸骨騎士が死んでも半永久的に復活する部屋である、行け、不死身の骸骨達よ……』

どこからか男の声が聞こえ、骸骨騎士達が鎧と共に復活する。そして剣をこちらに向けて振ってくるが、

「破壊がダメならば、封じればいいだけだ！光武器精製！鎖よ！」

光の鎖が骸骨騎士達を拘束する。そして聖我は骸骨騎士達の武装を剥ぎ取る。

「な、何してるのじゃ？」

「？普通相手の武装を削ぐのは当たり前だろ、神代の者が作り出した武装……何処かで使えるかもしれないしな」

聖我は骸骨騎士達の武装を一通り剥ぎ終わるとその武装を無限収納BOXにしまつていく。

「あの武装、魔法かかっている」

「え？どんな魔法なんですか？」

「危ない魔法はなく、劣化はしているけど再生魔法が少しかかっていたり、重力魔法がかかっている。私たちは使わないけど、兵士が使えば魔人族と対等に戦えると思う」

「え？そんな魔法ついていたの？ラッキー！」

ユエの言った魔法が付いていることに驚き、とりあえずメルドに渡すかと考えて閉まっておく。

「……多分勇者は無限に復活する騎士を倒し続けて疲弊したんだろうな、破壊ができないなら拘束という考えがなかったんだろう」

「……一応、勇者なんだけどなあ」

「(最初勇者探つて来いって言われたんじゃないかなあ……)」

ハジメ、聖我、ティオが勇者に落胆し、ここにいる全員の勇者の株が下がったのだつた。(元々底に着いているが)

「ノイント様、次はどうすればよろしいのでしょうか？エリヒド王にバーン大迷宮を報告し、私は聖教教会から消えました……他に何をすれば？」

消えたはずのイシュタルは銀髪のワルキューレ、ノイントの前で平伏していた。

「そうですね、貴方はもうやることはないですし……じゃあ死んでください」

「え？ぎゃああああ!？」

イシュタルはノイントに双大剣を首に振られ、そのまま絶命した。そしてノイントは双大剣に着いた血糊をハンカチで拭き取ると空を見上げる。

「……あのクソ上司、次は何をさせる気ですか!?!……はあ、私にこのブラック企業から助けてくれる白馬の王子様はいませんか……出来ればイケメンで……私に優しくしてくれる方はいませんかね……」

ノイントはため息をつきながら俯く。

「あら、そんな方はいないと思いますけど。神のお人形さんを助けてくれる方なんて」

「シーク……」

「ふふつ、そろそろ実験の始まりですよ、我々の魔剣兵士と私とフリードの魔剣の実験をね！」

何処か禍々しい雰囲気、剣を持ちシークは宣言し、ノイントはやっぱり無理よね……
とさらにため息を着くのだった。

前座を超えた第一階層

聖我達は骸骨騎士達を全て拘束し、装備を全て取り去ってから骸骨騎士を拘束したことで現れたやたら重厚そうな扉を蹴り飛ばして次の部屋に向かった。

すると突如謎の光が出てきてハジメの宝物庫と聖我の無限収納BOXを照らし、大迷宮攻略の証を自動的に取り出してスキャンし始めた。

そしてスキャンが終わると骸骨騎士の部屋でも聞こえた男の声が真のバーン大迷宮の解放を宣言した。

『骸骨騎士の部屋の突破を確認。……大迷宮踏破の証を確認。……攻略メンバーの人数を確認。……完了、これより真のバーン大迷宮の部屋を解放する』

すると5つの入口としてなのか、5つの木のドアが現れた。そしてハジメ、聖我、ティオ、シア、ユエが目を合わせてアイコンタクトを取り、それぞれ木のドアを開けたのだ。

聖我が木のドアをくぐるとそこにはかつて魔人族が王国に急襲してきた時聖我やメルド、ガハルド達が戦った戦場と同じ光景があった。

「……どういことだ？ 魂魄魔法はどんな能力を持つ魔法か気になってくるが……まずは目の前の敵に集中しようか！」

聖我がそう一人で呟いていると目の前にあの戦場で聖我が戦った魔人族や魔物が現れた。そこには聖我が死闘を繰り広げたフリードも目の前におり、アザンチウムの腕を構えていた。

「変身ー！」

仮面ライダー最光に変身し、エックスソルジャーを聖剣サイコウドライバーバックルに装填し、ライドシグナムでトラディオライドを押し込む。

《最光発光！》

《Get Shining power! Go to Battlefield! エックスソルジャー!!》

《エピソードー!!》

《戦場に参上！ババババーン！》

あの戦場では結局出番のなかった仮面ライダー最光・エックスソルジャーに変身し、聖光剣クラウ・ソラスの能力を使ってソードビットを大量に生み出して魔人族と魔物を

蹴散らしながらフリードに向かって急接近した。

「セイー!」

光の力と光のオーラを組み合わせて高熱となった光剛剣最光をフリードに振るうが、アザンチウムの右腕に阻まれてそのまま左腕で掌底を放たれ吹き飛ばされる。

「アザンチウムは厄介だが、これなら行けるだろ!」

再度ライドシグナムでトラードイオライドを押し込むことで違う姿となる。

《パワー最光!》

《Get Shinning power! Power up! エックスソルジャー!!》

《エピソード2!》

拳に光のエネルギが集まり、光のグローブができる。そして重力魔法でフリードの動きを止めながらカー〇イのバルカンジャブのようなパンチを連続で放つ。

フリードはそれを再びアザンチウムの腕で防ごうとするが連続パンチとパワーに特化した今の姿には世界最高硬度と言われるアザンチウムもあまり意味もなく、パンチ数発でアザンチウムは砕け散った。

そしてすかさず聖我はエックスソルジャー ワンダーライドブックを閉じて2回トラードイオライドを押し込み、光のグローブにさらに光を込める。

フリードは慌てて灰竜を召喚するがブレードビットが灰竜を撃墜し、聖我が必殺技を

叩き込む道を作り出す。

《ファイニッシュ・リーディング!》

《Shining Speed Impact!》

《超・最光!》

光のパワーを込めたグローブをフリードの腹に向かってロケットパンチのように打ち出してグローブがフリードをその辺にあつた岩に打ち付ける。

「アクセル!」

『おう、任せろ聖我!』

《Acceler! Acceler! Acceler!》

聖我はアクセルの能力と重力魔法と最光のスピードを組み合わせた超スピードでフリードに急接近してフリードに突き刺さっている光のグローブに向かってパンチを放つ。

フリードにはロケットパンチで衝撃が入っているが、さらに光のグローブに勢いよくパンチを叩き込む事でさらに衝撃を与えたために岩を破壊してそのままフリードを吹き飛ばす。

吹き飛んでいくフリードに向かって聖我は慢心することなく無限収納BOXからとある札を取り出してその札を切り裂いた。

『これが私と（俺と）！』』

するとその札から魔法陣が7枚ほど現れ、中心に穴を作るように魔法陣が移動する。そしてその穴に小さい結界が現れる。

「リリーのー！」

結界の中に聖我の魔力とオーラが充填されていき、十分に魔力とオーラが集まると結界が破壊され光の球体となって聖我の目の前に降りてきた。

「超広域殲滅魔法！」

聖我はその球体に光剣を突き刺して球体を爆破させる。それがトリガーとなったのか、球体の中から極光と光の衝撃波が聖我を中心に広い範囲で放たれた。

「アウローラ・デストラクション破滅の極光!!!」

聖我の起こした超広域殲滅魔法により、聖我がいた空間にいた魔人族、魔物、それに

加えて岩や木、草、雑草すらも消え、戦場とはいえ色々残っていたはずの土地が荒野と
なっていた。

「……調子乗りすぎたかな……リリイと少し抑えた魔法に作り替えよう」

先程の超広域殲滅魔法は聖我とリリアーナ、ついでにアクセルが組み上げた術式を札
に書き、魔力を通して札を切り裂くことで発動していた。

その威力は考えている時はまあ魔族の軍隊1割くらい削り取れば御の字かな？
となっていたが、聖我のオーラを組み合わせることで威力が桁違いになつてし
まったのだ。

『第一階層、攻略完了を確認した。第二階層への移行を宣言する』

「……そもそもこの階層って何が攻略完了の条件なんだ？」

先程も聞いた男の声が聞こえ、聖我を移動させようとするが、聖我はこの階層がそも
そもどんなことをすれば攻略完了になるのかと思ひそうこぼした。

だが男の声は聖我の疑問を解消せずそのまま聖我を違う階層へと移動させたの
だった。

第二階層の黄金と騎士王

聖我は第一階層から第二階層へと移動していた。だが聖我は戸惑っていた。なぜならそこには白い空間が続いており、中央にぽつんと宝石が浮いているだけなのだから。

「ここは？何をすればいいんだ？」

聖我は先程の男の声が質問を投げかければ聞こえると思つて部屋に何をすればいいのか問いかける。

『この部屋は記憶の間である。貴様が印象に最も残っている者を再現し、それを倒せば攻略完了と見なされる。……貴様の敵には限らんがな』

「私の敵には限らない？……どうということだ？」

聖我は意味深な男の言葉を聞いてもう一度問いかけるもそれには男の声は答えず、仕方なく聖我は中央に浮いている宝石を触った。

すると宝石から攻略の証を確認した時に出た光と同じものが発射され聖我を包み込み、スキヤンを始めた。

『……なるほど、中々面白い記憶を持っているな。異世界の人類を救うためにある人間が人類史に挑む物語。正義の味方になりたい人間がある戦争に巻き込まれる物語。そ

れに他にも色々面白い物語を見てきたようだ……」

「(私の記憶を読み取っているのか? 異世界の人類を救うためにある人間が人類史に挑む物語はFate/Grand Orderだろう、それに正義の味方になりたい人間がある戦争に巻き込まれる物語はFate/Stay nightだろうな……)」

『おい聖我! 俺の記憶も読み取られている!』

その言葉に聖我は驚くがよくよく考えてみれば神器に封印されただけで死んだ訳では無いアクセルの記憶が読み取られるのは普通だろう。

『貴様の宿す龍の戦いも面白いな、力を倍加する龍との戦いや半減する龍との戦いとは……』

『昔のドライブとアルビオンの戦いか!』

「え?! お前赤龍帝と白龍皇とも戦ったことあるのか?!

聖我は今まで聞いたことの無いアクセルの戦いの記憶に驚いてしまう。

『聞かれなかったからな……まあ言わなかったのは悪かったさ』

「まあいいさ、だが記憶まで見るということはやばい敵が来るぞ、カイニスなどの神霊はもちろん、ゲーティアやティアマト、女神ロンゴミアド辺りが来たら私の大迷宮攻略は不可能に近くなる……」

『いや、それらのボスはレベルが違うからな。この世界の魔法で再現出来るレベルまで

強さを下げるだろうからそこまではない』

「それでもやばいもんはやばいだろ……流石にオーフィスやグレートレッドと戦ったことは無いだろうな？」

『ない、あつたらそもそも俺は滅んでお前の神器になつてない』

「だよな〜」

そんなふうに聖我とアクセルが雑談しているとスキヤンが終わり、謎の光が人の形を作る。それも2人。

「2人だ?!」

『さあ、第二階層の試練の始まりである。1人目は異世界の地球の紀元前、シユメル之都国家ウルクを治めていた半神半人の王……』

1人目の光が金色の鎧を身にまとった金髪赤目の男を作り出す。

『英雄王ギルガメツシュユ!』

『ギルガメツシュユだ?!』

ギルガメツシュユはメソポタミア文明の王にしてギルガメツシュユ叙事詩の主人公、Fate世界ではかなりの強さを誇るサーヴァントである。

その宝具、王の財宝と乖離剣エアは様々なサーヴァントを屠ってきている。

『2人目はアーサー王伝説に登場する円卓の騎士の一人であり、選定の剣を引き抜き、不

老の王となつた騎士にしてある世界では女体化した……』

2人目の光は黒のスーツをまとつた金髪青眼の女性を作り出す。

『騎士王アルトリア・ペンドラゴン！』

アルトリアはFate世界では女体化しており、聖我の好きなキャラクター、そして聖剣エクスカリバーを使う。そのエクスカリバーの火力は凄まじく、空想でありながら最強と評される剣である。

「よりによつて、FateZeroの2人か……」

聖我はため息をつきながら2人のことを思い出す。なぜ2人が出てきたのか、それは聖我がFateZeroをよく見ていたからであろう。アルトリアの黒スーツいいなーと思ひながら見たり、イスカンドルとギルガメッシュの戦いもいいなーと思つていたからだ。

「イスカンドルはなんで出ないんだ？」

『単純にキャパオーバーだろうな、だが2人は多分Fate世界の實力を完全に發揮できさるだろうさ。心してかかれよ！』

「おうー」

聖我の気合いを入れるための声が響くとギルガメッシュが王の財宝により発生したゲートを2つ展開し、小手調べだと言わんばかりに聖我に向かって投射する。

ゲートから飛び出た2つの剣を弾こうと聖我は聖光剣クラウ・ソラスを振るが、宝具と作り物では硬度が違うのか、クラウ・ソラスを折って破壊されてしまった。

「折れたア!？」

『やばいな……』

「変身!」

《烈火抜刀!》

《When a knight enters the battlefield
With Excalibur.》(ゴールデンアーマー!)

《The Knights of the Round Table
head for the kings support with the Brave
Dragon.》(スカレットブラスター!)

《And the knight defeats the enemy with
his friends and the Brave Dragon.》(ス
トリーオブアーマー!)

《Dragonic Arthur!》(ドラゴニックアーマー!)

《我らは勝利する!》

仮面ライダーセイバー ドラゴニックアーマーとなってギルガメッシュに斬り掛か

るが、横から透明な剣に攻撃され吹き飛ばれる。

「風王結界か……厄介だな！」

アルトリアの宝具、風王結界によってエクスカリバーは隠されており、しかも見えな
いために手首の動きを見ないと攻略は出来ない。

聖我はドラゴニックアーサーが長いこと続かないことを知っているためにドラゴ
ニックアーサーのページを叩く。

《 Summoned is the Knight of the Round
Table!…… Bedivere! 》

ドラゴニックアーサーのページから炎の竜巻が出現しその中から炎の鎧を纏った銀
の義手を持つているベディヴィエールが現れる。

「我が魂食らいて奔れ、銀の流星！」

ベディヴィエールは詠唱を行って走り出す。徐々にスピードが上がりそのままアル
トリアの腹に拳を叩き込もうとするが……

「フーン！」

アルトリアはエクスカリバーに纏わせた風を解放することで暴風を打ち出してベ
ディヴィエールの腹に逆に一撃入れ、ベディヴィエールを消し去った。

「何!」

『聖我、来るぞ!王の財宝だ!』

聖我が驚いている横でギルガメツシュユが先程の2つのゲートより多く、数十のゲートを展開し聖我に宝具を放つ。それらの中にはドラゴンスレイヤーと名高いグラムや回復不可能力を持つハルペーなどが入っており、急いでアクセルを使用して避けようとするが、聖我の目の前にはアルトリアがおり、動こうとする聖我に容赦のない一撃を叩き込んだ。

「ガハア!」

アルトリアの一撃によって吹っ飛んでしまい動くことが出来ない聖我にギルガメツシュユが放った宝具が殺到した。それを聖我は防御することができずにそのまま受けた。

『ぎゃああああ!』

アクセルもドラゴンであるためにグラムによってダメージが入り、聖我はドラゴンの力を使ってアクセルも使用しているために倍以上のダメージが入る。

聖我はセイバーの変身を解除してしまい、そのまま倒れ込んでしまう。

『せ、聖我!』

アクセルは立つように聖我に呼びかけるが、聖我は立つことが出来ずにそのまま地に伏していた。

それを見て情けをかける訳もなく、アルトリアは聖我の首にエクスカリバーを振り下ろした。

進化の時

アルトリアの斬撃が無慈悲にも聖我に向かつて放たれた時、聖我也アクセル持つ予期せぬことが起こった。なんと聖我の首にかけられている無限収納BOXから骨の長いドラゴンの腕が現れ、アルトリアの斬撃を弾いたのだ。

「ツッ!？」

これにはギルガメッシュとアルトリアも驚き、一歩下がって行く。そして聖我がゆっくりと立ち上がった。

こんな奇跡のような展開の中、アクセルは焦っていた。なぜなら……

『(不味い! 聖我の心と身体がプリミティブドラゴンに侵食されている! このままでは……)』

聖我の心、身体全てがプリミティブドラゴンの意思のまま動かされているからだ。

そもそもプリミティブドラゴンとはなんなのか。それはこの前聖我を転生させた女性に聖我に渡そうとしてそのまま飛び去って行った本の正体であり、仮面ライダーセイバー内でも主人公を暴走させた禁書である。

聖我はギルガメッシュとアルトリアに応戦するために光武器精製を発動したが、そこ

で生まれたのは光の剣ではなく、黒い闇の剣。名をつけるなら闇武器精製。

聖我は闇の剣を乱雑に掴み取り、それをアルトリアに向けて投げた。すると闇の剣は鎖となってアルトリアを拘束した。

アルトリアはエクスカリバーを手放して拘束されてしまい、急いでそれを懸命に外そうとするが破壊しても再生するため破壊できず、じたばたしている。

ギルガメッシュが不味いと思ったのか王の財宝でアルトリアを縛っている鎖を破壊しようとするが、骨の龍の手がギルガメッシュの展開したゲートを破壊する。

そして聖我はアルトリアが手放したエクスカリバーを手に取り、そのままエクスカリバーをアルトリアの腹に突き刺して絶命させた。

「ッー」

ギルガメッシュがアルトリアの仇を取ろうと王の財宝を聖我の周りに数百程度展開して倒そうとするも、アルトリアが消えたのに何故か保持しているエクスカリバーと骨の龍の手が発射される前に全て叩き落とした。

「!？」

その事実を受け止められないのかギルガメッシュは近づいてくる聖我にいまいち反応出来ず、致命傷とはいかないものの左腕に大きな傷を作ってしまった。

『おい聖我！起きろー！』

「アクセルは聖我を呼び戻そうと何度も呼びかけるが、聖我は答えない。仕方なくアクセルは聖我の中に侵食しているプリミティブドラゴンを抑えようと自分も聖我の中に入ろうと意識を神器から聖我の身体へと移したのだった。」

『聖我は何処にいる……？早めに見つけてプリミティブドラゴンを抑えねばならないのだ、何処に……』

アクセルは聖我の深層心理の中に入って聖我を探す。プリミティブドラゴンに侵食されて表にいるはずの聖我の意識は深層、裏のところにいるはずと考えてだ。

『GYAAAAA!』

プリミティブドラゴンが聖我を救おうとするアクセルの行動を邪魔しようとして攻撃してくるが、アクセルは加速の力で逃げ回り、聖我を逃げながら探していた。

『GYAAAAA!』

プリミティブドラゴンの意思がアクセルを追いかける。だがアクセルは加速しながら逃げ回る。そんなことを続けていたらあることにアクセルは気がついた。

『俺をあるところから遠ざけていないか？』

アクセルはプリミティブドラゴンの攻撃を避けて逃げていたが、プリミティブドラゴンに最初に襲われた位置からだいぶ離されていた。そして最初に襲われた位置をよく見てみるとプリミティブドラゴンの意思が何かを守っているように見える。

『あそこか!』

『GYAAAAA!』

アクセルは聖我の意思がそこにあると思つてプリミティブドラゴンが守っている場所へと加速の力で突貫する。

『GYAA!?!』

その速さはいつも聖我が使っている時のスピードをはるかに超えており、光速を超えたスピードでプリミティブドラゴンを突き飛ばして進み続ける。

そして聖我がいると思われるところに着くと、長らく使っていなかった龍の息吹を放ち、プリミティブドラゴンの意思を攻撃してプリミティブドラゴンの守備に穴を開ける。するとそこには聖我の意思があつた。

『なるほど、聖我の意思を囲うことで聖我を表に出さないようにしていたわけか!』

『……あ? アクセル?』

『聖我!』

聖我の意思が再起動し、アクセルは喜んだ。だがそれで聖我の意識が戻る訳ではな

く、まだプリミティブドラゴンが聖我を操ってギルガメッシュと戦っていた。

『GYAAAAA!』

聖我の意思を再度閉じ込めてまた完全に操作しようとするプリミティブドラゴンにアクセルは聖我を護るために炎を吐く。青い炎だ。

「アクセル！」

『聖我は俺が護る！プリミティブドラゴン！俺と聖我に従いやがれ！』

アクセルがプリミティブドラゴンにそう言い放つと、何処からか赤い本が落ちてきた。

『!?!』

『GYAAAA!?!』

その本を見て聖我とアクセル、そしてプリミティブドラゴンは驚いていた。何故ならその本の表紙には炎の龍と『エレメンタルドラゴン』と英語で書かれていたのだから。

聖我がアクセルに助け出された頃、聖我を転生させた女性はその様子を見ていた。

「やっぱりアクセルが助け出したわね！ここから反撃よ！」

女性はアクセルを応援してファイティングポーズを取っていたのだが、急に近くに
あつた本が赤く光り、エレメンタルドラゴン ワンダーライドブックとなつて飛び去ろ
うとした。

「!?待ちなさい！まだ貴方が出る時じゃあ!?!」

女性の制止虚しく、エレメンタルドラゴン ワンダーライドブックはそのまま女性の
部屋を飛び去つてしまい、女性はため息をつきながら、

「……仕方ないわ、今回は始末書ものね」
と少し落ち込むのだった。

「エレメンタルドラゴン!?!」

『何故ここに……!?!』

聖我とアクセルが口々にエレメンタルドラゴンがなぜここにいるのか疑問をこぼし

ていると、エレメンタルドラゴンがアクセルを吸収し始めた。

「アクセル!?!」

『や、やめろ! エレメンタルドラゴン! 俺はプリミティブドラゴンを抑えないと……!』

抑えないといけないう前にエレメンタルドラゴンはアクセルを吸収し終わり、プリミティブドラゴンはこれ幸いとばかりに聖我を閉じ込めようと攻撃を開始する。

この空間内でまともな攻撃手段と移動手段を持ち合わせていない聖我はアクセルが居なくなつた瞬間にピンチに陥り慌てていると、アクセルを吸収したエレメンタルドラゴン ワンダーライドブックが光り輝いた。

『GYAAAA!!』

「な、なんだ!?!」

光り輝くエレメンタルドラゴン ワンダーライドブックに徐々にヒビが入り始め、エレメンタルドラゴン ワンダーライドブックは割れそうになっていた。

『GYAAAAAA!!』

邪魔だと言わんばかりにプリミティブドラゴンは骨の龍の手でエレメンタルドラゴン ワンダーライドブックを殴りつけるとエレメンタルドラゴン ワンダーライドブックはそのまま碎け散つた。

『GYAAAAAA!!』

プリミティブドラゴンが邪魔な存在を破壊したと勝ち誇り、聖我はアクセルも死んでしまったのかと思い始めていたその時、エレメンタルドラゴン ワンダーライドブックの欠片と白い龍が現れ、融合して行く。

「な、何が……」

融合が終わり聖我の目の前には大きな金の翼を広げ、赤い鎧を纏った巨大な白い龍がそこにいた。

『俺は速さと自然の力を司りし龍……』

『俺の名は元エレメンタル・アクセラレイト・ドラゴン素の加速龍アクセルだ!!!』

元素の加速龍（エレメンタル・アクセラレート・ドラゴン）とプリミティブドラゴン

「エレメンタル・アクセラレート・ドラゴン元素の加速龍……」

聖我は進化したアクセルが言った今のアクセルの名前に少し思うところがあるように顎に手を当てる。

『どうした聖我？』

「すんげえ安直な名前だな！」

『いいだろ別に……行くぞ聖我！今の俺とお前ならあれが使える！いくぞ！』

元素の加速龍となったアクセルは神器と変化し、聖我はそれを身に纏う。そのアクセルの神器の姿は両手に赤と白の籠手の中心に金色のオーブが入ったものと両足に籠手と同じカラーリングに同じオーブが入ったスパイク。

『さあ、プリミティブドラゴンを従えよう！』

聖我とアクセルが同時に叫ぶと両手両足の神器が光出し、聖我の全身を覆うように鎧が展開されていく。

《Elemental Accelerate Dragon Balance Br

e a k e r!》

赤と白の鎧に両手両足両肩の中央に金のオーブが入り、背中に金色の光翼が展開された。その姿こそアクセルと聖我の禁手化。

《Acceler! Acceler! Acceler! Acceler!》

《Flame! Flame! Flame! Flame! Flame!》

《Wind! Wind! Wind! Wind! Wind!》

《Create!》

いつもの加速は何回でも使うことが出来、Flame!とWind!の声と共に炎と風が現れ、Create!の言葉と共に炎と風の剣や槍が作られる。

『「いけえー!」』

『GYAAAAA!?!』

加速された炎と風の武器たちはプリミティブドラゴンの元へと投射されプリミティブドラゴンの意志を攻撃し始める。

「まだまだ!」

《Water! Water!》

《Land! Land!》

《Solar! Solar!》

太陽光レーザーを発生させてプリミティブドラゴンを攻撃しながら岩と水を作り出して加工し、岩の檻と水の鎖を使ってプリミティブドラゴンを拘束する。

『「従え！プリミティブドラゴン！」』

『GYAAAAAAA!』

嫌だと言わんばかりにプリミティブドラゴンは拘束を破壊しようとするも骨の龍の手を展開しようとするも、水の鎖は触れられても破壊することは出来ず、岩の檻は破壊しても崩れて重みになるだけだった。

『GYA……』

勝てないと悟ったのか聖我を操っていた意志を消し去り、プリミティブドラゴンはその体内に消し去った意志を吸収した。

そしてプリミティブドラゴンはプリミティブドラゴンワンダーライドブックとなつて聖我の体内から出るのだった。

「一件落着！」

『……ギルガメッシュ』

「あ……」

聖我がこれでようやく終わったと休憩しようとする。アクセセルが聖我に向かってギルガメツシュがまだ残っていることを言う。アルトリアはプリミティブドラゴンが聖我を乗っ取った時に殺したがギルガメツシュは殺していないのだ。

「……………急ぐう」

『おうー！』

聖我は意識の表層に、アクセセルは神器に意識を戻してギルガメツシュと戦うことにしたのだった。

聖我が意識を取り戻した時、目の前には金の武器が三本飛んできていた。それをアルトリアから奪っていたエクスカリバーで破壊しようとするが、ギルガメツシュの王の財宝の攻撃を食らっていた上、体が動かないのにプリミティブドラゴンが無理やり動かしただことで体が思うように動かない。

「……………闇武器精製！・光武器精製！」

聖我は腕が動かないことを知るとプリミティブドラゴンが聖我を乗っ取った時に

使っていた闇武器精製といつもおなじみ光武器精製を使って武器を作って投射し、相殺しようとする。

作り出した武器はハルバード三本。一本が闇武器精製、残りが光武器精製だ。それらには硬度上昇の能力が付与されており、生半可な攻撃では破壊されない。

だが流石は英雄王の財宝と言ったところか、急ごしらえで作り出した上に宝具とはレベルが違うすぎる精製された武器は少し抑えるが破壊されてしまう。

「（プリミティブドラゴンを従えたのに、ここで、こんなところで、英雄王の模造品に殺されるのか………そんなの嫌だ！ここで負けてたまるか！）」

聖我は再度光武器精製と闇武器精製を使って今度は重力操作を付与してハルバードを三本投射する。

ハルバードが当たったことで多少軌道に乗らなくなったがそれでも聖我に向かって突き進む英雄王の財宝を見て、聖我は進化したアクセルの神器を使用することにした。先程行なった禁手を行い、能力を発動する。

《Ice!Ice!》

《Create!》

Ice!とCreate!の音声とともにアクセルの神器のうち、両手の籠手から氷が現れ、それらの氷が魔力と水属性のオーラを消費して剣となる。

「氷の魔法剣……まあどこぞの殺せないタコのifストーリーでチョロつと出た剣だが……」

《Acceler! Acceler! Acceler! Acceler!》

アクセルの加速の力を使って刺突の構えをしてそのまま三本の王の財宝から投射された武器を貫く。神滅具相当に進化した神器から作られた剣は英雄王が放つ宝具に匹敵したのか宝具にヒビを入れた。

だがそれでも破壊されなかったため、どうしようかと悩んでいると無限収納BOXからブリミティブドラゴンの腕が出現し、宝具を強引に叩き落とした。

《Acceler! Acceler! Acceler! Acceler! Acceler!》

聖我は今までやらなかった治癒速度の加速を行い、自然治癒を早くして腕などの怪我を治して英雄王と戦うために聖剣ソードライバーと先程従えたブリミティブドラゴンワンダーライドブックを取り出す。

「行くぞアクセル!」

『俺は……俺たちはさらに進化する!』

『バハンスプレイク禁手化!!』

もう一度禁手化を行い、禁手によって作られた鎧が1つのワンダーライドブックへと変化する。

その名もエレメンタルアクセルドラゴン。ワンダーライドブック。エレメンタルドラゴンとアクセルの禁手が混ざりあったドラゴニックアーサーや円卓の黒龍王、エックスソルジャーと同じ聖我オリジナルのライドブックだ。

《エレメンタルアクセルドラゴン！》

《太古の龍を従え全てを追い抜く速度の頂点を目指す！》

聖我はエレメンタルアクセルドラゴンを起動し、次にプリミティブドラゴンを起動する。

《プリミティブドラゴン！》

聖我はプリミティブドラゴンをソードライバーに装填し、次にエレメンタルアクセルドラゴンをプリミティブドラゴンのゲットシエルフに装填する。

《ゲット！》

そして聖我は聖剣ソードライバーから火炎剣烈火を引き抜き、変身する。

「『変身！』」

《烈火抜刀！》

《バキッ！ボキッ！ボーン！》

《メラ！メラ！バーン！》

《アクセル！アクセル！アクセル！！》

《エ・レ・メ・ン・タ・ル！アクセル！ドラゴン！》

《エレメントマシマシ！スピードサイキョー！！》

仮面ライダーセイバー エレメントタルアクセルドラゴンドラゴンとなり、ギルガメツ
シュに様々な属性の剣、槍、短剣などの数多の武装を向けながら聖我はこう言った。

「英雄王、武器の貯蔵は十分か？」

英雄王との決着

仮面ライダーセイバー エレメンタルアクセルドラゴン。その能力はアクセルの禁手と同じ能力にエレメンタルドラゴンの能力を付与、そしてプリミティブドラゴンのパワーを加えた形態である。

更に今の聖我はプリミティブドラゴンに乗っ取られたことで得た闇武器精製、毎度おなじみ光武器精製、元素を操ることで様々な属性の武器を作り出すことができる。

強度が少し心配だが、投射される武器の多さでは英雄王を遥かに超えており、英雄王が1000の武器を投射しても聖我はそれを10000にして返してくる。

それに加えて一つ一つの武器に十数本で対応するために強度がどうのこうのもあまり問題ではない。

まあ何が言いたいのかというと、武器の投射勝負では英雄王ギルガメッシュではなく、聖我に軍配が上がった。

「ッー」

『オラオラア！まだまだ無限に出せるぜエ!?英雄王の貯蔵ももうすぐなくなりそうだなあ！』

聖我とアクセルはギルガメツシュの武器をどんどん撃ち落としていく間になんとか調子に乗り始めたようで、武器を作りながらギルガメツシュを煽りまくる。

「…… おのれ—— おのれ、おのれおのれおのれおのれおのれ……!!!」

ギルガメツシュは聖我とアクセルに武装をどんどん破壊され煽りまくられたことによつて激昂し、ギルガメツシュは自身固有の宝具を宝物庫から取りだす。

「来るぞ……」

『ああ、ギルガメツシュの最強宝具、乖離剣エアが……』

聖我はギルガメツシュが乖離剣エアを振るう前に聖我也クラウ・ソラスを構えてギルガメツシュの乖離剣エアを持つ腕を切り落とそうとするが、そこであることに気づく。

「……クラウ・ソラスが折れている……」

『……え、マジ?』

聖我とアクセルがプリミティブドラゴンを従える前、ギルガメツシュの投射攻撃に耐えきれずそのまま折れてしまつて放置していたのだ。

「……エアはやばい、防げない可能性が……」

『こちららも必殺で対抗するぞ! スカーレットブースター!』

アクセルの掛け声で聖我的左腕にドラゴニックアーサーを使った時に装備されるスカーレットブースターが出現する。

「少しだけなら使えるよな！」

《円卓の黒龍王！》

聖我は円卓の黒龍王 ワンダーライドブックを取り出して起動してスカーレットブースターに装填する。

《ブラッド！リーディング！》

《円卓の黒龍王！》

《ドラゴニック！ブラッドブラスター！！》

聖我は円卓の黒龍王をスカーレットブースターに読み込ませてから火炎剣烈火を聖剣ソードライバーに納刀し、プリミティブドラゴン ワンダーライドブックを押し込む。

《超必殺読破！》

そして聖我は火炎剣烈火を聖剣ソードライバーから抜刀する。

《烈火抜刀！》

火炎剣烈火に火、水、風、その他様々な属性の力が集まり、虹色の剣に火炎剣烈火を変えていく。

「原初を語る。天地は分かれ、無は開闢を言祝ぎ。世界を裂くは我が乖離剣。星々を廻す曰、天上の地獄とは創世前夜の終着よ。死をもつて鎮まるがいい……！」

一方ギルガメツシユも詠唱を行い、エアの回転を開始、赤く神々しいエネルギーが乖離剣エアへと集まって行く。

《エレメンタルアクセル合冊斬り！》

聖我、ギルガメツシユ両方とも攻撃の準備は終わり、あとは両者振り下ろすだけである。聖我は火炎剣烈火を十字に振り、ギルガメツシユは垂直に剣を振り下ろした。

「天地乖離す開闢の星!!!」

《left》『勝利する全属性剣!!!』《left》

天地乖離す開闢の星の極太ビームと勝利する全属性剣の十字の斬撃が激突し、強力な衝撃が幾度となく発生するが、次第に聖我の勝利する全属性剣が押されていき、劣勢に立たされる。

「『まだまだア！黒龍の咆哮！』」

聖我は奥の手として用意していたスカレットブラスターから円卓の黒龍王のエネルギーを抽出した黒いビームを発射する。

その黒いビームは十字の斬撃を押しつけていき、やっと天地乖離す開闢の星と同じ威力へと上がっていく。

聖我は後押しとばかりに火炎剣烈火を再度聖剣ソードライバーに納刀する。

《超必殺読破！》

聖剣ソードライバーに納刀されている火炎剣烈火のレッカトリガーを引いて空高く飛び上がる。

《エレメンタルアクセル合冊撃！》

その音声とともに勝利する全属性剣と黒龍の咆哮が放たれているところに現段階で出せる全属性のエネルギーが込められた蹴りを仮面ライダーがよく行うライダーキックの形で放つ。

『オールエレメンタル・クロスキック全属性勝利蹴り!!!』

聖我のライダーキックが加えられたことで勝利する全属性剣で放たれた十字の斬撃は遂に天地乖離す開闢の星を打ち破り、そのまま聖我の蹴りとともにギルガメッシュを斬り裂き、蹴り抜いた。

「……勝ったのか？」

『ギルガメッシュの生存は確認されていない。お前の勝ちだ』

「いや、その言葉は少し違うぞ」

『ん？』

「アクセルが疑問に思うと聖我はこう呟く。

「俺たちの勝ちだ」

『……聖我』

聖我とアクセルは変身を解除し、クラウ・ソラスを回収してから部屋を出ようとする。するとどこかからまたあの男の声が聞こえてきた。

『第二階層、攻略を確認した。次の階層へ案内しよう』

その声を聞いた聖我は部屋を出て、男の音が案内する所へと向かうのだった。

一方、王城では……

「ふふっ、実験内容は魔剣システムのテストと、それを伴った王女殺しよ……王女を殺すことでこの国の最高戦力の戦意を落とすことが出来るわ！それにその最高戦力は今はいないしね……」

「行くぞお前らー！」

「我が宿敵と戦えんのは残念だが、我が神のためだ……行くぞ」

シークが実験内容を話終わると仮面を被った赤と白の鎧を纏った騎士と聖我の宿敵、フリードが王城へと侵入する。

フリード達が王城に入ると同時に王都を守る結界5箇所から爆発と轟音が起こった。「あらあら、恵里ちゃんも頑張ってくれてるわね〜」

王都上空、そこには白とオレンジの魔法使いの出で立ちのようなスーツ、というより仮面ライダーウィザードに登場する白い魔法使いがいた。

「このワイズブレードロッド凄い……これなら光輝くんも僕の虜だよ……ふふっ、結界の次は雫ちゃんを捕えないとね……」

白い魔法使いの正体は中村恵里であり、スーツの中で恍惚とした表情を浮かべながら王都を守る結界を破壊していた。

「敵襲！敵襲です！」

騎士が駐屯する兵舎にて兵士が敵襲を知らせていた。だが別に王都の大結界が破壊されたことについても、王城にフリードと赤白の仮面の騎士が侵入したことについて知らせていた訳では無い。

4人の緑色の騎士が兵舎に襲撃を掛けていたからである。

「これすげえよ！魔族についてよかったぜ、なあお前ら！」

「ああ力が漲る！」

「これなら俺らにでかい顔してたあの神刃を叩きのめせる！」

「ついでに天ノ河も殺そうぜ！」

4人の緑色の騎士の正体は檜山率いる小悪党4人組であり、身にまとっているのは魔剣システムによって作られた鎧である。

4人の緑色の騎士は兵士を殺しながら兵舎を攻撃しまくるのだった。

魔人族の将、再来

フリードと赤白の騎士は配下の戦士何名かを引き連れて王城の壁を破壊して中に侵入する。近衛騎士達がフリード達を排除しようと槍や剣を構えて攻撃しようとするが、その前に配下が攻撃を阻害する。

「任せたぞ、てめえら」

赤白の騎士の言葉を聞いて配下の戦士達は剣を抜剣し、近衛騎士達に苛烈な攻撃を与え始める。それを尻目に赤白の騎士とフリードは王女を探しに部屋を片っ端から開けて行った。

「見たたんねえんだけど、どこにいやがんだ！」

「落ち着け、モードレッド」

「チツ！ここか？ここなのか？やけに豪華だなア!？」

モードレッドと呼ばれている赤白の騎士が豪華な扉を見てそのドアノブに手を掛けるとそこにはリリアーナとエリヒドがいた。

「ば、バレたか……」

「だから違う部屋に隠れば良かったんですよ！なんでこんないかにも居そうな部屋に

隠れたんですか！私も父様のこと言えませんが……」

バレたことに驚くエリヒドと隠れた場所に閉じて呆れるリリアーナ。

「……まさかこんなところに父親と共にいらつしやるとは……なありリアーナ王女？」

「……モードレッド、そう言うな。非戦闘員が固まるのは普通だろう、王妃と王子は後宮かな？」

モードレッドと呼ばれた赤白の騎士は赤黒い剣を取り出す。

「ハハハッ！俺の剣のサビになりやがれ！」

モードレッドが剣をリリアーナとエリヒドに振るおうとする。その時、リリアーナが叫んだ。

「やりなさい！皆さん！」

その言葉がエリヒド、リリアーナ、モードレッド、フリードがいる部屋に響き、光の斬撃が2つ、風の斬撃が1つ、モードレッドとフリードがいる場所へと放たれた。

「！まさか伏兵か！」

「その通りよ、リリイがこんなことを思いつくなんて思いもしなかったでしょ？」

「……はア……ヒヤヒヤしたよ……リリイに何かあったらどうしようかと……」

「……戦場なのに危機感も何も無いな」

光の斬撃が放たれた方角をフリードとモードレッドが見るとそこには光の刀を持つ

た雫、モードレッド、フリードがいらないと思つていた仮面ライダー最光 エックスソルジャーとなつてゐる聖我、バスタードソードを持ったメルドがいた。

「聖我、あの赤白の騎士……モードレッドと言つたか、アイツは任せろ、フリードを頼む」
「了解した、モードレッドは任せます」

メルドはバスタードソードを納刀し、いつもとは違う金色の剣を取り出して構え、札を投げる。それは聖我とリリアーナが作り出した札であり、対象2人を指定した場所、この札は訓練所へとワープさせる魔法が籠つた札である。

メルドとモードレッドは訓練所へとワープして行き、雫はアームドブックを取り出して聖光刀クサナギに装填しようとする。

だがエリヒドとリリアーナが隠れていた部屋に大穴が開き、白い魔法使いが現れる。

「いたいた！雫の相手は私だよ！」

「その声は恵里……貴方、裏切つてたのね……」

「そう！」

白い魔法使いとなつてゐる恵里は雫に魔法陣を潜らせ、自分も魔法陣を潜り、被害を気にしないのか王都へとワープする。

「……フリード、お前とは久しぶりに戦うな……」

「……そうだな、さあやり合おうか！」

青い刀身のバスタードソードをフリードは取り出し、見たことがないアームドブツクを起動して装填する。

《ニーベルンゲンの歌！》

《ニーベルンゲンの歌！》

バスタードソードのトリガーを引き、アームドブツクを開くことでフリードは鎧を纏う。

《魔剣起動！》

《北欧の竜殺しの英雄の力をその身に纏い、最強の力を得る！》

《KAMEN RIDER SIGURUD！》

全体的に黒い鎧、青い目の鬼のような仮面をつけ、腰に青い刀身の短剣を何本も納刀した仮面ライダーへとフリードは変貌した。

「仮面ライダーシグルド。この剣の銘は魔剣グラム、シークが言うにはこれは竜殺しの魔剣……らしいがまあいい。いざ殺し合おうか！」

聖我はフリードが魔剣グラムのことを伝聞で聞いたことを不思議に思いながら光剛剣最光を構えて名乗ったあと直ぐに突撃してきたフリードを迎撃しようとする。

「甘い！甘いぞ聖我！」

フリードは突撃を聖我が光剛剣最光を構えた瞬間にやめ、短剣を一本抜いて拳で撃ち

出した。その短剣はものすごいスピードで聖我へと接近する。

その短剣を難なく聖我は避けるが、避けたあとその短剣は部屋の壁をいとも容易く破壊してしまう。

「……当たる訳には行かないな、行くぞ！」

聖我は転移の札とは違う札をどこからか取り出してそれをフリードに向かつて投げる。フリードがその札を払おうと手を伸ばした瞬間、札が爆発してフリードの体勢を崩させた。

「食らえ！」

光速とは言えないが速いスピードで体勢を崩したフリードへと斬りかかり、聖我はフリードに刃を届かせた。

だがそのフリードに当てられた刃をフリードはガチッと掴み取り、そのまま光剛剣最光を離さない聖我をそのままリアーナとエリヒドの方向へと投げ飛ばした。

「グッ！」

「聖我！」

リアーナは聖我に駆け寄ろうとするがエリヒドはリアーナを抑える。何故ならフリードが短剣を撃ち出そうとしていたからだ。

「不味い！」

「護つて！聖絶！」

聖我の技能、光武器精製によって作り出した光の盾とリリアーナの聖絶で短剣の威力とスピードを殺そうとするがフリードが撃ち出した短剣はそれらを貫き、聖我へとダメージを与える。

「ガバア！」

「トドメだ……」

《魔劍グラム！》

フリードは短剣を何本か空中に待機させ、グラムのグラムトリガーを引く。すると空中に待機させられていた短剣をフリードが目にも止まらぬスピードで撃ち出す。

その攻撃を聖我はリリアーナとエリヒドを守る為、受け続ける。そしてフリードは最後の仕上げとばかりに魔劍グラムを上段に構えて振り下ろした。

《イーヴィル・スラッシュユ！！》

青い斬撃が聖我へと放たれ、その鋭利な攻撃が聖我を襲う。

「やらせません！」

「やらせん！」

エリヒドがリリアーナに魔力を渡し、リリアーナは先ほど聖我が使った札ではなく、銀色の札を投げる。

銀色の札からは銀色の障壁が何十枚も現れ、聖我と後ろにいるリリアーナとエリヒドを守護する。

「助かった、ありがとう！行くぞ！」

聖我はリリアーナの援護に感謝しながら光剛剣最光のライドシグナムでドライバーのトラーディオライドを押し込むことで違う姿となる。

《パワー最光！》

《Get Shinning power! Power up! エックスソルジャー!!》

《エピソード2！》

姿は変わらないが拳に光のエネルギーが集まり、光のグローブができる。そしてこの前と違うのは足にも光のエネルギーが集まって重厚なブーツが出来る。

銀色の障壁はすぐに破られていくが次第に短剣は失速して行き、全ての障壁が無くなる頃には短剣は全て地に落ちていた。残りは青い斬撃のみ。

青い斬撃を視認した聖我はエックスソルジャー ワンダーライドブックを閉じて2回トラーディオライドを押し込む。

《フィニッシュ・リーディング！》

《Shinning Power Slash!》

《超・最光！》

地面を力強く踏み締め、地面にクレーターを作りながら拳を青い斬撃にぶつける。スラッシュと銘打っているが斬撃ではない。

青い斬撃と最光のパワータイプの必殺技がぶつかり合い、衝撃波が何度も発生し、周囲に被害を及ぼして行つた。だが青い斬撃を聖我は少しずつ押し出していく。

「クウウウ!!」

「やるな！ならこれもオマケだ！」

フリードは魔法陣から灰竜を召喚すると極光……ではなく光弾を追い打ちとばかりに放つた。聖我の拳は光弾が放たれていく末に押されて行き、ついに弾かれてしまったのだった。

騎士団長と魔人族の騎士

聖我がフリードと激突している頃、王宮の訓練場にて赤黒い闇の斬撃や風の斬撃が左右から放たれる。それらは真ん中でぶつかり合いお互いを消し去っていく。

時折紅いビームが放たれて斬撃を破壊しながら右側の風の斬撃を放つ剣を持つ人間……メルドに攻撃を加えるがそれを容易くメルドは避ける。

「チツ！罅が空かねえ！今度は接近してお前を殺してやるよ！」

赤黒い闇の斬撃を放つ剣士であるモードレッドがその様子に苛立ち、我慢出来ずにメルドに向かって紅い魔力を放出しながら突撃する。

「俺を護れ、光絶！」

メルドは自分の前に障壁を作り出してモードレッドの突撃を防ぎながら自分が持つ剣、光剣に向かって魔力を流す。

すると光剣の形状が変わり、バスタードソードからハンマーのような形へと変わっていく。そして光絶が破られそうになる瞬間に足に風を纏わせて空高く飛び上がり、光絶を破ろうとしているモードレッドに向かってハンマーを振り下ろした。

「痛アアアア!？」

「なるほど、パワー型の俺に相応しい武装だな……」

メルドはそう言葉を零すとハンマーに魔力を流して通常のバスタードソードへと形状を換える。

「……確か銘は、トランス、ブレード形状変化剣だったか。聖我もよく作ってくれたものだ……」

メルドはそう言いながらモードレッドへと剣を向けて足に再度風を纏わせスピードを上げて容赦なくモードレッドへと突撃をする。

「……いいことを教えてやるよ、これは母様が言っていた……」
「？」

メルドはゆっくりと立ち上がりながら呟くモードレッドに困惑しながらも突撃の勢いを緩めず、もっとスピードを上げモードレッドに突っ込む。

「俺は『この世界に本来存在しない者』と『この世界に存在し、最強である者達』でしか対抗出来ない存在だつてなア……」

モードレッドは自分の持つ剣に魔力を込め始め、それを危険に思つて辞めさせようとメルドは自分の耐えられる速度の限界まで魔力を流してスピードを上げる。

メルドが形状変化剣をモードレッドに向かって突き刺そうとしたその時、魔力のチャージが終わったのかモードレッドの持つ剣が赤黒い光を放つ。

「その力を今、お前に見せてやるよオ！」

メルドはモードレッドの剣を本能的にヤバいと感じたのか魔力を纏わせる方向を変えられることで後退できるようにし、形状変化剣を盾に変える。

「死ね！」

「知らぬ誰かに叛逆する闇の剣!!」

モードレッドが振り下ろした剣は盾で防ごうとしたメルドに向かって赤黒い魔力の奔流を放ち、メルドをいとも容易く呑み込んだ。

「……死んだか、あの聖剣英雄サマはシグルドの野郎に追い詰められているだろうし、残っている転移者でも殺しに行こうかねえ……暇だし」

メルドが赤黒い魔力の奔流……ビームに呑み込まれたのを見て死んだと判断したモードレッドは足に魔力を流して魔力を放出して移動しようとする。

「……ま、待て、アイツらは殺させん」

だがメルドのその声でモードレッドは魔力の流れを止める。

「……まだ息がありやがったか……」

「……ふう……やはり対抗するなら使わねばならんか……」

《ナイト・オブ・ラウンズ!》

メルドはよろよろと手を懐に入れ、1つのアームドブックを取り出しながら起動する。

「……聖我の力の一部を模倣したものらしい。……使わなければ勝てんし、アイツらも殺される。隠し球のつもりだったか……」

形状変化剣にナイト・オブ・ラウンズ アームドブックを装填する。

《ナイト・オブ・ラウンズ!》

「変身……!」

形状変化剣に付属しているトリガーを引くことでメルドの目の前に兜以外の騎士甲冑が現れ、それを纏う。

《トランス・ライズ!》

《ナイト・オブ・ラウンズ!》

完全な仮面ライダーでは無いのか、顔には防御のためのヘルメットがないが、機械のような黒い鎧がメルドに装着され、形状変化剣が消えていた。

「……剣が欲しいんだが……設計ミスか?」

そう言葉を零した瞬間、鎧から白いバスタードソードが現れる。

「成程な」

メルドはバスタードソードをモードレッドに向ける。だがその様子にモードレッドは笑う。

「ダメージでプルプル震えてる癖にいきがんなよ雑魚が、大人しく寝てな」

モードレッドは流し終わっている魔力を使ってメルドに急接近して剣を振り下ろす。だがその攻撃は黒い十字架と丸の形をしたラウンドシールドによって防がれる。

「自動防御だど？……やっつかいだなア！」

メルドは突然現れたラウンドシールドに驚くが、今度は自分の魔力がラウンドシールドに勝手に流れていることに驚く。

そしてラウンドシールドから光の光線が放たれ、メルドに当てられる。自分の魔力がラウンドシールドによって浄化され、様々な効果を持つ加護が与えられたことは知らずに。

「……身体が楽に動くだと……」

「何?！」

手をグーパーし、自分の身体がいつもより早く動くことを認識したメルドはバスタードソードを構えてモードレッドを睨みつける。

「何故か快調だ！行くぞ赤白の騎士よ!!」

「俺は赤白の騎士じゃなくてモードレッドだ！」

モードレッドの剣とメルドの剣が半ばモードレッドの赤黒いビームのせいで破壊された訓練所の中心でぶつかりあった。

現れるもう1つの竜殺し

聖我3が仮面ライダーシングルドことフリードと戦い、メルドがモードレットと斬りあっていた頃、王城の兵舎を襲っていた小悪党4人組は兵士に対して虐殺の限りを尽くしていた。

訳もなく、王城の警備に着いていた聖我2が参戦することで一気に戦況はひっくり返り、騎士団の副団長であるホセが兵士の指揮を行って小悪党4人組と戦っていた。

「な、なんでこんな雑魚どもも倒せねえんだよ!？」

「簡単な話だ大介、お前達は力は私たちに勝っているが、技術などが圧倒的に足りない！」

ホセが大振りに剣を振るうと檜山は吹き飛ばされ変身を強制的に解除させられる。そして他の兵士も残りの小悪党を倒し切り、変身を強制的に解除させた。

「ヒイイイ！俺たちは神の使徒だぞ！殺したりしねえよな!？」

「今回の悪事はいつものように軽い罰になるとは言えんからな、覚悟してもらおうぞ」

檜山達小悪党4人組はいつも小さい悪事からあまり小さくない悪事を行っていた。例えば神の使徒の名を笠に泥棒を行ったり、低い位の田舎貴族に金を揺すったりして

いたのだ。

それらの犯罪行為を行なっても檜山達は投獄されることはなかった。なんなら罪を問われることがなかったことも少なくない。

それらは全て神の使徒のネームバリューがあつたからだ。今回の反逆行為は流石に度が過ぎており、兵士が何人も殺されたこともあつて檜山達は魔剣システムとアームドブックを回収され、拘束されたのだった。

檜山達を牢屋に入れようと檜山達を運ぼうとするホセ達ともう1人の自分を援護しようとしてリリアーナがいる部屋に向かおうとするが、そこに待ったが掛かる。

「……案外使えないわね……恵里が言うから使つてやったのに……」

「何者だ！」

「私の事？……私は魔人族の魔剣システム開発者、シークという者よ……よろしく、英雄殿にこの王国の騎士団の副団長殿？」

聖我とホセの目の前には金髪褐色の女性が十字架の形をしたバスタードソードを持って立っていた。

「ホセさん、急いで私の分体がいるところに向かつてリリイとエリヒド王を連れて安全なところまで行つてください」

「……聖我はどうするんだ？」

聖我は闇黒剣月闇と邪剣カリバードライバー、ジャアクドラゴン、ワンダーライドブックを取り出して起動せずに邪剣カリバードライバーにワンダーライドブックを装填して闇黒剣月闇でライドインテグレーターを押し変身する。

《闇黒剣月闇！》

《Get go under conquer than get keen！》

《ジャアクドラゴン！》

《月闇翻訳！光を奪いし漆黒の剣が、冷酷無情に暗黒竜を支配する！》

仮面ライダーカリバーとなり、シークと戦うという聖我の意志を見たホセはリリアーナ達の救助に向かい、聖我は必冊ホルダーに闇黒剣月闇を納刀する。

《月闇居合…》

必殺技が発動するというのに全く微動だにしないシークを不思議に思うがチャンスとばかりに必冊ホルダーから闇黒剣月闇を引き抜いて闇の斬撃を放つ。

《読後一閃！》

闇の斬撃はそのままなんの障害にも当たらずにシークに傷を与えようと突き進む。

「任せましたよ、神の使徒」

その言葉をシークが呟いた瞬間、闇の斬撃の進行方向の正面に銀髪のワルキューレが現れて闇の斬撃を消し去った。

「……帰って姉様達と遊びたい……寝たい……」

「……………何このやる気ない人……」

だがそのだらしなさに力が抜けてしまう聖我。だがすぐに力を入れ直して闇黒剣月闇を力を入れ直して握り締め、天空のペガサス ワンダーライドブックを取り出して3回リードさせる。

《必殺リード！必殺リード！必殺リード！ジャアクペガサス！》

そして闇黒剣月闇のトリガーを引いて闇黒剣月闇を横に切り裂くように構える。

《月闇必殺撃！習得三閃！！》

青い斬撃が3度シークとワルキューレに向かって放たれる。だがそれらの攻撃もワルキューレによって消し去られてしまう。

「エヒト様によって遣わされました、神の使徒・ノイントと申します。僭越ながらこの私貴方を滅ぼさせてもらいます」

無機質な声でノイントは聖我に自分の名前を告げて聖我に向かって斬りかかろうとする。だがそれにシークが待ったを掛ける。

「このデータも取ってもらおうわ、余裕でしょ？」

「……………わかりました」

シークは十字架の形をしたバスタードソードとアームドブックをノイントに手渡し

てノイントはそれを受け取る。

《ニーベルングンの歌!》

《ニーベルングンの歌!》

う。
バスタードソードのトリガーを引き、アームドブックを開くことでノイントは鎧を纏う。

《魔剣起動!》

《北欧の竜殺しの英雄の力をその身に纏い、最強の力を得る!》

《KAMEN RIDER SIEGFRIED!》

ノイントは仮面ライダージークフリートとなり、バスタードソードを地面に突き刺して剣のしりに両手を当てて待機する。

「この娘が変身した仮面ライダーこそ、仮面ライダージークフリート!最強の竜殺しの力を身につけ、魔剣バルムンクを持った魔剣システムの仮面ライダーよ!」

シークがノイントが変身した仮面ライダージークフリートの紹介をするとノイントは力強く魔剣バルムンクを引き抜くと、その剣先を仮面ライダーカリバーとなつている聖我に向ける。

「竜殺しだと、……私キラーか！」

「行きますよ神刃聖我！」

2人は同時に走り出して暗黒剣月闇とバルムンクをぶつけ合い始めたのだった。

狂う友と剣道少女

聖我と仮面ライダーシグルドとなったフリードが剣（？）を交えている頃、そこらで死体が倒れている王都の街中で2人の少女が剣と魔法を交えていた。

剣を使って戦っているのは雫。聖我から受け取った聖光刀クサナギを用いてもう一人の少女、恵里の放つ魔法を斬り裂いていた。

「やっぱりお得意の剣の腕は脅威だね。でも雫ちゃんは僕のような変身能力もないし、僕のような魔力もないでしょ？ 私には勝てないよ。この力を使って光輝くんを僕のモノにしてあの剣士モドキを殺すよ！」

「まあたしかに私にはそんな魔力量はないわね……でも変身出来ないとは言っていないわ」

「え？」

雫は聖光刀クサナギのアームドブックを装填する場所、クサナギシエルフにアームドブックを装填するためにアームドブックを起動する。

《闇と光の剣士！》

《闇の力と光の力を操る剣士が聖光刀クサナギを用いて全ての敵を両断する！》

闇と光の剣士 アームドブックをクサナギシエルフへと装填し、クサナギトリガーを引く。

《聖光刀クサナギ!》

《闇と光の剣士!》

雫の目の前に右半分が黒く、左半分が白い仮面ライダーダブルのような鎧が現れる。それを真つ二つにぶった斬ることで鎧が二つに分かれてその二つに分かれた鎧が雫の左右に移動して雫をサンドした。

「……こんな変身方法だなんて聞いてないわよ」

「……プツ……」

「笑うな!」

雫は気恥ずかしくなったのか聖光刀クサナギを右手で振るう。すると闇の斬撃が恵里を襲う。

「危ないんだけど!」

その斬撃を恵里はいとも容易く躲して避けられた斬撃は王都のとあるお店の看板を破壊した。というかお店の壁も破壊して瓦礫すら残っていない。

「絶対当たりたくない……当たったら痛いじゃ済まなそう……」

「行くわよ、恵里!」

魔剣システムを流用しているので必冊ホルダーは無い。なので鞘があると仮定してクサナギを腰に納刀するように携える。

「セイ！」

そして恵里に向かって走り出してクサナギを左手で抜刀する。すると抜刀した瞬間にクサナギにやどる光のエネルギー。それを保ちながら恵里が雫がこちらに来ないよう放つ魔弾を避けてさらに近づく。

「対物障壁展開！」

《Wise barrier!》

丸い魔法陣が描かれた障壁が恵里の前に出現し、恵里に迫る雫の攻撃を防ごうとする。だがその障壁はすぐ崩されることになる。

「これが私の新しい我流剣術！一の太刀、疾風斬！」

聖我とメルド、他の騎士たち相手に鍛えた剣術と魔法を重ね合わせた我流剣術の攻撃が恵里の生み出した障壁と恵里を襲う。

疾風斬、それは風魔法と剣圧を組み合わせた高速の斬撃、その威力は低いが恵里の障壁を打ち破ることが出来た。

それに加えて風魔法を使用しているためかノックバックも付属して恵里を吹き飛ばす。

「まだよー！八重樫流刀術・霞穿ー！」

雫が習得しているもう一つの剣、八重樫流の霞穿という技を風魔法でノックバックした恵里に向かって使う。

霞穿は神速の三段撃ちを放つ技であり、光のエネルギーを纏っているクサナギで使うと白い流星のように見える。

「ま、不味い！魔法弾！」

《Wise Shooter!》

白い魔法弾がワイズブレードロッドから現れ、雫に向かって放つが、魔法弾は雫の鎧に弾かれる。

「聖我の闇の龍と光の兵士の力を使ってるからそんな攻撃効かないわー！」

凄まじいスピードで迫る三段撃ちが恵里に向かって放たれそのまま恵里はさらに吹き飛ばされる。

「な、な、嘘でしょ!？」

「魔法使いタイプな恵里には近接が天敵よね、それに今の貴女には前衛は居ないわー！」

雫が吹き飛んでいった恵里に向かって恵里が何故簡単にやられるか丁寧に説明する。

その言葉を聞いた絵里は俯きながらとある言葉を口にする。

「縛魂！」

《Death Ruler Mode!!!》

ワイズブレードロッドから発生したその音声が周囲に響くと恵里の白い魔法使いのような出で立ちが黒いロープを羽織った魔法使いへと変化する。ワイズブレードロッドも黒い杖へと変化する。

そして周囲に倒れている死体達がよろよろと立ち上がり、あつという間に死体の軍隊が現れる。

「これが、私の奥の手！死の支配者、仮面ライダールーラー！」

「縛魂は死んだ直後しか使えないはず……」

「このワイズブレードロッド……いやルーラーロッドの能力でね、縛魂等の死霊魔法は強化されるの！行け！」

恵里がルーラーロッドを縦に振ると死体達がゆっくりと雫に向かって進む。

「どれだけ数がいても、斬り捨てれば良いだけよ！」

「いいのかな？」

雫がクサナギを両手で振ろうとすると恵里が待ったをかける。その言葉を不思議に思い手を止めると恵里は雫に伝える。

「その人たちは貴女が守らないと行けない存在じゃないのかな？曲がりなりにも神の使徒でしょ？」

「ウツ……」

雫はその言葉を聞いてクサナギを下ろしてしまう。死体達が魔人族なら容赦なく斬り捨てるだろう、敵であるのだから。だが操られている死体は王都民だ、斬っていいのかと躊躇ってしまふ。

「やっっちゃえ、ゾンビ共！」

雫にゆつくりと近づくと死体達が腕を振り上げて雫に攻撃したが、それを雫は間一髪で避ける。

「それそれ、炎天！」

《Fire Impact!》

炎の上級魔法が雫に攻撃している死体ごと雫を攻撃する。雫は上級魔法を鎧で弾くが死体はそのまま骨ごと燃え尽きてしまった。

「くっ！」

「まだまだ行くからね！」

雫と恵里の戦いはここから本番へと突入するのだった。

最終階層と魂魄魔法

聖我は模造された英雄王・ギルガメッシュを倒して第二階層を突破していた。そして階層を上がり、第三階層に突入した。

「ここが……第三階層……」

『大丈夫だ、相棒！今の俺とお前ならどんな困難も越えられる！』

心身共に疲れ切っている聖我を英雄王との戦いで進化したアクセルが励ます。その励ましを聞いて自身を奮い立たせる聖我、そして階層を上がる事に聞こえる男の声が聞こえてきた。

『ここはバーン大迷宮 最終階層。ここでは貴様の忍耐を試させてもらうぞ……貴様の記憶を見て、貴様が耐えられるか分からぬものを選ばせてもらう』

声は第二階層で放射した光を放射して聖我の身体をスキャンする。そして少し経つと光が止み、第三階層の空間が違う空間へと変わった。

「ここは……転生の時の部屋だ?!」

聖我がいた第三階層の部屋は聖我を転生させた女性と最初に会った部屋と酷似した部屋へと変わっていた。

『ここで貴様は常日頃から使っているその剣、聖剣を得た。記憶では別に構わないと言ったそうだが、内心ではまだその聖剣ではなく、これらのような聖剣を使いたいと思っているのだろうか?』

すると聖我の目の前には金と白で彩られた先程戦ったコピーである騎士王・アルトリア・ペンドラゴンが劇中で使っていたエクスカリバーが現れた。

他にもハイスクールD×Dでゼノヴィア・クアルタが使っていたエクス・デュランダ、同じ作品内で使われていたアサー・ペンドラゴンが使用していた聖王剣コーブルランド、兵藤一誠が使っていた竜殺しの聖剣アスカロン、他にも色々な作品の聖剣が現れた。

「……」

聖我は聖我の目の前に現れた数々の聖剣を手に入れようと手を伸ばすがそれらには触れられず手は空を切る。

『やはりな、貴様のその聖剣が欲しいという欲望を無くさぬ限りこの試練は越えられぬ。戦闘で無類の強さを発揮しても忍耐では弱いと言うことだな』

聖我は唸るが全く持つてその通りなために反論できない。

『聖我……』

アクセルも戦いではなく聖我の欲望が試練の対象になっているために助言をするこ

とが出来ない。

『この大迷宮における魂魄魔法の取得条件は神に対して信仰心を持つていないこと。そしてこの大迷宮のコンセプトは神に靡かぬ確固たる意志を有することだ、この試練の場合は神を欲望に置き換えただけだがな』

「欲望に……靡かぬ確固たる意志……」

その言葉は聖我の心に響いた。転生前、欲望に身を任せて最低限の学歴とその日その日の金稼ぎ、それ以外の時間は聖剣探しに費やしていた聖剣狂だったあの頃、そして今は鳴りを潜めてはいるもののまだ聖剣を自分に合う聖剣を探そうとしている自分の心に。

「私が探す聖剣ってなんなんだろう、自分が求める聖剣ってなんなんだろうか……」

自分は2度目の人生で11本の聖剣と共に生まれてきた。その力を使い、今まで現れた数々の敵を滅ぼし、時には撤退させてきた。

だが昔欲しかったものは変身して戦う聖剣ではない。ビームを出したりするあのカッコイイ聖剣だ。決して特撮ヒーローが持つ聖剣ではない。

「私が欲しかったのは……」

1度目の人生で馬鹿みたいに世界各地を巡って聖剣を探してきた。2度目の人生では女性に与えられた聖剣を使っていた。

「(1度目と2度目でなにが違う………そういう事か、私が欲しいのは)」

聖我は最初と2回目を比較することでなにが違うのか気づいたのだ。

「私が欲しいのは、アーサー王伝説のような聖剣だ、いや……」私が欲しいのは、自分の力で手に入れた聖剣だ！しんに手に入れたいの、自分の力で探し求めて掴み取った聖剣なんだ！」

アーサー王伝説のアーサーが手に入れた聖剣は多少の細工はあろうとも、自分の力で手に入れたものだ。

聖剣ではないが、他にも著名な武具を持つもの達はそれなりの努力をしてそれらを手に入れている。

2度目で手に入れたのはなんの苦勞もせず女性から与えられた聖剣だ、それは欲しいものであり、今必要なものではあるが、真に欲しいものではない。

「私は、貴様が提示するその聖剣は要らない！欲しいものは自分で手に入れる!!」

その言葉を言った聖我は手の上に向けクラウ・ソラスを呼び出す。

クラウ・ソラスは折れていて使い物にならないはずだが、何故か修復されており、その力は折られた時よりも強くなっている。

「光……あれ!!!」

クラウ・ソラスを振り下ろすと空間は破壊され、聖我が欲しかったであろう数々の聖

剣が消えていく。

『お見事、よくぞ最終階層をクリアしたな。これで貴様の大迷宮攻略を終了とする』

クラウ・ソラスを振り下ろした聖我に男の賛辞の音が響く。そして最終階層の最奥に穴が開く。

最終階層の部屋を出た聖我の前にはハジメ、ユエ、シア、そして身元が確認できない龍人族のテイオがいた。

「最下位は私か」

「ああ、比較的簡単だったからな。俺は過去の試練はベヒモスだったし、1番強いと思う敵は魔剣を見せた時のお前だった。新作アームドブックで倒したよ、それに欲望も早く帰れるくなんて試練だったが簡単にクリア出来た」

ハジメは自分の試練内容を話しながら全体的に楽にクリア出来たことを話す。

「私も過去の試練はヒュドラ、1番強いと思う敵はハジメだったけど、偽物で何も話さな

いハジメなんてハジメじゃない、それに欲望も楽にクリア出来た」

「私もですね、過去の試練は帝国兵でしたし、一番強いと思う敵はハジメさんでした、まあ欲望の試練は苦勞しましたけどね」

ユエとシアも自分たちの試練があまり難しいわけではなかったことを話す。

「妾は……結構キツかったの……まあ何とかあったが」

テイオは苦い顔をしていたが何とかクリア出来たらしい。

「……あれ、私とテイオだけか？めっちゃくちや苦勞したの……」

そんな4人の様子にふと呟いた聖我だった。

聖我達は第三階層を出た部屋のさらに先に進むとそこには大迷宮の紋章と魔法陣が描かれた部屋にたどり着いた。

するとそこには禿頭の男がおり、その隣には手記のようなものが置かれていた。

そして魔法陣の中に入ると重力魔法を得た時とは違う感覚が聖我達を襲った。重力魔法を得た時は記憶の精査だったがもつと奥深くに入り込んできたのだ。

「……これが魂魄魔法か、面白そうだ……」

「ユエが適性ありそうだな……それに聖我もあるのか？」

「ああ、これで意志のある光と闇の兵士を作り出せるからな」

「敵に回したくないのう……」

各々が感想を言い終わった頃、聖我の懐が震え出した。

「電話か、どうしたリリイ」

『緊急事態です！今私の目の前で聖我とフリードが……キヤア！』

「リリイ!？」

聖我がリリアーナが叫んだことに驚いてリリアーナのことを呼ぶが返答はなく切られていた。

「悪い、ちよつとまずいかもしれない。探査！」

聖我は地上の状況を理解するために探査を行う。そして冷や汗をかきながらハジメにこう言った。

「大迷宮攻略後に言うことじゃないが協力してくれないか？ちよつとどころじゃない、

王国の一大事だ」

聖我の言葉を急展開で驚いているが何とか理解したハジメが聞くと、

「任せろ、まあ報酬はお前の聖剣を解析させろ」

「安心しろ、後で国王陛下とリリイに頼んで聖剣以外の報酬も出してやる」

聖我の依頼を了承し、空間魔法で地上へと戻り、攻撃に参加するのだった。

聖我が大迷宮を攻略し終えた頃、聖我を転生させた女性は聖我を転生させた世界でな
にが起きたのかいまいち分かっていなかった。

「あのシークとモードレッドって誰よ……私転生させた覚えはないわよ……」

女性は怪訝に思いながら柵から2つの聖剣と1つの本を取り出す。

「まあいいわ、後で調べましょう。聖我的手に入れる聖剣が気になるところだけど、取り
敢えずこの二振りの聖剣と本を送りましょう……行ってらっしゃい！」

女性の手から聖我の元へ煙を操る聖剣と時を飛ばす聖剣、そして氷の獣が記された本
が飛んで行ったのだった。

ユエとハルナ

聖我から依頼を受けたハジメはリリアーナを助けに行った聖我と次いでについて行ったティオを見届けてからユエとシアと話し始めた。

「聖我からの依頼だ、さっさとこなさせてもらうぞ」

「分かってる、どうする?」

「敵は聖我を打倒可能なレベルな奴らだろう。だからまずはボス前の雑兵を片付けるためにあいつらの傷を回復させる、勿論聖我の懸念があるから……ユエ、頼む」

フリード、ノイント、モードレッドを打倒するにはまず雑兵を片付けないといけない。雑兵を倒すには寝たきりになっている勇者達を治癒して戦いに参加させるのが都合がいい。

ハジメのパーティーの中で身体の欠損を治す魔法、再生魔法を十全に使えるのはユエだけだ。なのでユエには王宮に行ってもらうことをハジメは頼む。

ちなみに聖我の懸念とは香織だ。バレたらめんどくさいことこの上ない。

「わかった、任せて」

ユエはハジメの頼みを了承した。そしてハジメはシアの方を向く。

「シア、これを渡しておく」

「？」

シアはキョトンとしながらハジメに渡されたものを受け取る。ハジメから渡されたのは青い大剣。

「魔剣ギガント、お前用に作り出した魔剣だ」

魔剣ギガントを頬でスリスリしながら嬉しそうにするシア。勿論刃がない刀身の方でスリスリしています。

「むう、私のは？」

「あ、あるから落ち着け」

シアにだけ渡されて私にはないの？とばかりにハジメをジト目で見るユエ。それに對して少し慌てながら細長くも切れ味が有りそうな赤い剣を渡すハジメ。

「魔剣スライサー、斬れ味と魔力の通しの良さは俺たちの中で随一だ。後これアームドブックな」

そう言つて2冊のアームドブックを1人1つずつ渡すハジメ。そしてハジメはシアにこう伝えた。

「俺たちは聖我にさつき見せてもらった破損した結界の補修をしながら敵を蹴散らしに行くぞ」

そう伝えてから3人は二手に別れて各々がやることをやりに行ったのだった。

ところどころ爆音や剣と剣がぶつかり合う音が鳴り響く中、金髪美少女なユエは壁などがボコボコになっている王宮の廊下を歩いていた。

「ここが王宮……というか勇者達……どこ？」

「しつこいですよ！ファントム・ブロー幻影衝!!」

ユエが1人でとぼとぼと歩いてみると王宮に侵入したであろう魔人族に衝撃波を放つ少女を見かけた。ユエはその少女を助けて勇者パーティーの元へ案内してもらおうと考えた。

「緋槍！」

「な、なんですか!?!」

衝撃波を放っていた少女、ハルナは突然燃え盛る槍が魔人族に放たれたことに驚く。

「大丈夫？」

「あ、あなたは誰ですか!?!見たところ魔人族ではなさそうですが……」

極めて威力の高い魔法を放った金髪の少女を恐れ、ナイフを向けるハルナ、だがユエ

はナイフを向けられても動じることなくこうハルナに伝える。

「敵じゃない、私はハジメに言われて勇者達の回復に来た」

「……ハジメ、ああ、そう言えば聖我さんから聞いたことがありました。とても卓越した技術を持つ錬成師と。では貴方はそのハジメ殿と呼ばれる方の……」

「私はハジメの正妻、ユエ。早く案内してくれる？」

「わかりました！このハルナ、貴方を勇者達の部屋まで責任もつてお連れします！」

ハルナはユエに後ろから着いてきてもらうことを伝えて勇者の部屋まで連れていくことにしたのだった。

勇者達が寝ている部屋は襲撃があつてから急いで違う部屋に移動させられたらしく、戦火から遠い王室の隣まで下げられていた。

そこには護衛の騎士が2人ほどいた。

「申し訳ありませんが開けていただけますか？」

「申し訳ありません。リリアーナ王女の近侍と言えど開ける訳にはいきません。ここは勇者の皆様方の病室なのです」

護衛の騎士がハルナとユエの入室を拒む。勇者という希望の旗の一つである光輝達の部屋に誰かを入れて殺されてたまるかと思っているのだろう。

「仕方ありません……幻ファンタム・ドリーム 夢」

ハルナは幻影を眠らせて夢として見せる技を使って護衛の騎士2人を眠らせる。

「どうぞ、ユエ殿。回復をお願い致します」

「任せて、聖典」

ユエは光属性最上級魔法を使うとユエの魔力の質から香織と比べて速い回復スピードで傷が回復していく。

「次いでに再生魔法」

勇者である光輝達が損傷している腕などが徐々に転移する前、戦争前の身体に変わっていく……いや戻っていく。

「すい……」

ユエの回復スピードに感嘆の声を漏らしながら勇者パーティーの回復を見守るハルナ。

徐々に起き上がる勇者達。

「は、ハルナさん？ どうして私の怪我が……」

香織が頭に手を当てながら起き上がり、ハルナとユエに顔を向けると自分の身体の怪

我と欠損がなくなっていることに驚く香織。

「貴女が……ありがとう！」

ハルナが起き上がった勇者達に身体の回復とユエについて軽く説明を施すと口々にユエに礼を言う勇者達。

「礼はいいから早く行って、貴方の仲間が頑張つて戦っている」

「ああ、わかつた！みんな行くぞ！」

光輝はユエに向かって元気よく言う。床に置いてあつた宝剣と鎧を付けて仲間に声を掛けて戦場へと足を踏み入れたのだった。

「聖我の救援に行く。貴女も来る？」

「行きます！連れて行ってください！」

光輝達を見送つたあと、ユエはハルナにハルナも来るかと聞き、ハルナは肯定した。そしてハルナとユエは聖我とフリードが戦っているところへと向かうのだった。

闇龍失墜

聖我とハジメ達が大迷宮を攻略し、各々自分たちの役割を決めて救援に向かった頃。

「相性の問題か……？強すぎる!？」

「相性云々では無いわよ。その娘は真なる神の使徒、ノイント。たかが転生して力を得た仮面ライダーと Fate の混ざり物のアーサーとは圧倒的に格が違う存在……魔剣の適性もフリードを超えてたからね」

聖我2はノイントと呼ばれている女性が変身した仮面ライダージークフリートに圧倒されていた。

「(転生者の存在を知っているのか……)混ざりものとは失礼なことを言うな、シークとやら!」

「あらあら、ろくに力を使いこなせないのによくそんな口が聞けるわね!……話してると危ないわよ!」

「うわっ!」

シークに対して文句を言い放つとろくに力を使いこなせていないと言われ、ノイントに斬撃を浴びせられる。

「使いたくないが、死ぬよりマシだ！リリイ、ごめん！」

ラウンス・ジャオウドゴン・アーサー

《円卓の黒龍王！》

ミレディ戦で使い、使ったあとの後遺症のせいでリリイに泣かれてしまったがスペツクの追いつくには円卓の黒龍王しか選択肢はない。

そして聖我は円卓の黒龍王のページを開く。

《闇の龍を従えた騎士王が、闇の力を込めた聖剣を引き抜き数多の敵を蹂躪する…》

ジャガンリーダーに円卓の黒龍王を読み込ませる。

《ジャオウリード！》

邪剣カリバードライバーに円卓の黒龍王を装填してエングレイブヒルトでライドインテグレーターを押し込んで変身する。

《闇黒剣月闇！》

《When the Knight of Darkness, Excalibur reveals darkness that cannot be joked.》

《No matter how strong it is, the power of the dark dragon will knock down everything.》

ラウンス・ジャオウドラゴン・アーサー
 《円卓の黒龍王!!!》

《誰も生き残れない……》

禍々しい出で立ちをした仮面ライダーカリバの現段階での最終形態、それをノイントとシークの前で見せる。

「……データにないわね……まあいいわ！ やっちゃいなさいノイント！」

「……はい」

やや遅れながらノイントはバルムンクを構えながら聖我に向かって突撃するが、聖我を中心に闇のワンダーライドブックが出現し、闇黒剣月闇のジャガンライダーにどんどんリードされていく。

《ジャアクセイバー!》《ジャアクブレイズ!》《ジャアクエスパード!》《ジャアクバスター!》《ジャアクケンザン!》《ジャアクスラッシュユ!》《ジャアクサイコウ!》

《サモンリード! ジャアクセイバー! ジャアクブレイズ! ジャアクエスパード! ジャアクバスター! ジャアクケンザン! ジャアクスラッシュユ! ジャアクサイコウ!》

聖我の目の前に仮面ライダーセイバーを始めとした聖我が変身できる仮面ライダーの黒い基本形態が現れる。(最光はシャドー)

そしてノイントの突撃を最光が光剛剣最光の先で受け止めて、止まったノイントに集団リンチとばかりに6人の剣士が攻撃を仕掛ける。

「……………」

だがノイントは攻撃を食らっても痛がりもせず、攻撃を受け止め続け、バルムンクのバルムンクトリガーを引いた。

《イーヴイル・スラッシュユ!》

青い光がバルムンクに集まり、円を描くように横薙ぎに剣を振ると6人の剣士と目の前にいた最光が消え去ってしまった。

「まじか……」

ミレディ戦で大活躍だったジャアクライダー達が瞬殺されたのを見てシヨックしそうになったが、何とか持ち直して闇黒剣月闇を持ってノイントに対して剣を振るう。

だがその剣も簡単に受け止められ、バルムンクトリガーをもう一度引くノイント。すると今度は青い光がノイントに集合し、巨大な竜となってしまった。

「これで、終わりです!」

竜の口に青い炎が充填されていき、それを聖我に向かって吐こうとする。

聖我もそれを見て危ないと思ったのか円卓の黒龍王を閉じてエングレイブヒルトでライドインテグレーターを押し込んで再度円卓の黒龍王を開く。

《ジャオウ必殺読破!》

「全てをねじ伏せる……」

闇黒剣月闇を頭の上に両手で掲げて闇のエネルギーを収束し始める。青い光の残滓すら闇のエネルギーに変えて吸収する。

「へえー、光まで闇に変えるのかあ……」

これから危なくなるというのにシークは聖我とノイントの戦いを見るのを辞めず、聖我の必殺の解析すらしていた。

「私の周りは全て反転する……」

闇黒剣月闇が闇のエネルギーにコーティングされ、ミレディ戦で使ったものとはだいぶ異なる状態へと変化していく。

「あらゆる聖なるものを呑み込め！」

闇黒剣月闇を頭から腰の高さまで下ろして斜めに斬り上げる。すると闇のビームが放たれる。

《ジャオオウ必殺撃！》

「闇 龍 砲 撃!!」

この前のエクスカリバーは名前負けだと思っていたのか、今回は違う名前で放つ。そしてノイントも闇龍砲撃に合わせて炎を放つ。

《イーヴィル・ブラスタ―！》

炎と闇のビームがぶつかり合い、お互いに拮抗する。だがノイントは出力を更にあげ

て炎を吐き、次第に聖我の闇のビームは押されていく。

「グウウウ……!!」

ノイントの吐く炎を耐えながら聖我はもう一度円卓の黒龍王を閉じようとする。

「させないのよ、そんなこと!」

だが横からシークに短剣を投げられ閉じようと伸ばした手を弾かれる。

そしてそれを見たノイントはさらに出力をあげてついに闇のビームを消し飛ばして聖我を吹き飛ばした。

「ガバア!」

「……死んでください」

ノイントは竜から通常の仮面ライダージークフリートへと戻って聖我にゆっくりと近づいてバルムンクを振り下ろした。

そのバルムンクによって変身を解除させられた聖我。

「……次で、死ね!」

さらに力を入れてバルムンクを振り下ろそうとバルムンクを振り上げて聖我の心臓に狙いを付ける。

「……やるつきやないよな、来い!」

心臓にバルムンクが迫るその瞬間、聖我が声を上げた瞬間、無限収納BOXから煙が

立ち上り、劍撃がノイントを攻撃する。

「な、何が……」

先程まで邪魔をしたりしていたシークがノイントを襲うその煙に驚く。

そして煙はノイントを聖我から離すと聖我の元へと向かっていき、聖我的手に劍としての形を作って聖我到握られる。

「煙叡劍狼煙……行こうか」

聖我はノイントともう一度戦うために立ち上がろうとする。その時、聖我の身に不思議なことが起こった。

聖我が光に包まれ、光が引いたその時、身体が女になっていた。

黒髪だったのが金髪に戻っており、目は金色に、そして身長も小柄になっている。そして何より、男性についているはずの棒がなくなって、やや小ぶりながらも胸が盛り上がっていた。

というかまんまセイバーオルタ。

「……反転したのか」

「いや冷静ですね（ね）!？」

敵であるはずのノイントとシークに突っ込まれていたが、聖我は別に女になったことに驚いてはいなかった。（声も高くなっていた）

「仮面ライダーサーベラのは女だった。仕方ないことだと思うな」

「……先程とは違うとは思いません。外見が変わっても中身は同じです！」

「試してみるか？……行くぞ！」

驚いていたノイントだが、聖我を始末するために落ち着きを取り戻し剣を握り直して聖我に向かつて走り出した。

聖我は煙叡剣狼煙を握って先程の戦いを思い出しながらノイントの様子を伺うために動き回り始めた。

黒龍が竜殺しにやられた第1戦が終わり、次の戦いの幕が上がったのだった。

身体の真実、煙の剣

偽物ではあるがセイバーオルタとなった聖我が煙叡剣狼煙を構えたままノイントの周りを動き回るのに対し、ノイントはバルムンクを聖我に近づいて力いっぱい振る。だがその攻撃は光武器精製によって作られた剣で勢いを相殺する。

「変身をしたのですか?……こんなことを言いたくはありませんが、私に負けている癖に変身をしたくないで勝てるとは思えませんよ?」

聖我に向かってノイントは変身しなくて勝てるのか聞く。だが聖我は返答はせず、煙叡剣狼煙を持ったままノイントに向かって走り出す。

ノイントはこれを好機と見て、バルムンクのバルムンクトリガーを引く。

聖我はノイントがイーヴイル・スラッシュの体勢に入っても後退することなく足を進める。

《イーヴイル・スラッシュユ!!》

バルムンクを縦に振り下ろすと聖我に向かって青い斬撃が放たれる。

衝突の衝撃によって煙が洗われ、内心勝ったなと思えばバルムンクのバルムンクシエルフにセットしているニールベルンゲンの歌を外して変身を解除しようとした瞬間、ノイン

トのバルムンクを持っていて腕が切り落とされた。

「え……」

聖我が煙叡剣狼煙を持ってノイントの手を切り落とした。その事実にはノイント以外にも近くで見ていたシークすら驚かせた。

「……シーク、お前言ったよな。私はろくに力を使いこなせないって。何となくわかった。私は今までサーヴァントの身体スペックと聖剣、技能で勝ち上がってきた」

ノイントが手を切り落とされたことによつて落としたバルムンクを砕こうと煙叡剣狼煙を振り上げる。

そうはさせまいとノイントは残った手でバルムンクを取り戻してその身を後退させる。

「……それだけじゃないんだな。長くはないが濃い日々のせいで忘れていたよ……」

煙叡剣狼煙は目標であるバルムンクがなくなつてそのまま地面に激突するがその勢いは止まらず細身の剣と今までの聖我では考えられないような衝撃が発せられた。

「……スキルを忘れていた。宝具にこだわった私が馬鹿だったよ」

なぜあのような衝撃が起きたのか、傷つけるのすら難しいジークフリートのアーマーを切り落とせたのは何故か。それは……

「魔力放出 [A]」

「まさかあんな言葉でスキルに勘づくなんて……」

聖我がプロトアーサーのスキルが使えることに気づいたことにシークは苦々しい顔をする。

「そんな顔をするな、美人な顔が台無しだぞ？」

「黙れえ！……ノイント、ソイツを殺しなさい。今なら成長する前に殺せるはずよ！」

「わ、わかりました！」

シークに対して軽口を叩くとシークはノイントに命令して聖我に向かって攻撃させる。

ノイントはバルムンクを構えながら聖我に向かって接近する。

「こうか？えつと……！」

ノイントが近づくのを気にもとめず、今まで使ったことの無いプロトアーサーのスキル、直感「A」を発動する。

接近するノイントに対して魔力放出を使いながら同じく接近する。そして煙叢剣狼煙を使ってノイントを切り抜いて切り返す。それを何度も行いノイントの動きを止める。

「なんか見覚えある動きなんだけど……なんだったかな……まあいいや！」

何回も連続で行なわれる切り返しの最中、動きを止めて振り返り、突きの構えから強

烈な闇と光が織り交じる。

「喰らえ！なんかヤバそうなビーム!!」

掛け声とともに闇と光を伴った突きをノイントにかますと、ノイントはその突きによつて放たれたビームに飲み込まれる。

「え？えええええ!!」

ノイントは何故か聖我によつて放たれた名称も分からないビームに呑み込まれ、そのまま直撃を食らつてしまう。

今聖我が放つたのはオルタ化した沖田総司の宝具 絶剣・無窮三段。なぜ使えるのか、それはプロトアーサーのスキル、直感の改変によるもの大きい。

聖我の記憶の中に様々な思い出から、この場合こうした方がいいんじゃない？というものをスキル 直感を使って何となく再現していた。

今まで気づいていなかったかもしれないが、光輝との一回目の時決闘の時、天翔閃を返したのも、二回目の決闘の時、リンチを行なったのも全て無意識の直感によるものだったりする。

「……騎士王のスキル、頭おかしいわね……仕方ないわ、戦闘に参加するつもりはなかったけれど、私も参加するしかないわね!」

アーマーがボロボロなノイントを見下ろしながら聖我がノーツで戦つた時の魔剣に

似た魔剣を取り出して変身して地面に降りる。

「ほら、立ちなさい！本当にグズねアンタは！神の造兵なんだからさつさと戦いなさいよー！」

シークはノイントを無理やり立ち上がらせてバルムンクを構えさせる。

「ううう……」

ノイントはバルムンクを嫌々構え、シークはノイントに喝を入れようとする。……だがその隙を見逃すほど、聖我は甘くない。

《昆虫大百科！》

《この薄命の群が舞う、幻想の一節……》

即座に昆虫大百科 ワンダーライドブックを開いて閉じ、ノロシエルフに装填してノロシトリガーを引くことで変身する。

「変身……！！」

《狼煙開戦！》

《FLYING！ SMOG！ STING!!STEAM！》

《昆虫CHU大百科!!》

《揺蕩う、切っ先！》

仮面ライダーサーベラとなり、そのまま煙となってノイント達に急接近する。

「へ？」

「セイ！」

大きく声を出しながら地面を魔力を放出しながら踏み込む。

そしてサーベラの背中から昆虫の鋭い足が出現してノイントとシークの胸に毒を流し込む。

「ぐうう！」

「があああ！」

ノイントとシークは突然流された毒に苦しむが聖我はそれを見ても足をとめない。

「行くぞ!!」

グリップ近くのデフュージョンプッシュを2回連続で押し込んだ後、ノロシトリガーを引く。

《狼煙霧虫!》

《インセクトーシヨット!》

どこからか煙が現れシークとノイントを包む。

そして聖我は煙に覆われた2人の周りを走り回り、煙叢剣狼煙を振りまくる。

「な、何?!」

「み、見えません！」

魔力放出を併用して斬っているためかシークのアーマーは勿論、ノイントのアーマーにも傷が入る。

デフュージョンプッシュを今度は長押ししてノロシトリガーを引く。するとさらに煙が現れてさらに視界が悪くなる。

《超狼煙霧虫！》

《昆虫煙舞一閃！！》

聖我が8人に分裂し、先程とは比べることがおこがましいほどの斬撃が2人を襲う。その斬撃はシークとノイントのアーマーを一部完全に破壊していた。

「とどめだー！」

8人の聖我が一斉に飛び上がったデフュージョンプッシュを2回連続で押し込んだ後、ノロシトリガーを引く。

《狼煙霧虫！》

《煙幕幻想撃！！》

8人の聖我がさらに増えて24人になり、全員が剣を振り上げる。煙叡剣狼煙に赤いエネルギーと聖我の魔力がチャージされ、煙叡剣狼煙を振り落とす。

「インセクター・インパクト！！」

赤い斬撃が24発、ノイントとシークに放たれる。そしてノイントの変身は強制的に

解除させられ、シークのアーマーは変身解除だけでなく過度のダメージで完全に修復不可能になった。

「あれ？ハジメさんに言われて手伝いに来たんですけど………あれ？」

「残念、もう終わってますよ」

変身を解除した女体化してセイバーオルタとなっている聖我と倒れ伏している魔族と天使のような女性。

それを見てポカーンとしているシア。

「あ、貴女誰ですか!？」

「え？聖我ですけど？」

「聖我さんは男ですよ!？」

混乱しているシアを落ち着かせるために聖我は結構な労力を払ったのだった。

聖我はノイントとシークを起こすために水をぶっかけた。ノイントはそれで起きたのだが、シークの場合ダメージが大きいのか起きなかつた。

ちなみにノイントとシークは起きても問題ないように光の枷に嵌めて行動できない

ようにしている。

「……もう一回無窮三段叩き込むか」

「ダメです！ドリユツケンでたたき起こします！」

「待て、ドリユツケンだと骨が折れて最悪死んでしまうかもしれない、無窮三段も危ないといえは危ない。なら光武器精製で作ったハリセンと魔力放出で起こすべきだ」

「それハリセンなんですか!?デカすぎてハリセンに見えませんか!だったら私のビンタで起こします！」

「肉体強化も合わさってドリユツケンと同レベルで危ないだろう、なら毒をもう一回注入して起こすべきだ」

「毒も危ないですよ!なら私の微妙に弱めた張り手で……「あ、あの……」どうしました?」

シアと聖我がどうやってシークを起こすか議論し合っているとノイントがその言い合いに口を挟んだ。

「シークならもう居ませんけど……」

「「え?」」

ノイントの言う通り、シークはその場から転移していたのか消えており、残っていたのはノイントとノイントに与えられたバラムンクだけだった。

「……………やべ、逃げられた」

とりあえずノイントに魔力封じのチョーカーを取り付けて腕に光の枷、足に重力倍增の枷をつけて動けなくして事情聴取、もとい尋問を始めた聖我だった。

「覚えてなさいよ、あのぐ都合主義の塊野郎！今度会った時は必ず負かして私に命乞いさせて恥かかせてやるんだから！」

バルムンクとノイントを忘れてきたことを脳の片隅に追いやつて聖我のことを罵りながらモードレッドとフリードに回収を頼もうとするシークだった。

円卓の王国騎士と反抗の錬成師の剣舞

訓練所で再び剣をぶつけ合う2人の騎士。1人は赤い稲妻を帯びながら、1人は炎を剣に纏わせながら戦っていた。

「俺のクラレントと打ち合えるたア、なかなかの業物だな！」

「銘はガラティーンと言うらしいぞ、まあお前と戦うのが私には精一杯だったりするんだがな！」

ラウンドシールドからバックアップを受けたメルドは先程と比べても段違いな力を出していた。

それでも押し負けず、軽口を叩けるモードレッドの実力は確かなものだろう。

「負ける訳にはいかんのだ！真名封鎖、擬似模倣宝具展開！」

「来るか！だけども、魔力が溜まってねえからクラレントの技は使えねえ！だからこいつらがお前のその技の相手だ！」

モードレッドが2振りの剣をどこからか取り出して投げるとそこから剣で出来た黄金の巨大なゴーレムが2体現れる。

「……ベヒモス以上か!？」

「ソードゴーレムだ、他にもオマケだ」

さらに10本の剣をメルドの周りに投げ込むとメルドの周りに先程と同じソードゴーレムが10体現れる。

「……これはキツイな、だが……負ける訳にはいかん！ブレードオブ「ちよつと待つてもらおうか！」む？」

「なんだ!？」

メルドが技を放とうと剣を振りあげようとする空から無数の弾丸が放たれ、ソードゴーレムが後退していく。

メルドとモードレッドが弾丸の放たれた方向に目を向けるとそこには仮面ライダーリベリオン……ハジメがガトリングを片手で持ちながらそこに浮遊していた。

「聖我に頼まれてな、援護させてもらうぞ……メル……コホン、王国の騎士団長殿」

「……感謝する!？」

ハジメは巨大なフープを取り出してソードゴーレム12体を潜らせるとメルドより少し離れたところに転移させる。

「新作のお披露目だ、刮目しろ!？」

ハジメは通常より大きいドラゴニックアークサイズのアームドブックを取り出して起動、ページを開く。

《赤龍兵士の物語！》
ハイスクールドxD

《とある変態な眷属悪魔が織り成すハーレム熱血バトルストーリー！》

《序章！グレモリー！》

仮面ライダーリベリオンの腰に追加されたカリバーの邪剣カリバードライバーに似たりベリオンドライバーに赤龍兵士の物語を装填する。

リベリオンドライバーの上部に付いているボタンを魔剣リベリオンで押し込むことで赤龍兵士の物語 アームドブックのページを開く。

《Revelion! Power up!》

《Get Devil's Power! Gremory genus!》

《Curse blade! Revelion!》

《慈愛の悪魔とその眷属の力を反抗の力に合わせた魔剣が敵対する全てを切り裂く！》
 仮面ライダーリベリオンのアーマー全体に赤い色が追加され、左手に赤龍帝ブリステッド・ギアの籠手のようなものが追加されている。

「仮面ライダーリベリオン・グレモリースタイルだ。骨も残らず消しとべ！」

そう言いながら地面に魔剣を生やして、指に雷と滅びの魔力を纏わせてソードゴールムへと走り出した。

強化形態へと変身したハジメ……メルドはハジメとは知らないが、それを見たあとメルドは擬似模倣宝具を発動する。

「さてもう一度……真名封鎖、擬似模倣宝具展開！」

メルドの持つガラティーンにオレンジ色の燃え盛る炎のエネルギーが充填されていく。

「……少し無理をするか！死にさせエ!!」

モードレッドのクラレントにメルドを追い詰めた赤黒い魔力が宿る。そしてそれを上に掲げる。

《left》クラレント・ブラッドサムワンズ
「知らぬ誰かに叛逆する闇の剣！」
《left》

「敵を燃やす聖なる剣！」

2人の赤黒い邪悪なビームと聖なる炎のビームがぶつかり合う。出力的には互角であり、拮抗していた。

メルドはビームを撃てるほど魔力があるわけでは無いのだが、今この時、鎧をまとっている場合のみビームを放つことが出来る。

モードレッドに打ち勝つためにメルドはさらに擬似模倣道具を発動する。

「……これなら勝てる。力を、一部封じた状態でもと思ったのが間違いだった！これで勝たせてもらう！」

メルドは聖なる炎を維持しながら剣に魔力を込める。

「真名解放！擬似模倣道具同時展開！」

ガラティーンの炎がさらに滾り、オレンジから黄色へと色が変わる。そしてメルドの左腕に白い箆手が纏われる。

メルドの横に銀色の鎧を着た金髪の男と美青年が幻の身体で現れる。

『この剣は太陽の映し身。もう一振りの星の聖剣！あらゆる不浄を清める焰（ほむら）の陽炎！』

『我が魂喰らいて迸れ、銀の流星！』

ガラティーンの出力が上がり、クラレントのビームを推していく。そして白い箆手に光の極光が集まる。

『エクスカリバー・ガラティーン転輪する勝利の剣!!!』

『デッドエンド・アガトラム閃せよ、銀の腕!!!』

ガラティーンのビームがクラレントのビームを完全に打ち消してモードレッドに直撃、そして直撃を確認したあとガラティーンを捨てて走り出し、モードレッドの腹に当

てたアガートラムから放たれたビームでモードレッドは消滅した。

「ガアアアアア!!」

自分の攻撃でモードレッドが消滅したという事実には驚きながらも、勝ったことに喜んでいるメルド。

「……………勝った、のか……………あとは任せただ、みんな」

メルドはそのまま魔力の過剰消費によって鎧を解除し、いつもの騎士姿に戻ってそのまま倒れたのだった。

「さあ、このまま死にやがれ!」

一方ハジメはソードゴーレム12体相手に善戦どころか圧倒していた。

空中にて再現された赤龍帝の籠手の倍加・譲渡によってパワーアップした滅びの魔力と雷光、再現・魔剣創造ソードパルスによって生み出された魔剣が発射されていく。

それらの攻撃はソードゴーレムに命中して行き、徐々にダメージを負わせていく。

「大迷宮でも使ったが、確かに使いやすいな。シアやユエに送った奴も多分使いこなせ

んだろ……さあ、終わりと行こうか！」

ハジメは魔剣リベリオンのリベリオントリガーとリベリオンドライバーのボタンを押す。

《Deadly! Hajime's power × Gremory genus
!》

《Revelion Impact!!!》

無数の魔剣に増幅し切った雷光と滅びの魔力が合わせられ、赤龍帝の籠手を纏う手に戦車の駒の力が合わせられる。

魔剣がソードゴーレム12体の腕、足を全て切り落とし、ソードゴーレムのコア12個を一直線に並べる。

そして拳をまつすぐ勢い良くコアに伸ばすとそれらは全て砕かれ、コア12個を砕いたあとでもその威力は殺せなかった。

「……予想以上だな……もうちよつと調整しねえと……」

思ったのより強かったために調整しようと思いつながら倒れているメルドの方向を見る。

「ボロボロだな……トワイライト・ヒールンク聖母の微笑」

メルドの傷を少し弱い回復魔法で再現した聖母の微笑で治していき、ほぼ完全に治し

てからメルドを空間魔法で運び出し始めたハジメだった。

駆けつける友、攫われる友

雫と恵里、2人の戦いは恵里優勢で進んでいた。恵里が使役するゾンビを攻撃することが守る側として出来ないために後手に回ってしまっていたからである。

「ほらほらあーまだまだ止まらないよオ？」

《Fire Impact!》《Ice Impact!》

炎と氷の上級魔法が雫を攻撃する。氷は雫の動きを封じ込め、炎は雫に防御できない攻撃を叩き込む。これを先程からずっと撃たれているために雫のアーマーは崩壊寸前であった。

「ぐう……!（せめて拘束系が使えれば……）」

雫は攻撃を主とするために拘束系の魔法を会得していない。そのためゾンビをまとめて捕獲して攻撃しないで無力化という選択肢がないのである。

次炎と氷の魔法攻撃を喰らえばアーマーが破壊され、恵里の攻撃を耐えることが不可能になってしまう。

「(本当に不味いわね……このままだと負けてしまうわ……こうなったら賭けよ賭けよ!)」

雫は聖光刀クサナギのトリガーを引いてクサナギを腰に納刀する。

《聖光刀クサナギ!》

《光闇一閃!》

「三の太刀、抜刀斬!」

そして神速の抜刀術で恵里を攻撃しようとする。

だがクサナギの刃が恵里に触れる前に恵里は近くのゾンビを盾にした。

「……!?!」

雫は刃を地面に向けて三の太刀の威力を殺し、恵里を攻撃し損してしまった。

「本当に甘いね、君は……まあいいや、君は僕の計画には不要だからね。ここで殺させて

もらうよ!」

また炎と氷の上級魔法を雫に放とうとロッドを振ったその時、恵里を無数の光の刃

が攻撃した。

「な、これは縛光刃!?まさか香織が!?!」

突然現れた光の刃を見た雫はいるはずもない親友の名前を叫ぶ。

「全員、あのゾンビを捕縛しろ!死んでいるし、撲殺なんて絶対するな!」

『縛光鎖!』

「光輝とみんなの声!?!な、なんで?」

光輝の声が響き渡り、雫の後ろから無数の光の鎖が現れて王都民の死体で作られたゾンビを捕縛していく。

驚いている雫の横に欠損や怪我がどこにも無い香織が現れて雫に治癒魔法をかけていく。

「大丈夫？ 雫ちゃん」

「ええ……なんで香織たちが？」

「親切な女の子が私たちを治してくれたの！」

ユエのことを年下の優れた魔法が使える女の子と思っている香織が雫に自分たちが来たことについての詳細を説明する。

「で、あれは誰なの？」

「恵里よ。魔人族に着いた恵里」

「……え？」

恵里が敵に着いたことに驚きを隠せない香織、そのまわりの光輝や龍太郎、鈴達も動きが止まる。

「アハ、光輝くん、つくかまくえた」

「!？」

恵里は高速で光輝の元に向かい、光輝を闇の鎖で捕まえ、仮面ライダーのマスクだけ

を収納して光輝の唇を奪い、ディープリキスをかます。

光輝は突然の行動に驚きながらも恵里と闇の鎖を解こうとするが魔力が封じられているのか力が思ったように出ず、振り解けない。

やがて満足したのか恵里は闇の鎖をさらにまきつけてから唇を離す。そして、目を細め恍惚とした表情で舌舐りしながらマスクを展開してロッドを構える。

「異世界に連れてよかつたよ。日本じや、ゴミ掃除するのは本当に大変だし、住みにくいったらなかつたよ。もちろん、このまま戦争に勝って日本に帰るなんて認めない。光輝くんは、この世界で僕と2人で一緒に暮らすんだから」

小馬鹿にするように雫や香織、鈴たちに言い放つ恵里。ゴミ呼ばわりされても、余りの豹変ぶりに驚きすぎて怒りも湧いてこない。一人称まで変わっており、正直、雫達には目の前にいる少女が初対面にしか見えなかった。

「え、恵里？そんな性格だったか？」

光輝が恵里のそんな言動を聞いて震えながら恵里がそのような人間だったか聞く。

「そうだよ？……突然の変化に着いて来れないのも分かるけど、まあこれから一緒に家庭を持つんだからこの変化にも慣れてね？」

「……光輝狙いだつたのね……」

「話を戻すね？僕は光輝くんを手に入れるために色々と画策したんだ、でも殆どが失敗

に終わっちゃった。決闘の時に大怪我を負ったりとあの聖剣使いのせいだし」

雫の言葉を無視して自分の話を進める恵里。そんな恵里に囚われている光輝を助けようにもロッドが構えられているために近づけない。

「だからこの襲撃を利用させてもらったんだ！あの人にくれたこの武装とこの力……これでやっと光輝くんを手に入れられた！」

「エリリン、戻ってこないの？今なら戻ってこれるよ？」

「あはは、馬鹿なこと言わないでよ。やっと手に入れた人を手放すわけもないし、ましてや戻るつもりもないよ」

鈴が恵里に戻ってくるよう説得する。だが恵里はその提案を突っぱねた。

クスクスと笑いながらそう言う恵里に、雫は、まさかと思いつながら、ふと頭をよぎった推測を口からこぼす。

「……まさか……：大結界が簡単に……破られたのは……」

「アハハ、気がついた？ そう、僕だよ。僕が爆発させたの！」
「……！」

自分の予想が当たっていたことが分かって驚く雫。そして恵里はロッドを振って魔法陣を2つ展開する。

「そろそろ失礼させてもらおうよ、魔族の人から家を貰ってるからそこに移動してゆっ

くり光輝くんを僕の物にさせてもらう……たとえばどんな手を使ってもね？」

片方の魔法陣は恵里と光輝を包み始め、片方の魔法陣は光を放った。突然の光に思わず目を背ける雫達。

そして目を開けると、恵里と光輝がいたはずの場所には誰もいなかった。

「エリリン……」

「光輝……」

王都の結界を破壊した襲撃者の主犯の一人を逃がただけでなく、転移者達ほとんどの心の支えでもあった光輝を連れていかれたことで転移者達の士気がさらに下がってしまった。

「……みんな、恵里と光輝のことは後で考えるところとして、先に襲撃者を捕らえるわよ！」

雫は恵里の件を後で考えることにし、どんよりしている勇者パーティーに号令を掛け、パーティーメンバーを率いて残りの魔族を攻撃し始めたのだった。

「ハ、ハハハ……」

「ここは僕の家だよ、光輝くん。いやこれから2人で住むから僕たちの家というべきか

な？」

木とレンガで出来た家の中に転移した恵里と光輝。恵里は光輝の鎖を解いて光輝を椅子に座らせる。

光輝は椅子に座ると恵里を説得し始めた。

「……恵里、早く戻ろう！まだやり直せる！今から帰って王様に謝れば許してくれると思うし香織達とも会え」「ほかの女の子の名前を言わないでよお……」え？」

「これからは僕だけを見ていればいいからさ、あんな子の名前を呼ばないで……」

「……え？」

「……ほかの女の子の名前を言うことはまだ未練があるんだよね？……大丈夫！これから僕という存在を教え込めばいいだけだ！」

「え、恵里？」

恵里は独り言を言いながら光輝にゆっくりと近づく。そんな恵里を怖く思つて震える光輝。

「安心して？光輝くん！これから私の色に染めて私以外考えられないようにしてあげるからね！」

時を潜る者

「光武器精製！光そ「遅い！」グア！」

王宮でリリアーナとエリヒドを守りながら戦っている聖我はあのフリードのイーヴィル・スラツシユを受けてから防戦一方に陥っていた。

「……やはり後ろの荷物が邪魔だな。貴様の力のほとんどが出せておらん……先に片付けさせてもらおうか！」

《イーヴィル・スラツシユ！》

聖我の後ろにいる2人の人間のせいで力が出せないということに苛立っていたのか、聖我に大きくダメージを与えたイーヴィル・スラツシユを問答無用で2人に使おうとするフリード。

「やらせない！……お守りします！光武器精製、多重障壁！衝撃吸収付与！」

聖我の目の前にフリードの必殺の一撃を受けきるための障壁が展開されていく。

「その程度で……守れると思うなア!!」

《フィニツシユ・リーディング！》

《Shining Power Slash！》

《超・最光!》

「全力で守り切る!」

聖我は更にエックスソルジャー ワンダーライドブックを閉じて2回トラーディオライドを押し込む。

多重障壁の目の前に大きな光の拳が現れ、フリードへと向かう。

「……なら、まとめて死ね!」

斜めにグラムを振ると青い斬撃がウルトラマンAのバーチカルギロチンのように発射される。その斬撃と光の拳がぶつかり合う。

「威力は同等か……だが!」

フリードは聖我と自分の技が拮抗しているのを確認すると、そのぶつかり合っているところに走る。

「切り裂く!」

フリードは光の拳にグラムを振り下ろし、さらにグラムトリガーを引く。

《イーヴィル・スラッシュユ!》

光の拳はさらに威力と斬れ味が上がったグラムによって切り裂かれ、爆発する。

そして最初のイーヴィル・スラッシュユで放たれた斬撃はそのまま聖我の多重障壁を容易く切り刻んでいく。

「……………なら……………」

多重障壁を全て斬ったイーヴィル・スラツシユを光剛剣最光で切り裂こうとする聖我。だが防戦一方だった聖我にイーヴィル・スラツシユを防ぐだけの力が残っているはずもなく、弾かれ吹き飛ばされる。

「聖我！」

リリアーナが聖我の名前を呼ぶがリリアーナの元へと走っても間に合わない距離まで飛んでしまった。

「リリイ！」

イーヴィル・スラツシユはリリアーナとエリヒドに容赦なく襲いかかる。

もうダメかと思ったその瞬間、炎の槍と氷の剣がイーヴィル・スラツシユをはじき飛ばした。

「ま、間に合った……………」

「……………ユエさんも来てたのか。それにハルナも」

「はい、聖我さん！」

「妾もおるんじゃけどな……………」

応援として聖我の元へと来たユエの緋槍と急いでリリアーナの元へと救援に向かった聖我のアクセルの能力で作りだした氷の剣がイーヴィル・スラツシユを弾いていた。

「おい、私。選手交代だ」

「あ、ああ」

救援にきた聖我がフリードに弾かれた聖我に手を貸し、その身体を吸収する。

「指示通りに動いてくれ、ハルナとユエさんはリリイとエリヒド^{義父}陛下^上を連れて避難を、ティオはここに敵が来ないようにしてくれ」

「わかった」「わかりました」「わかったのじゃ!」

「来い!」

聖我は3人に指示を出してその指示通りに動いたことを確認すると1つの聖剣とワンダーライドを無限収納BOXから取り出す。

《時国剣界時!》

「ふん、今度は違う剣か……」

フリードが新しい聖剣を見ながら楽しそうに笑う。聖我はそんなフリードを無視してワンダーライドブックを起動する。

《オーシャンヒストリー!》

《この群青に沈んだ命が、今をも紡ぐ刻まれた歴史……》

聖我は時国剣界時のカイジシエルフにオーシャンヒストリーワンダーライドブックを装填し、剣を柄から引き抜く。その様子にフリードは目を見張った。

《界時逆回！》

「変身！」

界時逆回の音声とともに引き抜いた剣を逆にして三叉槍を先にし、柄に戻して変身する。

「……変身！」

《時は……時は……時は時は時は！我なり！》

《オーシャンヒストリー！！》

《オーシャン、バツシャーン！バツシャーン！！》

仮面ライダーデュランダルへと変身し、三叉槍モード……カイジスピアをフリードに向けて走り出す。

「セイー！」

スピードが乗っている魔力放出を使った刺突がフリードを襲う。それをフリードは身を翻すことで避けるが、少しばかりかする。

「……なら、これならどうだ」

聖我は時国剣界時の刀身をまた外して、カイジトリガーを引く。

《界時抹消！》

すると聖我の周りの空間が歪み、聖我が消える。だがフリードの目の前から聖我はい

なくなっておらず、聖我と斬り合っている。

聖我は特殊な時間の流れとは関係ない空間を移動しており、フリードはそれを知らずに何をしたのかも分からずに戦っていた。

そして少しの時間が過ぎた後、聖我に向かってイーヴィル・スラツシュを放とうとトリガーを引こうとしたその時、

《再界時！》

聖我はフリードの目の前に現れ、魔力放出を使った刺突を3度繰り返し出す。

「な、なにイ!? アアア！」

魔力放出を使った刺突はフリードに対して大きなダメージを与えたようで、フリードは体勢を崩してしまふ。

「次はこれだ！」

聖我は自分の直感に従って時国剣界時をカイジスピアの状態から刀身を一度外し、再接続後にカイジトリガーを引く。

「堕ちたる神霊をも屠る魔の一撃、その身で味わえ！」

《必殺時刻！》

どこからともなく水が聖我の周りに発生し、時国剣界時の刃先に水が集中する。水は徐々に丸くなっていき、その中に魔力を混ぜていく。

《オーシャン三刻突き!!》

「無敗の紫鞞草!!!」

聖我が勢いよく時国剣界時を突き出すと、フリードに向かって高出力の水のレーザーが放たれる。

そのレーザーはフリードのアーマーの右肩の部分を貫いた。

「グウウウ!!き、貴様ア!」

「まだ立ち上がるか……なら次行こうか!」

「……は?」

剣を握るための力がなかなか入らないことを確認して叫ぶフリードを見て、まだ戦えると思った聖我は変身を解除して聖剣ソードライバーと水勢剣流水、タテガミ氷獣戦記ワンダーライドブックを取り出す。

いつも通りソードライバーを腰に巻き付け、タテガミ氷獣戦記を起動する。

《タテガミ氷獣戦記!》

《吹雪く道行く百獣を率いる、百戦錬磨の白銀のタテガミ……!》

そしてタテガミ氷獣戦記を横にしてソードライバーのスロットに装填し、水勢剣流水を抜刀する。

《流水抜刀!》

《タテガミ展開！》

《全てを率いしタテガミ!!》

《氷獣！戦記!!》

《ガオーツ！LONG GET!!》

仮面ライダーブレイズ タテガミ氷獣戦記に変身し、水勢剣流水をフリードに向けて
こう言い放つ。

「さあ、今度は氷の力で御相手しよう」

氷の王者

「さあ、今度は氷の力で御相手しよう」

魔剣グラムを力を精一杯入れて持とうとしているフリードに向けて容赦無く時間を飛ばして突いた後は氷の力で潰すと宣言するのと同じことを口にする。

『お前ホント容赦ないな！よく見てみる、あの魔族腕動かせてないぞ！』

「何を馬鹿なことを言っている。剣を持とうとしているのはまだ戦意が潰えていない証拠であろうが……私の分身も同じことをフリードにして、フリードの攻撃を防いでいたぞっ。」

『……あ、ダメだ』

アクセルが聖我にツツコミを入れるが、全く取り合わない聖我を見てフリードに手を合わせるが、魔族の将であるフリードはこんなことでは終わらない。

フリードはまだ動く左手で再生魔法を貫かれた右肩に施す。

「……再生魔法か」

「……我が神が授けてくださったのだ。貴様は私が倒す！今度こそ完膚なきままに！」

「……そうか、なら私も本気で相手をしよう！アクセル、行くぞー！」

『おう、全力全開だ!』

聖我とフリードが同時に地面を蹴り、水勢剣流水とグラムがぶつかり合う。フリードの方が力が強いのか水勢剣流水がジリジリと押されている。

「単純な力はそつちが上か! アクセル!」

《Ice! Ice! Wind!》

『フリーズ・ストーム氷雪嵐!!』

力では勝てないと早々に理解した聖我は氷の嵐をアクセルの能力とタテガミ氷獣戦記の力で作り出し、フリードに浴びせる。フリードは少し面食らったものの、ダメージは無かった。

「小細工など……ん?」

フリードは嵐など関係ないとばかりにグラムを振るおうとするが、全身が凍っていて動くことが出来ない。

「まだだ!」

ジャツ君と土豆の木 ワンダーライドブックを取り出して水勢剣流水にリードさせる。

《ジャツ君と土豆の木!》

《ジャックと豆の木! ふむふむ……》

《習得一閃!》

氷でコーティングされた豆がフリードに向かって発射され、フリードの腕や脚に氷の蔦が巻き付く。

「小癩なア!」

なんとか振りほどこうと動こうとするが、全身が凍っていてそもそも何も出来ない。

「今度はこれだ!」

《キングライオンブースター!》

キングライオン大戦記で使用する事が出来るキングライオンブースターを展開し、ガイドルグリップを水勢剣流水にリードさせる。

《スペシャル!ふむふむ……ふむ》

《完全読破一閃!》

聖我の目の前に青い大砲を肩に搭載したライオンが現れ、聖我はライオンに跨る。そして大砲を撃たせながら水勢剣流水を振る。

「グレネード・アクア・スラッシュユ!」

水勢剣流水から水の斬撃が放たれ、凍って動けないフリードに水の砲撃と斬撃が大量に浴びせられる。

「グアア!？」

フリードの身体を拘束していた物が粉微塵になり、動けるようになったがアーマーの各所は傷だらけになっており、結構なダメージを負っていた。

「……はあ……はあ……やつと動ける……!」

肩を回しながらフリードはグラムを構える。

「……ラストだ!これでこの戦いに終止符を打たせてもらおう!」

水勢剣流水をソードライバーに納刀し、キングライオンブースターにキングライオン大戦記を読み込ませる。

《スプラッシュユ!リーディング!キングライオン!》

《必冊凍結!》

「それはこちらのセリフだ!勝たせてもらおう、聖我アアア!!」

フリードも聖我に負けじとグラムのグラムトリガーを引いて青いエネルギーを剣に充填する。

《イーヴィル・スラッシュ!!》

聖我の周りにエネルギーを溜めた大砲が現れ、水の剣が大量に出現する。

《流水抜刀!》

《タテガミ氷牙斬り!!!》

《ライオニツクフルバースト!!!》

聖我は全ての周りにある武器をフリードに向けて発射し、水勢剣を力いっぱい振るう。

フリードも今までの比ではない程のエネルギーを溜めたイーヴィル・スラツシュを放つ。

「全てを凍らす百獣の氷剣!!!」

《ベルウエルグ・クラム・スラツシュ》
「壊劫の天斬撃!!!」

氷の嵐と剣が龍をも殺す青い斬撃とぶつかり合う。だが徐々に量的な問題か青い斬撃が押されていく。

「ならもう一度……」

フリードが押されていくイーヴィル・スラツシュを見てもう一度イーヴィル・スラツシュを放とうとするが、魔力の不足で放てない。

「あれだけ放てば魔力が尽きるのも道理だ!このまま決める!」

氷の弾幕がフリードのアーマーに当たっていき、凍りついていく。それは先程の氷結の比ではなく、小さい冰山へと変わっていた。

「……よし、勝った」

『……純粋な剣技で勝つてくれない?』

「……次戦う時はそうするよ……多分」

フリードを凍らせて勝つたことを確信し、聖我とアクセルが話していると、空間が歪み出した。

「……空間魔法か!」

「……フリードたすけ……負けてる!?!」

シークが空間を開いてフリードに助けを求めようとしたが、フリードが凍っているのを見て驚いている。

「とりあえず……確保しとくか?」

『しとけしとけ』

聖我がジャツ君と土豆の木、ワンダーライドブックを水勢剣流水にリードさせてシークを拘束しようとしたその時、黒い剣が聖我を襲った。

「な、なんだ!?!」

『聖我、上だ上!』

アクセルがどこから黒い剣が発射されたのか特定し、聖我が上を見上げると、そこには黒い翼を生やしたノイントのようなワルキューレがいた。

そしてワルキューレが魔法陣を展開してシークとフリードを回収しようとする。

「いや逃がすか!」

《ジャックと豆の木…ふむふむ……》

《習得一閃!》

氷の豆がガトリングのように発射され、ワルキューレを氷漬けにしようとする。だがワルキューレはホコリを払うように豆を手をサツと動かすだけで破壊した。

「まじかよ……」

そしてワルキューレは魔法陣を使用してフリードとシークを何処かに転移させ、自分も転移していったのだった。

「何者だあのワルキューレ」

『気をつけておけ、あれは今のお前より数段上の実力者だ』

「分かった……」

「我が神よ、我がコピー元は回収することが出来なかったが魔人族2人の回収は完了した」

「御苦労だった、ノイント……いや闇の使徒よ。次の妨害を行ってこい。まだイレギュラーに行動を起こされるのは早いのだ」

「了解した、我が神、エヒトルジュエよ」

神々しい空間の中、女体化した分身聖我が戦ったノイントに似た闇の使徒とトータスの神、エヒトが会話していた。

闇の使徒が凍ったフリードと気絶しているシークを置いて何処かに転移すると、エヒトは小さめの魔法陣を幾つも展開する。

「神代魔法を与えて強化した將軍も、前世の知識が蘇ったと大騒ぎして我に神代魔法を強請った研究者も大して役に立たなかったな」

フリードの氷を溶かしながら呟くエヒト。

「神の使徒の素体を貸してあのモードレッドという者を作り、魔剣なるものを作ってもイレギュラーにはかなわなかった。大した詐欺師だよ、シーク」

そう言ってシークから淡い光を放つ玉を取り出す。

「……此奴らは後で闇の使徒の実験に使わせてもらう。役に立たないゴミ2人でも合わされば役に立つようになるだろう」

「……ついでに負けたノイントの魔力供給のラインも切らせてもらおうか、魔力の無駄だ」

そうやって手を振り下ろし、フリードとシークを宙に浮かせながら色々といじくり出すのだった。

襲撃後

闇の使徒がフリード達を連れて退散した次の日、ハジメと聖我は王宮の聖私の部屋の
中にいた。

「今どういう状況になってるんだ？」

「とりあえず襲撃は終わってるからな、リリイやエリヒド陛下はこれからの……小悪党
とノイントの処分とかかな……君の報酬の件も会議に入れてくれている」

「あ、聖剣！早く貸せ！」

「ハイハイ……：そういえば顔隠さなくていいの？」

「……お前の部屋だから大丈夫だろ」

「ハジメ……」

聖我は無限収納BOXから火炎剣烈火、水勢剣流水、雷鳴剣黄雷などの10本の聖剣
を取り出してテーブルに並べる。

「火炎剣烈火、水勢剣流水、闇黒剣月闇、光剛剣最光、時国剣界時、煙叡剣狼煙は駄目だ、
残りは持っていつて構わない。まあ貸すだけだが」

「わかってるさ、なら土豪剣激土、音銃剣錫音を借りるよ。ありがとうな」

「依頼の報酬だ、別に構わない。それに礼を言うのはこちらの方さ、うちの騎士団長を助けてくれてありがとう」

聖我にハジメに礼を言い、ハジメに聖我が礼を言う。聖我はそのやり取りの後8本の聖剣を無限収納BOXに収納する。

「あ、ついでにこれを持ってけ」

玄武神話 ワンダーライドブック、ヘンゼルナッツとグレーテル ワンダーライドブックをハジメに投げ渡す。

「いいのか？」

「構わない」

聖我がハジメに対して首を振る。

「あと一応だけど聞いておきたいことが2つある」

「あ？」

「私は次の戦争の時に部隊を結成するんだが、ハジメ達も参加しないか？」

聖我は次の戦争も協力してくれないか聞く。

「断る」

「だよね」

聖我はハジメに断られることを予測していたようで気にしていなかった。

「……それとな、ずっと聞いておきたかったんだが……」

「おう、なんだ？」

「君は私を恨んでいるかい？」

「ん？どういふことだ？」

聖我の言うことが分からないハジメは首を傾げる。

「前、君と出会った時に話さなかったことなんだが……私は白崎香織……治療術師に君が落ちないで私が落ちた方が良かったと恨み言を言われてね。君はどう思っているのかと」

「……そうだな、奈落に落ちてユエに会う前の俺なら恨み言を並べてお前を糾弾したかもだが、今はどうでもいい。助けることができなくて感謝していると云う訳では無いが、落ちたことでユエ達に出会えたからな」

「……そうか」

聖我はハジメの言うことに静かに耳を傾けていた。そして聖我は安心したのかドアノブに手を掛けて部屋から出ようとする。

「……………お前の部屋だぞ」

「あ」

結構かつこよかったのに最後の最後でしくじった聖我だった。そしてハジメは聖我

の部屋から出ていったのだった。

「……今誰か外にいたような気がするんだが……まあいいか」

「おい、私。今外に誰かいたぞ」

「オルタか」

聖我の後ろに聖我の女バージョン、オルタがいた。オルタはワンダーライドブックで分身した聖我の突然変異であり、今は聖我の魔力を使用して存在を維持されている。

「オルタ、君は任務があつたはずだが？」

「あの黒いワルキューレはどこかへ消えてしまったからな、追うことも出来ないから一旦帰ってきたんだ」

「そうか、それで外の奴の正体は？」

聖我が期待を込めた目でオルタを見る。

「……わからん」

だがその期待はすぐ裏切られ、今度は期待ではなく落胆がこもった目でオルタを見る。

「仕方ないだろう、ついさつき帰ってきたんだ……気配掴めただけまだマシだ……ただ王国に対して敵対しているわけではなさそうだな」

「そうかい、リリイには後で伝えておくことにして早めに寝ることにしないか？リリイ

は今日も忙しかっただろうからな」

「そうだな、リリイが倒れることは我々の望むところではないからな」

聖我とオルタはお互い頷きあい、そのまま布団の中に入る。二人一緒に。

翌朝、聖我とオルタが仲良く一緒にベッドで寝ていると、ハルナが聖我のことを起こしに部屋に入ってきた。

「聖我さくん、朝ですよリリアーナさまがお呼びで……………」

聖我を起こそうと布団に手を掛けると、聖我の隣にオルタがいることに驚く。

「おはよ……………」

「ダ、ダレエ!?……………まさか聖我さんに新しい婚約者!? そんな……………そんなア!? リリアーナ様! リリアーナ様ア!!」

「へ?」

聖我がハルナが情緒不安定になっているところを見ると、何が起きたのか疑問に思う。

そしてハルナの目が自分ではなく自分の隣に向いていることに気づくとようやく事情を理解した。

「ハルナ……ちよつと」

「リリアーナ様ア！聖我様が浮気しましたア!？」

ハルナは聖我の言葉が聞こえなかったのかそのまま一目散に走り去って行ってしまった。

「……不味い、ハルナにオルタのことを伝えるの忘れてたから……リリイは知ってるけど勘違いしたら……」

「おい不味いぞ、何故私が本体と浮気したと勘違いされている。このままではリリイに嫌われかねん」

「わかっている、それにこれがなんかの拍子でトレイシーに伝わってみろ……」

聖我は動転したリリアーナがトレイシーに相談する未来を見る。

エグゼスを振るって自分たちのことを追いかけて回す未来が見える。一撃一撃が色々なところを破壊していく。

「死にはしないだろうが壊滅的な被害が出る……」

聖我とオルタはさっさと布団から出て服を着替えてリリアーナの部屋へと全力で向かったのだった。

リリアーナの部屋にて、1人の勘違いメイドが正座して頭にでかいたんこぶを作っていた。

「聖我は本当に馬鹿ですね……私はオルタさんのことを知っているんですから勘違いするわけないでしょう……」

「良かった……リリイに嫌われたら生きていけないからね……」

「本体と浮気したと思われてリリイに嫌われるなんて最悪だからな……」

聖我とオルタは事情を説明するまでもなく、リリアーナの部屋に着いた瞬間、勘違いで安眠を妨害された怒りのリリアーナを見た。

寝巻きでハリセンを持ってハルナの頭を思いつき叩いていたところを見ると、今度は自分の番かと縮み上がっていた。

まあそんな思いは杞憂に終わり、聖我とオルタはリリアーナと後々に集まってきた食客のテイオと一緒にご飯を食べている。

「まあ妾もお爺様に痴態を見られたら恥ずかしくて死にそうじゃからな……聖我とオルタの気持ちは分かるぞ」

「あれ？そこは恋人じゃないんですね」

「妾は恋人……婚約者もおらぬからな！一応目星はつけておるが……」

テイオはチラチラと聖我を見るが、リリアーナはそれを牽制するように聖我を抱き込む。

「聖我はあげません！聖我は私とトレイシーのものですから！」

「り、リリイ、嬉しいけどみんな見てるから……」

「やっぱり本体が一番かア……」

聖我はリリアーナに恥ずかしいと伝えるが、普通にリリアーナを抱き返す。それを見てオルタは苦しそうな声をあげる。

波乱の襲撃が終わったすぐあと、まだまだ大変なのだが、聖我達は楽しそうに話していたのだった。

「……私、いつまで正座してればいいんですかね」

ハルナは忘れ去られていたが。

賢神と失踪者

辺り一面が白い世界、そこに聖我を転生させた女性が何かを見ていた。

そこには英雄王　ギルガメツシュと騎士王　アルトリア・ペンドラゴンと戦っている
大迷宮攻略時の聖我が映っていた。

聖我はドラゴニックアースー　ワンダーライドブックのページを叩いてページから
炎の竜巻が出現しその中から炎の鎧を纏った銀の義手を持っているベデイヴィエール
が現れる。

「我が魂食らいて奔れ、銀の流星！」

ベデイヴィエールはアルトリアに接近して極光を叩き込もうとするが、風王結界から
放たれた風によって破壊されてしまい、そのままギルガメツシュの財宝を食らって大ダ
メージを負ってしまった。

また別の映像ではリリアーナとエリヒドがいて上手く戦えず、仮面ライダーシグルド
となっているフリードがイーヴィル・スラッシュを放つことで倒してしまい、危うく負
けてしまうところだった。

「……聖剣のスペックは最高品質、能力も仮面ライダーと聖剣どちらの見方をしても高いレベルの能力を持っている。それにプロトアークサーの能力も使いこなしてはいるけど……それだけじゃあこれからの敵には勝てないよ、聖剣狂いの転生者君」

ほかの映像でも危うく負けそうになるところが多数映っていた。そして女性は額に手を当ててため息を着きながら本棚に手を伸ばす。

「まだ渡すときではないから使ったら行けないけど、転生者君自体のスペックを上げる為だ。仕方ないね」

女性は1冊の黒い本を手に取り、それを1冊のワンダーライドブックに変える。そのワンダーライドブックは文字と絵がなく、ただマークが着いただけの金と黒のブックだった。

《グリモワール！》

グリモワールと鳴るワンダーライドブックをドウムズドライブバツクルと呼ばれるドライブバーに装填しようとするが、装填しようとした瞬間に黒い稲光に襲われグリモワール ワンダーライドブックから手を離してしまった。

「……やっぱり無理か。仕方ない、これは諦めよ……え、成功したの？おー！きたきたー！」

地面に落ちたグリモワール ワンダーライドブックから黒い煙と黄色の雷を放ちな

がら黒いロープを来た1人の人間が出てくる。

「良かった、これでめんどくさい事しなくていいや！さて、転生者君を頼んだよ？オリジナルの賢神……」

ロード・オブ・ワイズ　タイラント

「え、マジ？」

「マジですマジ。今王都中を探していますが全く見つかりません。こちらも人を出すようにとの事ですよ、団長殿」

新しく増設された兵舎の中、聖我と1人の兵士が話していた。

「新しく作られたばかりで人材も足りないし訓練もしないといけないんだけどなあ……」

「流石に人材不足は団長殿でも解決できませんか」

「というか団長殿とかいうのやめてくれない？」

先程から団長殿を連呼されて嫌な顔をする聖我、それを見て苦笑いをする兵士。

「仕方ないでしょう、貴方はこの国で3つ目の騎士団を背負う騎士団長なんですから」

一護衛であった神刃 聖我は今、ハイリヒ王国の新しい騎士団を背負う騎士団長となっていた。

「で、誰が行方不明なんでしたっけ？」

「白崎香織と檜山達小悪党組ですよ。全員自分の装備を持って行方不明になっていきます。魔剣は持っていないようですがね」

昨日の夜、白崎香織は自分の部屋から、檜山達は檻を破壊してどこかへ消えてしまっただらしい。

「白崎香織が居なくなったのは少し痛いですが、あんなんでも回復能力はありましたから……」

「（白崎香織がいなくなったのは間違いない、アイツがここから出たからだ）」
「団長殿、少ない人員を搾るようですが誰を送るか御決断を」

今、メルド率いる騎士団とイシュタルがいなくなってシモンがトップとなった聖教会の騎士団が10人ほど送ったらしい。自分たちもそれくらい送らないといけないとなると悩むことになる。

それに香織が出ていったのはハジメが王宮から去っていったからだ。ハジメは昨日

の昼に空間魔法で秘密裏に王都から次の大迷宮に向かっていった。

エヒトの真実を国王エリヒドと国の上層部に伝えてから。

その話で今大騒ぎをしているのに、香織と檜山達がどこかへ消えてしまったのだ。首脳陣は今大忙しだろう。

話を戻す。ハジメが出ていったあとに出ていったとすればまだ王都かその近くの街にいるだろうと考え、騎士団に兵士を出動させることを要請したのだ。

「はぁ……光武器精製、闇武器精製」

聖我が生み出すのは光と闇の兵士。この力が聖我を騎士団の団長に抜擢させた要因の1つだ。無限の兵力を生み出す者だから。

「飛行可能な索敵専用の兵士だ。これを30体作るからこれを使って探査してくれ」
「わかりました！」

そう言つて兵士は量産された飛行兵士を連れて下がって行つた。そしてその兵士と入れ違いでハルナが聖我のいる兵舎にやつてくる。

「聖我さん、リリアーナ様からの書類を持ってきました。サインよろしくお願いします」
「……………あの頃に戻りたい……………リリーの護衛だった頃にもどりたい……………」

段々と増えていく書類の山を見てまだ自由があったりリリアーナの護衛に戻りたいと嘆く聖我であつた。

どこか森の中、1人の治癒術師 白崎香織は先日フリード達を回収した黒いワルキューレと話していた。

「え？ハジメくんの居場所を教えてくださいませんか？」

「ええ、さらに貴方に南雲ハジメを与えてあげましょう。貴方が邪魔だと思ふ女を取り除いて……」

「本当ですか!？」

「ええ……貴方が我々の味方をしてくれるならば、あなたの望むもの全てを与えましょう」

黒いワルキューレは香織に手を差し出す。そして香織はその手を取ってしまった。

「これからよろしくお願いします……名前なんでしたっけ？」

「ノワール……そうお呼びください、白崎香織」

ノワールは香織を連れて魔法陣を潜り抜け、どこかへと去っていったのだった。

王都の死者が眠る墓地のどこか、清水が眠る墓の前で一人の小柄な女性、畑山愛子がすすり泣いていた。

「うう……清水くんだけでなく白崎さんに天ノ河くん、檜山くんもみんなどこかへ消えてしまいました……私はどうしたらいいんですか！」

「お困りのようですね、お嬢さん！」

「あ、貴方は？」

見知らぬ黒い髪の男が現れて警戒しながらも話しかける愛子。

「あつしですか？あつしの名前はネロ！よろしくお願ひしますよ小さいお嬢さん！」

「お嬢さんじゃありません！私は立派な大人です！」

最初の警戒はどこに行つたのか、愛子はネロの勘違いに怒つて訂正する。

「あらあらそうですかい……それで大人なお嬢さん。あつしは貴女に相談があつて来たのです！」

「はい?」

ネロの相談という言葉に首を傾げる愛子。

「貴女の生徒さんを取り戻したくは無いですか?」

「……………え?」

「理不尽にも魔物に殺されてしまった1人の生徒さん、誘拐されてしまった生徒さん、殺されるという恐怖で逃げてしまった生徒さん達、理由も知れず消えてしまった生徒さんを……………」

「……………」

「あつしの主様ならそれができます。どうでしょう」

「……………本当に助かるんですか、死んでしまった清水くんも!」

「はい、あつしの主様は死者を救うことが出来ますからね……………」

「なら……………取り戻したいです!」

愛子は藁をも掴む勢いでその怪しい提案に乗った。

「では……………あつしと一緒に行きましょうか!」

ネロは愛子をひよいと担ぐとそのまま魔法陣を潜り抜けてどこかへと消えてしまったのだった。

ロード・オブ・ワイズ・タイラント

ある夜、聖我は一人で己の力を試しながら訓練を行っていた。何故夜に訓練しているのかその理由は――

「（負ける訳にはいけません、リレイやトレイシー、そして共に戦う戦友のためにも、私はもっと強くならねばならない！私が憧れた聖剣を持つあの騎士たちのような力を得るために！）」

この前の襲撃で戦ったフリード、そして分身が戦ったシークと今度は^{オルタ}圧倒できるような強さを得るために。

聖我は何度も何度も光武器精製や闇武器精製、アクセルの力を試す。どのような組み合わせがあるか、どのような応用ができるかを知るために。

『おい聖我、そろそろ休め。お前が焦る気持ちも分かる。だがそろそろ身体を休めろ……そのうちお前はその身を壊して戦えなくなるぞ』

「わかって「わかっておらぬよ」……誰だ」

聖我は突如聞こえた聞き覚えのない声に反応して火炎剣烈火を取り出して構える。

「……聞いた時、酷いと思ったが——実物はもっと酷いな、強くなるのに最も重要なことを忘れておる」

「なんだと……!」

「かかってくるが良い。そして儂が貴様の間違い、思上がり正してくれるわ」

ロープを着た顔の見えない謎の男のその言葉に聖我は自らが持つ火炎剣烈火を聖剣ソードライバーに納刀し、ドラゴニックアーサー ワンダーライドブックを取り出して装填して抜刀する。

「変身!」

《烈火抜刀!》

《When a knight enters the battlefield
With Excalibur.》(ゴルデンアーマー!)

《The Knights of the Round Table head
forth the kings support with the Brave
Dragon.》(スカレットブラスター!)

《And the knight defeats the enemy with
his friends and the Brave Dragon.》(ス
トリーオブアーサー!)

《Dragonic Arthur!》(ドラゴニックアーサー!)

《我らは勝利する!》

金色の鎧を身にまとったセイバーとなり、謎の男に向けて剣を振るう。聖我の振るった剣は謎の男を切り裂くとそう思っていた。

だが謎の男はそれを鉄の剣で防ぎ、聖我の剣をいなしてさらに聖我に向けて剣をふるってダメージを与えた。

「グッ!」

「弱い。今の貴様はただ剣を振るい、能力を使って強いように振る舞う小童……磨かれた技術で戦う者には決して勝てん!!」

「何を言う! 私はこれでこれまで戦ってきたんだ!」

「だがその程度ではこの世界の本当の敵は倒せない! この世界の元締めには決して敵わない! 貴様は全てを奪われ、そのまま死ぬ——それが貴様の末路じゃ!!」

「なら、この一撃を受けてみる! アクセル!」

『……おう!』

少し歯切れの悪い返事をするアクセルに少し疑問を持ちながら聖我は火炎剣烈火を納刀し、再度抜刀する。

《烈火抜刀!》

《是は、生きるための戦いである——ケイ》

《是は、一対一の戦いである事——パロミデス》

《是は、精霊との戦いではない事——ランスロット》

《是は、私欲なき戦いである事——ギヤラハッド》

《是は、世界を救う戦いである事——アーサー》

《是は、主従の為、使える国の為の戦いである事——聖我》

「約束された勝利の炎剣!!」

灼熱の炎を纏った剣が謎の男を襲う。だが——

「フン!!」

その剣を謎の男は剣を軽く振ることで炎を消し去って防いでしまった。エレメンタルアクセルドラゴンもあるが、セイバーの中では2番目に位置する技を軽く防いでしまったのだ。

「貴方は何者だ……」

「儂か? 儂の名はタイラント。ロード・オブ・ワイズ・タイラント——貴様を鍛えるもの名じや……」

「!?!」

「驚いとるようじやが、儂は貴様を転生させた神から寄越された者じや。これから毎日

「ここで……と言いたところじゃが、貴様にも立場というものがある。仕事もあるからの、儂の力を使って精神世界で訓練するぞ」

「……」

「拒否権ないからの」

「わかりました」

その言葉に聖我は頭を下げて謎の男―タイラントに教えを乞うことにしたのだった。

「貴様は能力に頼りすぎじゃ！よつてこれから様々な剣を覚えてもらう。剣の種類ではなく、剣の流派じゃ！」

タイラントの言う言葉に従い、聖我は剣を振るう。いつもの我流剣術とは違って少し振るいづらいが、プロトアーサーのスペックで慣らしていく。

「様々な剣を覚え、使い易いものをそれぞれの聖剣に合わせて使っていていき、最終的に貴様
は聖剣の本数に合わせた剣の戦い方を覚えることが出来る」

まず聖我は能力の幅が広い聖剣、炎、水、雷の三聖剣にあつた剣を覚えることにした。
タイラントの教え方は実戦稽古と口頭説明だけなため、時折アクセルに聞いたりして練
習を行なっていく。

『聖我、俺の力も合わせて使え。最近属性の方に目をやってるが、俺の本来の力は加速
だ。俺らはエレメンタルアクセルドラゴンとして覚醒し、バランスブレイクを手に入れ
たが、俺本来の力でもバランスブレイクを使うことが出来る。その訓練も行うからな
！』

アクセルは聖我の仮面ライダー以外の力の使い方について、自分の前の宿主などの例
を見せて教えていた。

まだアクセル自体のバランスブレイクを手に入れていないが、聖我はアクセルの加速
を備蓄し、それを様々なことに応用する術を手に入れた。

聖我の訓練はまだまだ始まったばかりである。

手を組む者たち、激突する者たち

とある昼下がり、聖我とリリアーナは2人で昼飯を食べていた。2人で食べてはいるが、すぐ隣には給仕役としてハルナとヘリーナが控えている。

それに2人が食べながらしていることは決して楽しいことではない。業務連絡をこなしながら食べている。それでも忙しい2人にとってはささやかな癒しであるのだが。

「白崎香織に続いて畑山愛子まで行方不明になってしまいました。この状況はかなり深刻です。捜索部隊を下がらせて隠密諜報部隊に2人の捜索を頼むことにしました」

「わかりました、リリイ。私のところの騎士団は大分人数が揃ってきています。何人かのクラスメイトがこちらに移籍してきましたので大分前よりマシです」

「大丈夫ですか？ 貴方と使徒達は険悪な関係であつたはずですが」

「彼らの頭が殆ど居なくなつたのでそれに伴つて……でしょうか。それに雫達も同様にこちらの騎士団に入っています。我々のところは騎士団というより兵団と言つた方が正しいかもしれませんね」

聖我のところにはいつもの園部率いる三人娘と雫に加え、勇者パーティーの殆どが入りました。

光輝や香織といった聖我を目の敵にしていたメンツのほとんどが消えてしまい、残った上位カーストメンバーである龍太郎はリーダーシップはあまりなく、勇者パーティーは瓦解した。

それに加えて愛子の行方不明だ。愛子が消えたことで生徒たちの後ろ盾がほぼ消えてしまった。

これは困ったと地球から転移してきたクラスメイトのほとんどが頭を抱えてしまった。困っていないのは雫と三人娘のみ。

それを見かねた雫は聖我を説得することにしたのだ。

「貴方を冷遇していたのは分かっているわ。それを飲み込めとは言わないけど、何とかして貰えないかしら」

聖我は騎士団の人材に困っていた。そんなところに雫からの頼み。これ幸いと勇者パーティーのメンバーをエリヒドに頼んでこちらの騎士団に入れてもらったのだ。

心情的にはあまり好ましくないが、気持ちを押し殺すのも社会では必要と分別をつけたのだった。

それによって加えられたのは永山重吾、野村健太郎、遠藤浩介、辻綾子、吉野真央の6人の永山パーティーと相川昇、仁村明人、玉井敦史の3人の愛ちゃん護衛隊のメンバーである。

雫たちも合わせると12人のクラスメイトが聖我の騎士団に入ったのだ。

「ふふっ、それは良かったです。それと魂魄魔法はどうですか？ 新たな神代魔法の使い道を教えて欲しいです」

「そうですね、試してみましようか……」

聖我は魔力を目に流して魔力を発動する。そしてリリアーナをじーっと見つめる。リリアーナは聖我に見つめられて顔を赤く染め、少し経つとさらに顔を赤らめる。

「な、なるほど、し、思念を伝達することが出来るのですか」

「他にも思考を読み取ったり、新しく意識などを作ることができません。……それにしても可愛い反応しますね、リリィ……」

「だ、誰でもあんな言葉を送られたら恥ずかしくなりますよー」

魂魄魔法の能力を理解しながらまだ顔を赤らめ続けるリリィ。どのような言葉を送られたのか気になるハルナとヘリーナだが、すぐに思考は仕事モードに切り替わる。

「こ、こほん、では王女として命令します。すぐに思念を伝達するアーティファクトもしくは光の武器を作り、それを兵士たちに配布してください」

「了解しました、リリアーナ王女様」

婚約者としてではなくかつての主従関係で命令を行ない、聖我はその命令を受諾し、食事を終えて仕事に戻ろうとした瞬間――

「オリジナル、リリイ、緊急事態だ！」

「聖我様、緊急事態です」

オルタがノイントを連れてリリアーナと聖我が食事を行っていた部屋の扉を蹴破つて入ってきた。

何故ノイントがオルタとともに入ってきたのか……それはまた後程。

「な、何事ですか！」

「ヘリーナ、落ち着きなさい。どうしましたか」

「帝国に南雲ハジメとその一派ハイレム、そして兎人族が急襲を掛けました！」

「……は？」

事態はとも訳の分からない方向へと行っているようだった。

ところは変わって帝国、帝都は炎に包まれていた。

「どういふつもりだ南雲ハジメ？いきなり俺の国に攻撃してくるとは……事と次第によつてはお前を殺すぞ？」

「こちらにも事情があるんでな、お前とお前の国の腐った貴族共を殺して返すもん返してもらうぞ！」

その帝都の中心でガハルドとハジメが剣とドンナーをお互いに向けて緊張した空気を醸し出していた。

2人の後ろには帝国の精鋭と兎人族が待機しており、お互いを牽制し合っていた。

「聖我の友であるあなた方には申し訳ありませんがその首、置いて行ってもらいますわ！」

「ハジメの敵は私の敵、シアの敵も私の敵……聖我の婚約者であつても容赦しない」「父様をかえしてもらいますう！貴方達を殺しても！」

トレイシーとユエ、シアもお互いの得物を構えてお互い睨み合っていた。

なぜこうなつたのか、それは少し前、そしてオルクスからハジメが出た頃に遡る。

シアの父であるカム・ハウリアと兎人族は奈落から出たばかりのハジメによつて魔改造を施されている。だがハジメは態度が少し柔らかくなつていたためにアサシンと普段の切り替えができるように変わっていた。

その魔改造が終わつた頃にシアと付き合い始め、カム達からも祝福され、ハジメは力

ムをもう一人の父親として見ていた。

ハウリアの安全を確保したあとも、なにかあったら連絡するよう通信のアーティファクトを渡すくらい、ハジメはカムを、その人となりや父親として尊敬していた。

聖我達から離れたある日、ハジメはカムに渡したアーティファクトから通信を受けた。ハジメとシアはどんなメッセージが送られたのかワクワクしながらそれを見ると、そこに書かれていたのは――

カムが帝国に連れていかれたという連絡だった。

フェアベルゲンに向かっていたのもあつて急いで空間魔法を用いてフェアベルゲン近郊にあるハウリアの隠れ家に向かうとそこには悲しみにくれたハウリアたちの姿があった。

どうやら仲間を庇つてカムが一人残つて帝国と戦つたために連れていかれたらしい。

ハジメは聖我とのコネを使い、帝国に掛け合つてガハルドと会談した。

だが――

「そんな兎人族は知らん、そもそも最近兎人族を見かけんしな。それよりもどうだ、聖我から聞いたんだがお前優秀な錬成師なんだろう？ 帝国に仕えないか？」

返つてきたのは知らないという返答だった。だが帝都の酒場で話を聞くには帝城に兎人族が連れていかれていたらしい。

全く取り合わないガハルドに痺れを切らしたハジメは帝国を兎人族とともに攻撃した……ということだ。

「だからハウリアの男なんて知らねえと言っているだろう！いくら聖我の友だろうと帝国に攻撃したんだ……タダでは返さねえ！」

「それはこちらのセリフだ！俺の義理の父親とも言える男を攫ってシラを切るなら帝国を燃やしてでも強制的に探し出す！」

ハジメとガハルドはそれぞれ自身を奮い立たせると激突した。

それを見て兎人族と帝国軍、ユエとシア、トレイシーも戦いを始めるのだった。

暗黒使徒

力が一番ものを言う帝国という大きな戦力と単独ではあるものの国に対してでもおきな痛手を負わせることが可能なハジメ達があつかり合っているのを聞いて、聖我達は混乱していた。

だがいち早く冷静さを取り戻したりリアーナが頭をフル回転して決断する。

「ノイント、聖我、そしてここにいない雫を連れて共に帝国に向かって争いを止めてきてください。今帝国に軍隊を送れば三つ巴になって更なる火種によって大変なことになるってしまいます。なので単騎でも十分な活躍が見込める貴方達を送ります！」

「エリヒド王にはどう報告なさいますか！」

「ヘリーナ、早く行ってきて！」

「し、承知しました！」

リアーナとは思えない口調でヘリーナに命令するリアーナに驚きながらも命令を遂行するヘリーナ。

「聖我、全力で鎮圧しなさい。これから魔族に黒い天使との戦いが待っているのになんかことに兵を使わせる余裕はないわ！」

「了解しました」

聖我はブックゲートを使って帝国内の街に転移しようとする。

「ん？」

だが何回も展開してもブックゲートが使えない。

「どうなっている？」

「使えないのですか？」

「はい……」

「仕方ないわ、空を飛んで行ってくださいー！」

「了解しました」

ブックゲートが使えないという謎の現象が起こったために、聖我とノイントは仕方なく空を飛んでゆくことにした。

「聖剣は火炎剣烈火のみ使用可能じゃ、それ以外はまだ貴様の鍛錬ができておらぬからな」

「（わかりました、ライドブックはどうしますか？）」

「（鍛錬の成果がみたいからのう、3冊までなら許可するわい、ついでにアクセルも使つて良いぞ）」

「（わかりました。いつもの鍛錬と同じですね）」

「(その通りじゃ)」

聖我は毎晩タイラントと鍛錬を荷物につけながら行なっている。強化フォームの禁止や、ライドブックの使用数指定などの荷物をつけながら足りない部分を剣術で補っている。

聖我はガトライクフォンで雫を呼び出しながらブレイブドラゴン、ストームイーグルを装填して変身する。

《烈火抜刀!》

《竜巻ドラゴンイーグル!!》

《烈火二冊!》

《荒ぶる空の翼龍が獄炎を纏い、あらゆるものを焼き尽くす!》

仮面ライダーセイバー ドラゴンイーグルフォームに変身して炎の翼、バーミリオンウイングを展開する。

「待たせたわね聖我、変身!」

雫は聖我の元に駆け寄ると聖光刀クサナギに光と闇の剣士 アームドブックを装填してトリガーを引く。

《聖光刀クサナギ!》

《光と闇の剣士!!》

本当にどう見ても仮面ライダーダブルのような鎧が合わさり、仮面ライダーダークサナギへと変身を完了する。

そして闇と光の翼、ダークネスウイングとシャイニングウイングを片翼ずつ展開して聖我、ノイントとともに王国の空を飛ぶ。

「聖我様、今のうちに魔力供給をお願いします」

「ああ、分かりました」

「そういえば魔力供給を元々のところから受けられなくなったのよね？ どうやって供給してるの？」

聖我がノイントの背中を触って魔力を流していると雫が気になったのか聞いてくる。「魔力供給のコアをノイントの身体に入れてそこに魔力を流してる。そこまで難しいんじゃない」

聖我は魔力供給のラインを切られたノイントに魔力供給の能力を込めた剣を埋め込むことで魔力供給を行ない、消えかかっていたノイントを救っていた。

そこからリリアーナの交渉術によってノイントは聖我の部下へと転職を果たしたのだった。

「なるほど。それ私にもできるかしら」

「できるが……」

「魔力が足りないのよ」

雫は飛びながらクサナギを使用しながらの戦闘では魔力が足りなく、とても長期的な戦闘はできないということだった。

「…魔力供給か。了解した、それ！」

ノイントに埋め込んだ魔力供給の剣を雫に埋め込んで魔力を流す。

「…すごい！魔力が潤沢に使えるわ！」

聖我の流す魔力の質、量に驚きながらも嬉しそうにする雫。

「よし、スピードをあげてさっさと帝国に「やらせませんよ」何?！」

黒い剣が聖我の元に飛来し、バーミリオンウイングを攻撃する。間一髪で避けるが、加速は消え去ってしまった。

「何者だ!」

ノイントが自らの武器である大剣を黒い剣を投擲した方向に向けるとそこには黒い執事服に身を包んだ黒い髪の男がいた。

「切り捨てられたノイントちゃんじゃないですか! あっしはエヒト様の忠実なる暗黒使徒が1柱、ネロちゃんでございます!」

「……ネロ? どなたですか?」

「ノイント、知らないの?」

「…お前のようなおっさんがネロを名乗らないでくれ…ネロっていうイメージが崩れる……」

エヒト様という言葉に反応したノイントが顎に手を当てて思い出すがどうにも覚えておらず、雫はそもそも知らない。そして聖我は頭の中に赤い暴君を浮かびあげながらため息を着いている。

「あらあら辛辣〜！まあいいや、帝国には行かせませんよ〜あつしに勝てたら行ってもいいですけどね」

勝てたら、のところでおちやらけていたネロの空気が変わり、凄みが出てきた。

「今お前と戦っている暇はないのだが？」

「南雲ハジメとガハルド・D・ヘルシャー…この2人の戦いの元を私が握っているとしたらどうでしょう？」

聖我の言葉を聞いてネロは自分の手元にひとつの鳥かごを持つてくる。

それはすぐに大きくなり、人が1人入っていた。

「獣人か？」

「そう！このクソツタレはカム・ハウリア…あの南雲ハジメの番であり、エヒト様の警戒対象の1人の親ですよ」

「シアさんの親か…舐めた真似してくれるじゃありませんか」

聖我が火炎剣烈火を構え直し、ネロとの戦いに備えたその時、ノイントがネロと聖我の間に入りネロに問う。

「貴方は暗黒使徒と言いました。ですが私が切り捨てられる前は貴方のような方はいらつしやらなかった…これは一体どういうことでしょうか？」

「ノイントちゃん、それはね…貴方達ワルキューレよりも強い使徒を用意する必要があつたためですよ…それに自我を持ち、ただ命令を遂行する人形さんの代わりを作るというのもあつたみたいですわね」

くるりくるりと回りながらネロはノイントに対して説明を行なう。

「さてさて、戦いましょうか…最優先警戒対象、そして警戒対象、元神の使徒・現クソ残りカスさん達……！」

「よし、この映像を持って戦いを止めてこい！」

「了解しました！」

「わかつたわ、聖我！」

光の剣二振りをもノイント、雫それぞれに渡して帝国に向かわせ、ストームイーグルの能力を持つて炎の結界を作り出す。

「さて、逃がさないぞ。エヒトの使徒よ」

「勝てますか？フリードごときに苦戦していた身で…」

「勝てるさ、暗黒使徒ネロとやら……魔力の貯蔵は十分か？」

「舐めた口聞きますね……！」

ネロはカムの鳥かごを自分の後ろに置き、先程聖我に投げた剣を自分の手に戻す。
「戦いの場を作つて差し上げましょう！境界!!」

聖我とネロの身体が異空間へと移動し、空が淀んだ全体的に暗い空間へと移動する。

「……鍛錬で手に入れたこいつを使うか」

《ゴースト偉人録!》

《かつて歴史に生きた偉人の魂をその身に宿し、命を燃やす……!》

ゴースト偉人録 ワンダーライドブックを起動してブレイブドラゴン、ストームイーグルを外して装填、抜刀する。

《烈火抜刀!》

《神獣を宿す!》

《レジェンドライダー!!》

《ゴースト!伝説一冊!》

《正義の心は、更なる力を剣に宿す!》

ライドブックから現れたパーカーゴースト、ゴーストイジンロクをその身にまとい、両肩にはかつて仮面ライダーゴーストとその仲間が共に戦った英雄達が記されている。

「さあ、始めようか！」

「……知らない姿をまたポンポンと……いい加減にしやがれ！調査する身にもなれってんだ！……あつしは調査したことありませんけどね？」

火炎剣烈火を構えながらネロを集中して見て、聖我はネロのまだ見ぬ能力を警戒する。

ネロは新しいセイバーの力をイラつきながらも警戒して見る。
聖我とネロの戦いの幕が降りたのだった。

聖我の成果

聖我の精神空間の中、1人の老人と一体のドラゴンが聖我とネロの戦いをじっと見ていた。

ネロの剣による攻撃を危なげなくいなして剣を当てて着実にダメージを与えていく聖我、その立ち振る舞いは前回のフリードたちとの戦いとは雲泥の差だった。

「タイラント、よく鍛えたもんだな…あのネロとかいう奴、聖我と俺が前戦った奴らよりも数段上のやつなのに楽々といなして行ってるぜ？」

「ふん、まだまだじゃ…:…:…とりたいところだが、流石はアーサー王のポテンシャルと聖剣の力を誰に師事した訳でもないのに引き出した男よ…:…:既に火炎剣烈火にあつた剣技に応用を加えよつた」

タイラントが見る聖我はネロに対して魔法を放ちながら剣をふるってネロの攻撃を防ぎながらダメージを与えていた。

「相棒なら当然だぜ」

「じゃが油断は禁物じゃ…:…:暗黒使徒と名乗るからにはあの程度で終わる実力ではなさそうじゃからの」

聖我はガンガンセイバーと呼ばれる仮面ライダーゴーストの武器を巧みに火炎剣烈火と併用しながらネロに対して攻撃を続ける。

「どうなつてやがりますかあ!?!この前はそんな強くなかつたでしょうに!?!」

「これが私の鍛錬の成果だア!」

聖我は叫びながらゴースト偉人録のページを押す。

《ゴースト偉人録!》

2体のパーカーゴーストが現れ、銃と弓矢を撃ちはなつていく。どうやら織田信長とロビンフッドの英雄が宿つたパーカーゴーストのようだ。

「ちっ、鬱陶しいなあ!」

だがネロはその攻撃を容易く避ける。そこをさらに新しい三体のパーカーゴーストが現れ、聖我とともに切りかかる。

1人はカマ、1人はハンマー、1人は二刀流の攻撃。四方からの攻撃にさすがに対応できなかつたのか、ネロは大打撃を食らう羽目になった。

「次はコイツだ!」

聖我はネロが吹き飛んで言ったのを見てから次のワンダーライドブックを取り出して起動する。

《てれびくん!》

《とある戦士達の戦いを描いた、超絶楽しいてれびくん……!》

てれびくん ワンダーライドブックを起動してそのままゴースト偉人録 ワンダー

ライドブックを外して装填、抜刀する。

《烈火抜刀!》

《コミックライダー!》

《漫画一冊!》

《愉快な本は、更なる力を剣に宿す!》

仮面ライダーセイバー ドラゴンてれびくんに変身を遂げ、何故かドライバーには装填した覚えのないブレイブドラゴンが装填されている。

Xソードマン、Xウオーリアーに似た腕の武器、パワフルエックスソードが装備されており、アーマーには歴代のてれびくんの付録ヒーローが描かれていてブレイブドラゴンの肩と合わさってカツコよく見える。

「またか! またなのか! どうなってるんだお前の引き出しはアアア!」

暗黒使徒ネロは頭を抱えて地面を転がりながら黒い魔力弾をガトリングのように放

ちまくる。だがそれを腕に装備されたパワフルエックスソードで防御しながら魔力放出で接近して斬りかかる。

地面に転がっていてまともに避けられないのか、ネロはその攻撃をまともに喰らって切り裂かれた。

はずだった。

「残念、今までのあつしは全部演技よ演技。本当に馬鹿だねえ！騙されてやんの〜!!」

ネロは今までの傷を負っていなかったかのように振る舞う。その様子を見て不思議そうにしながら、聖我は新たにふたつのワンダーライドブックを取り出す。

《ストームイーグル!》《キングオブアーサー!》

「今度はこれだ!どんな手品でも必ず倒してみせよう!」

キングオブアーサーを通常の逆位置に装填し、ストームイーグルを装填、抜刀する。

《烈火抜刀!》

《三冊の本が重なりし時、聖なる剣に力がみなぎる!》

《ワンダーライダー!》

《アーサー王!イーグル!てれびくん!》

聖我にキングオブアーサー、ストームイーグル、てれびくんの力が宿り、キングエクスカリバーと火炎剣烈火を持ってネロに向かって走り出す。

《三属性の力を宿した、強靱な剣がここに降臨！》

「ちよ、はや」

キングエクスカリバーのケイトリガーを5回連続で引いてネロの体にキングエクスカリバーを当て、そのまま切り裂く。

《必殺読破！》

《キングスラッシュユ！》

青いエネルギーがネロの傷を輝かせ、そのまま爆発する。

「まだまだア！」

致命傷を負わせた筈のネロがまたも無傷でキングスラッシュユを放った聖我に向かって攻撃する。

「…大体わかった。お前のその異常な回復量、再生魔法か」

「少し違うなく80点だ！だが種がわかった所デエ！」

《必殺読破！》

《キングスラッシュユ！》

十字の青い斬撃がネロを襲う。だがその攻撃はネロの作り出した障壁によって弾き飛ばされる。

「異様な回復量に固い防御…ならこれで行く！アクセル！」

3冊のワンダラーライドブックを順に押しつけていきながら火炎剣烈火をソードライバーに納刀、そのままレックカトリガーを2回引く。

《キングオブアーサー!》《ストームイーグル!》《てれびくん!》

聖我と同じくらいサイズのキングオブアーサー、そして赤い炎の鳥にてれびくん歴代のふろくヒーロー達が聖我の横に並ぶ。

《必殺読破!》

《アーサー王!イーグル!てれびくん!三冊撃!ファ・ファ・ファ・ファイアー!!!》

「フレイムアーサーインパクト!!」

バーミリオンウイングで加速しながらキングエクスカリバーとパワフルエックスソードを前に突き出して突進する。

これ幸いと避けながら攻撃しようとするネロだったが、それをライドブックから召喚したヒーロー達が阻む。

「これで終わりだあ!消えろお!!!」

ネロに2本の剣が貫かれ、そのまま青い聖なるエネルギーと炎によって吹き飛ばす。

「残念だったな!これで死ぬわけないだろお!!」

「わかってるさ、だがこれで終わりだ」

《金の武器 銀の武器!ふむふむ……》

《必殺リード！ジャアクドラゴン！》

「な、何だそのオーラは…」

「これでお前はどこか生きている実感すらわからないだろう暗黒の空間に飛ばしてやる！」

仮面ライダー最光がやっていたマスターロゴスをブラックホールに吸い込んだあの技を、闇黒剣月闇と火炎剣烈火で再現している。

「や、やめろおおお!? ……なあんちゃって、空間魔法で……」

《習得一閃！》《月闇必殺撃！習得一閃！》

「残念だがそれは出来ない」

聖我はネロの身体に魔力を凝縮して作りだした魔法禁止の能力を付与させた釘を刺突の時に打ち込んでいた。

ホワイトホールとブラックホールによって生み出された穴に吸い込まれるネロの返答を聞く前に聖我は空間を破壊してきつきと出ていってしまったのだった。

「ちくしょおおおおおおおおお!!!」

ネロの断末魔を聞くことなく。

「急ぐぞ、アクセル！」

「よっしや！行くぜ！」

聖我はドラゴンイーグルアーサーに変身してバーミリオンウィングを使用しながら空を飛んで帝国に向かうのだった。

錬成師と皇帝

聖我とネロが戦っていた頃、帝国対ハジメ一派は苛烈に各々の刃を交わらせていた。ハジメ謹製のナイフや剣、帝国の剣や槍が、各々の剣技が。

死者はまだ出ていない。激突しあっているものがそれぞれ匹敵するほどの実力者ということがあつてだ。

その中でも一際目立つ戦いを繰り広げているのはハジメから魔剣を貰ってさらなる力を手に入れた2人だろう。

魔剣スライサーという魔力の通りと切れ味が持ち味な剣を使っているユエは『魔法科高校の劣等生 アームドブック』と呼ばれるアームドブックを用いて変身していた。

仮面ライダースライサーである。その能力は魔法科高校の劣等生に登場する第一高
校生徒の魔法を自由自在に操ることが出来るというもの。

「フォノンメーザー！」

ユエの放った魔法、熱線を当てる事が出来るフォノンメーザーはトレイシーのプレートアーマーを焼き焦がしていく。

「くっ！」

ずっと当たるとは行かないと避けるがそこには土豪剣激土と比べると小さい魔剣ギカントを振り下ろすシアがいる。

「甘いですねぇ！どっせい!!」

仮面ライダーギカントとなり、『僕のヒーローアカデミア アームドブック』の力を使つて魔剣に炎を滾らせている。

僕のヒーローアカデミア アームドブックは1年A組の生徒、先生の個性を使うことが出来る。

轟焦凍の個性を使つての攻撃だ。前門の熱線、後門の炎にたちまち上に飛び上がつて避けるトレイシー。

そして自分の武器である魔喰大鎌エグゼスに2人が出している攻撃を吸収させて切れ味を増させる。

「さあさあさあ！綺麗な断面見せて頂きますわ！」

横薙ぎにエグゼスを振るうと、周囲の建物が真っ二つに切れ、かまいたちが現れてユエ達を切ろうとする。

だが易々と切れるならこの戦いはすぐ終わっている。

「ハウザーインパクト！ですう！」

「ジークフリート！」

シアの爆撃がかまいたちを相殺し、その衝撃をユエが自らの体を硬化させて受ける。「その展開は……読めてましてよ！」

ユエとシアのコンビネーションを見ても大して驚かず、そのままエグゼスを何回も振るうとそこには大量のかまいたちが現れてユエとシアを攻撃する。

「合わせてシア」

「了解ですユエさん！」

ユエとシア目掛けて突っ込んでくるかまいたちを見てから2人は目を合わせてそれぞれの魔剣を前面に押し出す。

「フアランクス！」

「がてんひょうへき
穿天氷壁!!」

氷の壁と魔法によって生み出されたいく枚もの盾がそのかまいたちを全て封じていた。

全てのかまいたちが消えた頃、3人は息を吐き続けていた。
また何度目かも分からない振り出しに戻っていた。

魔剣リベリオンと帝国の宝剣と言つてもいいガハルドの愛剣が激突する。2人とも力任せに二人の剣を奮つていた。

「はアアアアア！」

「オラアアアアア！」

二人の間にとつともないほどの衝撃波が生まれ、知覚で戦っている兎人族や帝国兵に被害が出ている。

「力を貸せ！リベリオオオン！」

ハイスクールDxD アームドブックから赤龍帝の箆手の力を使ってその力を倍にしながらガハルドに一撃入れようとするハジメ。

「当たらねえな！そんな！攻撃はアアア!!」

自ら冒険し、自ら見つけた矢よけの加護と魔力放出のペンダントを使いながらハジメの攻撃を避け、ハジメの身に攻撃を仕掛けようとするガハルド。

派手さで言えばユエ達の方が上だがその攻撃と防御は誰も立ち入れないほどだ。

「何故互角なんだ！ステータスは俺の方が上のはずだ！」

「……簡単だ、年季が違うんだよ若造がアア！」

ハジメはガハルドの気迫から少し後ずさり、リベリオントリガーを引く。

《Deadly! Hajime's power x Gremory genus
!》

《Revelion Impact!!!》

「なら俺も行くぞ! 風雷! 斬!!」

ハジメの手から放たれる紅い滅びの魔力とガハルドの剣から放たれる風と雷の斬撃がぶつかり合う。

ユエたちとは比べ物にならないほどの勢いで攻撃がぶつかり合うために周囲への被害は甚大だ。

全てを滅ぼそうとする攻撃とその攻撃を貫こうとする攻撃……とぼつちりが強くないかわけが無いのだ。

ついにその攻撃の雌雄が決するその瞬間、戦場において発動されていた魔法が全て消し飛ばされた。

「な、何が……!」

「……申し訳ないですが、ここで打ち止めです、ハジメ殿、貴方の義父は生きています、聖我様が今貴方の義父を助けて今ここに向かってきていますので」

「は?!……了解だ」

ハジメとガハルドの目の前に現れたのはノイントと雫だ。だが両者とも雫は変身し

ているため見てもわからなかったが。

「お前ら王国の者か？ 見覚えがないんだが……」

ガハルドがノイントと仮面ライダークサナギ状態の雫を知らないために疑問を投げ掛ける。

雫が証明のために変身を解除するとガハルドはようやく2人を信用した。

「……………」で戦力を減らされては困るのですよ」

「それはこちらにも困ります、戦力を減らさないといけないのにこの争いを止められる訳にはいかないのです」

ノイントが諭すように言うと、その言葉に重ねるように別の声が聞こえる。ガハルド達はその方向に目を向けると、そこには黒いワルキューレ、ノワールがそこにいた。

「私の名はノワール、エヒト様に仕える暗黒使徒です」

「何故神の名が出てくるのかわからんが、敵ということだな！」

「そうですね、そして南雲ハジメ、貴方の義父を誘拐したのは我々です」

「お前らかよ……………」

真犯人を見つけたことにより、ハジメと合流したユエとシアの顔が怖くなる。

「さて、戦力を減らすために……………少し遊びましょうか」

その言葉がハジメ達に届いた瞬間、ノワールの横から魔族が数人、灰竜や色々な魔

物が帝国にあらわれる。

だが、フリードレベルの戦力がいないので簡単に勝てる、そう思っていたが、ノイントと同じタイプの使徒が複数出現し、状況はハジメ・ガハルド側の劣勢となってしまうた。

「この戦局なら、イレギュラーと帝国を潰せる！」

ノワールは勝ち誇りながら魔族と使徒に指示を下し、攻撃を始めさせたのだった。

不死鳥と感情のトリブルドラゴン

ハジメ一派とガハルド達が戦っていたところで、今度はその戦っていたものたちと魔族と神の使徒が戦っていた。白銀の美女たち——神の使徒はハジメ達イレギュラーと呼ばれる戦力と戦い、魔族はガハルド率いる帝国軍と戦っている。

「少し暇ですね……まあここにもうすぐ来るであろう王国の騎士団長を待ちながらの子らの手伝いでもしましょうか」

ノワールはそう呟きながら両手から邪悪な魔力を出し、神の使徒と魔族と魔族が使役する魔物にそれを振り掛ける。すると彼女らは黒いオーラを醸し出しながらさらに攻撃のスピードを上げる。

「なんて強さだ……」

「それに量も多い……」

「どうしたらいいんでしょう?」

《聖光刀クサナギ!》

《光闇一閃!》

「五の太刀、天衝!」

仮面ライダークサナギとなっている雫がクサナギトリガーを引きながらクサナギを横に振るう。すると振るったところから光と闇が混ざった色をした斬撃が現れ、使徒を襲う。

「こんなもの……!」

使徒が仮面ライダークサナギの技を分解しようとするが、雫の放った斬撃は簡単には碎けず、そのまま使徒を一体真つ二つに切り裂いた。

「こつちも行くぜ!」

《Deadly! Hajime's power x Gremory genus
!》

《Revelion Impact!!!》

雷と光の力をまとった魔剣リベリオンを振るうことで、周りの使徒2体を消し飛ばす。

ユエとシアもノイントも各々の武器を振るうことで使徒を倒していくが、使徒は湯水のように溢れてくるため倒しても倒してもキリがない。

徐々に押され始めていた。

ところ変わってガハルドとトレイシー。2人が率いる帝国軍とハジメの援護できていた兎人族の相手はノワールによって強化された魔人族と魔物。

だが割かし善戦していた。帝国の強みは各々のステータス、そして経験の高さ。強化されたと言えど、これまで戦ってきた魔物に負ける訳もなく、連携を取って魔物を倒して行く。

灰竜とは別系統の竜が魔力砲を放ってきたがそれをトレイシーがエグゼスで切り分けて吸収、空いた口に魔法を放って着々と倒している。

「さっさと倒してボスの援護だ！行くぞお前ら！」

「「「おう！」」」

ハジメ謹製の武器とその隠密性、スピードで魔物の足、手、そして首を切り裂いて行く。気付くことの出来ない魔物が多数いる中、反応が追いついてきた魔物もいた。だが速さに追いつくことが出来ずに倒されて行く。

「……魔族は本当に将軍クラスじゃないと弱いですね…なら、使徒をぶつけてみますか」

帝国と兎人族の奮闘に苛立ったのか、ハジメ達に向けていた使徒とは別の使徒を差し向ける。

「なんだ？つてうおっ!？」

使徒が各々の武器を持ちながら突撃をかましてくるのでそれを迎え打とうとしたその瞬間、手持ちの武器が分解されそのまま斬撃を受けてしまう。

「……ちつ、怪我して武器があるやつは俺に剣を渡せ！」

負傷している帝国兵から無理やり剣を奪い、使徒と鏢迫り合いを行うが、簡単に吹き飛ばされてしまう。

「あんなひよろつとしたカラダしてどこからあんな力出たんだって……トレイシーもか」

「エグゼスう！」

分解を吸収しようとエグゼスを振るうトレイシーだったがエグゼスの刃が少し欠けてしまった。

「……速い、我々よりも速いとは……！」

スピードと隠密性が自慢の兎人族がスピードで押され、ハジメ側と合流して挟撃されそうになり始めてきた。

《必殺読破！》

《烈火抜刀！》

《ドラゴン！ピーターファン！ヘッジホッグ！三冊斬り！ファ・ファ・ファ・ファイヤー！！》

ピンチと思われたその時、紅く燃える斬撃と、雷を纏った針、水を小人型にしたものが飛んできて、囲んでいた一番前の敵全てを消し去った。

「来ましたね、王国の英雄！」

「間に合ったみたいで、良かったです、それに来る前に新たな力を2つ手に入れましたからね……（いいですか、使っても）」

『……………いいだろう、許可する。エモーシヨナルドラゴンの使用を許可してやろう。その力を持って、邪神の兵を討て』

——ありがとうございます

そう呟いた聖我の目の前に、3匹の龍が描かれたワンダーライドブック、エモーシヨナルドラゴン ワンダーライドブックが顕現する。

「ノイント、来い！」

「承りました、聖我様！」

聖我は向かってくるノイントに向けてオレンジ色の剣が納刀されたこれまたオレンジ色のドライバーと、不死鳥が描かれたワンダーライドブックを投げ渡す。

それをノイントはキャッチするとすぐさまそれを腰にまきつける。

《覇剣ブレードドライバー！》

覇剣ブレードドライバー、それは聖剣であり、聖剣でなくなつた、覇剣となつた、変質した剣、無銘剣虚無を納める器である。

《エターナルフェニックス！》

《全てを無に帰す……》

エターナルフェニックス ワンダーライドブック、それは不死鳥の力を封じたワンダーライドブック。その力は単体のみで原典のエレメンタルプリミティブドラゴンを超えるほどの強さを誇る。

「私は新しい主のために、新しい力を振るう」

《エターナルフェニックス！》

エターナルフェニックス ワンダーライドブックをひとつしかない装填部に装填する。そしてノイントは無銘剣虚無を抜刀する。

《抜刀……！》

「ふふふっ！変身！」

《エターナルフェニックス!!!》

《虚無!》

《漆黒の剣が、無に帰す……!》

かつて、感情の三龍でしか剣士では倒すことが出来なかった仮面ライダーファルシオンがこの世界、トータスに出現した。

「ふむ、では私も行くか!」

エモーショナルドラゴン!

勇氣、愛、誇り! 3つの力を持つ神獣が、今ここに……!

エモーショナルドラゴン ワンダーライドブックを展開し、また閉じる。そして3冊のワンダーライドブックを全て取り、エモーショナルドラゴン ワンダーライドブックを装填する。

そして火炎剣烈火を抜刀し、変身する。

エモーショナルドラゴン!

烈火抜刀!

愛情のドラゴン! 勇氣のドラゴン! 誇り高きドラゴン!

エモーショナルドラゴン!!!

神獣合併!!

感情が……溢れ出す！

仮面ライダーセイバーの新しい力、仮面ライダーセイバー エモーショナルドラゴンが、火炎剣烈火と盾を装備した新しい力が聖我の身に宿る。

「少し、増やすか」

《こぶた三兄弟！》

こぶた三兄弟を起動し、聖我の身が3つに分かれる。

《時国剣界時！》《煙睿剣狼煙！》

《オーシャンヒストリー！》《昆虫大百科！》

分身はそれぞれワンダーライドブックを装填して刀身を引き抜き、トリガーを引く。

《界時逆回！》

「変身！」

界時逆回の音声とともに引き抜いた剣を逆にして三叉槍を先にし、柄に戻して変身する。

「……変身！」

《時は……時は……時は時は時は時は！我なり！》

《オーシャンヒストリー！！》

《オーシャン、バッシヤーン！バッシヤーン！！》

「変身……!!」

《狼煙開戦!》

《FLYING! SMOG! STING!!STEAM!》

《昆虫CHU大百科!!》

《揺蕩う、切っ先!》

聖我の両隣に仮面ライダーデュランダルと仮面ライダーサーベラが現れ、ノワールに向けて剣を向ける。

4人の仮面ライダーが帝国の戦場に出てきて、それぞれの援護に向かうのだった。

聖我が持つワンダーライドブック、ハジメの持つワンダーライドブック、アームドブック、その他が持つアームドブック、それ以外にも、この場にある聖剣・魔剣が共鳴して光っているのを、まだ誰も知らない。

聖剣の仮面ライダー、全員集合！

聖我が変身完了すると同時に、使徒が大量に向かってくる。前の時はその使徒1人に苦戦していた。

だが、今は違う。聖我が振るう剣は、原典の賢神とは違うが賢神であるタイラントから教えられたセイバーとなった聖我に合う剣術と、気高い誇りの力によって力、精密さ全てが上がっている。

その聖我が振るう剣によって、使徒は一瞬で1人殺されていた。
「フンっ！」

魔族が使役する巨大な亀の魔物によって踏み潰されそうになるが、セイバーに装備された破壊の盾によってその足を防ぎ、そのまま押し返す。

《スペクター激昂戦記！》

新しいワンダーライドブックを取り出して起動、ページを開く。

《とある兄貴が激昂の末に、紫炎を纏う戦いの歴史……！》

ページを閉じて火炎剣烈火に3度読み込ませる。

《スペクター激昂戦記！ふむふむ……》

《習得三閃!》

聖我の目の前に、デイープスラッシュヤーと呼ばれるサングラスが着いた剣と、2人のパーカーを来たピンクと紫の戦士が現れる。

《ゲンカイダイカイガン! デイープスペクター! ギガオメガドライブ!》

《ダイカイガン! カノンスペクター! オメガドライブ!》

2人の戦士が背中に紋章を浮かばせて飛び上がり、聖我はデイープスラッシュヤーにいつの間にか持つていた眼球のようなアイテム、眼魂を装填し、サングラスを下げる。

《キョクゲンダイカイガン! ギガオメガギリ!》

2人の戦士が使徒に向かってキックをかますと同時にデイープスラッシュヤーと火炎剣烈火を振るい、紫炎の斬撃と紅の炎の斬撃が使徒に与えられる。

それらの攻撃によって、出てきている使徒の2割が倒された。

仮面ライダーデュランダルとして分身聖我は使徒と魔族に向けて自らの剣、時国剣

界時を振るう。そのとなりには雫とトレイシーがいた。

雫なら使徒は倒せるだろうが、苦戦する、トレイシーはエグゼスとともに使徒の攻撃ならギリギリいなせるが倒すことは出来ないという考えから魔人族に攻撃させる。

《界時抹消！》

時間を抹消して使徒の認識外の所へ向かい、カイジスピアで1人ずつ貫いていく。最初使った時よりも上手く使いこなし、周りの使徒を倒したところで――

《再界時！》

時間抹消を解いて雫、トレイシーの元へと戻る。

そして分身聖我は何を思ったのかトレイシーに自らの剣を渡し、変身を解除、風双剣翠風と猿飛忍者伝を取り出して装填、変身する。

《壺の手、手裏剣！》《式の手、二刀流！》

《風双剣翠風！》

《翠風の巻！》

《甲賀風遁の双剣が、神速の忍術で敵を討つ！》

「え、これは……」

「使ってくれ、今は人手が欲しい」

「……わかりましたわ！」

トレイシーは分身聖我から渡された、時国剣界時にオーシャンヒストリーを装填し変身する。

《時は…時は…時は時は時は！我なり！》

《オーシャンヒストリー!!》

《オーシャン、バツシャーン！バツシャーン!!》

「ねえ、私のは？」

「君にはクサナギがあるだろう」

「……それもそうね」

少し不満そうな雫を見ないようにし、分身聖我は風双剣翠風を手裏剣モードに変えて投擲する。何人かの使徒、もしくは魔族を屠ってその手裏剣は帰ってきた。

雫が五の太刀・天衝を使用して範囲攻撃で多数の敵を足止めし、トレイシーは長物なのに、エグゼスと時国剣界時のカイジスピアで敵の首を切り落とし、貫く。

「槍と鎌の二刀流なんて朝飯前ですわ!」

普通は朝飯前では無いが、ここは戦場。聖我と雫はその言葉にツツコミを入れることなく、敵を倒すことに集中するのだった。

「ハジメ、土豪劍激土を皇帝に回せ、お前は音銃劍錫音とりベリオン、ユエさんは私の煙
睿劍狼煙とスライサーだ」

「……………どういうことだ」

サーベラとなったもう一人の分身聖我がユエに煙睿劍狼煙を手渡ししてその命令を話
すと、ハジメが反発してきた。まだ研究が終わっていないのだろう。

「一時的にだ、使徒を倒せる戦力が欲しいからな」

「……………いい「ちよつと待つて欲しいぞボス」……………どうした？」

ハジメが渋々了承しようとする、聖我がここまで連れてきたカムがそれを制止す
る。

「俺達も使う。そうすればまた戦力が増えるだろう」

「……………あくわかった！」

こうして、ハジメはりベリオン、ユエはスライサーと、シアはギガント、カムは音銃
劍錫音、カムが連れてきたネア・ハウリアが煙睿劍狼煙、ガハルドが土豪劍激土を使う
ことになった。

「これが聖我の使う聖劍か……………変身！」

「行くぞ、変身！」

「切り刻む……変身!」

《ぶった斬れ!》

《ドゴ!ドゴ!土豪剣激土!》

《激土重版!》

《絶対装甲の大剣が、北方より大いなる一撃を叩き込む!》

《銃剣撃弾!》

《銃でGO! GO! 否!剣で行くぞ!》

《音銃剣錫音!》

《錫音楽章!》

《甘い魅惑の銃剣が、おかしなリズムでビートを切り刻む!》

《狼煙開戦!》

《FLYING! SMOG! STING!!STEAM!》

《昆虫CHU大百科!!》

《揺蕩う、切っ先!》

3人が仮面ライダーへと変身するのを確認すると聖我も仮面ライダーの力をその身

に纏う。

《闇黒剣月闇！》

《When the Knight of Darkness,
Excalibur reveals darkness that cannot
be joked.》

《No matter how strong it is,
the power of the dark dragon will
knock down every-
thing.》

ラウンス・ジャオウドラゴン・アーサー

《円卓の黒龍王！》

《誰も生き残れない……》

聖我は仮面ライダーカリバーとなり、右手に闇黒剣月闇、左手に光剛剣最光を持つて敵に向かって攻撃をしかけ始めた。

それを見ながら残った者たちも攻撃を始めるのだった。

「ノイント、覚悟！」

エヒトによって作られた使徒が自分に向かって剣を振るってくるのを迎え撃たずにそのまま受ける。普通なら身体が切られそのまま死亡するだろう。だがその攻撃は食らったものの、ダメージは全く無かった。

切られたところがすぐさま再生したのだ。

この神のごとき力を与えた聖我に感謝しながら無銘剣虚無を振ることで不死鳥の炎を撒き散らしながら多数の敵を切り裂いていく。

《エターナルフェニックス！》

エターナルフェニックスのページを押し込むことでノイントの身体全体から不死鳥の炎が湧き上がり、その炎が鳥の形になる。

「征け！」

炎の鳥が魔族の魔物をその炎で包んで倒して行く。

《虚無居合！》

必冊ホルダーに無銘剣虚無を納刀し、抜刀する。

《黙読一閃！》

魔族を屠っていた不死鳥が無銘剣虚無へと集まり、炎を纏わせる。そしてそれを振るうと炎が周りの使徒、魔族、魔物を殺していく。

「これが私の新しい力……!」

ノイントにこの無銘剣虚無が本当に与えられるかどうか分からないが、確かなことがわかる。無銘剣虚無を使うノイントが物凄く強い事だ。

『全く、私は火炎剣烈火を使うことは許したが、他の剣を使っているなどと言った覚えは無いのだが?』

「申し訳ありません……でもこうしないと我々が押されてしまいますので……」

『……水勢剣流水とワンダーコンボのワンダーライドブックを貸せ。それともう一人分身を生み出せ、雷鳴剣を遊ばせておく訳には行かんからな』

「了解しました」

タイラントは聖我を叱咤しながら水勢剣流水を渡すようにいい、実態化する。そして誰もいなくなった聖我はタイラントに水勢剣流水を渡して自分はこぶた三兄弟で分身

し、雷鳴剣黄雷を起動して変身する。

《蒼き野獣の鬣が空になびく!》

《ファンタスティックライオン!!》

《流水三冊!》

《紺碧の剣が牙を剥き、銀河を制す!》

《ランプの魔人が真の力を発揮する!》

《ゴールデンアランジーナ!》

《黄雷三冊!》

《稲妻の剣が光り輝き、雷鳴が轟く!》

タイラントと分身聖我は使徒へと向かっていき、敵を倒していく。そして本体の聖我もその多彩なワンダーライドブックを使用して敵を倒していくのだった。

(もう少しだ、もう少しで聖我、お前は最強になれる……!)

聖我の中で何かをしているアクセル、それが形となるのはもう少し先……

究極の力

聖我が取った作戦、それはこの場にいる実力のある者たちに聖剣を貸し与え、その力を存分に振るわせると言う作戦だった。

その目論見は上手く行き、タイラントという歴戦の猛者とも言える人物も戦いに加わり、戦闘はこちらの優勢になってきていた。

だが、それを使徒や魔族に指令を飛ばしているノワールによく思われるわけがなく、ノワールはついに動き出した。

「……なら私が動くしかないようですね、覚悟しなさい……」

ノワールは使徒と魔族、そして魔物を全て下がらせ、前に出る。そして空間を歪ませてとあるものを取り出す。

聖我によって飛ばされていたネロだ。

「……あれ、あつしは変な穴に吸い込まれて……」

「私が助けました、早く動いてください。あの量のイレギュラーを相手するのは骨が折れますからね……」

「わかりました、ロワール様ア！」

どうやら同じ暗黒使徒でもノワールの方が位が上のようだ、ネロはふざけた口調のままノワールに向けて敬礼しながら黒い剣を聖我達に向ける。

「なんかやべえな……だが負ける訳には……」

ガハルドがそう零した瞬間、ネロが高速でガハルドの元へ向かい、そのまま黒い剣で切りつけ変身を解除させる。

そのスピード、その威力、それらはステータスの低い者の技術などでは到底太刀打ちできないほどだった。

だがガハルドはギリギリ意識を保つがフラフラと意識は朦朧としていた。

「……総員、全力を持ってあいつらを倒すぞー！」

「あいつはやばいからな、必殺技だー！」

聖我とハジメの言葉で、各々が剣を使って必殺技を放つためにポーズを取る。

必殺読破！

烈火抜刀！

エモーショナル必殺撃!!!

《必殺読破！》

《流水抜刀！》

《超・最光!》

《超狼煙霧虫!》

《昆虫煙舞一閃!!!》

《必殺時刻!》

《オーシャン三刻突き!!》

《必殺黙読!》

《抜刀……!!》

《不死鳥……!!無双斬り!》

《Deadly!Hajime's power!Revelion Impact!
!》

《Deadly!Magic school Power!Slicer Impact!
t!》

《Deadly! Hero Power! Gigant Impact!》

《聖光刀クサナギ!》

《光闇一閃!》

十数本の剣から威力のある斬撃が放たれ、ノワールとネロそれぞれに別れてぶつかつた。ネロは障壁を展開してそれを防ぐが、ハジメとユエ、シアの放つた一撃がそれを砕いてネロに攻撃を当てる。

ノワールは残る全ての斬撃を相手していたが、ほとんどの斬撃はノワールの振るう剣によつて破壊されてしまつていた。

ただ、聖我とノイント、タイラントの放つた攻撃は防げなかつたようで、その攻撃は当たつていた。

まあダメージは切り傷程だが。

「……嘘でしょ……」

雫がそのノワールの様子を見てこの場のライダー全員の心のうちを代弁する。

「ふん、この程度ですか……ネロ、起きなさい」

ハジメとユエ、シアの攻撃によつて吹き飛ばされていたネロを回復して無理やり立ち上がらせる。

「……このままだと……」

「こちらが負けてしまう……」

「さて、こちらの攻撃です、喰らえ……」

ノワールの放つたものはこの場にいるものを全て飲み込みそうな闇の波動を放つ。

その攻撃をどう躲すか、どう受けるか迷ううちにその闇の波動はこちらに迫ってくる。

「……こうなれば、こうするしかないな！」

聖我は破壊の盾を使つて防ごうと、空中に飛び上がつて闇の波動を受け止める。

「……なくそおおおお!?」

エモーショナルドラゴンの出力でも受け止めることが叶わず、徐々に押されていく聖我。エモーショナルドラゴンが、その身に宿りし3匹の龍を出す、それですら受け止めることは叶わない。

「(……)までか……?」

『いやまだだ！今こそ、お前の特典全てを合わせ、あの力をこの場に顕現させる！来い！』

諦めようとした聖我を励ますように今まで出てこなかったアクセルがこの場にある聖剣、魔剣、ワンダーライドブック、アームドブックを聖我の周りに集める。もちろん、ハジメとシークが作り出したものも合わせての全てだ。

「なっ！」

誰かが驚きの声を上げる。他の者も驚く。突然変身が解除され、全ての剣とアイテムが聖我の周りに行ってしまったのだ。驚くだろう。

『俺の力を合わせ、全ての力を新しい力へ変化させる！行くぞおおお!!』

聖我の中にいたアクセルが出てきて、剣とブックをその身に融合させる。

闇の波動は弾き飛ばされ、ノワールとネロ、そして聖我の後ろにいるノイント達もその融合によって発せられる光に目を瞑る。

オムニフォース！

刃王剣全能刃！
オールセイバー

エクスカリバー！

3つのアイテムが聖我の元に降り立つ。ひとつはワンダーライドブックとアームドブックを全て組み合わせ、アクセルの力を元に作り出した、ワンダーライドブック。

ひとつは全聖剣・魔剣とエレメンタルの力が組み合わさり、銀河の力を内包した新しい純正の聖剣。

ひとつは闇と光、そして全てのブックを組み合わせて作り出したオムニフォース、聖我を助けたことのあるキングオブアーサーの力で新しく生み出された聖剣。

その力は何とんでもないまでのオーラを放出しながら聖我の元に降り立つ。

刃王剣全能刃からここまでの融合に使われた聖剣・魔剣が放出され、持ち主、そして貸されていた者たちに返還される。

「な、なんだその力は……それは紛うことなき神の力……どうなっているー！」

ノワールが聖我、というよりアクセルとブック、聖剣が生み出した新しい力に怯えている。あのとてつもない力を誇ったノワールが、だ。

聖我はその手にオムニフォース ワンダーライドブックを取る。すると聖我の腰に金色のバックル、ドウムズドライブバーバックルが顕れる。

オムニフォース！

伝説の聖剣と全ての本が交わる時、偉大な力を解き放つ……！

オムニフォース ワンダーライドブックを起動し、それをドウムズドライブバックルに装填、そしてドウムズライドと呼ばれるスイッチを拳で押し込んで変身する。

OPEN THE OMNIBUS, FORCE OF THE KNIGHT K

ING!

KAMEN RIDER ARTHUR!

HAPPINES IS COMING SOON……!

金と銀、そして青に彩られた鎧に神々しいまでのオーラが纏われる、オムニフォースで変身できるのは本来ソロモンのはずだが、原典のように邪魔をされなかつたために仮面ライダーアースとなっている。禍々しい気配などない。

そして聖我の手に金色の粒子が現れ、つい先程まで聖我のそばにあったエクスカリバーが握られる。

「すごいなこれは……魔力が滾る！使い切れないほどの魔力が私の身に！これなら！」

聖我は光武器精製、闇武器精製を使用して自らの頭上に一振りの剣を作り出す。それは人造の聖剣と比べても変わらないほどの出力を誇る聖剣だった。

その聖剣は聖我が思う方向に飛んでいき、使徒を出していた魔法陣を切り裂き、魔人族と魔物と残っていた使徒全てを切り伏せる。

「……どんだけ高性能なんだあの力！」

聖我が預けてくれた聖剣よりも高性能な力に目を輝かせるハジメ。それ以外の面々も、聖我が振るう聖剣とその鎧に目を向ける。

「……貴様は危険だ……絶対に……で殺します！」

ノワールは黒い剣を作り出して聖我に向かって突進、その身を切り刻もうとする。

「光武器精製、闇武器精製……いや聖劍精製！切断の聖劍！」

聖我の目の前によく切れるようにと切断の言葉を込めた聖劍が現れ、ノワールの振るう黒い剣をオートで対応し、それを切り裂く。そしてエクスカリバーをふるうことで剣を持つていないノワールは避けることが出来ず、そのままダメージを負う。

『おい、聖我、俺の力も使いえ！さらなる力を得た俺の力をな！』

「ああ、わかった！」

アクセルの靴はまた形が変わり、今度は籠手になっていた。それはまさに赤龍帝の籠手のような形をしていた。

『これが俺の新たな形、加速アクセラレータ・ギアの籠手だ。あと、エレメンタルの力は霸王劍全能刃に移しち

まったからないからな！』

「了解だ！」

《《accel boost!》》

《《transfer!》》

切断の聖劍に今の加速を譲渡し、切断の聖劍は進むスピードが2倍になる。

『スピードを倍にする。それは変わらない。だが禁手になればさらなる力を得れる。それだけではない！』

「……行くぞー！」

ノワールが黒い魔弾を放つが、それは全てスピードが倍加された切断の聖剣が切り裂いていくため意味が無い。聖我はゆっくりと歩きながらオムニフォース ワンダーライドブックを閉じてドゥームズライドを1回押す。

オムニバスローディング！

聖我の拳に切断の聖剣が纏われ、光のエネルギーが収束される。そしてノワールに向けて拳を突き出す。

ARTHUR BREAK!!!

すると拳から光り輝く拳型のエネルギー弾が放たれ、周りの地面や空気を震わせながらノワールと近くにいたネロに向けて直進する。

ネロはそれを迎撃しようとしたがノワールがそれを制し、それがノワールに着弾する直前に空間魔法で避けてそのまま拳型のエネルギー弾は爆発し、戦隊、仮面ライダー特有の大爆発を見せたのだった。

聖我は新たな力を発揮し、新たな敵を撃退した。だが次なる敵はすぐ迫ってきているのをまだ知らない。

ハウリア対帝国の後始末とその後

聖我が新たな力を使ってノワールとネロを撃退してから早くも3日が経った。

その間に、ハウリアと帝国の間で条約が結ばれたり、聖我から帝国、ハウリアに聖剣を渡したりと色々なことがあった。

それを順次説明して行こうと思う。

まずはハウリア・ハジメ一派と帝国の条約だ。

ハウリアとハジメ達は帝国側に急に強襲したことを謝罪、だが帝国もきちんと説明も牢屋などを見せたりもしなかったためにこのようなことが起きたと思ってその謝罪を受け入れ、この話は終わった。

そして帝国はハウリアの戦闘能力を評価し、これ迄通りに奴隷にしておけばどんなしつぺ返しが来るか分からないと考え、王国と相談、魔族との戦いに参加してくれるば獣人族の解放を約束すると言い、ハウリアはこれを了承した。

次に聖我が聖剣を貸し出したことについて。

聖我は魔族、使徒、神について改めて王国と帝国に説明し、敵として認識させ、その対応のために聖剣精製によって作り出された切断の聖剣と、先程の戦いで仮面ライ

ダーに変身するために使っていた聖剣を帝国とハウリアに貸し出した。

王国の一部の人間は聖我の聖剣を貸すことを渋ったが、貸し出しを何とか実行し、全員に聖剣を貸し出した。

これができたのは一重に刃王剣全能刃の能力によるものだ。この能力は魔力無しで無尽蔵に聖剣・魔剣を作り出すことが出来る。ただ決まったものしか作れないために聖剣精製とは一応区別されている。

刃王剣全能刃とエクスカリバーを見せろ〜と言ってきたMAD錬成師・H・Nと言う人がいたが、聖我はそれを無視して逃げた。

他にも魔人族との戦争時の大将やら何やらで話し合いは長引き、終わったのは、3日後の夜だったという。

「で、私にこの聖剣が回ってきたというわけですか」

「そういうことです」

「まあこの話は置いておきましょう、久しぶりに貴方に会えたわけですしね。貴方が来るとは思ってたましたが、他の方を連れてくるとは思いませんでしたわ」

「そうですね、ノイントは使徒でしたし、雫は連れて行っても問題ない戦闘力ですから」

「むー」

「どうしました?」

聖我の言葉を聞きながら不満そうにするトレイシーに疑問を抱く。

「……決めましたわ、私も王国に向かいます」

「へ？大丈夫なんですか？」

「ええ、どうせ戦争前に私がやることはあまりありませんから行けますわ」

「嬉しいです、トレイシーと会うことがあまり無かったので……」

「……！」

聖我の言葉に頬を赤く染めながらトレイシーは心の中で自分に宣言する。

「（絶対にリリアーナ姫には負けませんわ……！）」

「さて、貴様にこれからやることを説明するぞ」

トレイシーが去っていく、聖我はそのままタイラントを表に出してこれから修行でやることを説明してもらう。

「貴様にはこれからこぶた三兄弟で聖剣・魔剣の数だけ分身し、使い方を全てマスターし

てもらう。もちろんそれにあつた剣術もだ。それに加えて刃王剣全能刃とエクスカリバー、オムニフォースに慣れてもらう！いいな」

聖剣・魔剣の数は10本以上あるが、それをいつぺんに覚えると言ってきた。

どんな無理ゲーだと文句を言つてやろうと思つていた聖我だったのだが――

「聖剣精製×オムニフォース最高」

オムニフォースを使用して無限に等しい魔力を手に入れ、それを使つての聖剣精製を試していたところ、文字数はあつていたけど能力が強すぎて再現できなかったものを再現できるようになっていた。

精神と時の部屋的な能力を持つた聖剣を時間制限があるとはいえ作れるようになったり、剣士のコピーを作つて戦うことができるために修行が捗つていた。

ハジメの作つたりベリオンやスライサー、ギガント、聖我の作つたクサナギ、シークの作つたグラムなどはそれぞれの聖剣の補助武器として扱つている。

「エクスカリバーの能力はどんな能力なんだ……?」

エクスカリバーを振りながら能力を確かめる聖我。エクスカリバーのいい面を期待する。あの子安カリバーのような剣でないことを……。

「ヴァカめ!」

「ああ、終わった。何もかも終わった……」

いやさすがにこれはないだろうと頭を横に振って否定する聖我。そもそも彼が望むのはあの敵を薙ぎ倒していくあのエクスカリバー。決して子安カリバーでは無い。

いや別に嫌いではないが自分が使うなら使いたくない。そう思うと子安カリバーが普通のFate産のエクスカリバーへと変わっていた。

「うん、どゆことだ？」

もう一度聖我が子安カリバーのことを思い浮かべると、Fate産のエクスカリバーから子安カリバーに変わる。

「ヴアカめ！」

今度はFate産のエクスカリバー、また次は子安カリバーとどんどん考えを変えていく。

「思考するとそれに変わるのか？」

ならばとベレッタに変えてやろうと思つくと、Fate産のエクスカリバーからベレッタに……変わらなかつた。

「……どゆことなんだ？」

『聖我、お前のそのエクスカリバーはFate産の設定が使われている』

「うん？」

アクセルの説明に聖我は頭の中にはなマークを浮かべる。

『エクスカリバーは人々の「こうであって欲しい」という想念が星の内部で結晶・精製された神造兵装だ。だからそれはお前の望む形に変化することができるんだらう。剣限定で』

「めちやくちやだな」

『これがお前の新たな武器ということだよ』

アクセルはそういうとまた意識を消して、聖我はエクスカリバーの能力を慣らすのだった。

《錫音読撃！イエイイ！》

「ふん！」

聖我（スラツシユ）のお菓子を纏わせた斬撃を刀で相殺するタイラント。振るつたその隙を逃すまいと聖我は光武器精製で拘束のためのチェーンをタイラントに向けて射出する。

「このようないものが！儂に通用するか！」

《銃奏！》《ブレイメンのロックバンド！》

《銃剣撃弾！》

《剣でいくぜ！NO！ NO！ 銃でGO！ GO！ BANG！ BANG！》

《音銃剣錫音！！》

《甘い魅惑の銃剣が、おかしなリズムでビートを切り刻む！》

チエーンに対応して反応が遅れたタイラントはスラッシュのフォームチェンジをさせてしまった。

「イエーイ！ドンドン行くぜえー！」

《accel boost！》《transfer！》

音銃剣錫音の弾丸のスピードを倍加することでタイラントはそのスピードに反応するのが遅れてしまい、幾らかのダメージを受ける。

《ブレイメンのロックバンド！イエーイエーイ！》

《錫音銃撃！イエーイエーイ！》

左肩から発せられる音符でタイラントを惑わせてそのまま接近、剣盤モードで紫のエネルギー斬撃を負わせる。

「くっ！」

「次はこいつだ！」

《黄雷拔刀!》

《ランブドアランジーナ!》

《黄雷一冊!》

《ランブの精と雷鳴剣黄雷が交わる時、稲妻の剣が光り輝く!》

タイラントがダメージに苦しむ間にエスパードとなって剣を振るう。タイラントはダメージがあつたとはいえ、すぐに対応してその剣を受け止める。

《ランブドアランジーナ!》

受け止めた剣から稲妻が溢れ出て来るのを感じたタイラントはすぐさま聖我から離れる。だが離れたところに三日月の斬撃を浴びせる。

それも難なく防いだのを確認すると、聖我は魔剣スライサーを取り出す。そしてランブドアランジーナを読み込ませ、雷鳴剣黄雷をソードライバーに納刀、イカズチトリガーを1回引く。

《Deadly! Lampdo Arangina! Slicer Impact!》

《必殺読破!》

《アランジーナ! 一冊撃! サンダー!》

聖我は両足に雷のエネルギーを纏わせ、それを真空を切るように蹴る。すると、そこから雷のエネルギーがこもった斬撃が2つ現れ、タイラントに向かって直進するが、タ

イラントはそれを避ける。

避けたところに聖我は魔剣スライサーを投擲し、雷をまとった刺突を放つ。

それすらもタイラントは避け、タイラントは聖我に急接近し、その首に刀を突きつける。

「これで終わりじゃ」

「……お疲れ様です」

「まあ大体の剣は使えとるな、これならオムニフォースを使うか刃王剣全能刃を使えば儂にも勝てるじゃろうて」

その言葉を聞いて聖我は少し達成感を得るのだった。

「……というわけでここに来たんですわ」

「……貴女がここに来るとは本当に想定外です、トレイシー殿」

「うん私も想定外だった」

トレイシーは自分が来た経緯をリリアーナに説明、そしてリリアーナの隣の部屋に住むことになった。

そして聖我はリリアーナに今までであったこと、そして新しくできたことを説明する。

「なるほど、新たな力、オムニフォースにエクスカリバー、刃王剣全能刃ですか、わかりました、南雲ハジメはどうしました？」

「一部の聖剣持ちのハウリアとともにハルツィナと魔族の国にある大迷宮を攻略するそうです、その頃には戦争中ですが」

「わかりました、きっちり療養して準備を整えてください」

リリアーナはそう伝えると聖我の前に行って聖我の膝の上に座る。

「なっ……!」

「私の身長ならこういうこともできるわけです」

トレイシーはあぜんとしていたがリリアーナは得意そうな顔でトレイシーに言う。

「くっ、王女とあろう者が少しはしたくないのではなくて？」

「プライベートですから」

聖我の取り合いで喧嘩をして、トレイシーとリリアーナは張り合う。それをなんとも言えない顔で聖我はそれを見るのだった。

「次の修行は……これにしようかの」

聖劍使いVS賢神

聖我の精神世界、そこでは聖劍と魔劍全てを慣らす修行が行われている。だが今は全ての修行が止まっていた。

「は？今なんと言いました？」

「貴様の戦争ももうすぐで始まる。なので修行を最終段階にするべきだと考えた。……
儂との全力勝負じゃ」

「……それ絶対勝てませんよね？」

「……エヒトに勝つには貴様が強くなければならん。無論他の者も強くなければならないが、エヒトを倒せる可能性を持つのは貴様と南雲ハジメだけじゃ」

タイラントは聖我にエヒトを倒せる可能性がある者は二人しかいないことを伝える。

「……」

「儂の力で貴様をエヒトを確実に倒せるラインまで持つていく！あの神からも力を貸してもらっておるしな！」

タイラントは黒いワンダーライドブック、グリモワール、ワンダーライドブックを取り出して起動する。

グリモワール!

「なんですかその禍々しいエネルギーの塊は!?!」

「貴様の特典のひとつだ。グリモワール ワンダーライドブックと言ってな、ラスボスの力だ」

「……それを何に使う気ですか?」

「簡単な話だ、変身!」

グリモワール!

ドゥームズドライバーバックルを腰に巻き、グリモワール ワンダーライドブックを装填し、ドゥームズライドを拳で押し込む。

タイラントの背中から六対の黒翼が生え、タイラントの身体を包み、黒い鎧が現れる。

OPEN THE GRIMOIRE, THE END OF THE STORY
!

KAMEN RIDER TAIRANT!!

フハハハハハハ……!

聖我の目の前に魔王のような風貌をした仮面ライダータイラントが現れ、右手にカラ

ドボルグと呼ばれる剣が握られる。

「……！行きます！」

聖我は邪剣カリバードライバーを取り出して腰に巻き付ける。

《ジャアクドラゴン！》

闇黒剣月闇を取り出してジャアクドラゴンをジャアクリーダーにリードさせてからベルトに装填してエンブレイブヒルトでライドインテグレーターを押し込むことで変身する。

《闇黒剣月闇！》

《Get go under conquer than get keen！》

《ジャアクドラゴン！》

《月闇翻訳！光を奪いし漆黒の剣が、冷酷無情に暗黒竜を支配する！》

聖我は仮面ライダーカリバーとなってタイラントの前で剣を構える。するとタイラントは聖我に向かってカラドボルグを向けると聖我の目の前に黒い怪人が現れる。

「こやつはロードオブワイズ スパルタン。大剣と斧の技を極めし者であり、パワーならこやつが最強じゃな……行け！」

「バスターが正解でしたか！ですが……行きます！」

スパルタンの攻撃を聖我は避けながら剣を当てていく。だがそれらの攻撃に対して

全く怯みもせずにスパルタンの武器である斧を振って聖我を吹き飛ばす。

「ぐううう!?! (なんて威力ですか!?)」

『聖我! 俺を使え! スピードを操作して倒すぞ!』

「わかった! バランス・ブレイク 禁手!!」

聖我は変身を解除して加速の籠手を使用、そして禁手を発動する。聖我の身に青色の龍の姿をした鎧を纏わせる。

《Accelerate Dragon Balance Breaker!》

聖我は聖劍精製で作り出した擬態エクスカリバー・ミニッツクの聖劍を握ってスパルタンに攻撃する。蛇腹劍のように変形させ、ムチのようにしてスパルタンの身体に傷を負わせる。

だがその攻撃は大してダメージにならないために聖我は攻撃から蛇腹劍を拘束に使う。

「アクセル!」

《accel boost! boost! boost! boost! boost! boost!》

擬態の聖劍を何本も精製し、ナイフに姿を変えてスピードを上げてスパルタンに攻撃されないようにさつさと何本も刺していく。

「何をやってもそいつには威力の高い攻撃でないと……!」

ブローケン・ファンタズム
「壊れた幻想……発揮!」

《絶対装甲の大剣が、北方より大いなる一撃を叩き込む!》

仮面ライダーバスターとなり、土豪剣激土に玄武神話 ワンダーライドブックを3回
リード、ギガントに赤龍兵士ハイスクリールドxDの物語をリードさせる。

《玄武神話!ドゴドゴドゴーン!》

《激土乱読撃!ドゴドゴドゴーン!》

《Deadly!Gremory genus Power!》

《Gigant Impact!!!》

岩で出来た巨大な土豪剣激土とギガントに雷と滅びの魔力を纏わせ、それをスパルタンに振り下ろす。するとスパルタンは真つ二つに切り裂かれ、そのまま滅ぼされた。

「こんな倒し方で倒すとはのう……」

「次、どうぞ!」

「……来い、ハイランダー!」

ハイランダーと呼ばれた戦士は無数の目が描かれた禍々しい大鎌を持っており、それを振り回してくる。バスターの装甲で受けるが凄まじい速さで振り回され、そのリーチの長さも相まって中々攻撃出来ないでいた。

「なら今度は、これです!」

流水抜刀!

タテガミ展開！

全てを率いしタテガミ！！

氷獣！戦記！！

ガオーツ！LONG GET！！

仮面ライダーブレイズ タテガミ氷獣戦記となり、水勢剣流水を振る。氷のつぶてがハイランダーを襲うがそれは大鎌によって弾かれ、粉々にされてしまう。

聖我はそれを見た後、スノーブツクマーカールを操作して黄色のクリスタル、グラウンドクリスタルを選択した後、インデックスライダを拳で押し込む。

大地の氷獣！

タテガミ大地撃！

後頭部のタテガミブレイザーを氷のタテガミに変化させ、水勢剣流水を地面に刺す。すると氷の大地が広がり、ハイランダーの足を拘束する。

大空の氷獣！

タテガミ大空撃！

今度はスカイクリスタルを選択し、タテガミブレイザーを氷の翼へと変える。そして空中を飛びながら氷柱を何本も生み出して投擲する。

大鎌を回転させることでそれを破壊していくが、破壊しきれなくなりそのまま氷柱に

貫かれ腕を一本使えなくなつた。

大鎌を1本の腕で使うのは無理があるのか回転がやや遅くなり、氷柱を破壊することが出来なくなり、どんどんダメージを負っていく。

必冊凍結！

流水拔刀！

水勢剣流水を一度バックルに納め、インデックスライドを押し込んだ後に再度抜刀して発動する。聖我は大空から先程まで砕かれていた氷を水勢剣流水に集め、巨大な剣とした。

タテガミ氷牙斬り！

「グレレイシャル・カリパー全てを凍らす百獣の氷剣!!!」

それを力いっぱいハイランダーに向かって振ると、ハイランダーは大鎌で迎え撃つ。

だが氷柱によるダメージで中々防ぐことが出来ず、そのまま切り裂かれ、氷像となつてしまった。

「ふむ、少し休むか？」

「冗談言わないでください！」

「ではまたやろうか……行け、ディアゴ！」

今度はレイピアを操る剣士、ディアゴが聖我の目の前に現れたのだった。